鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (87)

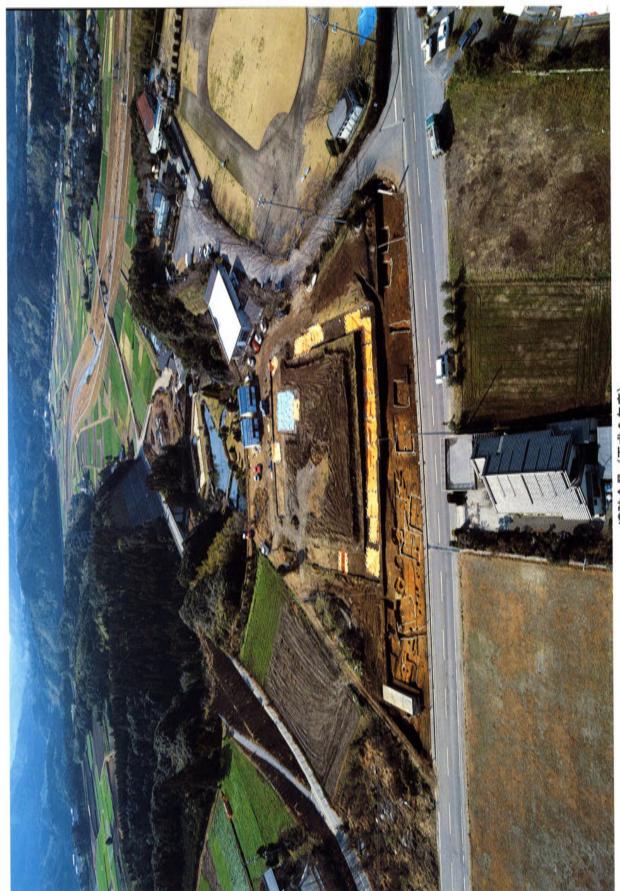
- 一般地方道折生野·神野·吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I -



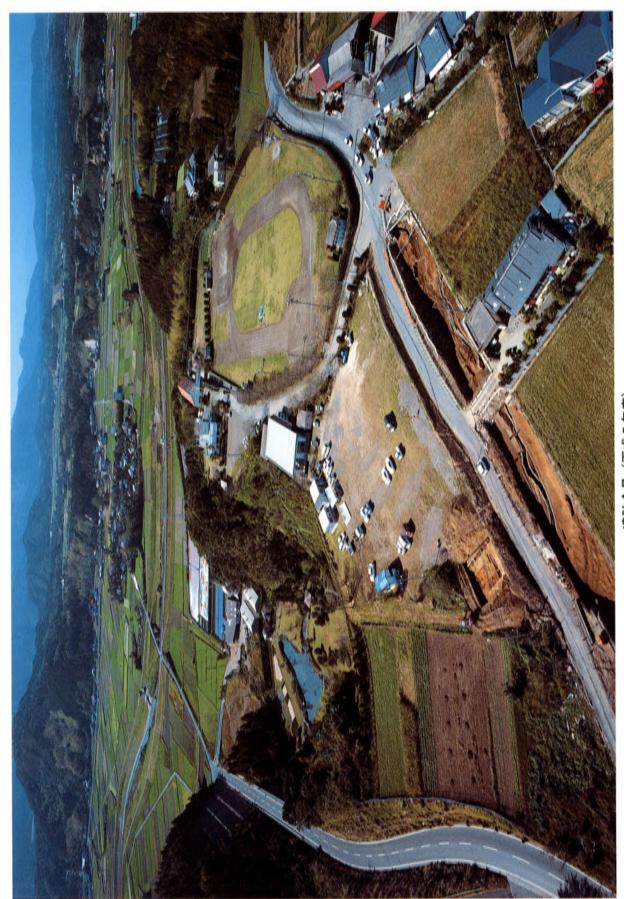
(鹿児島県肝属郡吾平町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡全景 (平成3年度)



遺跡全景 (平成5年度)



中尾遺跡出土土器



甑形土器



黑色土器

序 文

この報告書は、一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴って、鹿児島県教育庁文化課および鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成3年度から平成7年度にかけて実施した中尾遺跡の発掘調査の記録です。

中尾遺跡は, 鹿児島県の東部, 大隅半島の肝属郡吾平町上名に所在します。 今回の調査では, 縄文時代早期と縄文時代晩期, 古墳時代など各時代の遺構・ 遺物が発見されました。

なかでも、古墳時代の竪穴住居跡群や溝状遺構、あるいはこれらの遺構に伴って出土した甑などの土器、鈴等の鉄製品は、南九州における古墳時代集落の様相を研究するうえで貴重な資料を提供したものと考えます。

本報告書が十分に活用され、大隅半島における考古学や歴史研究、埋蔵文化財 の啓発・普及の一助となれば幸いです。

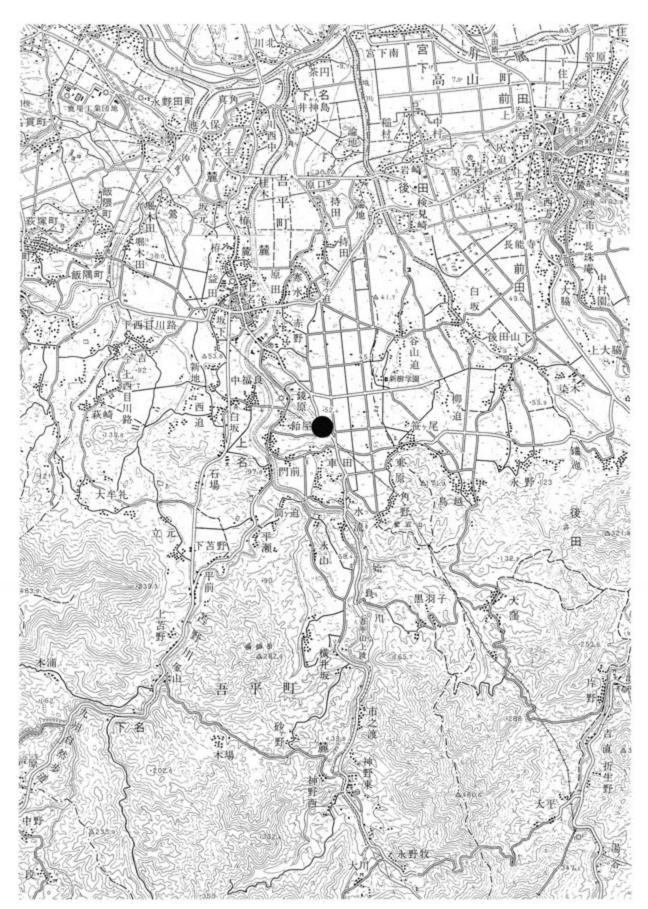
最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたって御協力いただいた県土木 部道路建設課、吾平町教育委員会をはじめ、関係各機関および地元の方々に深く 感謝申しあげます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木 原 俊 孝

報告書抄録

ふりがな	なかおいせき										
書 名	中尾遺	 跡									
副 書 名	一般地方道折	一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻 次	I	I									
シリーズ名	鹿児島県立埋産	蔵文化則	オセンター発排	屈調査報告							
シリーズ番号	87										
編集者名	三垣恵-	_									
編集機関	鹿児島県立埋産	蔵文化則	オセンター								
所 在 地	₹899-4461	鹿児島県	具国分市上之段	设1175番地	1 TEL	0995 – 48 –	5811				
発行年月日	西暦2005年3	月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経。, "	調査期間	調査	面積 ㎡	調査原因		
なかおいせき カ中尾遺跡 居	・ ご しまけんきもつきぐん 東児島県肝属郡	4648	5 75 – 47	31度	130度	19910723			一般地方		
å E	b いらちょうかんみょう 手平町上名 ざなか ぉ 字中尾			18分 37秒	54分 46秒	19910809 19910819	確·本 3,	調査 600	道折生野 ・神野・ 吾平線改		
						19920131			良事業		
						19930824	本調				
						19931102		000			
						19940726	本調金	太			
						19940826	1	200			
						19950522	本調	 			
						~	1, 確認	000			
						19950714	, , , , , ,	60			
	種別 主な間		主な遺構		主な	遺物		朱	宇記事項		
中尾遺跡 第	集落跡 縄文時代	弋早期	集石 8			『峯式土器・ 集・磨製石斧			質時代の集 下である。		
			製石斧・磨石・敲石・石皿・礫器・								
	縄文時代						後の遺跡				
	縄文時代	し 呪 男	土坑 3	織痕士	器等			いて	E範囲につ には消滅。		
			磨製石斧・打製石斧・スクレイ 県道神						直神野・折 ・吾平線		
	古墳時代	-	竪穴住居跡22 溝状遺構 4	軒 成川式	土器・平舶	・ ・砥石・高 J子・鉄製鉛	技石・	を抄	む部分にいては遺跡		
	古代	1	古道	少人以外次	ул. х уж · Д.	7. 1 数数	h -1,		存する。		



中尾遺跡位置図(1/50,000)

例 言

- 1 本報告書は「一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業」に伴う中尾遺跡の埋蔵文化財発掘調 査報告書である。なお、県教育委員会主体での中尾遺跡の発掘調査は、平成3年度および平成5 年度から平成10年度の7か年にわたって実施したが、本報告は、平成3年度および平成5年度か ら平成7年度の4か年分の発掘成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課(鹿屋土木事務所)から鹿児島県教育委員会が受託し、 鹿児島県教育庁文化課(平成3年度)及び鹿児島県立埋蔵文化財センター(平成5~7年度)が 担当した。当該年度分の整理作業および報告書作成は、平成15年度および平成16年度に鹿児島県 立埋蔵文化財センターにおいて実施した。
- 3 発掘調査については、鹿児島県土木部(鹿屋土木事務所道路建設課)や吾平町教育委員会の協力を得た。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号はすべて一致する。
- 5 挿図の縮尺は各図面に示した。
- 6 本書で用いたレベル数値はすべて海抜絶対高である。
- 7 遺物出土層を表すローマ数字は、遺跡の調査範囲が広く、地層の残存状況に違いが認められたこともあって年度ごとの分層に差違が生じたため、本文中では縄文時代早期遺物の出土層を ™層、縄文晩期~古墳時代遺物の出土層は Wa層として統一した。日誌抄については調査時の表記、遺物観察表については注記したローマ数字をそのまま付した。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は、鶴田静彦・大久保浩二・宮田栄二・湯之前尚が行い、中村耕治・倉元良文・堂込秀人・中村和美の協力を得た。
- 9 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。 出土遺物の写真撮影は、鶴田静彦・横手浩二郎が担当した。
- 10 本書の執筆及び編集は三垣が担当した。
- 11 出土した遺物は、県立埋蔵文化財センターが一括して保管し、展示・活用する予定である。 なお、本遺跡の遺物注記の略号は「ナカオ」である。

凡 例

1 遺 構

- (1) 遺構図の縮尺は、基本的に縄文時代の集石が 1/20・土坑 1/40、古墳時代の竪穴住居跡 1/40・溝状遺構は 1/20、または 1/40で掲載している。遺構位置図については縮尺をそれぞれに付した。
- (2) 竪穴住居跡のうち,住居の全体規模が把握できるものについては,遺物出土状況や遺物分布, 完掘状況をそれぞれ別途に図化し掲載している。部分的な検出にとどまった住居跡については 遺物密度などによって作成する図を分けた。
- (3) 竪穴住居跡の焼土域についてはその部分をスクリーントーンで表現している。
- (4) 古墳時代の竪穴住居跡における出土遺物分布図の記号は、●が土器(須恵器を含む)、○が石器、▲が微粒の炭化物、☆が鉄器を表す。●のみで表現している場合は、遺物の種別の区分を行わず、すべての遺物を表現していることを示す。

また、住居跡によっては床着遺物やそれに近い状態で出土した遺物を中心に出土状況を図化している場合と、遺物分布図においては出土遺物をすべて図化しているものもあり、各住居跡によって遺物出土状況図と遺物分布図の遺物数は必ずしも一致しない場合がある。

- (5) 遺物出土分布図の断面に投影されているドットは、出土した遺物をすべて見通している場合と断面線から半分を見通している場合がある。
- (6) 住居跡の遺構番号については調査時に付されたものに準じた。

2 土 器

- (1) 土器については、縄文時代・古墳時代ともに一部を除き基本的に 1/3 で掲載し、縮尺が異なる場合は、各図面に示した。
- (2) 顔料が塗布された土器については、その部分についてスクリーントーンで表現している。

3 石器

(1) 石器の縮尺は、基本的に打製石鏃・石匙・スクレイパーなどの剥片石器が3/4、磨製石

斧・打製石斧・礫器・磨敲石類を1/3,石皿は1/4で掲載している。

- (2) 磨敲石類・石皿・砥石の使用面(磨面)は白抜き、礫面(自然面)をドット、明瞭な擦痕については実線で表現している。
- (3) 石器観察表の計測値で() 書きのものは、欠損品の残存部における数値である。
- (4) 遺物観察表におけるの石材の略号や、石材の色調および利用されている器種については以下に示す表の通りである。

石材略号	名 称	色調	器種
A n	安山岩 (サヌカイト)	灰色~暗灰色	打製石鏃・石匙
O b	黒曜石	黒色(半透明)	打製石鏃
Сс	玉髄	淡黄色	スクレイパー
C h	チャート	暗緑灰色~明黄褐色	打製石鏃
Sa	砂岩	灰色・黄灰色・淡黄色	磨製石斧・敲石・楔形石器・石錘
P a	輝石安山岩	灰色	楔形石器・石皿
Рg	花崗岩	淡黄白色	磨敲石類
Ја	蛇紋岩	緑灰色	磨製石斧

3 鉄製品

(1) 鉄製品についてはすべて1/2で掲載している。表面に残存するサビについては表現せず, 鉄製品の外形からはみ出す場合にのみサビの輪郭を図化している。

序 文		
報告書抄録		挿図目次
例 言		
凡 例	第1図	中尾遺跡位置図
	第2図	周辺遺跡位置図12
本文目次	第3図	中尾遺跡基本土層図17
	第4図	土層断面図 118
第 I 章 発掘調査の経過1	第5図	土層断面図 219
第1節 調査に至るまでの経過1	第6図	土層断面図 320
第2節 調査の組織1	第7図	調査区域全体図21
第3節 調査の経過3	第8図	調査用グリッド・確認調査トレンチ位置図1 …21
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境9	第9図	調査用グリッド・確認調査トレンチ位置図2 …22
第1節 地理的環境9	第10図	™層上面検出集石位置図24
第2節 歷史的環境9	第11図	集石 124
第Ⅲ章 発掘調査の概要15	第12図	集石 225
第1節 発掘調査の方法15	第13図	集石 3 号出土土器25
第2節 発掘調査成果の概要15	第14図	集石 326
第3節 遺跡の層位17	第15図	集石 427
第Ⅳ章 発掘調査の成果23	第16図	Ⅷ層出土土器 129
第1節 Ⅷ層の調査(縄文時代早期)23	第17図	WI層出土土器 2 ····· 30
1 検出遺構23	第18図	Ⅷ層出土土器 331
2 出土遺物28	第19図	Ⅷ層出土土器 433
(1) 土 器28	第20図	Ⅷ層出土土器 534
(2) 石 器40	第21図	Ⅷ層出土土器 6 ······35
第2節 Ⅳ層の調査(縄文時代中期〜晩期)49	第22図	Ⅷ層出土土器 736
1 検出遺構49	第23図	Ⅷ層出土土器 8 ······37
2 出土遺物52	第24図	Ⅷ層出土土器 9 ······38
(1) 土 器	第25図	Ⅷ層出土土器1039
(2) 石 器62	第26図	Ⅷ層出土石器 140
第3節 Ⅳ層の調査(古墳時代)67	第27図	Ⅷ層出土石器 241
1 検出遺構67	第28図	Ⅷ層出土石器 342
(1) 竪穴住居跡67	第29図	Ⅷ層出土石器 443
(2) 溝状遺構115	第30図	Ⅷ層出土石器 544
2 出土遺物123	第31図	Ⅷ層出土石器 645
第Ⅳ章 発掘調査のまとめ145	第32図	Ⅷ層出土石器 746
第 1 節 縄文時代145	第33図	Ⅳ b 層上面検出土坑位置図49
第 2 節 古墳時代145	第34図	土坑 1 号50
	第35図	土坑1号出土遺物50
	第36図	組織痕土器50
	第37図	土坑 2 ・ 3 号51

第38図	Ⅳ層出土土器 153	第78図	竪穴住居跡 9 号遺物出土状況87
第39図	Ⅳ層出土土器 254	第79図	竪穴住居跡 9 号出土遺物 188
第40図	Ⅳ層出土土器 355	第80図	竪穴住居跡 9 号出土遺物 188
第41図	Ⅳ層出土土器 456	第81図	竪穴住居跡 9 号出土遺物 289
第42図	Ⅳ層出土土器 557	第82図	竪穴住居跡 9 号完掘状況90
第43図	Ⅳ層出土土器 658	第83図	竪穴住居跡10号遺物出土状況92
第44図	Ⅳ層出土土器 760	第84図	竪穴住居跡10号出土遺物93
第45図	Ⅳ層出土土器 861	第85図	竪穴住居跡11号遺物出土状況94
第46図	Ⅳ層出土石器 162	第86図	竪穴住居跡11号出土遺物 194
第47図	Ⅳ層出土石器 263	第87図	竪穴住居跡11号出土遺物 296
第48図	Ⅳ層出土石器 3 ほか64	第88図	竪穴住居跡13号遺物出土状況97
第49図	Ⅳ~Ⅵ層上面検出遺構位置図68	第89図	竪穴住居跡13号出土遺物98
第50図	竪穴住居跡1号遺物出土状況69	第90図	竪穴住居跡14号遺物出土状況99
第51図	竪穴住居跡1号遺物分布図70	第91図	竪穴住居跡14号出土遺物100
第52図	竪穴住居跡 1 号出土遺物 170	第92図	竪穴住居跡16号遺物出土状況 101
第53図	竪穴住居跡 1 号出土遺物 271	第93図	竪穴住居跡16号出土遺物101
第54図	竪穴住居跡 1 号完掘状況71	第94図	竪穴住居跡17号遺物出土状況102
第55図	竪穴住居跡 2 号遺物分布図72	第95図	竪穴住居跡17号出土遺物103
第56図	竪穴住居跡 2 号出土遺物 172	第96図	竪穴住居跡18号遺物出土状況104
第57図	竪穴住居跡 2 号出土遺物 273	第97図	竪穴住居跡18号遺物分布図105
第56図	竪穴住居跡 2 号完掘状況74	第98図	竪穴住居跡18号出土遺物106
第59図	竪穴住居跡 3 号遺物出土状況75	第99図	竪穴住居跡18号完掘状況107
第60図	竪穴住居跡 3 号出土遺物 175	第100図	竪穴住居跡19号遺物分布図108
第61図	竪穴住居跡 3 号出土遺物 276	第101図	竪穴住居跡19号出土遺物109
第62図	竪穴住居跡 4 号遺物出土状況76	第102図	竪穴住居跡19号完掘状況110
第63図	竪穴住居跡 4 号遺物分布図77	第103図	竪穴住居跡21号遺物分布図・完掘状況…111
第64図	竪穴住居跡 4 号出土遺物 177	第104図	竪穴住居跡21号出土遺物111
第65図	竪穴住居跡 4 号出土遺物 278	第105図	竪穴住居跡22号遺物分布図・出土遺物1…112
第66図	竪穴住居跡 4 号完掘状況78	第106図	竪穴住居跡22号出土遺物 2112
第67図	竪穴住居跡 5 号遺物出土状況79	第107図	竪穴住居跡22号出土遺物 2113
第68図	竪穴住居跡 5 号遺物分布図80	第108図	竪穴住居跡22号完掘状況114
第69図	竪穴住居跡 5 号出土遺物80	第109図	竪穴住居跡23号遺物出土状況115
第70図	竪穴住居跡 5 号完掘状況81	第110図	竪穴住居跡23号出土遺物116
第71図	竪穴住居跡 6 号遺物出土状況・出土遺物…82	第111図	溝状遺構 1 号······118
第72図	竪穴住居跡 7 号完掘状況83	第112図	溝状遺構 2 · 3 号119
第73図	竪穴住居跡 8 号遺物出土状況83	第113図	溝状遺構 1 ・ 2 ・ 3 号出土遺物…120
第74図	竪穴住居跡 8 号遺物分布図84	第114図	溝状遺構 4 号・古道位置図122
第75図	竪穴住居跡 8 号出土遺物 184	第115図	溝状遺構 4 号遺物出土状況122
第76図	竪穴住居跡 8 号出土遺物 285	第116図	溝状遺構 4 号出土遺物 1125
第77図	竪穴住居跡 8 号完掘状況86	第117図	溝状遺構 4 号出土遺物 2126

第118図	溝状遺構 4 号出土遺物 3127		
第119図	溝状遺構 4 号出土遺物 4128		図版目次
第120図	溝状遺構 4 号出土遺物 5 · · · · · · · 129		
第121図	溝状遺構 4 号出土遺物 6130	図版 1	遺跡全景 (平成 3 年度)149
第122図	溝状遺構 4 号出土遺物 7131	図版 2	遺跡全景 (平成 5 年度)150
第123図	溝状遺構 4 号出土遺物 8132	図版 3	遺跡全景 (平成7年度)151
第124図	Ⅳ層出土土器 1133	図版 4	①・② Ⅷ層(縄文早期)遺物出土状況…152
第125図	Ⅳ層出土土器 2134		③集石1号
第126図	Ⅳ層出土土器 3135		④集石1号(本体部)
第127図	IV層出土土器 4 ······136		⑤集石1号(かきだし部)
第128図	IV 層出土土器 5 ······137	図版 5	①集石 7 号153
第129図	Ⅳ層出土土器 6138		②集石 3 号断面
第130図	IV層出土土器 7 ほか139		③集石 2 号
		図版 6	Ⅷ層出土土器1 (I・Ⅱ類)······154
	表 目 次	図版 7	Ⅷ層出土土器 2 (Ⅲ・Ⅳ類)155
		図版 8	Ⅷ層出土土器 3 (V · Ⅵ · Ⅷ類)…156
第1表	一般地方道折生野・神野・吾平線改良	図版 9	Ⅷ層出土土器 4 (Ⅷ類)157
	事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧1	図版10	Ⅷ層出土土器 5 (底部)158
第2表	一般地方道折生野・神野・吾平線改良	図版11	Ⅷ層出土土器 6 (Ⅸ・X類ほか)…159
	事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧 2	図版12	Ⅷ層出土石器 1160
第3表	周辺遺跡地名表(1)13	図版13	Ⅷ層出土石器 2161
第4表	周辺遺跡地名表(2)14	図版14	Ⅷ層出土石器 3162
第5表	確認調査の概要16	図版15	Ⅳ層(縄文時代晩期)遺物出土状況…163
第6表	集石 3 号出土土器観察表25	図版16	①土坑 1 号上面遺物出土状況164
第7表	遺構観察表(集石)27		②土坑1号石鏃出土状況
第8表	Ⅷ層出土土器観察表 147		③土坑1号完掘状況
第9表	Ⅷ層出土土器観察表 248	図版17	Ⅳ層出土土器 1165
第10表	Ⅷ層出土石器観察表48	図版18	IV層出土土器 2 ······166
第11表	遺構観察表(土坑)51	図版19	IV層出土土器 3 ······167
第12表	土坑1号出土遺物観察表50	図版20	Ⅳ層出土土器 4168
第13表	Ⅳ層出土土器(縄文中期~晩期)観察表1…65	図版21	Ⅳ層出土土器 5169
第14表	Ⅳ層出土土器(縄文晩期)観察表 2 …66	図版22	Ⅳ層出土石器 1170
第15表	Ⅳ層出土石器(縄文後期~古墳) 観察表…66	図版23	Ⅳ層出土土器 2 ほか171
第16表	遺構内出土遺物観察表 1140	図版24	竪穴住居跡群172
第17表	遺構内出土遺物観察表 2141		①平成3年度
第18表	遺構内出土遺物観察表 3142		②平成5年度
第19表	Ⅳ層出土遺物(古墳)観察表 1 …143		③平成7年度
第20表	Ⅳ層出土遺物(古墳ほか)観察表2…144	図版25	①遺跡近景(北から)173
			②遺跡近景(南から)
		図版26	①・②竪穴住居跡 1 号174

図版27	①・②竪穴住居跡 1 号遺物出土状況 …175	図版45	①竪穴住居跡19号193
図版28	①竪穴住居跡 2 号176		②同19号完掘状況
	②同2号遺物出土状況	図版46	①竪穴住居跡21号194
図版29	竪穴住居跡 2 号遺物出土状況177		②同21号遺物出土状況
図版30	①竪穴住居跡 3 号178		③同21号完掘状况
	②同4号鉄器出土状況	図版47	①竪穴住居跡22号検出状況195
	③同3号遺物出土遺物出土状況		②・③同22号遺物出土状況
図版31	①竪穴住居跡 4 号・同 4 号断面 …179	図版48	①竪穴住居跡22号遺物出土状況 …196
図版32	①竪穴住居跡 5 号180		②同22号遺物出土状況(土坑内)
	②同5号遺物出土状況(土坑内)		③同22号完掘状況
図版33	①竪穴住居跡 6 号181	図版49	①竪穴住居跡23号検出状況197
	②同6号断面	図版50	溝状遺構 1 号 ······198
	③同6号遺物出土状況(土坑内)	図版51	①溝状遺構 2 号・②同 2 号断面 …199
図版34	①竪穴住居跡 7 号182	図版52	①溝状遺構 3 号・溝状遺構検出風景…200
	②竪穴住居跡 8 号	図版53	溝状遺構 4 号201
	③同8号断面	図版54	①・②溝状遺構 4 号遺物出土状況
図版35	①竪穴住居跡 9 号183		③同 4 号鉄製鈴出土状況202
	②竪穴住居跡 9 号(奥)・10号(手前)	図版55	①・②・③溝状遺構 4 号遺物出土状況…203
図版36	①竪穴住居跡10号184	図版56	①·②古道検出状況 ······204
	②同10号遺物出土状況(甑)	図版57	竪穴住居跡 1 ・ 2 号出土土器205
	③同10号遺物出土状況	図版58	竪穴住居 2 ・ 4 ・ 5 ・ 8 号出土土器…206
図版37	①竪穴住居跡13号(左)185	図版59	竪穴十強跡 8 ・ 9 ・11号出土土器 …207
	②竪穴住居跡 9 (左奥)・11(右)・10号(左)	図版60	竪穴住居跡10・13・16号出土土器…208
図版38	①竪穴住居跡13号186	図版61	竪穴住居跡18・19・21号出土土器…209
	②竪穴住居跡14号(手前)	図版62	竪穴住居跡出土土器210
図版39	①幻の15号遺物出土状況187	図版63	竪穴住居跡出土石器211
	②竪穴住居跡16号(奥)・17号(手前)	図版64	溝状遺構1・2・3・4号出土土器 …212
	③同16号	図版65	溝状遺構 4 号出土土器 ······213
	④同16号須恵器出土状況	図版66	溝状遺構 4 号出土土器214
	⑤同16号遺物出土状況	図版67	溝状遺構 4 号出土土器215
図版40	①竪穴住居跡17号188	図版68	溝状遺構出土遺物ほか216
	②同17号遺物出土状況	図版69	Ⅳ層出土遺物 1217
図版41	①竪穴住居跡17号炭化物出土状況…189	図版70	IV層出土遺物 2 ······218
	②同17号土層断面	図版71	IV層出土遺物 3 ほか219
図版42	竪穴住居跡18号と溝状遺構 4 号 …190	図版72	鉄製品①鉄製鈴·②鉄製鈴 X 線写真 …220
図版43	①竪穴住居跡18号(南から)191		③鉄鏃・刀子・鉄鎌ほか
	②同18号(北から)		
図版44	①・②竪穴住居跡18号遺物出土状況…192		
	③・④竪穴住居跡18号中央土坑		
	⑤竪穴住居跡18号完掘状況		

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき, 鹿児島県土木部道路建設課 (鹿屋土木事務所道路建設課) は, 「一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業」の計画に基づいて, 肝属郡吾平町上名地区に計画した道路改良工事に先立って, 対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課 (組織改革により平成8年度より文化財課と改称。) に照会した。

この結果,事業区間内には周知の遺跡である中尾遺跡が所在することが判明し,平成3年度に県 道拡幅部分について緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は県文化課が担当した。その結果、遺跡が縄文時代早期から古墳時代にかけての複合遺跡であることや遺跡の範囲が現県道の下部までひろがることが確認された。

そこで、平成4年度に鹿児島県土木部・県文化課・鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)の三者で再度協議を行い、当事業区間内においては現状保存や設計変更が不可能なことから、平成5年度以降、計画的かつ継続して発掘調査(確認・本調査)を実施し、発掘調査は埋文センターが担当することとした。

県教育委員会全体の調査は、平成3年度、平成5年度から平成10年度の計7か年にわたって実施した。調査総面積は計8,860㎡である。本調査終了後、平成3年度および平成5年から平成7年度の調査成果については、平成15年度および平成16年度に埋文センターにおいて整理作業・報告書作成作業を行った。

第2節 調査の組織

確認・本調査 (平成3年度)

起因事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	(鹿屋土木事務所	f道路建設課)				
調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育	長	大	田		務
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化課						
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	文 化 財	課長	向	Щ	勝	貞
調査企画者	"	文化財課:	長補 佐	濱	松		嚴
	"	主任文化財	研究員				
		兼埋蔵文化	財係長	吉	元	正	幸
調査担当者	"	文 化 財 研	千究 員	鶴	田	静	彦
	"	文化財研	千究 員	湯湯	と前		尚
事務担当者	"	主幹兼企画即	力成係長	濱	崎	琢	也
	"	主	查	枇	杷	雄	$\stackrel{-}{\rightharpoonup}$
	"	主	事	新屋	 慰	由美	

確認・本調査 (平成5年度~平成7年度)

起因事業主体者 鹿児島県土木部道路建設課 (鹿屋土木事務所道路建設課)

調 査 主 体 者 鹿児島県教育委員会

調 查 企 画 調 整 鹿児島県教育庁文化課

調 査 責 任 者 県立埋蔵文化財センター 所 大久保 忠 昭(日5) 長

> 内 村 正 弘 (H6~7)

調查企画者 次長兼総務課長 11 水口 俊 雄(H5)

> 原 信 義 (H6~7) Ш

1 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝 洋 (H5~7)

主任文化財主事 晃 一(H7) 11 新 東

調查担当者 文化財研究員 鶴田 静 彦 (H5~6)

> " 大久保 浩 二 (H5~6)

文化財主事 栄 二(H7) 宮田

文化財研究員 湯之前 尚(H7)

事務担当者 " 主 雅明(H6~7) 査 成 尾

> 主 事 中 村 和 代(H6)

追 立 ひとみ(H7)

調 査 指 導 者 鹿児島県考古学会 会 長 河 口 貞 徳 (H5~7)

整理・報告書作成 (平成15・16年度)

起因事業主体者 鹿児島県土木部道路建設課 (鹿屋土木事務所道路建設課)

作 成 主 体 者 鹿児島県教育委員会

企 画 調 整 鹿児島県教育庁文化課

作 成 責 任 者 県立埋蔵文化財センター 所 木 原 俊 孝 (H15~16) 長 作成企画者 11 次長兼総務課長 田中 文 雄(H15) " 11 賞 雅 彰 (H16) 調査課長 新 東 晃 一 (H15~16) 調査課長補佐 神 11

立 次 郎 (H15~16) 主任文化財主事兼第一調查係長 池 畑 耕 一 (H15~16)

主任文化財主事 村 耕 11 中 治(H15~16)

作成担当者 主任文化財主事兼第一調查係長 池 畑 耕 一 (H16)

> 文化財主事 11 宗 出 克 英(H15)

 \equiv 垣 恵 一 (H16)

文化財研究員 上 真(H15) 事務担当者 総務係長 野 浩 二 (H15~16) 11 平

> 主 山 恵一郎 (H15~16) 杳 福

床

企 画 委 員 主任文化財主事 中 村 耕 治 (H16) 11

企 画 委 員 県立埋蔵文化財センター 文 化 財 主 事 鶴 田 静 彦 (H16)

報告書作成検討委員会 平成16年12月24日 所長ほか 7名

報告書作成指導委員会 平成16年12月27日 課長ほか 8名

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成3年7月23日~8月9日、同8月19日~平成4年1月31日、平成5年8月24日~11月2日、平成6年7月26日~8月26日、平成7年5月22日~7月14日にかけて実施した。以下、年度ごとに日誌抄をもって調査の経過を略述する。

平成3年度

○平成3年7月23~7月26日(金)

5~8トレンチ配置図作成。

○7月29日(月)~8月2日(金)

 $1 \sim 3$ トレンチ配置図作成。 1 トレンチの II・III 層出土遺物平板実測(No. $1 \sim 20$)。 2 トレンチ検出遺構平板実測。

- ○8月5日(月)~8月9日(金)
 - 5 · 6 トレンチのⅢ層出土遺物平板実測(No.21~66)
- ○8月19日(月)~8月23日(金)

N-40~41区のⅢ層出土遺物平板実測(No.67~233)

- ○8月26日(月)~8月30日(金)
 - N-39~41区のⅢ a 層出土遺物平板実測 (No.234~410)。溝状遺構 1 · 2 の平面実測。
- ○9月2日(月)~9月6日(金)
 - M~N-32~39区のⅢ層出土遺物平板実測(No411~882)。
- 9 月 9 日 (月) ~ 9 月13日 (金)
 - M-36~38区のⅢ層出土遺物平板実測(No.883~924)
- 9月16日(月)~9月20日(金)
 - M-34~35区のⅢ層出土遺物平板実測(№925~1063)。M-37~38区の古道実測。
 - 9月19日台風接近により作業中止。
- ○9月23日(月)~9月27日(金)

瀬戸口望氏来跡(25日)。

○9月30日(月)~10月4日(金)

M-30~35, M~N-37~41区のⅢ層出土遺物平板実測(No.1064~1327)。

河口貞徳先生(鹿児島県考古学会会長)現地指導(9月30日~10月1日)。

中尾Ⅱ遺跡調査開始。(10月3日~10月18日)

○10月7日(月)~10月11日(金)

M-28~29区のⅢ層出土遺物平板実測(No.1328~1397)

○10月14日(月)~10月18日(金)

M-27・N-38~41区のⅢ層出土遺物平板実測(No.1398~1477)。12~13トレンチ配置図作成。 N-39区のⅢ層土器出土状況実測。

- ○10月21日(月)~10月25日(金) N-39区のIV層土器出土状況実測。
- ○10月28日(月)~11月1日(金) M-30区の VI 層出土遺物平板実測(No.1478~1489)。 M-30区の土層断面実測。 瀬戸口望氏来跡。(1日)
- ○11月5日(火)~11月8日(金) M~N-25~29区のIV・VI層出土遺物平板実測(No.1490~1662)。VI層上面コンタ図作成。
- ○11月11日 (月) ~11月15日 (金) M-28~30区のⅥ層遺物出土状況(№1663~1667)およびコンタ図平板実測。
- ○11月18日(月)~11月22日(金) M-25区の土層断面実測。
- ○11月25日(月)~11月29日(金)

M-27~28区の土坑 1・2 平面実測。M~N-24~27区の VI 層出土遺物平板実測 (No.1594~1715)。 集石 7 の平断面実測。N-25区の吉田武土器出土状況実測。

- ○12月2日(月)~12月6日(金) 集石6の平断面実測。M~N-23~24区のVI層出土遺物平板実測(No.1716~1788)。
- ○12月9日(月)~12月13日(金)

M-22~23区の W層および溝状遺構 1 の出土遺物平板実測 (No.1808~1818)。 M-22~24区の土層 断面実測。古道平面実測。

- ○12月16日(月)~12月20日(金) 古道の検出状況の平面実測。集石1の平断面実測。
- \bigcirc 1月6日 (月) \sim 1月10日 (金)

竪穴住居跡7,溝状遺構1・2・3,集石3の平断面実測。古道の平面実測。遺構配置図作成。

- ○1月13日(月)~1月17日(金)溝状遺構4・古道検出状況実測。
- ○1月20日(月)~1月24日(金)

アカホヤ火山灰層上面検出遺構配置およびコンタ図作成。溝状遺構 3 ・ 4 の断面実測。溝内遺物 出土状況実測。竪穴住居跡 8 ・17の平断面実測。河口貞徳先生(鹿児島県考古学会会長)現地指導 (22~23日)。

○1月27日(月)~1月31日(金)

竪穴住居跡12・16の平断面実測,古道の平面および遺物出土状況実測。瀬戸内望氏来跡(27日)。

平成5年度

○8月24日(火)~8月27日(金)

発掘機材の搬入,調査開始。O~P-13~14区の重機による表土除去,精査。池田火山灰層の腐植土層から古墳時代,縄文時代中期の土器出土。IVa層まで掘り下げ。

○8月30日(月)~9月2日(木)

〇~P-13~14区のⅢ層掘り下げ、出土遺物平板実測。〇-14~15区の土層断面実測。台風対策

実施。

○9月6日(月)~9月10日(金)

台風通過後の復旧作業。鹿屋土木事務所・肝属土木事務所道路建設課と協議後、仮設道路の建設を実施。T~U-3、S~U-4、S~T-5区のアスファルト・砕石除去後、№a層まで掘り下げ。竪穴住居跡の平面プラン1基を確認、鉄鏃出土。

○9月13日(月)~9月17日(金)

R-7区のアスファルト・砕石除去。 U-4区の溝状遺構,竪穴住居跡の平面プランの検出作業。 R~S-7~8区の \blacksquare 層の掘り下げ。

○9月20日(月)~9月22日(水)

Q~R-8区の遺構検出作業。排水路及び客土の除去作業。雨水の流入防止対策実施。

○9月27日(月)~10月1日(金)

S~V-4~5区の精査,遺構検出作業。竪穴住居跡の隅丸方形プラン,溝状遺構を検出。遺構配置図作成,写真撮影。池田パミス層上面のコンタ図作成。溝状遺構2・4の掘り下げ,実測。溝状遺構4から鉄製鈴,竪穴住居跡8から須恵器が出土。古道2~4の平面実測。

○10月4日(月)

Q~P-9~10区の重機による表土剥ぎ。溝状遺構3・4の平断面,池田パミス層上面のコンタ図・遺構配置図作成。溝状遺構4の土器集中部断面実測。

○10月8日(金)

Q~P-9~10区および遺構の清掃。溝状遺構3の平断面実測。

○10月11日(月)~10月15日(金)

溝状遺構 4 の掘り下げ、 P ~ Q − 10区の重機による表土剥ぎ。河口貞徳先生(鹿児島県考古学会会長)現地指導(12~13日)。竪穴住居跡18の遺物出土状況実測。溝状遺構 2 の断面実測。

○10月18日(月)~10月22日(金)

溝状遺構 4 の掘り下げ、 $P \sim Q - 9 \sim 10$ 区の重機による表土剥ぎ。溝状遺構 4 の平面、遺物出土状況実測。 $N \sim O - 13 \sim 14$ 区、 $O \sim Q - 10 \sim 12$ 区の池田パミス層上面コンタ図作成。航空写真撮影(22日)。

○10月25日 (月) ~11月2日 (火)

竪穴住居跡18の平面実測。発掘調査終了

平成6年度

○平成6年7月26日(火)~7月29日(金)

発掘調査開始。重機による表土剥ぎおよび間層除去。N-21~22区のW層掘り下げ。貝殻条痕文系土器・打製石鏃等出土。

○8月2日(火)~8月5日(金)

N-22~27区のW層掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、平板実測(№ 1~124)。N-31区までW層上面の検出作業。

○8月8日(月)~8月11日(木)

N-26区の集石2の写真撮影, 平断面実測。N-30区までW層の検出作業。N-29~30区の掘り

下げ、出土遺物の取り上げ (No.266~541)。

○8月16日(火)~8月19日(金)

N-22~24,29~31区のWb層上面まで掘り下げ、コンタ図作成。重機によるN-28~35区のアスファルト除去およびⅢ層面の清掃。N-27~28区のWb層出土遺物平板実測(№542~555)。

○8月22日(月)~8月26日(金)

N-33~35区の遺構検出作業。N-36・38区にトレンチ設定,N-36区から竪穴住居跡プラン検出。N-26・27区の \mathbbm{m} b 層出土遺物平板実測(No.573~633)。集石 4 の平断面実測。発掘調査終了。

平成7年度

○平成7年5月22日(月)~5月26日(金)

確認調査の開始及び全面調査の準備。1~5トレンチを設定、掘り下げ開始。

1トレンチから竪穴住居跡、2トレンチ溝、3・5トレンチから土器・石器出土。 $1 \sim 3$ トレンチ 写真撮影、平板実測($No.1 \sim 129$ 、 $1175 \sim 1194$)。

○5月30日(火)~6月2日(金)

1~5 B T の掘り下げ、土器・石器出土。写真撮影、平板実測(Ⅲa 層No130~164, Ⅵ層144~182)。 1トレンチの竪穴住居跡写真撮影。重機による表土剥ぎ。

○6月5日(月)~6月9日(金)

 $1 \cdot 2 \cdot 4$ トレンチの掘り下げ。 $M \sim N - 36 \sim 37$ 区の掘り下げ,前回の住居跡確認,旧トレンチ跡の掘り下げ。旧道路部分の掘り下げ。

○6月12日(月)~6月16日(金)

M~N-36~37区のⅢ層掘り下げ。M~N-37~40区のⅢ層出土遺物平板実測(№165~620)。旧道路部分の掘り下げ。竪穴住居跡19の出土遺物取り上げ。

○6月19日(月)~6月22日(木)

竪穴住居跡 2 の掘り下げ、竪穴住居跡19の出土遺物の取り上げ、断面実測。竪穴住居跡23のプラン検出。M~N-39~41区のⅢ a 層出土遺物の平板実測(№621~977)。

○6月26日(月)~6月30日(金)

竪穴住居跡 2・19・22・23の掘り下げ、出土遺物平板実測。竪穴住居跡21検出、写真撮影。 1・2トレンチ出土遺物の平板実測(No.978~1079)。航空写真撮影(30日)。竪穴住居跡 2・22・23の実測。

○7月3日(月)~7月7日(金)

M~N-40~41区の重機による間層除去後、Ⅵ~Ⅷ層の掘り下げ。竪穴住居後23の写真撮影。竪穴住居後2・19の平面実測、掘り下げ。竪穴住居後21・22の遺物出土状況実測(№1395~1401)。 1トレンチ検出の竪穴住居跡実測。N-40区のⅥ層出土遺物平板実測(№1402~1421)。集石8の平断面実測。

○7月10日(月)~7月14日(金)

M~N-40~41区のVI層の掘り下げ。竪穴住居跡 2・21の平板実測。竪穴住居跡 1 の床面ピット検出。 1・3・5 トレンチの土層断面実測。河口貞徳先生(鹿児島県考古学会)・本田道輝先生(鹿児島大学法文学部)来跡(12日)。トレンチの埋め戻し。発掘調査終了。

第1表 一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧1

遺跡名	年度	調査期間	調査面積	調査担当者	時 代	遺 構	遺物	
	H 3	7 /23~8 / 9 8 /19~1 /31	確認調査 本調査 3,600㎡	鶴田 静彦 湯之前 尚	縄文早期縄文前期	集石8基	吉田式土器・下剥峯式土器・塞ノ神式土器 器・塞ノ神式土器 深浦式土器 黒川式土器・夜臼式土器・	
	H 5	8 / 24~11 / 2	本調査 3,000㎡	鶴田 静彦 大久保浩二	縄文晩期 古墳	土坑 3 基 竪穴住居跡22軒	組織痕土器・打製石鏃・ 磨製石斧・打製石斧・成 川式土器・打製石鏃・石 斧・磨敲石・砥石・石皿・ 鉄製鈴	
	H 6	7 / 26~ 8 / 26	本調査 1,200㎡	鶴田 静彦 大久保浩二	古代	溝状遺構 4 条 古道		県教
中	H 7	5 / 22~ 7 / 14	確認調査 60㎡ 本調査 1,000㎡	宮田 栄二 湯之前 尚				育
尾	H 8	8 / 19~10 / 18 11 / 25~11 / 29	確認調査 280㎡ 本調査 1,200㎡	長野 眞一 肱岡 隆夫 中原 一成	縄文早期 古墳	集石 1 基 地下式横穴墓 2 基 竪穴住居跡 5 軒 土壙 1 基	土器・石鏃・石斧 鉄製太刀・鉄製刀子 成川式土器	委員
遺跡	H 9	4 /21~7 /11	確認調査 45㎡ 本調査 1,600㎡	中村 耕治 安藤 浩 黒川 忠広	縄文早期 縄文前期 縄文前期 古古代	集石12基 集石2基 溝状遺構 土坑	下剥峯式土器・桑ノ丸式 土器・塞ノ神式土器・石 鏃・異形石器・石斧・石 斧未製品・礫器・磨石・ 石皿 曽畑式土器 刻目突帯文土器・組織痕 土器 成川式土器	会
	H 10	11/9~12/15	本調査 1,280㎡	鶴田 静彦 大久保浩二	縄文早期 縄文晩期 弥生中期 古墳	土坑	土器・石鏃 刻目突帯文土器・石斧・ スクレイパー 土器 成川式土器	
	H 16	5 / 11~ 9 / 9	本調査 1,400㎡	山下 博文	弥生 古墳	竪穴住居跡1軒 掘立柱建物跡 竪穴住居跡1軒 地下式横穴墓1 基	山ノ口式土器・石庖丁 成川式土器 鉄剣・鉄刀	吾平町教委

[※]中尾遺跡については、検出した遺構が一部重複するため、平成3年度から平成7年度分を一括して掲載した。

第2表 一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧2

遺跡名	年度	調査期間	調査面積	調査担当者	時 代	遺 構	遺物	
四方高迫遺跡	Н	8 / 7 ~10 / 27	確認調査 70㎡ 本調査 3,400㎡	鶴田 静彦 西村 喜一	縄文早期 弥生 古墳	集石 8 基	前平式土器·石坂式土器· 石鏃·打製石斧·礫器· 磨石·石皿 甕形土器 成川式土器	県 教 育 委
和田田			確認調査 40㎡		_	-	_	員 会 主 体
遊跡	H 14	7月 10月~ 1月~	確認調査 本調査 3,200㎡	川崎 重治山下 博文	縄文 弥生	連穴土坑 2 基 集石20基	加栗山式土器・吉田式土 器・石坂式土器・下剥峯 式土器・磨製石鏃・打製 石鏃・磨製石斧・打製石 斧・磨石・石皿・砥石	吾平
和田田遺跡	H 15	4 / 5 ~ 7 / 14	本調査 530㎡	川崎 重治山下 博文	縄文早期 弥生 古墳	集石 8 基	加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・辻タイプ・中原式土器・磨製石鏃・打製石鉄・磨製石斧・礫器・磨石・敲石・凹石・石皿・軽石製品山ノ口式土器成川式土器	町教育委員会主体

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中尾遺跡は、鹿児島県肝属郡吾平町上名字中尾に所在する。

遺跡の所在する吾平町は、鹿児島県の東半を占める大隅半島のほぼ中央にあり、県庁所在地の鹿児島市からは鹿児島湾を挟んで南東に約40kmの距離に位置する。行政区分上では、東を高山町、北西を鹿屋市、南西を大根占町と境を接しており、総面積は59.15kmの町である。

吾平町は、地勢的には南部の国見山系 (肝属山地)、中部のシラス台地、北部の河川流域に沿って 形成された河岸段丘および沖積地に区分される。南部一帯は山林、台地上には畑、河川流域には水 田地帯がひろがっている。

地質的には、南部山地に黒雲母花崗岩、西部山地に輝石安山岩・玄武岩などの火山岩、その中間 地帯には砂岩・頁岩交互層などの堆積岩が分布する。北部一帯は姶良カルデラを噴出源とするいわ ゆるシラス層からなり、姶良川流域には粘土層や一部に泥岩などが分布する。

中尾遺跡は、国見山系の支脈(福師岳286.2mなど)の北側、東原台地とよばれるシラス台地上および姶良川の開析によって形成された河岸段丘縁辺部に立地する。標高は約40~55mである。吾平町役場からは南へ約1.5kmの距離にあり、遺跡の西約250mほどを肝属川の支流の一つである姶良川が北流している。

第2節 歷史的環境

吾平町における遺跡の分布状況は、南部の山地帯には少なく、中部のシラス台地から北部の河岸 段丘上および沖積地にかけて遺跡が集中する傾向がうかがえる。

このような地勢的な特徴のなかで、吾平町における考古学の成果で特筆すべきものとして、古墳時代における地下式横穴群の存在がある。本町を含む大隅地域における地下式横穴は、志布志湾沿岸および肝属川流域を中心に分布しているが、現在までに23遺跡から総数90基以上が把握されている。吾平町では天神原地下式横穴群・宮ノ上地下式横穴群・堀木田原地下式横穴・中尾地下式横穴群の4遺跡で少なくとも26基が確認されている。今後の発掘調査によってさらに増加する可能性が高い。これらの発掘成果は、南九州の古墳時代、なかでも墓制の研究においては欠かせないものとなっている。以下、吾平町内における考古学成果について概観する。

(1) 宮ノ上地下式横穴墓群

肝属川の支流,姶良川などの周辺にひろがる平野を望む標高約40mの台地上に位置する。昭和24年から昭和61年にかけて計6回の発掘調査が実施されている。15基の存在が確認され、そのうち10基の調査が行われている。現在は吾平小学校の校庭となっている。副葬品として土師器や鉄剣・片刃箭式鉄鏃・鉄鉾・刀子などが出土している。

(2) 天神原地下式横穴墓群

肝属川に面した標高約25mの台地縁辺部にある。吾平町と高山町にまたがって存在横穴墓群であ

る。これまでに4基の調査が行われ、1号地下式横穴墓から人骨一体と軽石製石棺、2号からは粘土床や軽石板とともに副葬品として直刀、鉄刀・刀子・鉄斧などが出土している。

(3)堀木田原地下式横穴墓

宮ノ上地下式横穴墓群の西約1kmの台地縁辺部に所在し、昭和55年に発見、発掘調査が行われている。地下式横穴墓は、全長5.2mで県内では最大級の規模があり、玄室内に粘土床を有する。副葬品は鞘と思われる木質が残存する直刀、柄の一部を伴う鉄剣、刀子が出土している。

(4)中尾遺跡(中尾地下式横穴墓群)

本遺跡は平成3年度から平成16年度にかけて11度の発掘調査が実施されている。縄文時代早期から古代にかけての複合遺跡である。なかでも古墳時代の成果が注目される遺跡であり、竪穴住居跡や溝状遺構、地下式横穴墓などの遺構が多数確認されている。今回報告するものを除いた調査成果について列挙することとしたい。

平成3年度に町教育委員会主体で調査が行われ、古墳時代のものと思われる竪穴住居跡21基と円形周溝状遺構1基、溝状遺構4条などが検出されている。今回報告する調査区の隣接地であり、周辺には大規模は集落が存在したことを裏付ける発見となった。なお、遺構数については、住居跡が切り合って存在することや本報告の遺構と同一のものが含まれる可能性が高いことから変動する可能性がある。平成8年度には、本事業に伴う調査で地下式横穴墓を2基検出したのをはじめ、個人畑地造成に伴って町教育委員会が実施した調査でも4基確認されている。平成16年度に確認した1基を含め、中尾地下式横穴墓群ではこれまでに7基の存在が把握されたことになる。地下式横穴墓の玄室は平入りで隅丸長方形を呈する。玄室内から1号で2体、2号で1体、5号で1体、6号で3体の人骨が発見されている。副葬品は円頭太刀・鉄刀・鉄鏃・刀子・銅製鈴などが出土している。このほか、平成16年度の調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳時代の竪穴住居跡などが検出され、横穴墓から鉄剣・鉄刀が出土している。

(5)池山B遺跡

縄文時代の遺跡で、円筒形を呈し口縁部が直行する塞ノ神式土器が採集されている。このタイプは枕崎市の奥木場遺跡からも出土しているものである。

(6) 栫ノ下遺跡

古墳時代の壺形土器が採集されている。底部はやや尖り気味の丸底で胴部がふくらみ、頸部はよくしまり口縁部は外反する器形で、胴部にはすれ違う刻み目突帯が1条めぐり、頸部から肩部と突帯の上下に櫛描波状文がみられるものである。在地性の強い成川式土器に畿内・瀬戸内の影響が考えられる技法がみられる注目すべき発見である。

(7)四方高迫遺跡

昭和59年の大隅地区埋蔵文化財分布調査によって発見された遺跡で、縄文時代後期から晩期の遺

物が確認されている。平成12年に発掘調査が実施され、縄文時代早期の集石や前平式土器・石坂式 土器、打製石鏃・打製石斧・磨石・石皿等が発見されている。縄文時代から古墳時代にかけての複 合遺跡である。

(8) 名主原遺跡

昭和63年,平成元年,平成13・15・16年度に調査が実施され,弥生時代終末頃の花弁形住居跡をはじめとする竪穴住居跡群が多数検出されている。平成3年度の調査では同心円文や重弧文など幾何学的な沈線文様が施された壺形土器が出土している。

(9) 荷掛原遺跡

平成元年および平成3年に調査が実施され、縄文時代早期のものと思われる集石や打製石鏃・磨石・剥片石器類が出土している。

(10) 水流遺跡

平成2年に調査が実施され、縄文早期の集石、前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・山形押型 文土器のほか阿高式土器が出土している。

(11) 筒ヶ迫遺跡

平成3年に発掘調査が実施され、縄文時代の組織痕土器や古墳時代、古代の遺物・溝状遺構が発見されている。

(12) 原口岡遺跡

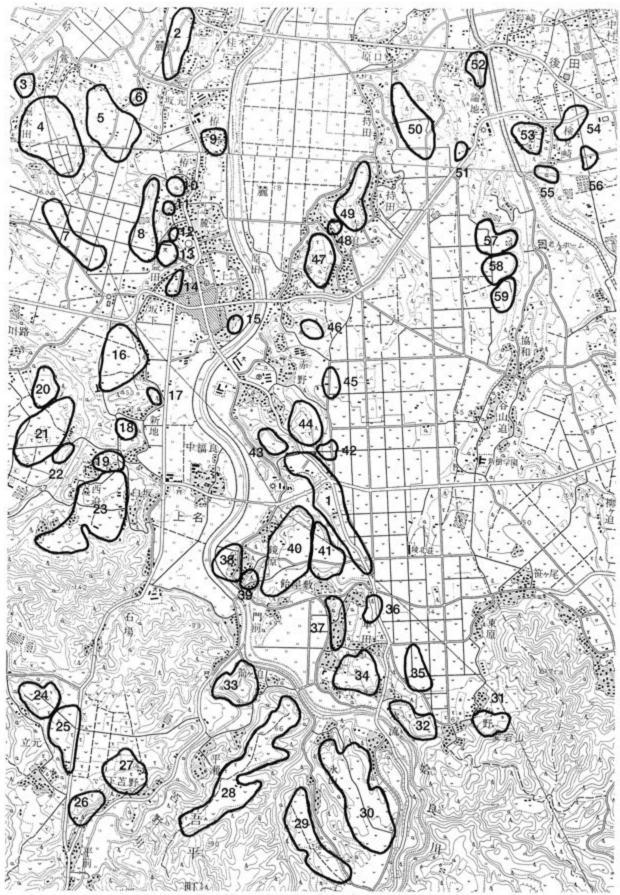
平成6年度に発掘調査が実施され、縄文時代早期の集石6基のほか、前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・石斧・磨製石鏃・石皿・砥石・剥片石器等の遺物が出土している。

(13) 和田遺跡

平成12年度に確認調査,平成14・15年度に本調査が実施され,縄文時代早期の連穴土坑2基,集石28基などの遺構のほか,加栗山式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・辻タイプ・中原式土器・磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・砥石などの遺物が出土している。

吾平町内においては、前述した弥生~古墳時代の成果に加え、近年の発掘調査で縄文時代早期の 遺構・遺物の発見が相次ぎ、大隅半島における当該期の研究において欠かすことのできない貴重な 資料を追加している現状である。

ここに列挙した遺跡を含め、中尾遺跡の周辺に所在する遺跡については、第3・4表のとおりである。



第2図 周辺遺跡位置図 (1/25000)

第3表 周辺遺跡地名表(1)

_				PRO		
No.	遺跡名	所 在 地	地形	時 代	遺物等	備考
1	中尾	吾平町上名中尾	台地	縄文・弥生・古墳	縄文(早・晩)・弥生土器・成川式土器	本報告
2	名主原	吾平町下名川西名主	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	S 63・H 1・13・ 15・16調査
3	堀木田	吾平町麓堀木田	低地	弥生(中・後)	甕棺・打製石斧・土器	
4	和泉田原	吾平町麓和泉田原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・須恵器・土師器	
5	鶯原	吾平町麓鶯原	台地	弥生	土器	
6	川上	吾平町麓川上	台地	弥生	高坏・壺	
7	廣牧	吾平町麓廣牧	台地	古墳		H 5 町調査
8	城ヶ迫原	吾平町麓城ヶ迫原	台地	弥生	土器	
9	栫の下	吾平町麓栫下	低地	弥生(中)・古墳	土器(櫛目文あり)	
10	山古城跡	吾平町麓城ヶ迫原城山	丘陵	平安(末)中世(室町末)	上古平判官と申人数代居住,近世初頭島 津氏支配,回り八町,高さ十間	「姶良名勝志」 「三國名勝図絵」
11	地頭御仮屋跡	吾平町麓山古城南山麓	低地	平安(末)・中世(室町)・ 近世	上古平判官居館跡、島津の地頭初代以降 (天正から)	
12	千手院(坂)	吾平町麓千手院	台地	弥生(後)・奈良・平安手 土器・土師器		
13	宮ノ上地下式横穴	吾平町麓宮ノ上吾平小校庭	台地	古墳	地下式横穴・直刀・鉄器	S 24 · 29 · 46 · 53 · 61調査
14	宮ノ前 (鵜戸神社脇)	吾平町麓宮ノ前鵜戸神社脇	低地	弥生 (中)	弥生壺形土器 (完全)	
15	町頭	吾平町麓町頭	低地	弥生 (中)	弥生壺形土器(完全)	
16	道脇	吾平町麓道脇	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器・ 青磁	
17	猫塚	吾平町麓猫塚	台地	古墳・奈良・平安	成川式土器・土師器・須恵器	
18	新地上	吾平町上名新地上	台地	縄文(前)・弥生(前・中)	曽畑式・石匙・弥生土器・石庖丁	
19	西迫	吾平町上名西迫	台地	弥生(中)	弥生土器・石斧	
20	モタイ坂	吾平町上名モタイ坂	台地	弥生(中)・古墳	弥生土器・打製石斧	
21	前木場A	吾平町上名前木場	台地	古墳・奈良・平安	成川式土器・土師器・須恵器	
22	前木場	吾平町上名前木場	台地	縄文・弥生(中・後)・古墳	弥生土器・須恵器	S63調査
23	白坂原	吾平町上名白坂原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
24	下小原	吾平町上名下小原	台地	弥生・古墳	弥生土器・土師器	
25	立元	吾平町上名立元	台地	縄文(後)・弥生(前・中)	市来式土器·指宿式土器·磨製石斧·石鏃· 弥生土器	
26	苫野原 A	吾平町上名苫野原	台地	縄文 (後)・弥生 (中)	指宿式土器・市来式土器・弥生土器・石 器	
27	苫野原 B	吾平町上名苫野原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
28	筒ヶ迫	吾平町上名筒ヶ迫原	台地	縄文(晩)・古墳		旧名「筒ヶ追原」
29	中崎	吾平町上名中崎	台地	古墳		
30	水流	吾平町上名水流	台地	縄文(早)・弥生・古墳	土器	H 2 調査
31	角野原	吾平町上名角野原	台地	弥生(中)	土器・石斧	
32	四方高迫	吾平町上名四方高迫	台地	縄文・弥生・古墳	曽畑式土器・指宿式土器・蓆目圧痕・弥 生土器・成川式土器・土師器・青磁・打 製石斧・石皿・磨製石斧・磨石・砥石	H12調査
33	筒ヶ迫城跡	吾平町上名迫門前	丘陵	中世(室町)	天文天正の頃地頭居住回り十二町,高さ 十五間,肝属伊勢守るの城跡という。	「姶良名勝志」 「三國名勝図絵」
34	渡迫	吾平町上名渡追 (車田)	台地	弥生(前・中)	弥生土器・石斧	
35	角野原A	吾平町上名	台地	縄文(早)・古墳	吉田式土器・成川式土器	H12確認調査

第4表 周辺遺跡地名表(2)

No.	遺跡名	所 在 地	地形	時 代	遺 物 等	備考
36	和田	吾平町上名和田	台地	弥生 (中・後)	弥生土器	H12·14·15調査
37	松下城跡	吾平町上名西栫	台地	中世 (室町)	筒ヶ迫城跡の前哨陣地としての役割	
38	軍宮下	吾平町上名	低地			H11調査
39	鏡原	吾平町上名鏡原	台地	縄文(中・後)・弥生・古墳	市来式土器・阿高式土器・磨製石斧・弥 生土器・成川式土器・土師器	
40	鏡原上	吾平町上名鏡原	台地	弥生(中・後)	弥生土器・石斧	
41	諏訪尾	吾平町上名諏訪尾	台地	弥生(中・後)	弥生土器・土師器	H 9 調査
42	打越	吾平町赤野打越	低地	古墳		H 5 市町村調査
43	大久保迫	吾平町上名大久保迫	台地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
44	境原	吾平町麓境原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	
45	赤野原	吾平町麓赤野原	台地	弥生(中)	弥生土器・石斧	
46	反田原	吾平町麓反田原	台地	縄文・弥生・奈良・平安	土師器・土器	
47	三角原	吾平町麓三角原	台地	弥生・奈良・平安	土器・土師器・須恵器	
48	寺ヶ迫古墳群	吾平町麓寺ヶ迫	台地	弥生(中)・古墳	円墳9基	
49	霧島原	吾平町麓霧島原	台地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	
50	井牟田	吾平町下名井牟田	低地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
51	論地原	吾平町下名論地	台地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	
52	論地原	高山町後田論地原	台地		弥生土器	
53	検検見崎城跡	高山町跡田検見崎	台地	中世	肝属氏出城の一・肝属二代の主兼経の弟 兼友の居館堀割・墓石等現存	
54	橋戸	高山町後田		古墳		H12土木分布調 查
55	北後田古墳群	高山町後田・稲村	台地	古墳		
56	検見崎	高山町後田検見崎	台地	弥生 (後)	円墳の回りに多量に散布	
57	銭亀	高山町後田銭亀	台地	弥生		
58	小牟田上	高山町後田小牟田上	台地	弥生・歴史		
59	稲荷岡	高山町後田稲荷岡	台地	弥生		

〈参考・引用文献〉

「山内原遺跡・大牟礼遺跡・児玉渡遺跡・中原遺跡」 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1985 吾平町教育委員会「宮ノ上地下式横穴群・松下城遺跡・大牟礼遺跡」 吾平町発掘調査報告書(2) 1987 吾平町教育委員会

「前木場遺跡」 吾平町発掘調査報告書(3) 1988 吾平町教育委員会

「前木場原遺跡・モタイ坂遺跡・薗入寺跡遺跡」 吾平町発掘調査報告書(4) 1989 吾平町教育委員会

「天神原地下式横穴群」吾平町発掘調査報告書(5) 1989 吾平町教育委員会

「六条原A遺跡」 吾平町発掘調査報告書(6) 1989 吾平町教育委員会

「名主原遺跡・荷掛原遺跡」 吾平町発掘調査報告書 (7) 1990 吾平町教育委員会

「水流遺跡・横井坂遺跡」 吾平町発掘調査報告書 (8) 1990 吾平町教育委員会

「黒羽子遺跡」 吾平町発掘調査報告書(9) 1991 吾平町教育委員会

「筒ヶ迫遺跡・荷掛原遺跡」 吾平町発掘調査報告書(10) 1992 吾平町教育委員会

「原口岡遺跡」 吾平町発掘調査報告書(11) 1994 吾平町教育委員会

「反田原遺跡」 吾平町発掘調査報告書(12) 1994 吾平町教育委員会

「出水・軍宮下遺跡」 吾平町発掘調査報告書 (13) 2000 吾平町教育委員会

「中尾地下式横穴群」 吾平町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 1998 吾平町教育委員会

「和田遺跡」吾平町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(17) 2004 吾平町教育委員会

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

調査は、測量基準として「一般地方道折生野神野吾平線改良施行計画平面図」のセンターライン No.64とNo.68の2点を結ぶ線を基軸に、北西から南東方向に1・2・3~、北東から南西方向にA・B・C~とする10m間隔の調査用グリッド(区割り)を設定して実施した。

なお、平成3年から平成7年度の調査では、レベル原点として肝属郡吾平町上名字中尾の町営グラウンドに所在するBM.6(H=49.459m)と同字中尾6396番地に所在するBM.5(H=51.887m)を基準として利用した。

平成3年度の調査は、遺跡の範囲や性格を把握するため事業区間の県道拡幅部分、3,600㎡を対象に確認トレンチを18か所設定して行った。その結果、調査区域全体に遺跡が残存することか判明したため、確認調査を本調査に切り替え、継続して調査を実施した。この時点で、現道部分の下位にも遺跡がひろがることが把握されたことから、事業区間の北側から平成5年度に3,000㎡、平成6年度には1,200㎡、平成7年度に1,000㎡を対象に本調査を行った。なお、平成7年度から平成9年度については、さらに南側への遺跡のひろがりを把握するための確認調査を本調査と併行して実施した。

調査の順序としては、伐採等の環境整備を実施した後、重機(バックホー)によって表土・アスファルトなどを除去し、II層以下について遺構検出面であるIV(池田火山灰)層上面あるいはVI(アカホヤ火山灰)層上面まで人力(山鍬・ジョレン等を利用)による掘り下げを行った。出土した遺物(土器・石器など)を記録して取り上げた後、検出した遺構(竪穴住居跡・溝状遺構など)については、それぞれ丁寧に掘り下げを行い(移植ゴテ等を利用)、写真撮影や図面作成作業を実施した。その後、VI(乳茶褐色粘質土)層まで人力によって掘り下げ、再度、遺物の取り上げなどを行い、遺構検出(集石など)・図面作成作業などを実施した。さらに下層確認のため、部分的に下層確認トレンチを設定して掘り下げを行い、遺物包含層の確認に努めた。なお、掘削によって生じた排土は、調査区の幅が狭いために隣接する事業区内の調査終了区間などにベルトコンベアやタイヤショベル、バックホーによって搬出した。その際、調査地と現道との高低差がある場合は、作業上の安全等を考慮して場合によっては法勾配を取りながらの掘削、排土処理を実施した。なお、各年度とも発掘調査終了跡には掘削部分の埋め戻しを行った後、県土木部(鹿屋土木事務所)への調査現場の引き渡しを実施した。

第2節 調査成果の概要

平成3年度から平成7年度にかけての発掘調査の結果、W層上面で縄文時代早期の集石を8基検出し、W層から吉田式土器・下剥峯式土器・塞ノ神A式土器などの土器、打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨敲石類・石皿などの石器が出土した。IV層からは、縄文時代晩期の土坑3基のほか、黒川式土器・刻目突帯文土器・組織痕土器などの土器、打製石鏃・磨製石斧・打製石斧などが出土した。このほか、IV層からVI層上面において古墳時代の竪穴住居跡22軒、溝状遺構4条などを検出した。各時代ごとの調査成果の詳細については、第IV章でふれることとする。

第5表 確認調査の概要一覧

年度	トレンチ番号	トレンチの規模	遺 構	遺物
	1 T	2 × 4 m	_	有
	2 T	1.2×6.5m	溝状遺構	有
	3 T	2 × 6 m	溝状遺構	有
	4 T	2 × 5 m	_	有
	5 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	有
	6 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	有
	7 T	$12 \times 1.5 \mathrm{m}$	_	有
	8 T	2 × 8 m	_	有
Н	9 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	有
3	10 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	有
	11 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	有
	12 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	有
	13 T	$2 \times 6 \text{ m}$	_	有
	14 T	2 ×10m	_	有
	15 T	2 ×10m	_	有
	16 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	有
	7 T	$2 \times 3 \text{ m}$	_	有
	18 T	14×1.5m	_	有
Н	1 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	有
6	2 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	有
	1 T	$2 \times 7 \text{ m}$	竪穴住居跡	縄文時代早期・古墳時代
	2 T	$2 \times 4 \text{ m}$	溝状遺構	縄文時代早期・古墳時代
Н	3 T	$2 \times 3 \text{ m}$	_	縄文時代早期・古墳時代
7	4 T	$2 \times 5 \text{ m}$	_	縄文時代早期
	5 B T	$2 \times 4 \text{ m}$	溝状遺構	古墳時代
	6 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	縄文時代早期
	1 T	$2 \times 4 \text{ m}$	竪穴住居跡	縄文時代早期・古墳時代
Н	2 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	縄文時代早期・古墳時代
8	3 T	$2 \times 4 \text{ m}$	_	古墳時代
٥	4 T	$2 \times 4 \text{ m}$	地下式横穴墓	古墳時代
	5 T	$2 \times 4 \text{ m}$	<u>-</u>	古墳時代
	1 T	$3 \times 4 \text{ m}$	_	弥生時代中期土器
H	2 T	$3 \times 3 \text{ m}$	_	縄文時代早期土器
9	3 T	$3 \times 4 \text{ m}$	_	弥生時代中期土器
	4 T	$3 \times 4 \text{ m}$	_	縄文時代早期土器

第3節 遺跡の層位

中尾遺跡は、標高約40~55mのシラス台地および姶良川の開析によって形成された河岸段丘縁辺部に立地する。遺跡およびその周辺の現況は、徐々に宅地化が進んではいるものの、ほぼ平坦な畑地帯がひろがっており、地形的には良好な様相を呈している。ただし遺跡が形成された I 層より下位の旧地形においては、台地縁辺部に立地することもあって部分的に起伏が認められ、浅い谷状の地形を形成するなど、現地形から受ける印象とは相違がある。このような旧地形に対し、後世に盛土や削平などの造成が行われたこともあり、地層の堆積や残存状況には地点によって若干の差が認められる。今回報告する中尾遺跡の調査区内における基本的な土層は、M~N-41区の土層を指標とした。基本的な層序については以下の通りである。なお、層厚については調査区全体における数値である。

(a) a o			
I	Ι	層	灰黒褐色土
П	П	層	黒褐色土
Ш	Ш	層	暗紫色土
IV a	IV a	a 層	暗黄褐色土
IV b	IV ł	層	黄褐色土
V	V	層	黄褐色軽石層
VI a	VI a	a 層	黄橙色火山灰層
VI b	VI I	p層	黄橙色軽石層
VII	VII	層	乳茶褐色粘質土
VIII	VIII	層	黒褐色土
IX	IX	層	暗茶褐色粘質土
X	X	層	黄褐色粘質土
	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
	I II III IV a IV b VI a VI b VII IX	II II III III IV a IV a IV b IV b V V VI a VI a VI b VI b VII VIII VIII VIII IX IX	I I M M M M M M M M M M M M M M M M M M

第3図 中尾遺跡基本土層図

I層は、表土または旧表土・盛土・耕作土である。層厚約20~200 cm である。

Ⅱ層は、 $O-14\sim15$ 区、 $M-20\sim25$ 区を中心に調査範囲の一部にわずかに残存する。古代の遺物包含層である。残存部分での層厚は約 $5\sim50$ cm である。

Ⅲ層は、開聞岳を起源とする噴出物で、通称紫ゴラとよばれる。 Ⅳ層中の上位に部分的であるがブロック状に認められ、層厚約4 ~10cm である。噴火の年代については西暦874(貞観16)年が有力である。

Ⅳ層は、約5,500年前の池田カルデラを起源とする噴出物で、上位から火山灰層(IV a)、火砕流層(IV b)に細分される。基本的にIV a 層は、縄文時代晩期・古墳時代の遺物包含層である。IV層の層厚は約20~40cm である。

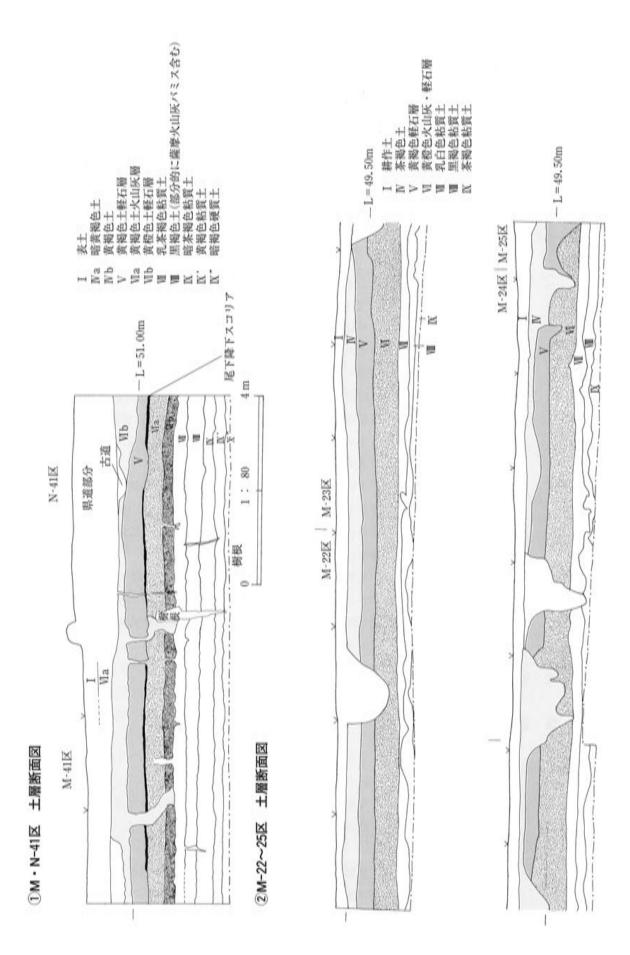
V層は、池田カルデラを起源とする噴出物で池田降下軽石とよばれる。層厚は約20~50cm である。なお、V層下部には部分的に尾下降下スコリアと呼ばれる黒褐色火山礫が認められる。層厚約4cm程度である。

VI層は、約6,400 \sim 6,300年前の鬼界カルデラを起源とする噴出物で、通称アカホヤ火山灰とよばれる。上位から火山灰層(W a 層)、軽石層(W b 層)に細分される。VI層の層厚は約 $20\sim$ 60cm である。

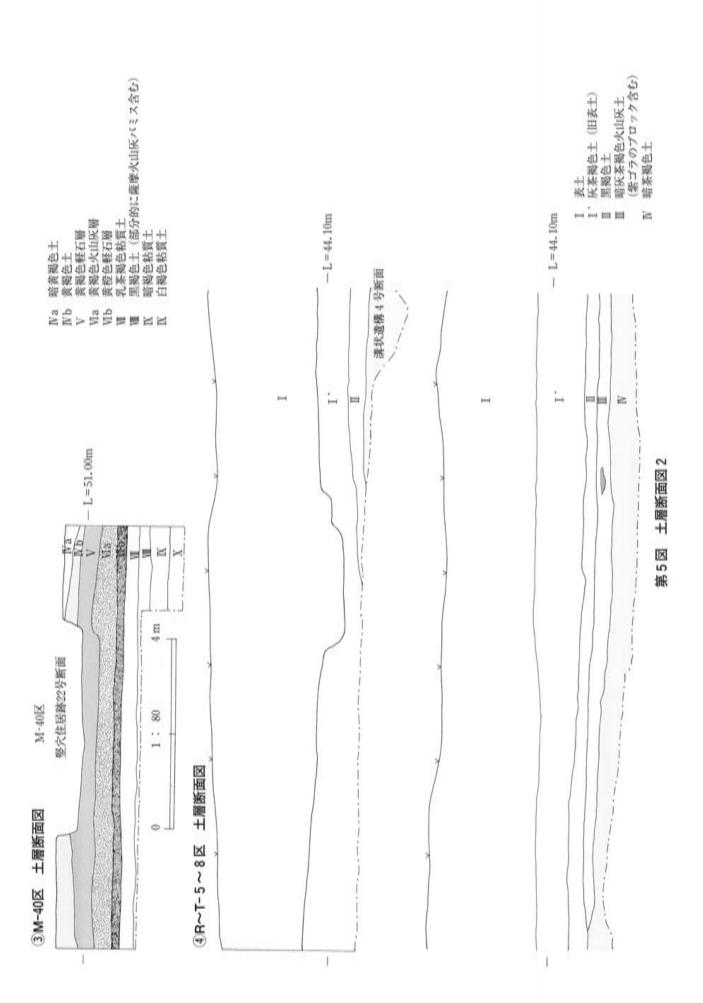
Ⅲ層は、縄文時代早期の遺物包含層でやや硬質である。層厚約20~30cmである。

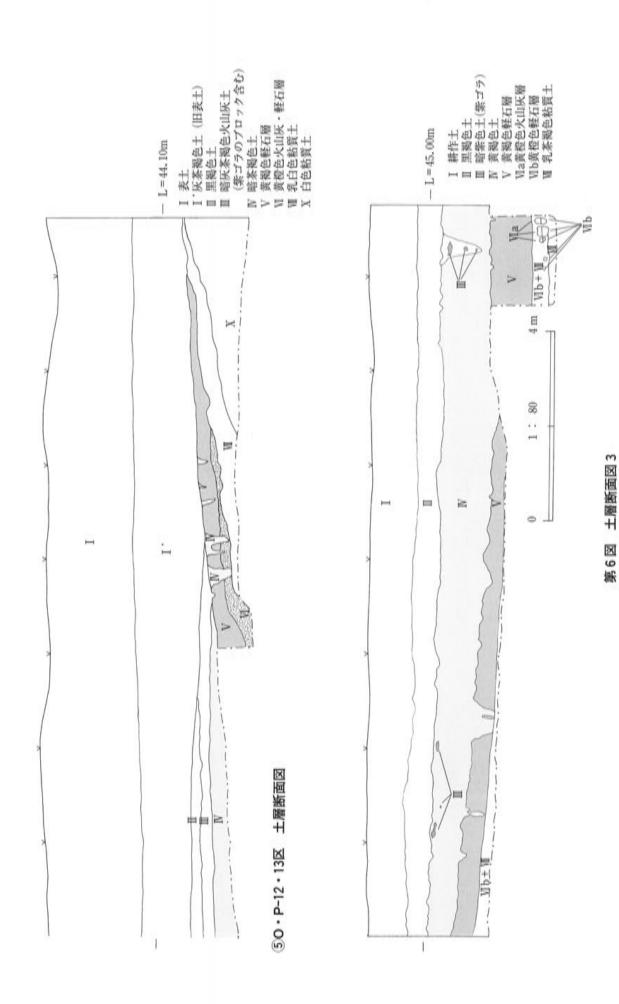
™層は、やや硬質で約11,500年前の桜島を起源とする噴出物、通 称薩摩火山灰が部分的にパミス状に点在する。層厚約30cm であ る。

IX層は、通称チョコ層とよばれる層に該当すると思われ、やや硬質である。IX層から遺物の出土は認められていない。

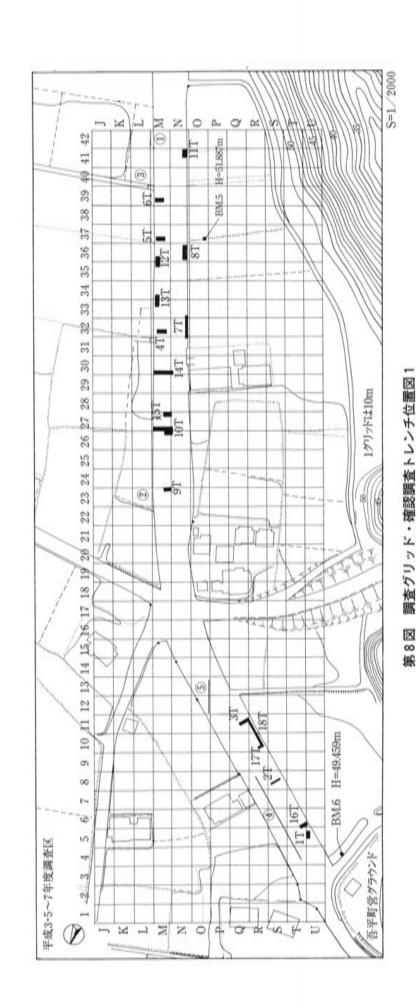


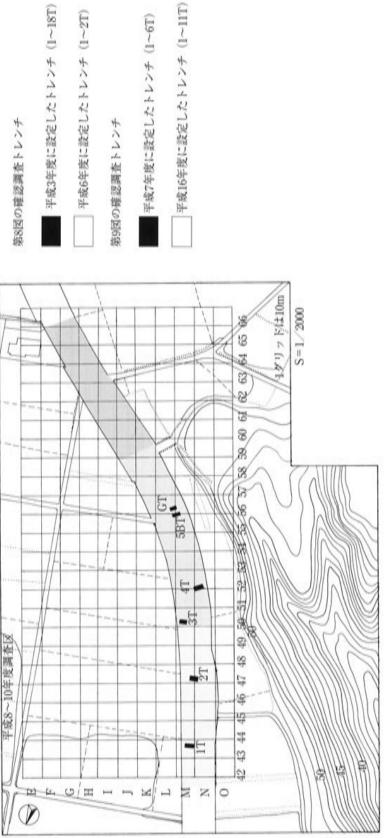
第4図 土層断面図1

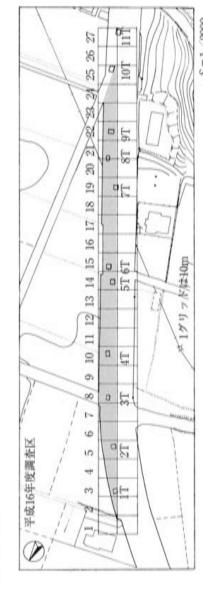












第9図 調査グリッド・確認調査トレンチ位置図2

第Ⅳ章 発掘調査の成果

第1節 Ⅷ層の調査 (縄文時代早期)

乳茶褐色粘質土のW層からは、縄文時代早期の吉田式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・塞ノ神 A式土器などの土器、打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・磨敲石・敲石・石皿などの石 器が出土した。これらの出土遺物を記録して取り上げた後、黒褐色土のW層上面で遺構検出を実施 した結果、縄文早期に属すると思われる集石を計8基検出した。

1 検出遺構(第11図~第15図)

(1)集石1号(第11図)

M-24区のW層上面で検出されたものである。径 $5\sim15$ cm 程度の輝石安山岩・花崗岩の亜円礫・角礫120個で構成される。集石内部および周辺に掘り込みは確認されていない。

(2) 集石 2号 (第12図)

M-26区で検出したものである。集石を構成する礫は、 1.0×0.85 mの範囲に分布しており散在的で集中は弱い。径 $5\sim10$ cm 程度の輝石安山岩の円礫・亜円礫31個で構成される。集石内部およびその周辺に掘り込みや共伴遺物は認められていない。

(3)集石3号(第12図)

N-24区のW層上面で検出されたものである。風化した輝石安山岩を主体とする円礫33個で構成される。集石内から外面に貝殻条痕を施す土器の胴部片が3点出土したほか(第13図 $1 \sim 3$),炭化物がわずかに認められた。集石に伴う掘り込みは確認されていない。

(4) 集石 4号 (第12図)

M-25区のW層上面で検出したものである。集石を構成する礫は、 0.6×0.33 mの範囲に分布する径 $5\sim10$ cm 程度の輝石安山岩の扁平な角礫16個で構成される。集石周辺からは掘り込み、炭化物、共伴遺物は確認されていない。

(5)集石5号(第12図)

N-26区のWb層で検出されたものである。集石を構成する礫は 0.6×0.33 mの範囲に分布する。径 $5 \sim 10$ cm 前後の円礫 3 個,角礫13個の計16個で構成される。集石内に掘り込みは検出されていないが炭化物がわずかに認められた。

(6)集石6号(第14図)

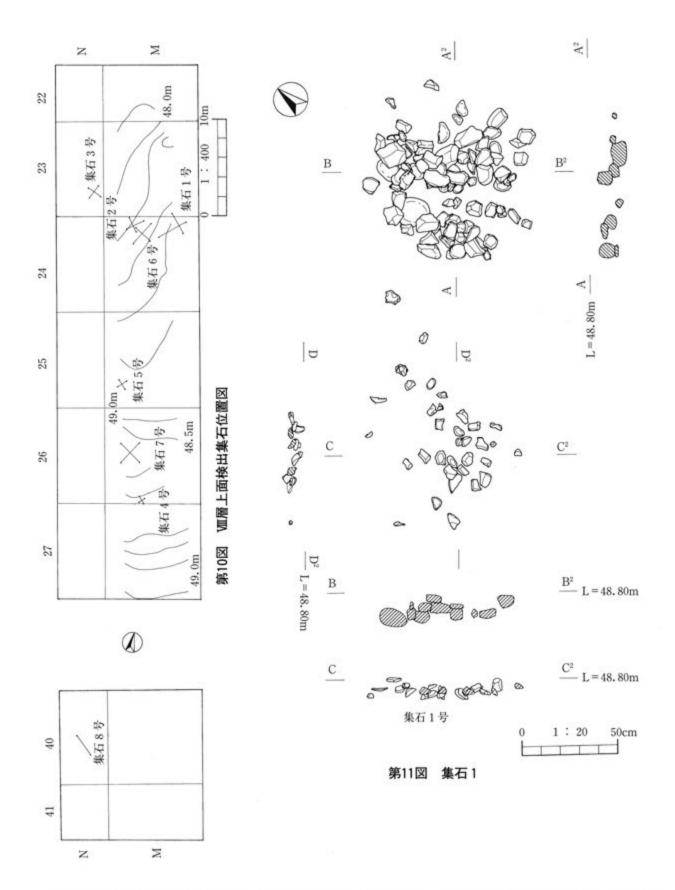
M-24区のW層上面で検出したものである。径 $5\sim10$ cm 程度の輝石安山岩・花崗岩の角礫21個で構成される。礫は 1.05×1.55 mの範囲に散らばっておりまとまりは弱い。集石周辺から掘り込み、遺物は認められていない。

(7) 集石 7号 (第14図)

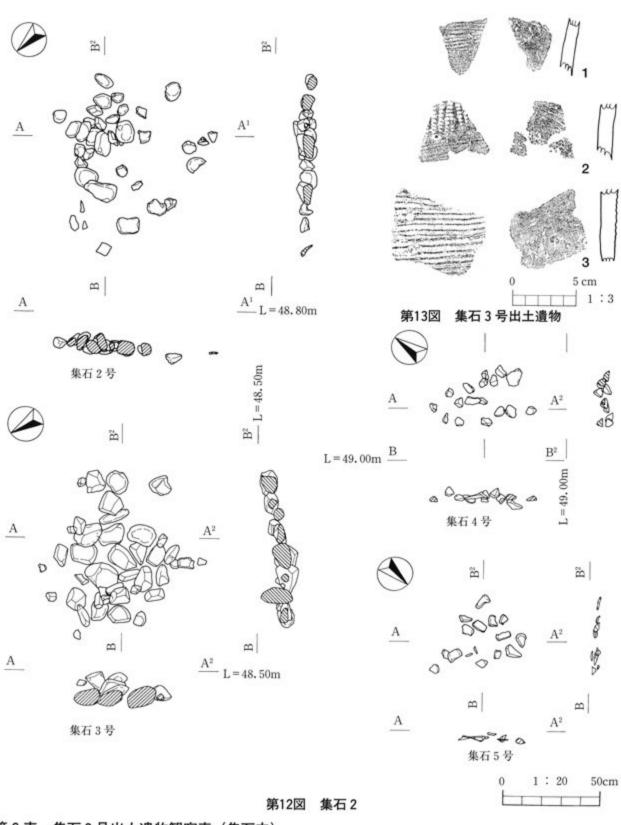
M-24区のW層上面で検出したものである。輝石安山岩の亜円礫・角礫41個で構成される。集石の内部には掘り込み、遺物とも認められていない。

(8) 集石 8号 (第15図)

M-40区のW層上面で検出したものである。径 $5\sim10$ cm 前後の角礫・亜円礫26個で構成される。

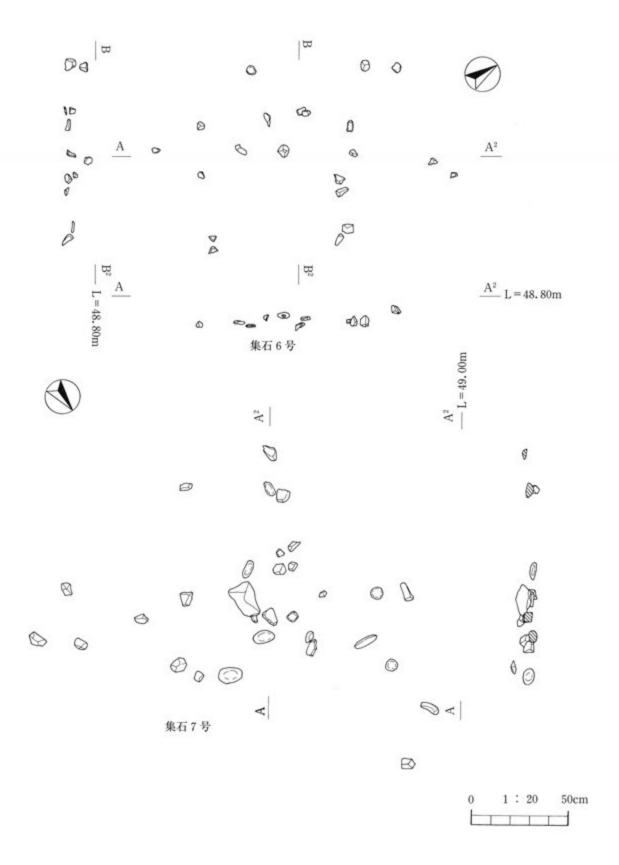


礫は2.2×2.2mの範囲に分布しており散在的で集中は弱い。集石内およびその周辺から掘り込み、遺物、炭化物などは確認されていない。



第6表 集石3号出土遺物観察表(集石内)

挿図	遺物 番号	器種	中干区	705 £85	-tr 48	色	調	845 -
番号		63° 131.	出土区	遺構	文 様	内 面	外面	Min II.
13	1	深鉢	N - 24	集石3号	貝殼条痕	黒褐	褐	長石・石英
	2	深鉢	N - 24	集石3号	貝殼刺突	明褐	黒褐	長石・石英・黄橙色砂
	3	深鉢	N - 24	集石3号	貝殼条痕	裀	暗褐	金色雲母・長石・黄橙色砂



第14図 集石3



0,0

0

0

第15図 集石 4

第7表 遺構観察表 (集石)

挿図 番号	遺構名	検出区	検出面	時期	長さ (m)	幅 (m)	碟数 (個)	石 材	遺物
11	集石1号	M - 24	加層上面	縄文早期	0.97 1.3	0.92 0.85	85 35	輝石安山岩・花崗岩	2
	集石2号	M - 26	WI層上面	縄文早期	2.15	1.70	31	輝石安山岩	-
100	集石3号	N - 25	加層上面	縄文早期	1.0	0.85	33	輝石安山岩	土器 3
12	集石 4号	M - 25	WI層上面	縄文早期	0.5	0.43	16	輝石安山岩	=
	集石5号	N-26 · 27	加層上面	縄文早期	0.6	0.33	16	輝石安山岩	-
	集石6号	M - 24	Ⅷ層上面	縄文早期	1.55	1.05	21	輝石安山岩	2
14	集石7号	M - 24	Ⅲ層上面	縄文早期	0.9	0.9	41	輝石安山岩	-
15	集石8号	M - 40	W層上面	縄文早期	2.2	2.3	27	輝石安山岩	2

2 出土遺物

縄文時代早期の遺物包含層である乳茶褐色土のⅢ層から出土した遺物は、縄文時代早期前半から 後半期にかけての土器、あるいはこれらの土器に共伴すると思われる石器である。

当該層はやや硬質で粘性があり、発掘時には掘り上げた土が遺物に付着し、取り上げが困難な状況があった。

(1) 土 器

土器は、縄文時代早期前半から早期後半のもので、これらを図化するにあたり、主にそれぞれの口縁部や胴部の文様などの特徴をふまえて $I \sim XI$ 類に分類した。

各類をこれまでの土器型式にあてはめると、おおよそⅠ類土器が栫ノ原6類土器の一部あるいは小牧3A遺跡の第Ⅱ類土器、Ⅱ類土器~Ⅲ類土器が吉田式土器、Ⅲ類土器が石坂式土器、Ⅸ類が下剥峯式土器、Ⅹ類が塞ノ神A式土器、ⅩⅠ類が条痕文土器あるいは右京西式土器に該当する。

Ⅰ類は、口縁部が緩やかに外傾する円筒土器を基本とし、底部は平底となる器形である。文様は、 栫ノ原 6 類あるいは小牧 3 A 第 Ⅱ 類土器では、口唇部に刻みが施されるが、本遺跡から出土した資料は無文である。胴部には貝殻復縁部による横位の刺突文が施されるものと思われ、底部端には縦位の連続刺突文や沈線がめぐらされる。調整は内面に丁寧なナデ整形がみられる。

Ⅱ~Ⅲ類土器は、これまでおおむね吉田式土器と呼ばれているもので、本遺跡で最も多く出土した一群である。器形は、口縁部が緩やかに外傾する円筒形土器を基本とする。底部は平底となる。

主として口縁部の文様から5類に分類したが、胴部には基本的に横位の施文(条痕文や押し引き 文あるいはこれらの組み合わせ)が行われていることが共通した特徴である。

これらの吉田式土器のほとんどの口唇部には連続した刻みが施される。口縁部直下には多くの場合、横位の貝殻刺突文が2~3段条施される。さらにその下位にはクサビ形貼付文の変形したもの、あるいはその名残として表現されたと思われる縦位の貝殻刺突文が施されるもの、横位の貝殻刺突文のみが施されるものなどがある。横位の貝殻刺突文を施すタイプには1段、4段のものもみられるがその多くは2~3段のものである。胴部には貝殻復縁部による押し引き文または条痕文が施されている。押し引き文は横位に施されているが、器面上に施文する際の力の入れ具合から文様としては結果的に強弱がつけられているもの、押し引き文と貝殻条痕文と組み合わせてアクセントをつけたものも認められる。また、底部の立ち上がり部分には基本的に縦位の沈線が施され、整形としては内面に丁寧なナデが認められる。

Ⅱ類~Ⅲ類とした吉田式土器を区別する大きなポイントはクサビ形の貼付文状の文様にある。クサビ形貼付文がくずれ、貝殻復縁部によって貼付文に変わるクサビ形の貼付文状の刺突文を施すⅢ類土器、貝殻復縁部による縦位の刺突文が施されるⅢ類土器、爪形文が施されるⅣ類土器、口縁部に横位の貝殻刺突文を2段施した後、その間に斜位の貝殻刺突文を施すⅤ類土器、半裁竹管状の施文具による「C」字状の文様が施されたⅥ類土器というように、吉田式土器の口縁部文様帯の変遷を考える上で貴重な資料が得られた。

Ⅲ類土器は、小片が多く全形を知り得る資料がないが胴部に縦位や横位の貝殻条痕文が施される ものである。

IX類土器は、口縁部が緩やかに内傾し、底部は平底である。口縁部には、貝殻背面による押圧文を施し、胴部から底部にかけて貝殻刺突文で飾るもので下剥峯式土器の範疇に含まれるとよばれているものである。器形、文様などから桑ノ丸式土器との近似性を感じさせる。

X類土器は、一般的にほぼ直行する胴部にラッパ状にひらく口縁部をもつものである。口縁部内 面に明瞭な稜をもつ。文様は、沈線によって幾何学的な区画文を施し、区画文内に撚糸文を施す。 調整は、内面に丁寧なナデ整形がみられる。

X I 類土器は、小片のため全体像を知り得ないが、これまでの土器形式でいう小山タイプ・右京 西式・条痕文土器とよばれているタイプである。

① I 類土器 (第16図 4~7)

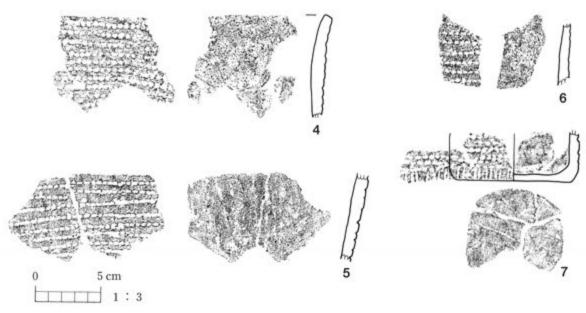
I 類土器は胴部に横位の貝殻刺突文を施す一群である。

4は口縁部片で、口唇部は無文である。5・6は胴部片である。いずれも外器面には、貝殻復縁 部による横位の刺突文が連続して施される。7は底部片で、底部からの立ち上がりに3cm弱の縦 位の刻みを連続して密に施している。

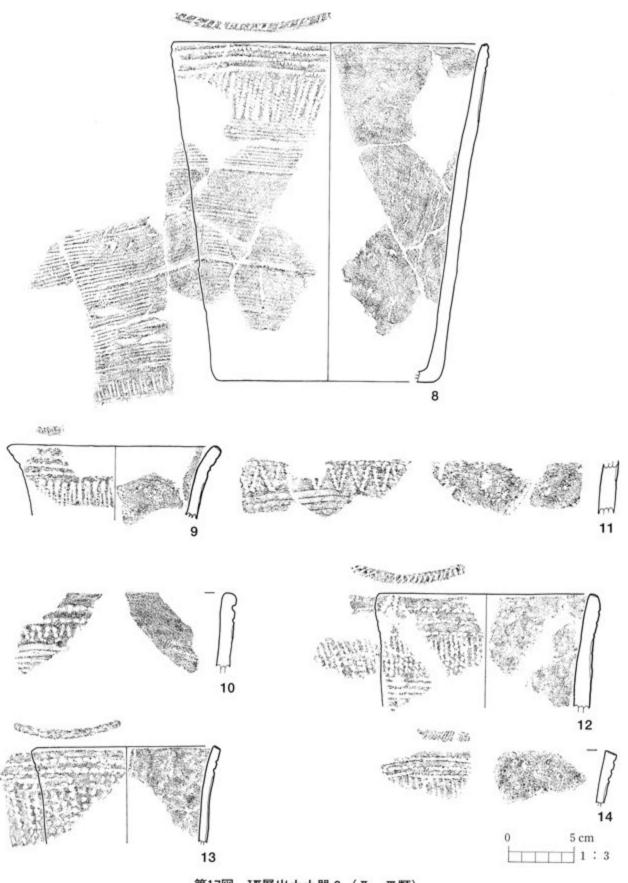
② Ⅱ 類土器 (第17図 8~11)

Ⅲ類土器は、クサビ形貼付文の形がくずれ、貝殻復縁部によってクサビ形状の貝殻刺突文が連続して施されるものである。

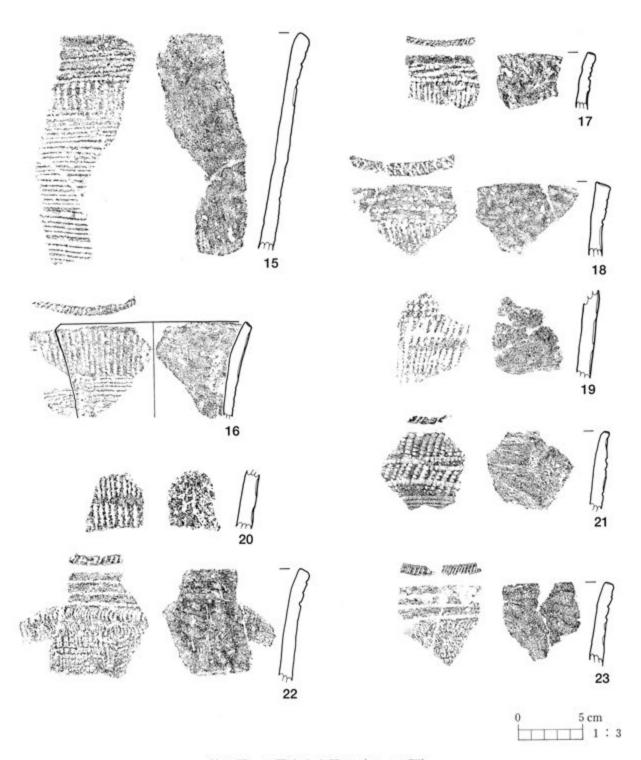
8 は完形品で復元口径24.8cm, 底径15cm, 器高27.2cmを測る。12は復元口径15.8cm, 15は復元口径14.7cmを測る。9のクサビ形状の貝殻刺突文は密に施されているが、10・11の刺突文は「V」字



第16図 VII層出土土器 1 (I類)



第17図 Ⅵ層出土土器2 (Ⅱ・Ⅲ類)



第18図 **UI**層出土土器 3 (**II**·**IV**類)

形にひらいており、かなりクサビ形を意識した施文であることが読みとれる。10は口唇部が無文で、口縁部のクサビ形状の刺突文は短く施されている。

③ Ⅲ類土器 (第17図 12~14・第18図 15~21) Ⅲ類土器は、口縁部に横位の貝殻刺突文が3段施され、その下位に、クサビ形の貝殻刺突文がく ずれ、貝殻復縁部による縦位の密な刺突文が連続して施されるものである。15・16のように胴部文様は貝殻条痕文である。16は口縁部に横位の貝殻刺突文が施されないものである。

④IV類土器 (第18図 22~23)

Ⅳ類土器は、口縁部下の文様帯に横位の貝殻刺突文を3段施し、その直下に爪形文を施すタイプである。22は、爪形文の方向が1段目が「C」字状、2段目は逆「C」字状に施されている。

⑤ V 類土器 (第19図 24~26)

V類土器は、口縁部に横位に2段の貝殻刺突文を施し、その間に斜位の貝殻刺突文を施すタイプである。胴部文様は貝殻条痕文である。24は口唇部のキザミ目がないものである。復元口径21.5cm、を測る。

⑥ VI 類土器 (第19図 27~33)

Ⅵ類土器は、口縁部下の文様帯に半裁竹管状の施文具による「C」字状の刺突文が施されているタイプである。27は復元口径が15.3cm、28が12.9cmを測る。28は口唇部直下に「C」字状の刺突文が少なくとも3段施されている。31は口唇部直下に横位の貝殻刺突文がみられないものである。

32は口縁部上位と下位に横位の貝殻刺突文が2段ずつ施され、その間に貝殻の肋と思われる施文 具で刺突文が施されれるものである。胴部には条痕文あるいは押し引き文が施された後、ナデによ る調整が行われている。

⑦Ⅷ類土器(第20図 34~41・第21図 42~54)

□類土器は、クサビ形状の貝殻刺突文が消え、口縁部に横位の貝殻刺突文が3段、胴部には貝殻 復縁部による押し引き文あるいは条痕文の組み合わせによって文様が構成されている一群である。

34は復元口径19.5cm, 器高21.6cm, 底径15.4cmを測る。底部からの立ち上がりに連続して施される沈線は底部の接地面付近にみられる。35は復元口径24.3cm, 36は18.9cm, 39は16cmを測る。

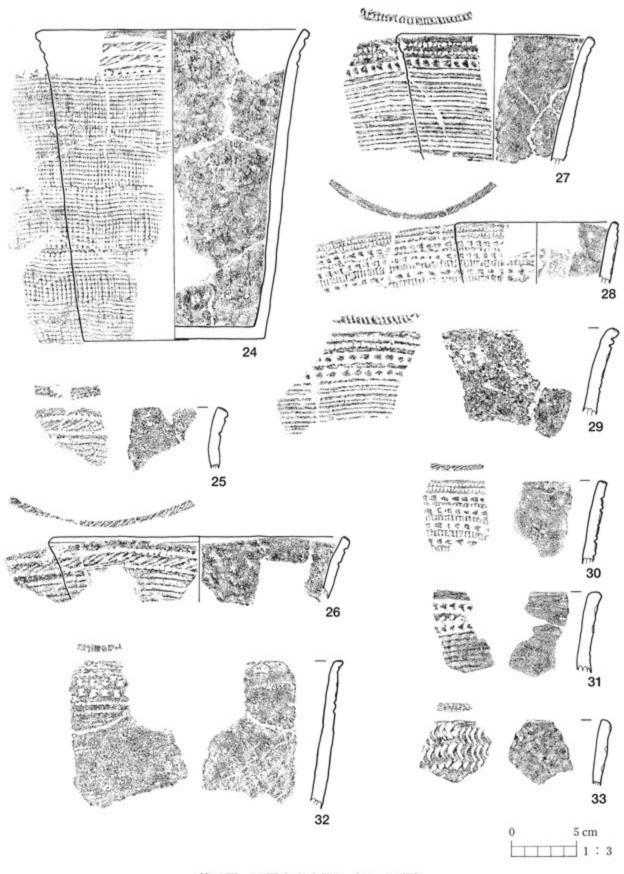
41は口縁部に横位の貝殻刺突文がなく、器面全体に押し引き文だけが施されるものと思われる。 口唇部は丸みを帯び無文である。 35・39・41は口縁部端が丸みを帯びる。

⑧胴部·底部(第22図 55~67·第23図 68·70~77)

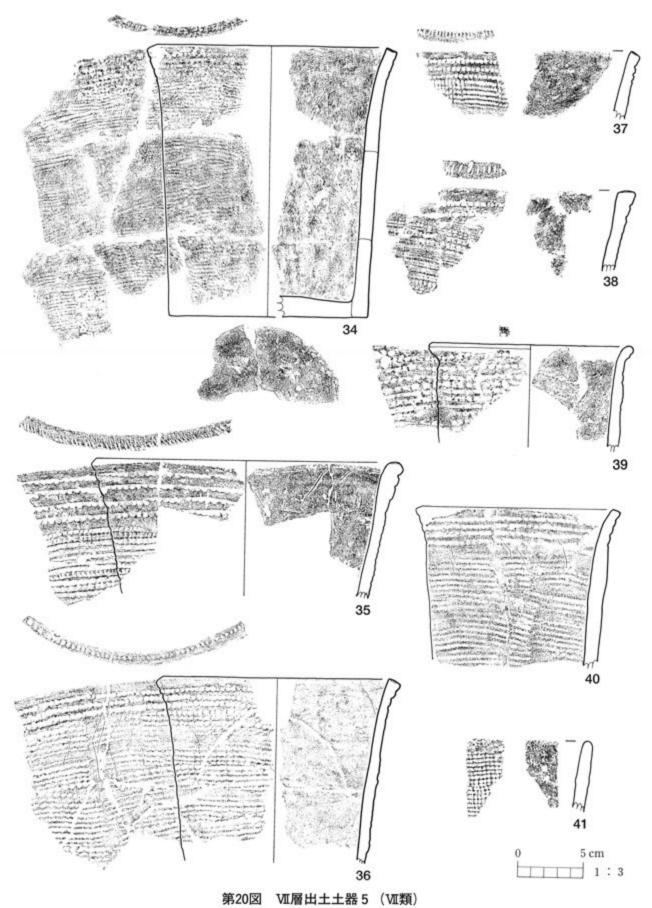
 $II \sim III 類の胴部や底部と思われるものである。<math>55 \cdot 57 \cdot 58 \cdot 61$ は胴部外面に貝殻復縁部による押し引き文、 $56 \cdot 59 \sim 61$ は押し引き文と条痕文が組み合わされているものである。 $62 \sim 67$ 横位の貝殻条痕文が施される。底部は $68 \cdot 70 \cdot 71 \cdot 73 \sim 76$ の底部は立ち上がり付近に縦位の刻み目が施され、 $72 \cdot 77$ は刻み目がみられないものである。

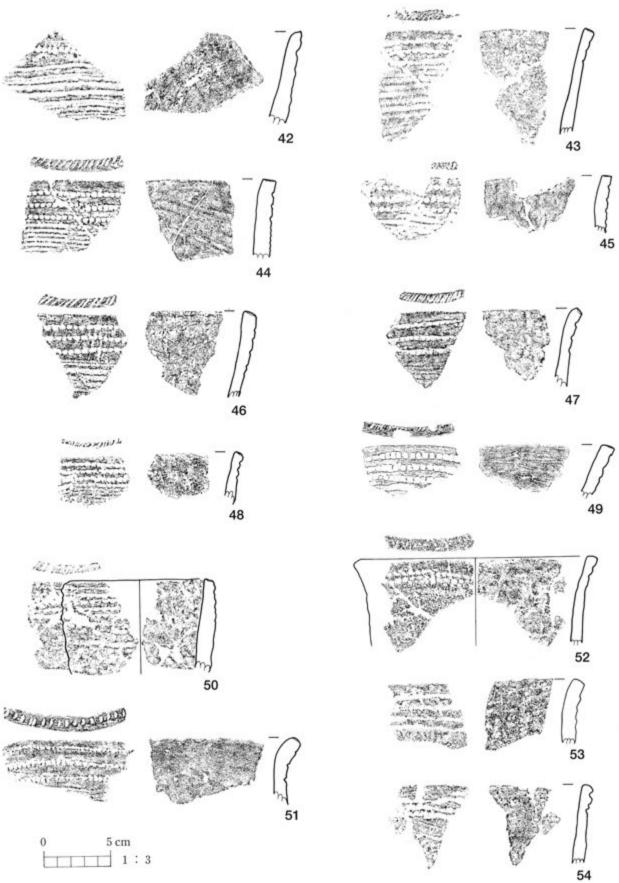
⑨垭類土器(第23図 69・第24図 81・85)

畑類土器は、胴部に縦位や底部付近の胴部に横位の貝殻条痕文が施されるものである。

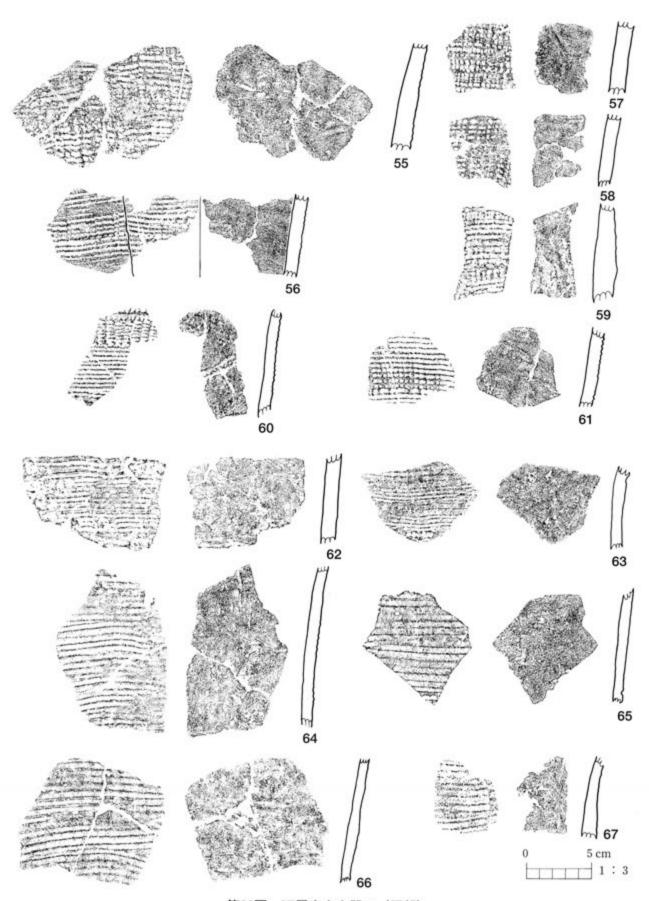


第19図 VII層出土土器 4 (V·VI類)

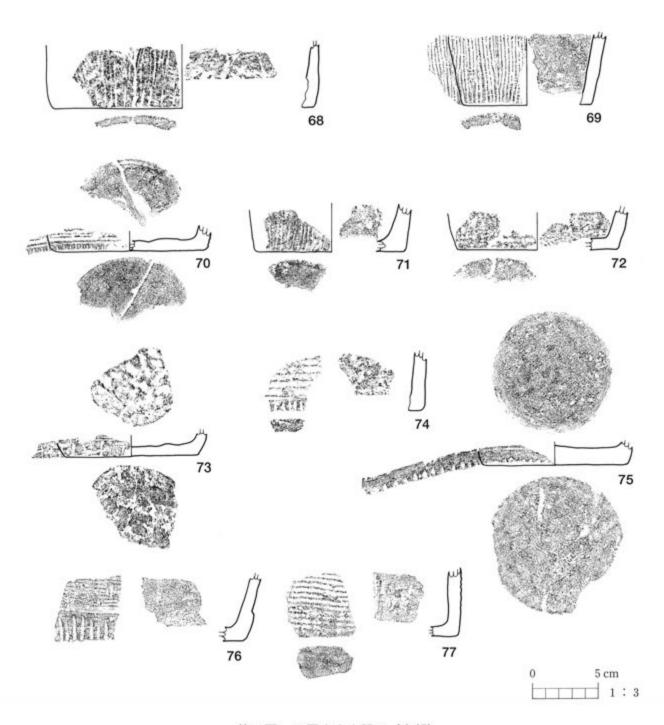




第21図 VII層出土土器 6 (VII類)



第22図 VII層出土土器 7 (胴部)

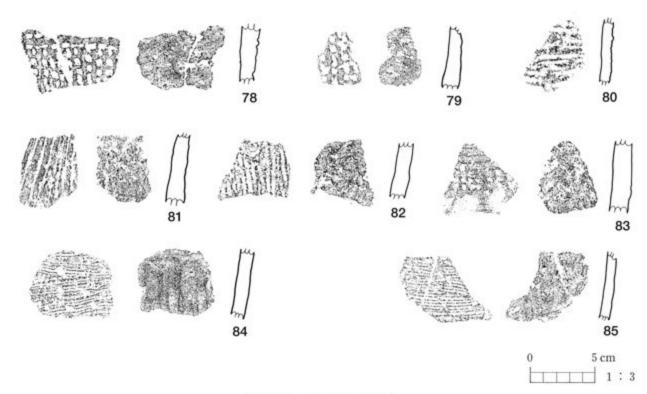


10 IX類土器 (第25図 86~88)

区類土器は、胴部に貝殻復縁部による貝殻刺突文が施されるもので、下剥峯式土器とよばれているものに該当する。

86は復元口径25.3 c m, 器高29.9 c mを測る。口縁部が内傾し, 口唇部は平坦となる。口縁部に貝殻背面で押圧文が施され, 口縁部以下の胴部には貝殻復縁部による鋸歯状の刺突文が連続して施される。

87は口縁部で口唇部は無文で端部は丸くおさまる。器面に縦位の貝殻刺突文が施される。88は胴



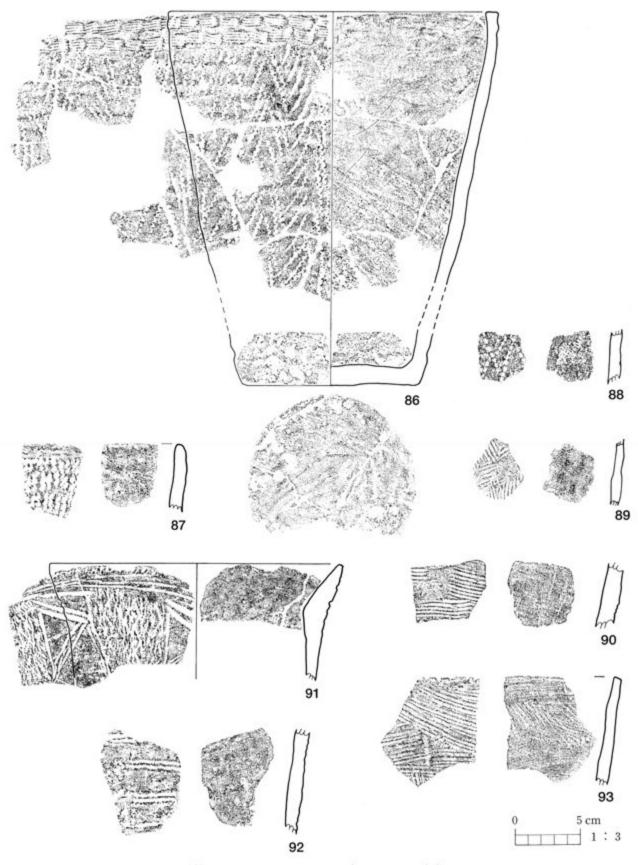
部片で貝殻刺突文がみられる。

① X 類土器 (第25図 91~92)

91は口縁部が緩やかに外反し、肥厚する口縁部内側には明瞭な稜を形成する。口唇部付近に刻み目が施され、胴部には沈線によって区画文が描かれる、区画文内に撚糸文が施される。塞ノ神A式 土器とよばれるものである。

12 XI類土器 (第25図 93)

XI類土器は、口縁部がやや外に開く器形で口唇部端は外傾する。胴部に条痕文が施されるものである。



第25図 VII層出土土器10 (区・X・XI類)

(2)石器

本遺跡から出土した石器は、打製石鏃・磨製石器・石匙・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・磨 蔵石・蔵石・石皿などがある。いずれも縄文時代早期の遺物包含層であるWI(乳茶褐色土)層から 出土したものである。調査面積や土器の出土量に対して当該期の剥片石器類の出土量は少ない傾向 が認められる。なお、平成9年度の調査区では打製石鏃をはじめとする多くの剥片石器が出土して いる。

①打製石鏃 (第26図 94)

94は黒曜石製の打製石鏃である。頭部、脚部など全体の半分ほどを欠くが、残存部から推定すると基部に抉りをもつ凹基鏃であると思われる。

②磨製石器 (第26図 95)

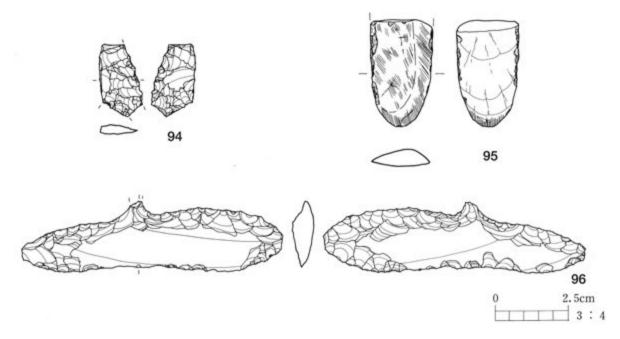
95は磨製石器として分類した。頁岩製で、同様の石材は磨製石斧・打製石斧に多用されている。 表面には全体的に擦痕が顕著に観察されるほか、裏面の先端部にも擦痕が認められる。両側縁は両面とも微細な剥離痕が観察できる。基部を欠損する。

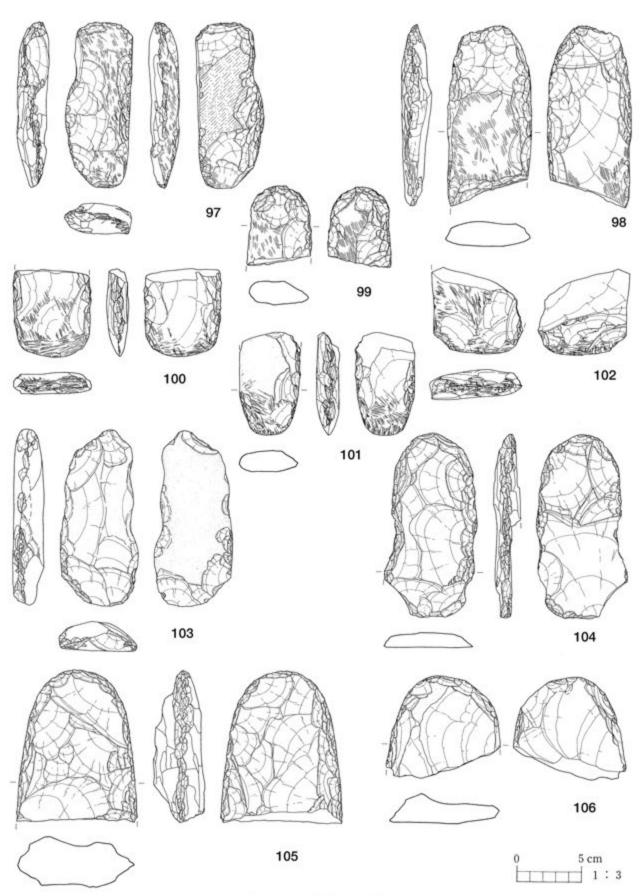
③石匙 (第26図 96)

96は、安山岩(サヌカイト)製の石匙である。横長の剥片を素材として利用しており、最大長9.0 c mを測る。つまみ部を欠損する。

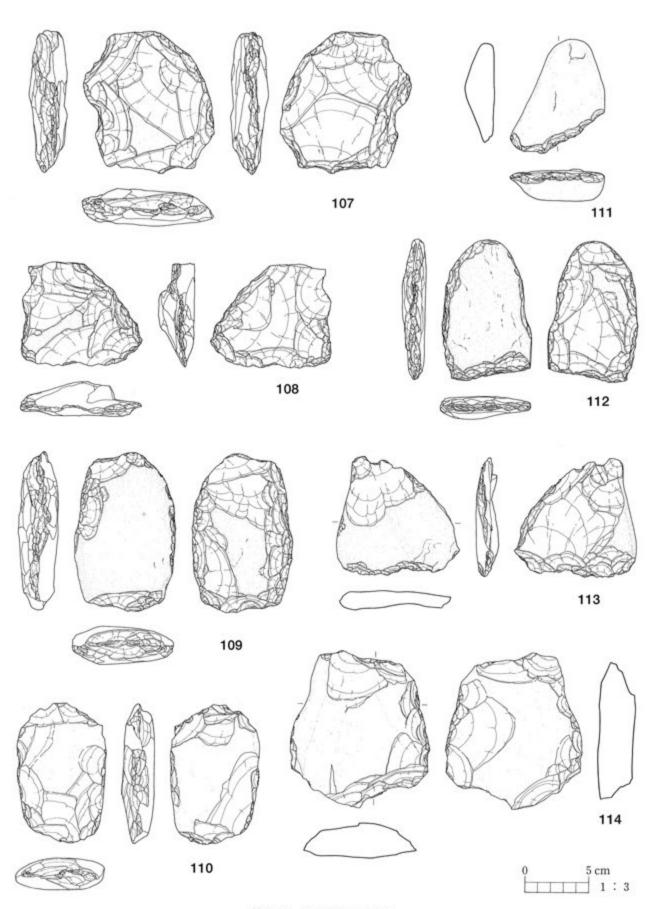
④磨製石斧 (第27図 97~102)

磨製石斧は、6点を図化し掲載した。これらは刃部や側面など一部を研磨した局部磨製石斧である。石材はいずれも頁岩を利用している。97は刃部を丁寧に研磨している。98は横長の剥片を利用したもので、刃部は欠損している。表裏面および側面の一部に研磨痕が観察できる。98~99は基部~胴部、100~102は刃部片である。

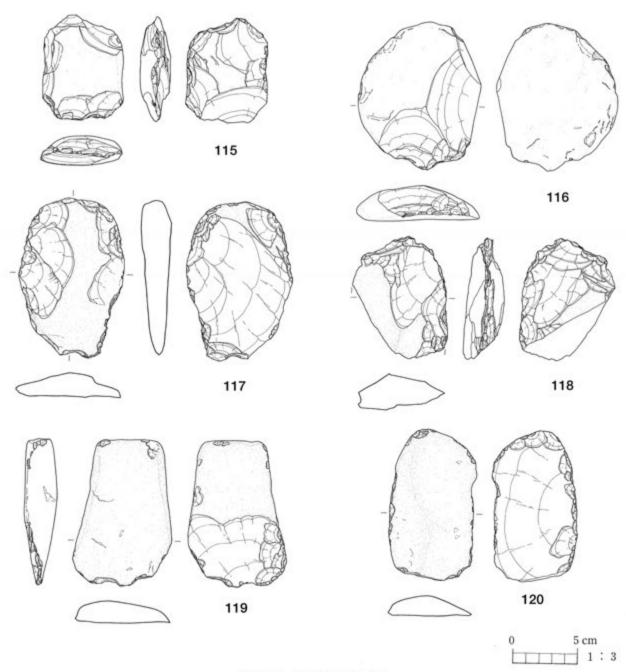




第27図 VII層出土石器 2



第28図 Ⅵ層出土石器 3



第29図 VII層出土石器 4

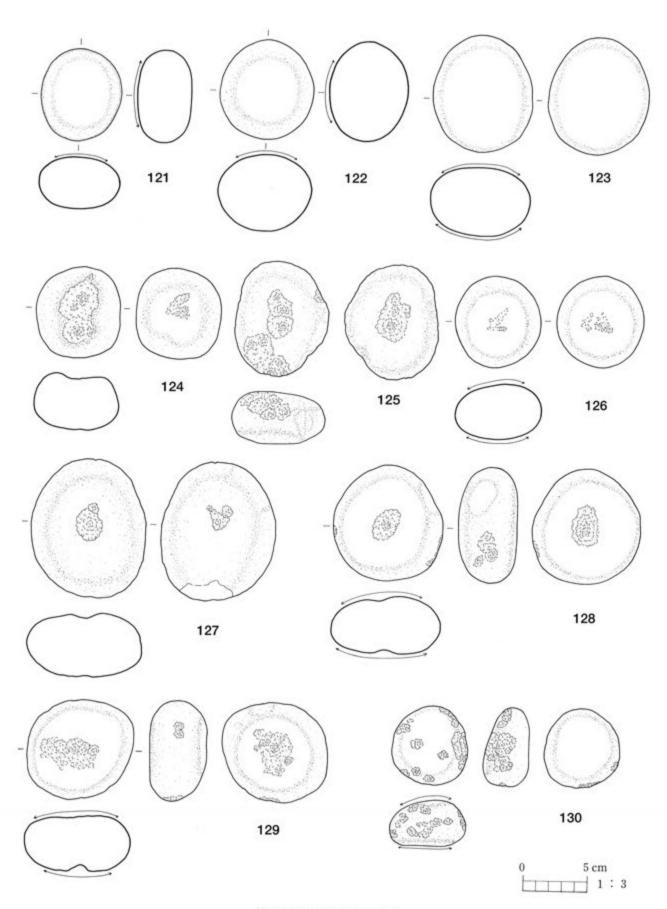
⑤打製石斧 (第27図 103~106)

打製石斧は4点を図化した。石材は117が砂岩製のほか、いずれも頁岩を利用している。103は両 側縁部方向からの整形剥離が行われた後、頭部および刃部方向からの整形が行われている。裏面に は礫面が残存している。

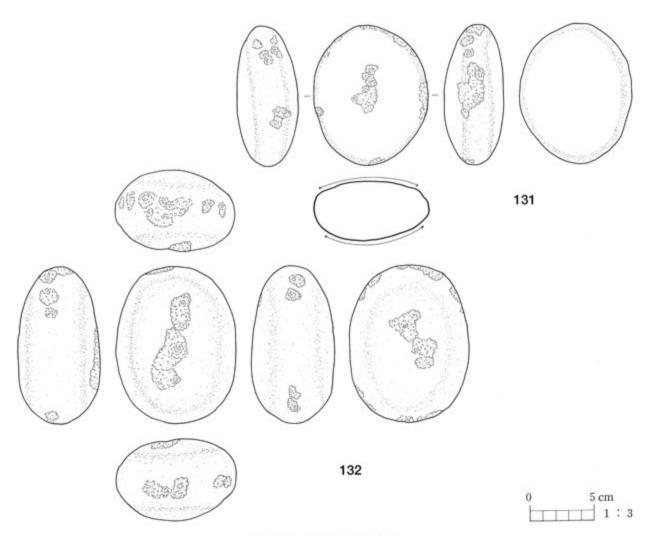
104は整形が丁寧に行われている。刃部から胴部途中を欠損している。105·106は打製石斧の頭部として分類した。比較的大型のものである。

⑥礫器 (第28 図107~114·第29図 115~120)

107~114は礫器として分類した。石材はいずれも頁岩を利用している。打製石斧の一部や欠損後



第30図 VII層出土石器 5



第31図 Ⅷ層出土石器 6

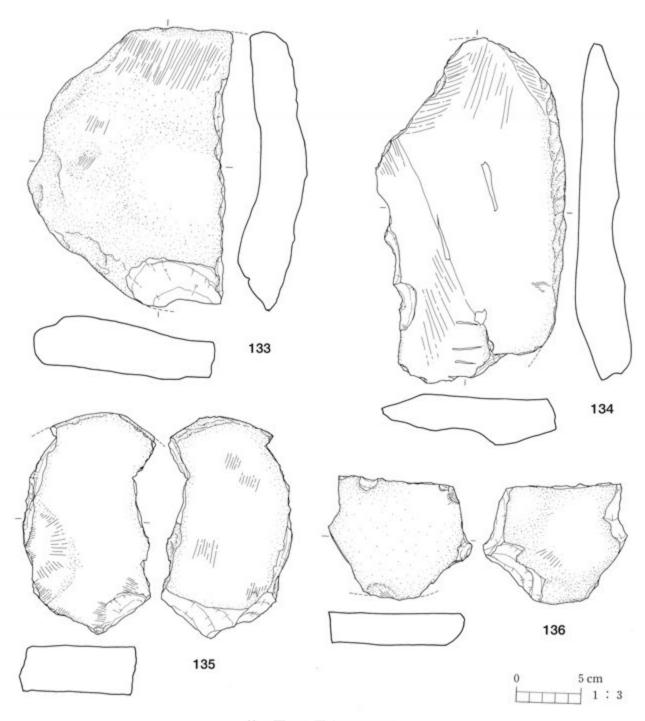
斧の一部や欠損後に再加工を施したものが含まれている可能性がある。側縁部からの整形剥離や連続する細かい剥離によって刃部が形成されているものがあるが、礫面(自然面)を残すものが多い。 ⑦磨石・磨敲石・敲石(第30図 121~130・第31図 131・132)

121~132は磨敲石類として分類した。これら磨敲石類には、いわゆる凹石も含まれる。形状は、 平面形が円形あるいは亜円形、断面形が楕円を呈する安山岩・砂岩・花崗岩が利用されている。

121~123は磨石である。石材は121, 122が砂岩, 123が花崗岩で, 断面形状が楕円形の円礫利用している。121・122:は片面, 123は両面に磨面が観察される。

126·128~131は磨敲石である。いずれも両面に磨面が認められ、表裏面の中央部にのみ敲打痕があるもの(126)、表裏面と側面の一部に敲打痕があるもの(128·129)、表面から側面にかけてあばた状に敲打痕をもつものなどがある。

124・125・127・132は敲石である。124・125・127は表裏面の中央部, 132は表裏面の中央部および側面の一部にに敲打痕がある。



⑧石皿 (第32図 133~136)

133~136は石皿である。いずれの石皿も使用面がくぼむほどの凹面の形成は認められないが、部分的に擦痕を観察できる。使用面の中央付近にはわずかに光沢のある磨面をもつ。133~135は輝石安山岩を素材とする石皿である。136は砂岩製の石皿で欠損している。

第8表 Ⅷ層出土土器観察表1

⊠No. 1	図面 番号 4	器種						tz.	∃133				_L	
			部 位	類別	出土区	層	遺物番号	色 外面	調 内面	石		胎カケ	<u>土</u> その他	文様・器面調整等
16	-4	沙公木	口縁部	I	N - 26	WIа	182	暗赤褐	暗褐	111		NY		横位の貝殻刺突文
16	5	イボッチ	胴部	1 //	M - 23		$1725 \cdot 1726$		暗褐		\cup		雲・白砂	横位の貝殻刺突文
+	6	"	胴部	"	N - 25	Wa	231	褐灰	暗褐	K			云 口沙	横位の貝殻刺突文
+	7	1/2	底部	"	N - 25	Wa		にぶい褐	にぶい褐	$\overline{}$	0		金雲・黒粒	胴部に横位貝刺・底部に短沈線
F	8	"	口縁~底部	II	N - 24 · 25 · 27		106・401・402他			0	ŏ		白砂・赤褐粒	口唇刻·口縁下3段横位貝刺+縦位貝刺+条痕文
	9	"	口縁部	//	M = 27	WIb	1555	にぶい褐	黒	ŏ	ŏ	0	黄砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺+縦位貝刺文
H	10	"	口縁部	"	M - 24	VIIb	1710	橙	橙	ŏ	ŏ		54.17	2段横位貝刺+縦位貝刺文
17	11	"	口縁付近	"	M - 27	VI b	1533	黄灰	にぶい黄		ŏ		金雲・黄白砂	横位貝刺+縦位貝刺+条痕文
1'	12	"	口縁部	Ш	M - 23·N - 24		1784 · 1700		褐灰		ŏ	0		口唇刻・口縁下横位貝刺+縦位貝刺+条痕文
F	13	"	口縁部	//	M - 26	VIIb	1600	にぶい褐	褐	0	ŏ	ŏ	X XIV ML	口唇刻,口緣下4段橫位貝刺+縱位貝刺文
F	14	"	口縁部	"	N - 24	Wab		黒褐	黒褐				金雲	口唇刻・口縁下3段横位貝刺+縦位貝刺文
-+	15	"	口縁~胴部	"	M - 27		1532 · 1587		にぶい褐	0	0			口縁下3段横位貝刺+縦位貝刺+条痕文
H	16	"	口縁部	"	N - 27	VIIb	503	暗褐	黒	ŏ	Ö		黄橙砂	口唇刻・口縁下縦位貝刺文+条痕文
H	17	"	口縁部	"	N - 24	WIb	100	灰褐	暗赤褐	ŏ	$\overline{}$			口唇刻,口緣下4段橫位貝刺+縦位貝刺文
F	18	"	口縁部	"	M - 24	VIIb	1689	褐	黒褐	ŏ		$\overline{}$		口唇刻,口緣下3段橫位貝刺+縱位貝刺文
18	19	"	口縁部	"	N - 25	VIIb		にぶい褐	にぶい褐		0	_	金雲多	口縁下3段横位貝刺+縦位貝刺文
	20	"	口縁付近	"	M-27	VIb	1570	にぶい赤褐			Ŏ			縦位の貝殻刺突文
F	21	"	口縁付近	"	N - 26	VIIb	573	褐	褐				#47 XIII	口唇刻・口縁下横位・縦位貝刺+条痕文
F	22	"	口縁部	IV	N-25	Wa		橙	黒褐	0	\cap		黄白・黒砂粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺+爪形文
F	23	"	口縁部	1/	M - 25	WIb		橙	黒褐	ŏ	_		茶粒	口唇刻,口緣下3段橫位貝刺+爪形文
-	24	"	口縁~胴部	V	N - 24	WIb	354	にぶい褐	にぶい褐				71/124	口縁下2段横位貝刺+斜位貝刺+条痕文
F	25	"	口縁部	"	N - 25	Wa	204	にぶい赤褐						口唇刻·口縁下2段横位貝刺+斜位貝刺+条痕文
F	26	"	口縁部	"	N - 24 · 26	WIb			にぶい褐				金雲・黄橙砂	口唇刻·口縁下2段横位貝刺+斜位貝刺+条痕文
F	27	"	口縁~胴部		M = 27	VIIb	1585	にぶい赤褐	褐灰	ŏ	0		雲	口唇刻 · 口縁下 2 段横位貝刺 + 竹管状刺突文
. F	28	"	口縁部	1/1	M - 24 · 26 · 27		50・1027・1530他		黒褐		ŏ	-	金雲	口唇刻,口緣下2段橫位貝刺+竹管状刺突文
19	29	"	口縁部	"	N - 25	WIЬ	1663	にぶい褐	褐		ŏ			口唇刻,口緣下2段橫位貝刺+竹管状刺突文
F	30	"	口縁~胴部		M - 25	VIIb	1514	灰褐	黒褐				金雲	口唇刻,口緣下2段橫位貝刺+竹管状刺突文
F	31	"	口縁部	"	N - 24	Wab			褐		0		金雲	口縁下2段竹管状刺突文+条痕文
F	32	"	口縁部	"	M-27 · N-24		1536 · 1670		黒褐	0	ŏ			口唇刻・口縁下4段横位貝刺+ナデ
H	33	"	口縁~胴部	11	N - 24	WIb	1720	橙	にぶい褐		ŏ			口唇刻・口縁下爪形状連続刺突文
-+	34	"	口縁~底部	VII	N-26	WIb	585	にぶい褐	にぶい褐	0				口唇刻:口縁下3段横位貝刺+条痕文
H	35	"	口縁~胴部	/111	N - 24	VIIb	310 · 394	にぶい褐	にぶい褐		0		金雲	口唇刻・口縁下4段横位貝刺+押引文
-	36	"	口縁~胴部	"	N - 24	WIb	354	にぶい褐	にぶい黄橙	0	-			口唇刻・口縁下3段横位貝刺+押引文
	37	,	口縁~胴部	"	N - 25	Wa	145	橙	褐	ŏ				口唇刻・口縁下3段横位貝刺+押引文
20	38	"	口縁~胴部	"	M - 26	WIb	1600	にぶい褐	にぶい褐	-	0			口唇刻・口縁下3段横位貝刺+押引文
-	39	"	口縁部	"	N - 25		1558 · 1559		灰褐		\cup			口唇刻・口縁下横位貝刺+押引文
-	40	"	口縁部	"	N - 25	WIa	$215 \cdot 218$		にぶい褐	ŏ	-			口縁下4段横位貝刺+条痕文
	41	"	口縁部	"	N - 25	WIb	466	にぶい褐	にぶい黄褐		0		金雲・黄白砂	
	42	"	口縁部	11	N - 24	VII	315	にぶい橙	黒褐	0	ŏ			口唇刻・口縁下3段横位貝刺+条痕文
-	43	"	口縁部	"	M - 26	WIb	1602	褐	褐	\vdash	ŏ	_	金雲多	口唇刻,口緣下3段橫位貝刺+条痕文
_	44	"	口縁部	"	N - 23	VII		橙	にぶい橙	0	ŏ			口唇刻,口緣下3段價位貝刺+条痕文
-	45	"	口縁部	11	M - 28		1510 · 1513		にぶい褐					口唇刻 口縁下 3 段橫位貝刺 + 条痕文
-	46	"	口縁部	"	M - 25	WIb	135	にぶい褐	にぶい褐		0			口唇刻,口緣下3段價位貝刺+条痕文
-	47	"	口縁部	"	N - 24	WIb	403	黒褐	黒		$\overline{}$			口唇刻,口緣下3段橫位貝刺+条痕文
21	48	"	口縁部	"	M - 27	WIb	1181	にぶい褐	灰黄褐		0		金雲多	口唇刻·口縁下3段横位貝刺+条痕文
-	49	"	口縁部	"	M - 27	WIb	1587	にぶい褐	にぶい褐		ŏ			口唇刻,口緣下3段橫位貝刺+条痕文
-	50	"	口縁部	"	N - 24	WIb	395	にぶい赤褐			ŏ			口唇刻・口縁下 6 段横位貝刺 + 条痕文
	51	"	口縁部	11	N-24	VIIb		橙	橙		ŏ			口唇刻・口縁下3段横位貝刺+条痕文
F	52	"	口縁部	"	N-25	WIb	421	橙	にぶい黄褐		ŏ		雲	口唇刻・口縁下3段横位貝刺+条痕文+ナデ
-	53	"	口縁部	"	N - 25	WIb	435	にぶい赤褐		ŏ				口縁下4段横位貝刺
F	54	"	口縁部	"	N-26	WIb		にぶい赤褐					金雲	口縁下3段横位貝刺+条痕文+ナデ
	55	"	胴部	I ~ VI	M - 24		1688 · 1777		にぶい褐	H		0	金雲	押し引き文/ナデ
 	56	"	胴部	VII	N-24	VII	390	明褐	黒		\neg		雲・黒粒	貝殻条痕文/ナデ
r	57	11	胴部	$\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$	N-24	WIa	68		灰褐	ŏ	0			押し引き文/ナデ
	58	"	胴部	I ~ VI	N-24	WIb	1674	赤褐	褐灰	ŏ				押し引き文/ナデ
F	59	"	胴部	I ~ VI	M - 23	VI	1801	にぶい橙	にぶい褐	M			金雲多	押し引き文/ナデ
 	60	1/	口縁~胴部		M-27 · N-28		552 · 1539 · 1554	灰褐	にぶい褐	\vdash				横位貝刺+縦位貝刺+条痕文
22	61	1/	胴部	I~W	M = 23	WIb	1756	にぶい褐	にぶい褐	0			雲	押し引き文/ナデ
F	62	"	胴部	I ~ VI	M - 23	1111	1131	にぶい褐	にぶい褐	ŏ	$\overline{\Box}$			貝殻条痕文/ナデ
-	63	"	胴部	I ~ W	M - 23	VII	1902	灰褐	灰褐	ŏ			金雲	貝殻条痕文/ナデ
	64	"	胴部	I ~ W	M - 24	WIb	1690	にぶい黄褐				\cap	茶粒	貝殻条痕文/ナデ
	65	"	胴部	I ~ W	N-24	WIa	305	灰褐	褐		0		金雲	貝殻条痕文/ナデ
	66	"	胴部	I ~ W	N - 24		63 · 301 · 302		にぶい褐		ŏ		金雲	貝殻条痕文/ナデ
-	67	"	胴部	I ~ W	N - 25	Wa	133	にぶい赤褐		H	ŏ			貝殻条痕文/ナデ
- 1	68	"	底部	I ~ W	N - 25	Wa	452 · 1665		黒褐	0	$\overline{}$			底部に縦位の短沈線
-+	69	"	底部	VIII	N - 25	Wa	442	褐灰	黒褐		d			縦位の貝殻条痕文
+	70	"	底部	_	$N-22 \cdot 24$	Wab		にぶい褐	にぶい褐	\vdash	허	\dashv		胴部に貝殻条痕文+底部に縦位の短沈線
+		1/2	底部	I ~ W	M - 23	WIb		赤褐	にぶい赤褐				金雲	底部に縦位の短沈線
	-				M-22 · N-24	VII		小個 にぶい褐	褐灰			0		底部に横位の貝殻刺突文
	71	1					111 1000	1-00-4 (18)	I⊎U\	\sim	\sim 1			
23 -	71 72	11	底部	~ ~				灰褐	福 屋					
23	71 72 73	"	底部	I ~ W	M - 24	WIb	1687	灰褐 にぶい橙	褐灰 灰褐		0		金雲	底部に縦位の短沈線
23	71 72 73 74	11	底部 底部	I~W I~W	M - 24 N - 24	WIb WIa	1687 81	にぶい橙	灰褐				金雲 金雲多·黒砂	底部に縦位の短沈線 胴部に貝殻条痕文+底部に縦位の短沈線
23	71 72 73	"	底部	I ~ W	M - 24 N - 24	WIb	1687 81 230			00	0		金雲 金雲多·黒砂 黄白砂·黒·茶粒	底部に縦位の短沈線

第9表 Ⅷ層出土土器観察表 2

図No.	図面 番号	器種	部 位	類別	出土区	層	遺物番号	色 外面	調 内面	石		胎カク	土 その他	文様・器面調整等
	78	"	口縁付近	Ш?	N - 24 · 25	VIIb	380 · 416	にぶい赤褐		11	O	NY		横位と縦位の貝殻刺突文
	79	"	口縁付近	Ⅲ?	N-24	₩b	400			0				縦位の貝殻刺突文
	80	"	胴部	$\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$	N - 25	WГа	426	にぶい褐	褐					
24	81	"	胴部	VIII	N - 27	WIа	504	褐	灰褐	0	0		金雲多	条痕文
24	82	"	胴部	$I \sim VI$	N - 24	WГа	65	にぶい赤褐	灰褐		0		金雲多·白砂	縦位の条痕文/ナデ
	83	"	胴部	$I \sim I$	N - 25	WIа	189	にぶい褐	にぶい褐		0		金雲多·白砂	貝殻条痕文/ナデ
	84	"	胴部	$I \sim VI$	M – 24	WIb	1698	褐灰	黒褐		0		金雲多・黄白砂	貝殻条痕文/ナデ
	85	"	胴部	VIII	M – 27	WIb	1574	にぶい赤褐	黒褐	0		0	雲	貝殻条痕文/ナデ
	86	11	口縁~底部	IX	M - 23	WIb	1746・1748~1750他	にぶい褐	にぶい黄褐		0		金雲多	口縁部貝殼押圧 + 貝殼刺突
	87	"	口縁部	IX	N – 24	WIb	323	褐	黒褐		0		金雲多	縦位の貝殻刺突文
	88	"	胴部	IX	N - 27	WГа	504	にぶい褐	にぶい褐	0		\circ	黄白砂	貝殻刺突文/ナデ
25	89	"	胴部	IX	M - 29	Шb	1500	にぶい橙	褐灰				金雲多・黄白砂	クシ状施文具
23	90	"	胴部	IX	N - 22	WГа	268	褐灰	黒褐	0			雲・黄白砂	貝殼背面
	91	"	口縁~胴部	X	4 T	V	150	にぶい褐	にぶい褐	0	0		金雲	口唇刻・口縁下沈線区画 + 撚糸文
	92	"	胴部	X	M-23	VII	1798	にぶい褐	褐灰	0	0	0	金雲・黄白砂	横位沈線
	93	"	口縁~胴部	XI	_	-	_	明黄褐	黄褐	$\overline{\bigcirc}$	0		金雲	貝殼条痕文

第10表 Ⅷ層出土石器観察表

図No.	遺物 番号	遺物番号	器	種	出土区	層	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
	94	_	打製石鏃		M - 34	VI	Ob	(25)	(15)	3	(1.4)
26	95	_	磨製石器		M · N – 25	VI	Sh	57	32	10	23.0
	96	1709	石匙		N - 24	VI	An	(25)	90	7	(15.0)
	97	1694	磨製石斧		M - 24	VIa	Sh	129	49	24	200.0
	98	1598	磨製石斧		M - 26	VI	Sh	(130)	64	19	(280.0)
	99	1207	磨製石斧		2 T	VI	Sh	(63)	49	19	61.0
	100	485	磨製石斧		N - 24	WIa	Sh	(69)	70	17	(100.0)
27	101	1604	磨製石斧		M - 26	VI	Sh	(68)	70	25	(110.0)
41	102	1607	磨製石斧		M - 26	VI	Sh	(111)	57	17	(100.0)
	103	1760	打製石斧		M - 23	VIb	Sh	138	60	23	250.0
	104	_	打製石斧		M - 25	VI	Sh	(144)	68	11	(200.0)
	105	160	打製石斧		4 T	VI	Sh	(117)	92	38	(500.0)
	106	469	打製石斧		N – 25	WIа	Sh	(78)	84	22	(190.0)
	107	470	礫器		N - 25	WIа	Sh	111	68	13	350.0
	108	1452	礫器		N - 39	WIа	Sh	82	92	26	200.0
	109	109	礫器		N - 24	WIа	Sh	90	74	25	160.0
28	110	324	礫器		N – 24	WIЬ	Sh	107	68	18	160.0
20	111	1682	礫器		M - 24	VIa	Sh	124	77	30	380.0
	112	205	礫器		N - 25	WIа	Sh	110	68	25	250.0
	113	219	礫器		N - 25	WIa	Sh	93	94	16	150.0
	114	1552	礫器		M - 27	VI	Sh	124	107	28	490.0
	115	165	礫器		N – 25	WIa	Sh	83	63	23	140.0
	116	602	礫器		N - 26	WIb	Sh	117	94	28	350.0
29	117	_	礫器		M - 29	VI	Sa	123	80	18	250.0
29	118	1603	礫器		M - 26	VI	Sh	(96)	70	28	(180.0)
	119	1594	礫器		M - 27	VI	Sh	114	73	17	280.0
	120	1649	礫器		M - 25	VI	Sh	116	62	16	170.0
	121	1736	磨石		M - 23	VIa	Sa	73	63	41	270.0
	122	610	磨石		N - 26	VIb	Sa	78	72	60	465.0
	123	228	磨石		N – 25	WIа	Pa	92	78	53	532.0
29	124	_	敲石		N - 26	WIЬ	Pa	71	65	43	296.0
23	125	339	敲石		N - 24	VII	Pa	90	72	41	336.0
	126	1623	敲石		M - 26	VIa	Pg	109	88	50	669.0
	127	175	敲石		N - 26	WIа	Pa	79	82	44	391.0
	128	465	磨敲石		N – 25	WIа	Sa	72	67	44	291.0
30	129	_	磨敲石		N - 26	VII b	Sa	90	84	46	488.0
30	130	1799	磨敲石		M - 20	VIa	Pa	62	64	36	173.0
31	131		磨敲石		M · N – 25	VI	Pa	110	88	47	614.0
91	132	1639	敲石		N 25	VI	Pa	124	92	64	941.0
	133	1533	石皿	3100.42	M - 27	VI	Pa	(298)	206	55	3600.0
32	134	1593	石皿		M - 29	VI	Pa	(368)	198	50	3700.0
ა∠	135	_	石皿		M · N – 25	VI	Pa	234	(133)	51	2500.0
ľ	136	1758	石皿		M - 23	VIa	Sa	(120)	(149)	34	955.0

第2節 Na層の調査(縄文時代中期~晩期)

暗黄褐色土層のIV a 層から出土した遺物は、縄文時代中期から古墳時代にかけての土器、あるいはこれらの土器に共伴すると思われる石器などである。時代や時期の異なる遺物が同一層から出土しているため、第2節に縄文時代中期から晩期の土器およびIV a 層出土の石器、第3節に古墳時代の遺物という形で記載を分けている。なお、縄文時代晩期の遺構としてIV b 層上面で土坑を3基検出した。

1 検出遺構

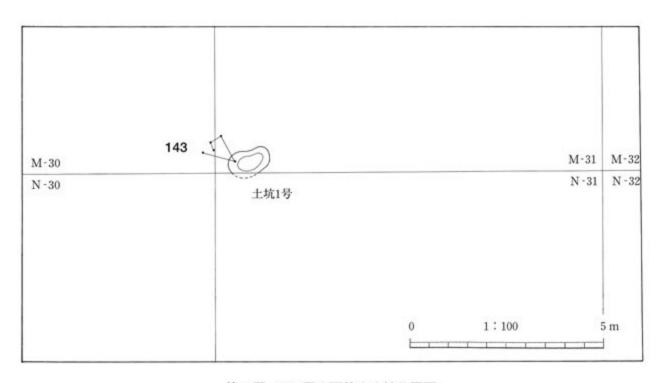
(1) 土坑 1号(第33図·第34図)

M-28区のIV b 層上面で検出したものである。長径1.12m, 検出面からの深さは14cmである。 土坑の検出面およびその周辺から組織痕土器,埋土内から打製石鏃が6点出土している。

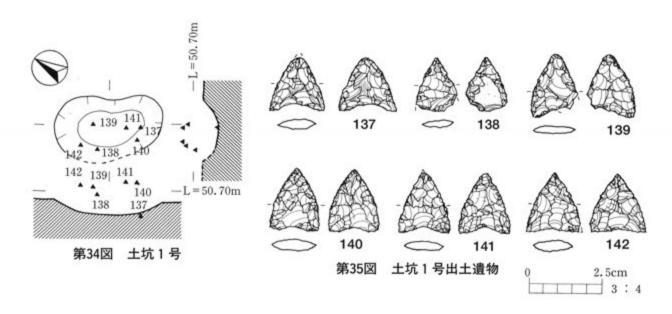
143は胴部下半から底部にかけて蓆目の圧痕が施された組織痕土器である。口径40.8cm, 器高 15.3 c mを測る。内面は丁寧に研磨されており, ススや炭化物の付着は認められない。137~142は 打製石鏃である。二等辺三角形を呈し基部に浅い抉りのある凹基鏃である。137·141~142は安山岩 (サヌカイト), 138·139は頁岩, 140はチャート製である。

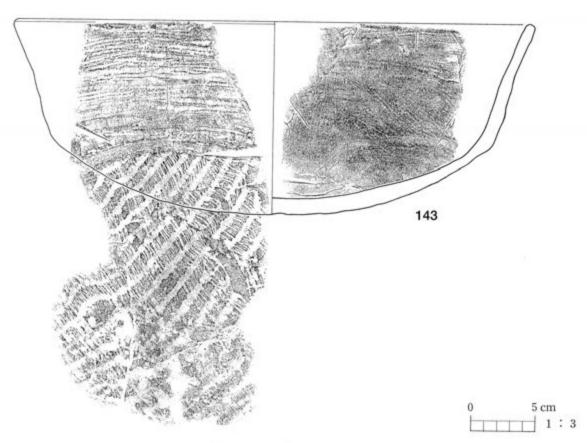
(2) 土坑2・3号(第37図)

2号はM-31区のN b層上面で検出したもので、長径2.76m、短径1.82m、検出面からの深さは42cmを測る。3号はM-27区のN b層上面で検出したものである。長径3.16m、短径1.96m、検出面からの深さは40cmを測る。いずれの土坑も遺物の出土は認められなかった。



第33図 IVb層上面検出土坑位置図

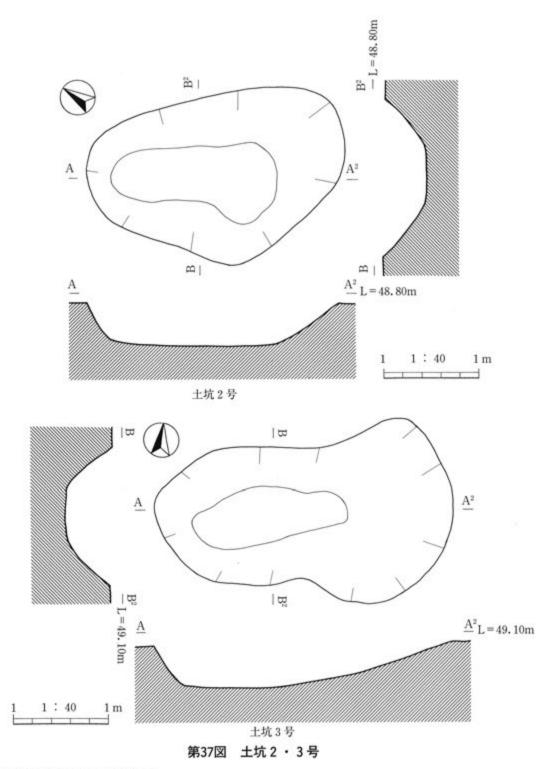




第36図 組織痕土器

第11表 遺構観察表 (土坑)

挿図 番号	遺構名	検出区	検出面	時 期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	共伴遺物
34	土坑 1 号	M-31	IV b 層上面	縄文晩期	1.10	0.6	0.18	打製石鏃 6 点
22	土坑 2 号	M - 28	IV b層上面	縄文晩期	3.15	1.4	0.49	
37	土坑 3 号	M - 27	Ⅳ b層上面	縄文晩期	2.75	1.8	0.50	12



第12表 土坑 1 号出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	遺物名	検出区	遺構	時期	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)
	137	打製石鏃	M - 28	土坑1号	縄文晩期	1.10	0.6	0.18
	138	打製石鏃	M - 28	土坑1号	縄文晩期	3.15	1.4	0.49
[139	打製石鏃	M - 28	土坑1号	縄文晩期	2.75	1.8	0.50
35	140	打製石鏃	M - 28	土坑1号	縄文晩期	1.10	0.6	0.18
	141	打製石鏃	M - 28	土坑1号	縄文晩期	3.15	1.4	0.49
	142	打製石鏃	M-28	土坑1号	縄文晩期	2.75	1.8	0.50

2 出土遺物

(1) 土器

①縄文時代中期土器 (第38図 144~146)

144~146は縄文時代中期の土器と思われる。

144は口縁部片で口縁端は丸くなる。断面カマボコ状の突帯が3条貼り付けられる。突帯状にはヘラ状工具による刻み目が連続して施される。内面に条痕がみられる。

145は口縁付近の破片である。刻み目のある一条の突帯と円形の突帯文が貼り付けられる。 146は胴部片である。貝殻による連点が施される。

②縄文時代後期~晩期土器 (第38図 147~151)

147は底部である。縄文時代後期の土器と思われる。底部立ち上がり付近に条痕,底面に網代圧痕がみられる。148は波状を呈し,肥厚する口縁部片である。内外面ともヘラミガキが施され光沢がある。149は深鉢形土器である。復元口径21cm,器高14.7cmを測る。底部は平底で胴部は直線的に立ち上がり,胴部でわずかに屈曲して口縁部に至る。口唇端は平坦となり外傾する。胴部の屈曲部には微隆の突帯が1条めぐる。

150は口縁部が波状を呈する鉢形土器で、口縁部に半円形のくぼみがみられる。意図的に施されたと思われるが不明瞭である。器面調整は外面へラミガキ、内面ナデが施される。

151は口縁付近から胴部にかけての破片である。胴部で屈曲し、内湾する頸部を介して口縁部に至る。口縁にはやや太めの凹線がみられる。調整は外面が条痕とナデ、内面に条痕が施される。

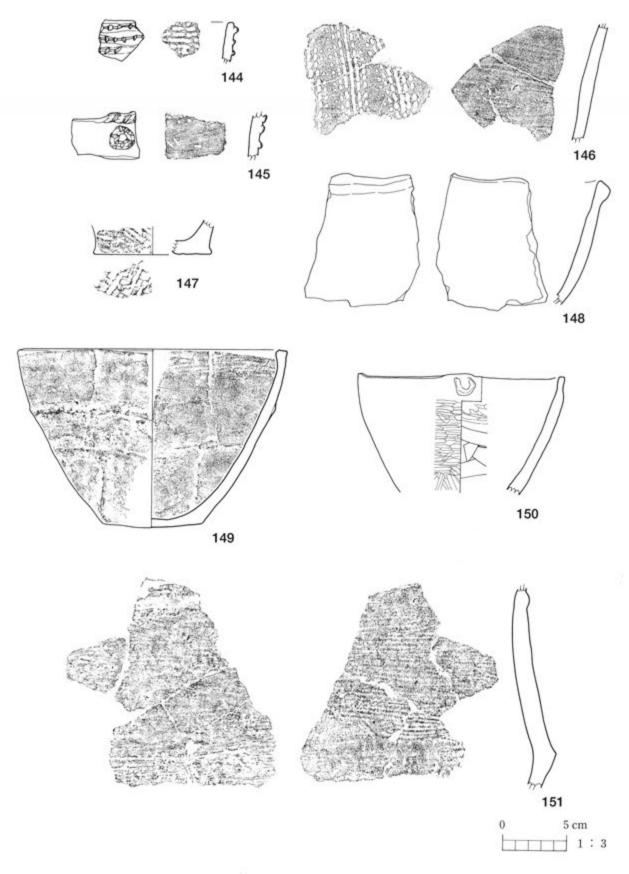
③粗製深鉢・浅鉢形土器(第39図 152~158・第40図 159~166)

152・153は胴部で屈曲して立ち上がり口縁部付近がやや直立する器形で、器面調整は内外面とも条痕が施される。156は口縁部が外傾しながら立ち上がるもので内外面とも明瞭な貝殻条痕がみられる。調整は外面が貝殻条痕、内面が条痕後ナデである。157は口縁部に接して突帯がめぐるもので口縁部下には円形の補修孔が穿たれている。調整は突帯直下から胴部途中までと一定の間隔をおいた胴部下位に条痕文が施される。施文具を強く押し当てたためか段が形成されている。160は外反する口縁部で外面には斜位、内面には横位の条痕が施される。161はやや肥厚する口縁部である。調整は外面が条痕、内面は条痕後ナデである。163は粗製の浅鉢としたものである。底部を欠損しており内面には横方向の調整痕が残るが、平滑に仕上げられていることから組織痕土器の可能性がある。

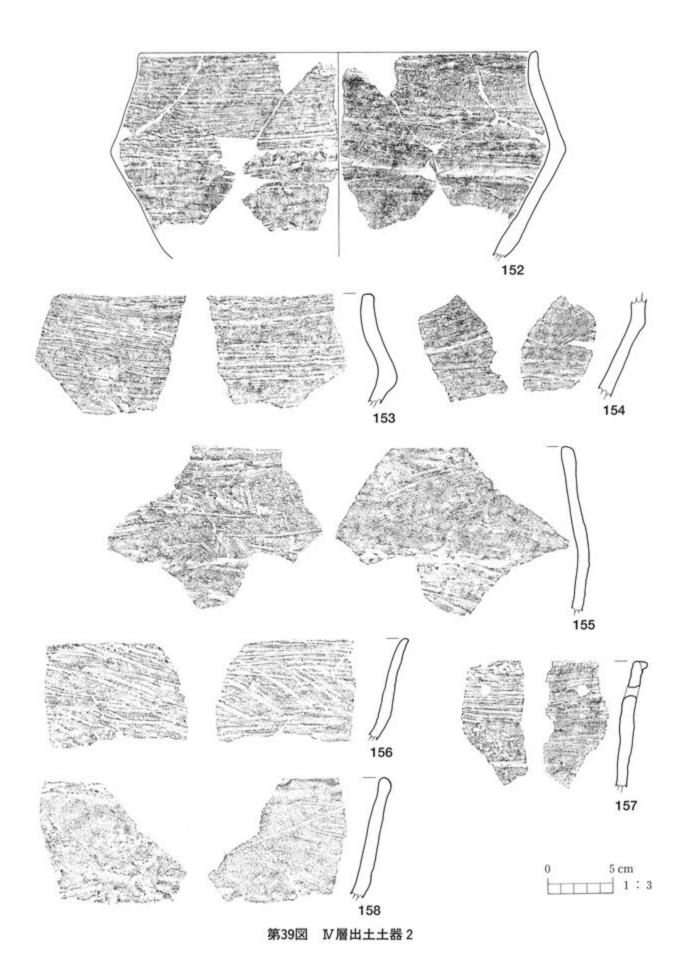
165・166は口縁部直下にやや太めの沈線が1条めぐり、沈線下がやや肥厚するものである。いずれも口縁部内面にも沈線がめぐる。

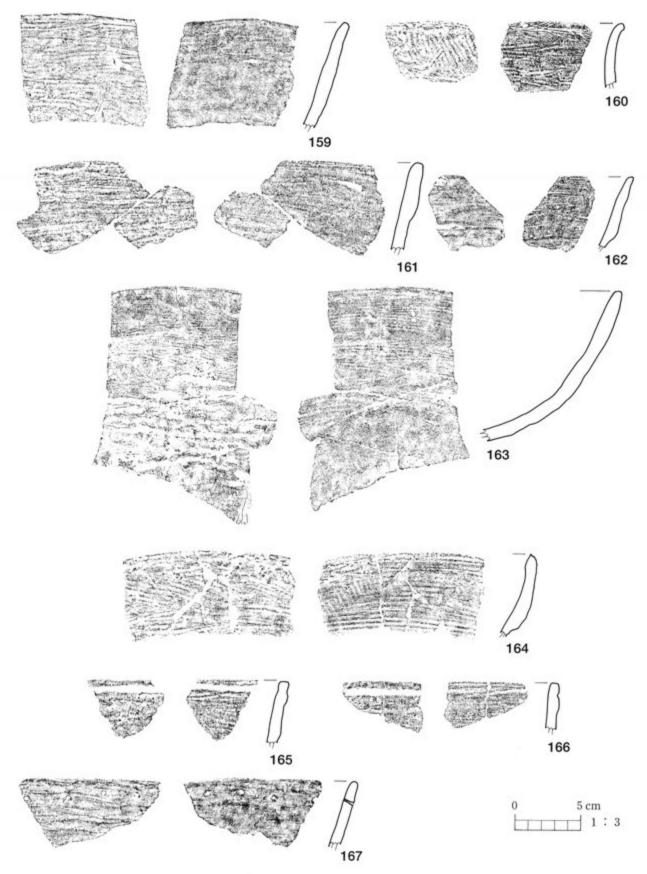
④孔列文土器 (第40図 167)

167は孔列文土器である。穿孔された孔の径は外面側が大きく、内面側が小さい。器面調整は内 外面ともヘラミガキが施される。

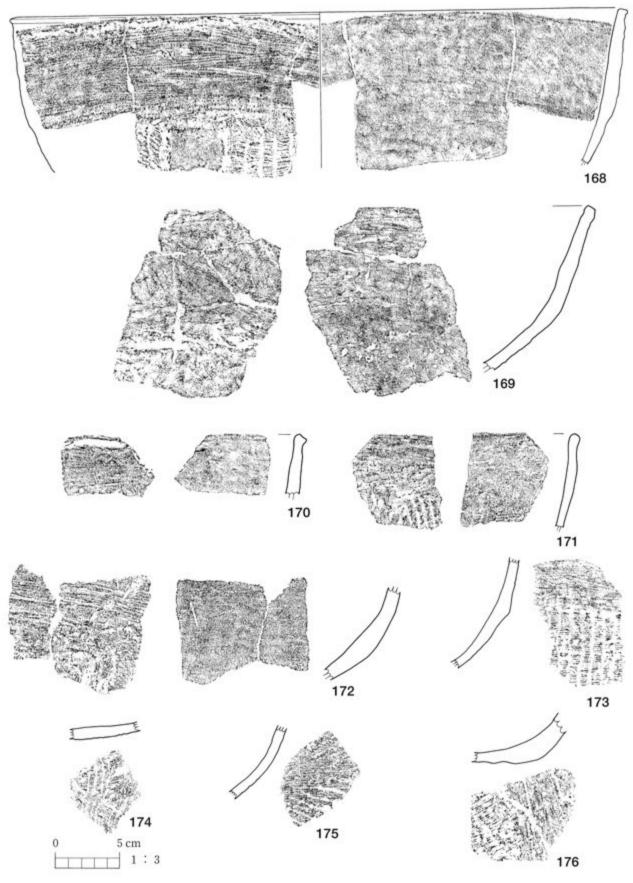


第38図 IV層出土土器 1

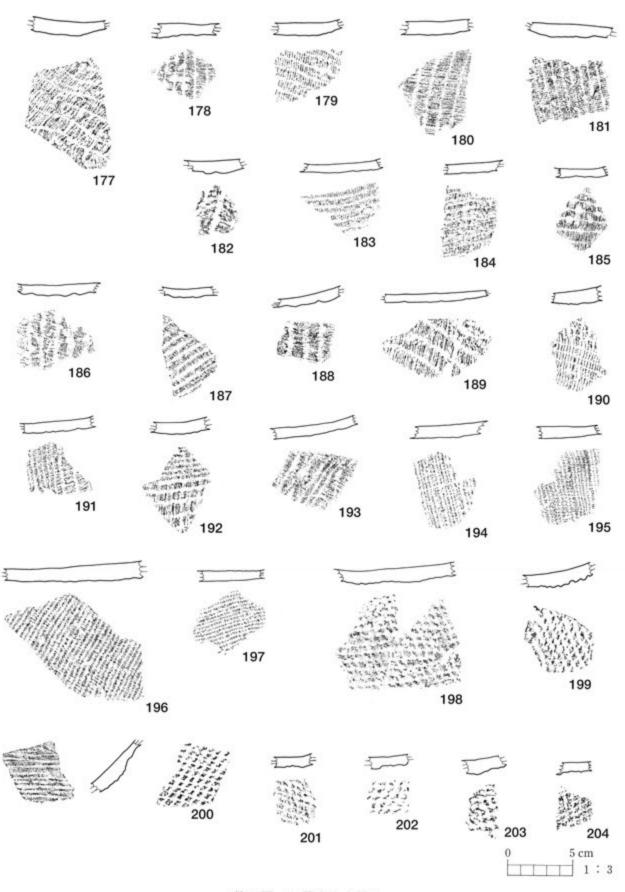




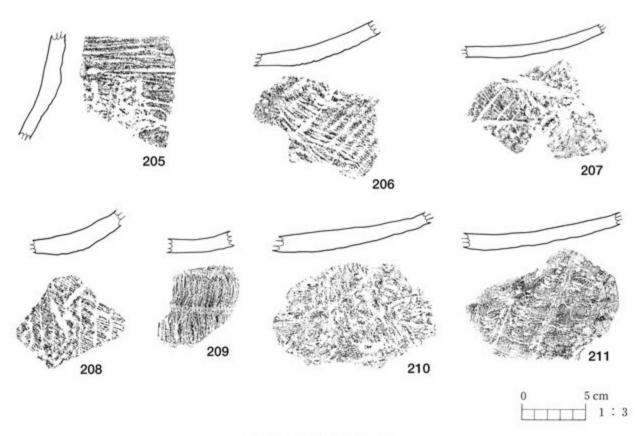
第40図 Ⅳ層出土土器 3



第41図 Ⅳ層出土土器 4



第42図 Ⅳ層出土土器 5



第43図 Ⅳ層出土土器 6

⑤組織痕土器 (第41図~43図 168~211)

168~211は組織痕を有する土器群である。組織痕は胴部下半から底部にかけて網目痕・蓆目痕・ 編布痕などが認められるものである。

外面は貝殻や木口状の工具によって調整されるが、内面はこれらの工具によって調整が行われた 後、研磨が行われている。工具痕が残らないほど内面の研磨が丁寧に行われているものと、工具痕 が明瞭に残るものがある。底部の破片については粘土積みよって製作されて土器のように接合面で 割れた破片が少ないためか全体の器形を把握できる資料が少ない。底部形状は丸底か丸底に近い平 底になるもので、胴部上半に対して底部の器壁は薄手である。また、底部の接地面付近の組織痕は 摩滅により観察が困難なものが認められた。

本遺跡から出土した組織痕土器の破片についてはモデリング作業を行い、縦糸の間隔や 1 cm当たりの横糸の本数、糸の撚りの方向などの観察を行った。摩滅などによりすべてに破片について把握できていないが、縦糸の間隔は狭いものが 2 mm,広いもので29 mm,その他はほとんどが $8 \sim 12 \text{ mm}$ 前後のものである。 1 cm当たりの横糸の本数は密なもので 3 本,疎なもので11 本と幅広いが、 $6 \sim 8 \text{ 本}$ のものが最も多い。糸の撚りの方向は「2 より」・「3 s ら、3 s ともほぼ同じ割合であった。

(6) 突帯文土器・精製浅鉢・その他の土器 (第44図 212~224)

212~217は口縁部に刻み目のない突帯がめぐるものである。213は胴部で屈曲し直立気味に立ち上がる器形で口唇部は丸くおさまる。口縁部には断面台形状の突帯が貼り付けられる。215は口縁部直下に断面三角形状の突帯が貼り付けられるもので胴部で屈曲する器形と思われる。216は幅広の薄い粘土が貼り付けられるもので器面調整は外面が条痕後ナデ、内面はヘラミガキが施される。217は213と同様な突帯が貼り付けられるが器面調整は丁寧なナデである。

218~222は刻目突帯文の施されるものである。218は浅鉢形を呈するもので口縁部に指頭状の刻み目のある突帯が貼り付けられる。219は胴部で屈曲し、やや内傾して立ち上がる器形で、深形土器土思われる。口縁部と胴部に棒状による刻み目の施された突帯がめぐる。口縁部の突帯は口唇部と接している。220は突帯上に棒状工具によって刻み目が施される。221は口縁部と一体化した突帯がめぐり、指頭によって円形を呈する刻み目が施される。突帯下位には補修孔がみられる。222は胴部で屈曲し、口縁部が強く内傾して立ち上がる器形で口縁端部は直立気味に丸くおさまる。口縁部に突帯を持たず、指頭痕が認められる。器壁は薄手である。223は外反する口縁部で口唇端部は平坦となり外傾する。口縁部と胴部の屈曲部に沈線が施され、補修孔がある。224は浅鉢形土器と思われる。胴部と頸部で屈曲する器形で調整は内外面ともにヘラミガキである。

225~227は底部である。いずれも上げ底状を呈する。225の器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデている。226も225と同様であるが丁寧なナデである。227はのヘラ状の工具によるナデが行われている。

228~237, 239~240は精製の浅鉢形土器, 238は高台のつく椀形土器である。228は口縁部が短く外反し胴部で屈曲して底部へと向かう器形で口縁部は平坦となる。頸部から胴部上半が文様帯となり, 口縁部の屈曲部に1条, 胴部上半に浮線文状の波状文が上下2方向に施され, 文様帯中央に楕円形文がつく。器面調整はヘラミガキである。229は口縁部で2条の沈線が施される口縁部に小さい補修孔がある。230は精製浅鉢である。欠損部分の文様は不明であるが頸部付近から胴部上半にかけて工字文条の沈線, 胴部屈曲部に沈線が施される。器面調整は丁寧なヘラミガキである。

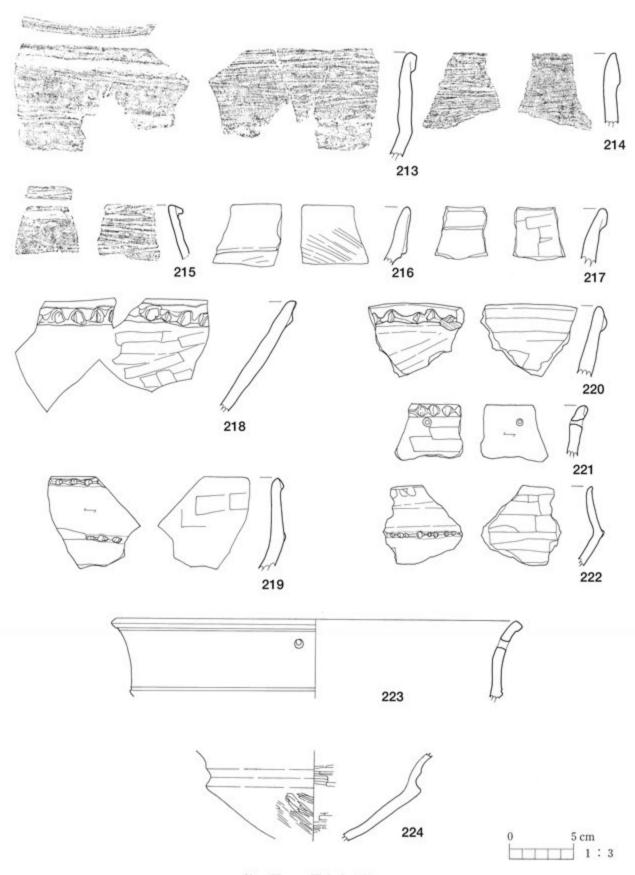
231・232は胴部で屈曲し内傾しながら口縁部に向け外反気味に立ち上がる器形で口唇部は丸くおさまる。器面調整はヘラミガキである。233は胴部片で調整はヘラミガキである。

235は波状口縁を呈すると想われる。口縁部がやや肥厚し口縁部内面には沈線が施される。調整はヘラミガキである。

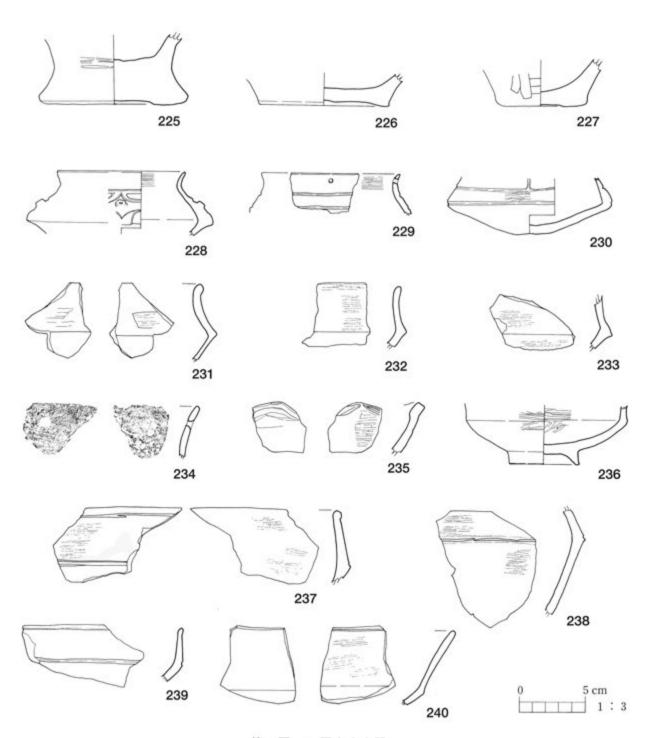
236は椀形を呈する土器で胴部下半で屈曲し直立する器形と思われる。高台状の底部を有する。調整はヘラミガキである。

237は胴部で屈曲し、口縁部は直立する器形で、口唇端部は丸くおさまる。口縁部と胴部屈曲部に1条ずつヘラ状工具による沈線が施される。外面はヘラミガキが施され黒色を呈する。いわゆる黒色研磨土器である。外面の胴部屈曲部から口縁部にかけては赤色顔料が波状に塗布される。238と同一個体の可能性が高い。

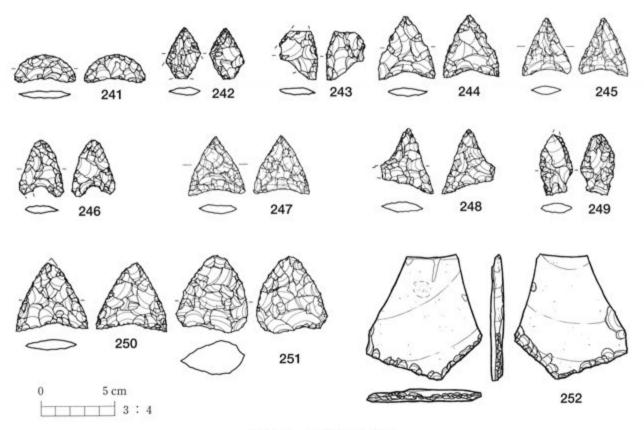
240は胴部で屈曲し口縁部が外反する器形である。口縁部内面に沈線が1条施される。調整はヘラミガキであるが表面はやや粗いつくりである。



第44図 Ⅳ層出土土器 7



第45図 IV層出土土器 8



第46図 IV層出土石器 1

(2)石器

IV a 層から出土した石器は、打製石鏃・スクレイパー・磨製石斧・小型磨製石斧・打製石斧などである。縄文時代晩期~古墳時代の土器を主体に包含する層からの出土である。ここでは、石器の帰属する時期を明確に区分できないため、一括して掲載した。

①打製石鏃·未製品(第46図 241~251)

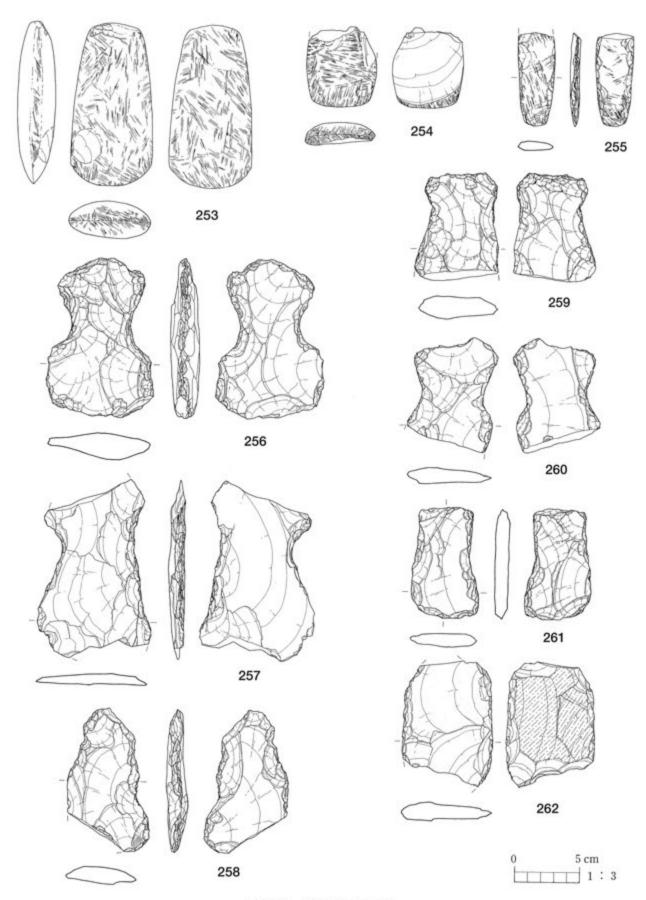
打製石鏃は、11点を図化した。石材は241・243~248・250が安山岩(サヌカイト)、242・249が黒曜石を利用している。241は三日月形を呈する特殊なものであるが打製石鏃として分類した。246は抉りが深く、基部が丸みを帯びる円脚鏃である。242~245・247~250については基本的に二等辺三角形を呈し、基部にごく浅い抉りをもつ凹基無茎鏃である。243・249は先端部と脚部、244は脚部を欠損している。251は素材の厚みを残すことから打製石鏃の未製品と思われる。

②スクレイパー (第46図 252)

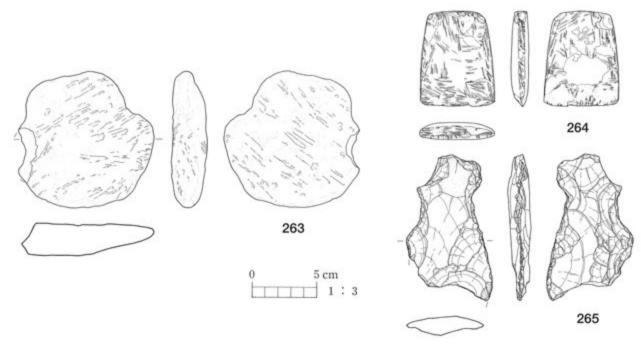
252は玉髄製のスクレイパーで、縦長剥片を素材とする、刃部は幅広のV字形を呈し、両面からの 剥離によって作り出されている。

③磨製石斧 (第47図 253~254)

磨製石斧は、2点を図化した。いずれも頁岩を利用している。253は完形品で、いわゆる定角式石 斧である。刃部は両刃で蛤刃状を呈する。表面に整形剥離痕が一部残存しているが全体的に入念に 研磨されており、表面と側面の境には稜を形成する。254は磨製石斧の刃部片で、蛤刃を呈する。側



第47図 Ⅳ層出土石器 2



第48図 Ⅳ層出土石器 3 ほか

面の一部に剥離痕が残存し253と同様、全体が入念に研磨されている。基部を欠損する。

④小型磨製石斧 (第477図 255)

255は頁岩を利用したもので、小型磨製石斧として分類した。基部が欠損しており、表裏面とも両 側縁からの整形剥離痕が残存する。

⑤打製石斧 (第47図 256~262)

256~262は打製石斧で、土掘り具としての用途が考えられるものである。いずれも頁岩製である。256は分銅形、261・262は短冊形、257~260が撥形を呈する。

257・258・260・261は幅広の剥片を素材とし、主要剥離面が残存している。器厚は比較的薄手である。257~260・261は刃部を欠損している。

⑥軽石製品 (第48図 264)

264は軽石製品として分類した。明瞭な加工痕は認められないものの、表裏面にわずかながら擦痕が認められる。

⑦その他 (第48図 265~266)

出土層が不明の石器を一括して掲載した。265は蛇紋岩製の磨製石斧である。最大長7.5 c mである。表裏面と側面の境に明瞭な稜を形成する。刃部は両刃で直刃となり、使用痕が観察できる。全体的に入念な研磨が行われているが、一部に整形剥離痕が残る。

266は頁岩製の打製石斧で撥形を呈する。刃部と基部の一部を欠損する。

第13表 Ⅳ層出土土器観察表 1

	10/1 25			1	T		77.	- 長田			
図No.	図面番号	器 種	部 位	出土区	層	遺物番号	色	調	焼成	文様・器面調整等	
		Non-A-I					外面	内面			
	144	深鉢	口縁部	$D - 14 \cdot 15$	IVa	-	褐	暗灰黄	良好		
	145	深鉢	口縁部付近	D - 14 · 15	IVα	-	にぶい黄褐	暗灰黄	良好	刻み目のある突帯	
	146	深鉢	胴部	D - 14 · 15	ΙVa	_	褐	褐	良好	列点	
	147	深鉢	底部	M - 37	Ша	1125	明赤褐	明赤褐	良好	貝殻条痕文・網代底	
38	148	深鉢	口縁~胴部	N-40	Ша	942	褐	褐	良好		
	149	精製深鉢	口縁~底部	N - 39	II	1442	褐灰	黒褐	良好		
	150	精製深鉢	口縁~胴部	11 33	-	-	褐	にぶい橙	-		
	130	们交体野	口水水 一月門 日口				19EJ	にかい位	良好	ペラミガキ・デデ	
	151	粗製深鉢	口縁~胴部	M - 39	Шa	829 · 830 · 854 ·	明赤褐	にぶい橙	普通	貝殼条痕文	
						886		1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1	1	3 (350)(530)	
	152	粗製深鉢	口縁~胴部	N-39 · 40	Шa	366 • 368 • 383 •	浅黄	浅黄	良好	貝殼条痕文	
	102	111 22 17 24	LI 1/3X MI ID	11 33 40	ша	386 · 393 · 1213	(2) 與	戊與	逐刈	只放朱版文	
	153	粗製深鉢	口縁~胴部	N - 40	Ша	1214	黄灰	にぶい黄	良好	貝殼条痕文	
	154	粗製深鉢	胴部	N - 38	Ша	236	にぶい黄橙	浅黄	良好		
39	155	粗製深鉢	口縁~胴部	N - 39	Ша	1460	褐灰	にぶい黄褐	普通		
	156	粗製深鉢	口縁~胴部	M-41	Шa	665 • 1040 • 1041	黒褐	黄褐	良好		
	157	粗製深鉢									
			口縁~胴部	N - 40	Ша	903	黒	褐		貝殻条痕文・補修孔	
	158	粗製深鉢	口縁~胴部	M-41	Шa	660 · 1020	黄褐	にぶい黄橙		貝殼条痕文	
	159	粗製深鉢	口縁~胴部	N - 40	Ша	924	黒	灰黄褐	良好	貝殼条痕文	
	160	粗製深鉢	口縁部	1 T	カクラン		にぶい黄褐	灰黄褐	良好	貝殼条痕文	
	161	粗製深鉢	口縁部	M - 41	Ша	668 · 1003	にぶい褐	にぶい橙	普通		
	162	粗製深鉢	口縁部	M-40	Шa	705	灰黄褐	黒褐	良好		
						380 • 1228 • 1229 •					
40	163	粗製浅鉢	口縁~胴部	N - 40	Шa	1231 · 1232	浅黄橙	浅黄	良好	貝殼条痕文	
	101	東日 毎日 5七 人に	1-163 ÷17	3.5.00.00	***						
	164	粗製浅鉢	口縁部	$M - 30 \cdot 31$	Ша	1167 · 1168	黒褐	黒褐	良好		
	165	粗製浅鉢	口縁部	N - 39	Ша	1392	黒	明褐		貝殼条痕文	
	166	粗製浅鉢	口縁部	M - 39	Шa	862	オリーブ黒	にぶい黄褐	良好	貝殻条痕文	
	167	孔列文土器	口縁部	_		_	黒	灰黄褐		貝殼条痕文	
	168	組織痕土器	口縁~胴部	N-39 · 41	Ша	1004 · 1464	浅黄	褐灰	良好		
				21 00 11		222 · 223 · 224 ·			12275	火灰水瓜 人	
	169	組織痕土器	口縁~胴部	N - 30	Ша	272	黒褐	黒褐	良好	貝殼条痕文	
	150	Art 646 ptg 1 DD	→ A⊒ -bp			_	unda per alda				
	170	組織痕土器	口縁部	_	_		暗灰黄	暗灰黄		貝殼条痕文	
41	171	組織痕土器	口縁~胴部	M – 41	Ша	1018	黒褐	暗褐	良好	貝殼条痕文	
	172	組織痕土器	胴部	$M - 40 \cdot 41$	Ша	692 · 1059	灰褐	にぶい赤褐	普通	貝殼条痕文	
	173	組織痕土器	胴部	M - 35	Ша	1022	オリーブ褐	にぶい褐	良好	貝殼条痕文	
	174	組織痕土器	底部	_	_	_	にぶい黄褐	暗灰黄	良好		
İ	175	組織痕土器	胴部	M - 35	Ша	1121	にぶい黄橙	暗灰黄	普通		
	176	組織痕土器	底部	M - 31	II	-	にぶい褐	にぶい黄褐	普通		
	177	組織痕土器	底部	M - 40							
					II a	706	にぶい黄橙	黒褐	良好		
	178	組織痕土器	底部	K	Ша	236	にぶい褐	暗灰黄	普通		
	179	組織痕土器	底部	一括	_	_	にぶい黄橙	明褐	良好		
	180	組織痕土器	底部	M – 41	Ша	654	にぶい黄橙	黄褐	良好		
	181	組織痕土器	底部	M - 34	Шa	968	橙	明黄褐	良好		
	182	組織痕土器	底部	$N - 34 \cdot 35$	_	_	にぶい黄褐	黒褐	良好		
	183	組織痕土器	底部	M - 39	Ша	1070	にぶい褐	暗灰黄	良好		
	184	組織痕土器	底部	M - 35	Ша	104	橙にぶ		普通		
	185	組織痕土器	底部	M - 37			にぶい黄橙				
					Ша	184			普通		
	186	組織痕土器	底部	-	_	_	にぶい橙	黒	普通		
	187	組織痕土器	底部	M - 40	Шa	540	黄褐	黒	良好		
	188	組織痕土器	底部			-	橙	灰オリーブ	良好		
[189	組織痕土器	底部	$M - 30 \cdot 31$	IV	560 · 562	橙	暗灰黄	普通		
	190	組織痕土器	底部	M - 39	Ша	1182	暗オリーブ褐	オリーブ黒	普通		
42	191	組織痕土器	底部	N - 39	Ша	436	橙	にぶい黄	普通		
	192	組織痕土器	底部	6 T	VI		にぶい黄褐	にぶい褐			
						1224	~~~~		普通		
	193	組織痕土器	底部	M – 33	Ша	1092	橙	暗灰黄	普通		
	194	組織痕土器	底部		_	_	にぶい黄	にぶい黄	良好		
L	195	組織痕土器	底部	N - 40	Ша	1215	にぶい橙	暗灰黄	普通		
	196	組織痕土器	底部	一括	- 1	_	にぶい黄橙	浅黄	良好		
-	197	組織痕土器	底部	M - 39	П	_	にぶい黄橙	オリーブ黒	良好		
	198	組織痕土器	底部	_	I	1157	にぶい黄橙	にぶい黄橙		網目痕	
	199	組織痕土器	底部	M - 30	Ша		にぶい黄橙	にぶい黄橙		網目痕	
	200	組織痕土器	底部	M - 30 $M - 30$							
H					Ша	1168	にぶい黄橙	黒		網目痕	
-	201	組織痕土器	底部	M - 30	Ша	1160	明褐	明褐		網目痕	
1	202	組織痕土器	底部	M – 31	Ша	1161	オリーブ褐	にぶい黄橙	普通	網目痕	
	203	組織痕土器	底部	M - 31	I	_	にぶい黄褐	にぶい黄橙	普通	網目痕	
「	204		底部	N - 33	Ша	880	にぶい褐	黒褐 普通 網目痕			
							17		~	/	

第14表 Ⅳ層出土土器観察表 2

図No.	図面 番号	器種	部 位	出土区	層	遺物番号	色 外面	調 内面	焼成	文様・器面調整等
43	205	組織痕土器	胴部	M - 34	Ш	_	オリーブ黒	にぶい黄橙	良好	
	206	組織痕土器	底部	$M - 30 \cdot 39$	III	840 · 44 · 2	黒褐色	にぶい黄褐	良好	
	207	組織痕土器	底部	N - 39	Ш	452 · 1202	にぶい黄橙	オリーブ黒	良好	葉脈痕
	208	組織痕土器	底部	N-31~38	カクラン	_	にぶい黄橙	黒褐	良好	
	209	組織痕土器	底部	M - 34	III	311	にぶい黄橙	黄褐	普通	
	210	組織痕土器	底部	M - 39	Шa	321	にぶい黄褐	オリーブ褐	普通	
	211	組織痕土器	底部	M - 34	Ша	932	にぶい黄橙	暗灰黄	普通	
	213	粗製深鉢	口縁~胴部	N-40	Ша	795 · 953	にぶい黄橙	灰黄	普通	貝殼条痕文
	214	粗製深鉢	口縁部	N - 39	Ша	770	オリーブ黒	にぶい黄橙	普通	貝殼条痕文
	215	粗製深鉢	口縁部	N – 14	-	_	赤褐	橙	良好	貝殼条痕文
	216	粗製深鉢	口縁部	N - 40	-	1221	灰	灰	良好	貝殻条痕文+ナデ
	217	粗製深鉢	口縁部	$M - 34 \cdot 35$	Ш	_	褐灰	灰黄褐	普通	ナデ
4.4	218	浅鉢?	口縁部	M - 35	カクラン		にぶい褐	にぶい褐	普通	刻目突帯・ナデ
44	219	浅鉢?	口縁~胴部	M - 36	_	1049	黄灰	浅黄	普通	刻目突帯・ナデ
	220	深鉢	口縁部	M - 35	カクラン	_	にぶい橙	にぶい橙	普通	刻目突帯・ナデ
	221	浅鉢?	口縁部	M - 34		997	黄灰	にぶい黄橙	普通	刻目突帯・補修孔
	222	浅鉢	口縁~胴部	$N - 34 \cdot 35$	カクラン		暗赤褐	にぶい赤褐	良好	刻目突帯・ナデ
	223	深鉢	口縁~胴部	M - 41	Ша	591 · 1045	褐	暗灰黄	良好	沈線・ヘラミガキ・補修孔
	224	浅鉢	口縁付近~底部	N - 40	VI?	1419	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	ヘラミガキ
	225	深鉢	底部	N - 38	-	1447	浅黄橙	黄灰		貝殻条痕後ナデ
	226	深鉢	底部	M - 33		1090	にぶい橙	浅黄	普通	
	227	深鉢	底部	M - 39	-	727	灰黄褐	浅黄橙	やや不良	
	228	浅鉢	口縁~胴部	N - 39	_	468	橙	暗灰黄	やや不良	ヘラミガキ
	229	浅鉢	口縁部	_	-	_	橙	橙	普通	沈線・補修孔
	230	浅鉢	胴部~底部	_	-	_	浅黄	灰黄	普通	沈線・ヘラミガキ
	231	浅鉢	口縁~胴部	N – 38	Ша	238	橙	にぶい橙	良好	ヘラミガキ・ナデ
45	232	浅鉢	口縁部	M - 34		934	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	ナデ
45	233	浅鉢	胴部	_	_		赤	にぶい黄橙	やや不良	
	234	浅鉢	口縁部	$M - 34 \cdot 35$	III	_	褐	にぶい橙	普通	
	235	浅鉢	口縁部	_		_	褐	褐	良好	
	236	椀形土器	口縁付近~底部	N - 39	_	1447	にぶい黄	黒褐	やや不良	
	237	浅鉢	口縁~胴部	N - 40		349 · 353 · 370	黒褐	灰黄褐	普通	沈線・ヘラミガキ・赤色顔料
	238	浅鉢	胴部	N - 40	_	370	黒褐	黒褐	普通	
	239	浅鉢	口縁部	_	_	_	にぶい黄橙	にぶい黄橙		沈線・ナデ
	240	精製浅鉢	口縁~胴部	M = 41	Ша	1032	黒	黄褐	普通	ヘラミガキ

第15表 Ⅳ層出土石器(縄文晚期~古墳)観察表

⊠No.	遺物 番号	注記番号	器種	出土区	層	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
	241	519	打製石鏃	N - 39	Ш	An	10	21	2	0.5
	242	_	打製石鏃	O-14·15	IVa	Ob	18	(13)	3	(0.5)
	243	845	打製石鏃	M - 39	Шa	An	(17)	(13)	3	(0.6)
	244	719	打製石鏃	M - 38	Ш	An	22	19	3	1.0
	245	1242	打製石鏃	N - 39	Ш	An	21	18	3	0.8
40	246	1298	打製石鏃	N - 38	Ш	An	(20)	15	3	(0.6)
46	247	986	打製石鏃	M - 41	Ша	An	21	19	3	1.0
	248	_	打製石鏃	O-14·15	ΙVa	An	23	(18)	4	(0.8)
	249	_	打製石鏃	O-14·15	ΙVa	Ob	(22)	12	4	(1.0)
	250	566A	打製石鏃	M - 31	IV	An	(24)	25	4	(1.7)
	251	444	打製石鏃未製品	N – 48	IV	Ch	27	25	11	3.2
	252	947	スクレイパー	M - 34	Ш	Сс	40	44	4	5.1
	253	957	磨製石斧	N - 40	Шa	Sa	126	63	30	350.0
	254	952	磨製石斧	M - 34	Ш	Sh	(64)	64	19	(80.0)
	255	1397	磨製石斧	M - 27	Ш	Sh	(73)	(29)	7	(20.0)
	256	304	打製石斧	M - 39	Ша	Sh	124	81	21	220.0
47	257	26	打製石斧	5 T	Ш	Sh	(131)	86	12	(140.0)
47	258	232	打製石斧	N - 30	Шa	Sh	102	60	13	100.0
	259	661	打製石斧	M = 41	Ша	Sh	85	64	18	130.0
	260	921	打製石斧	N-40	Шa	Sh	112	111	30	80.0
	261	1190	打製石斧	M - 40	Ша	Sh	88	52	10	70.0
	262	_	打製石斧	M - 34	Ш	Sh	(96)	69	15	(140.0)
	263	135	軽石製品	5 BT	Шb	軽石	108	105	25	160.0
48	264	_	磨製石斧	N-35 · 36	攪乱	Ja	75	58	14	120.0
	265	1448	打製石斧	N - 27	III	Sh	103	60	14	120.0

第3節 Na層の調査(古墳時代)

本遺跡では、第Ⅲ章の第3節でもふれたように、調査区内において地層の堆積や残存状況に違いがみられることから古墳時代の遺構はIV層からVI層上面にかけて検出されている。

1 検出遺構

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡22軒、溝状遺構 4 条などを確認した。なお、竪穴住居跡については調査時に遺構認定を実施し、15号を除外しているため、本節では $1\sim14$ 号、 $16\sim23$ 号について記載している。

本遺跡で検出した住居跡の特徴は、基本的に平面形は方形を呈し、竪穴の中央に炉跡と思われる 焼土域や掘り込みを伴う焼土域があること、主に竪穴の南壁面に接した円形や楕円形を呈する土坑 を伴うこと、あるいは竪穴の周囲や竪穴と切り合うように柱穴を伴うことなどが挙げられる。

遺構内から出土した遺物は、甕形土器・壺形土器・高坏形土器・坏形土器・鉢形土器・甑形土器・ 手づくね土器などの土器、坏・坏蓋・提瓶・平瓶などの須恵器、打製石斧・磨石・敲石・石皿(台 石)・砥石・礫器などの石器、鉄剣。鉄鏃・鉄製鎌・刀子・鉄製鈴の鉄製品などがある。

(1) 竪穴住居跡

①竪穴住居跡 1 号 (第50図~第54図)

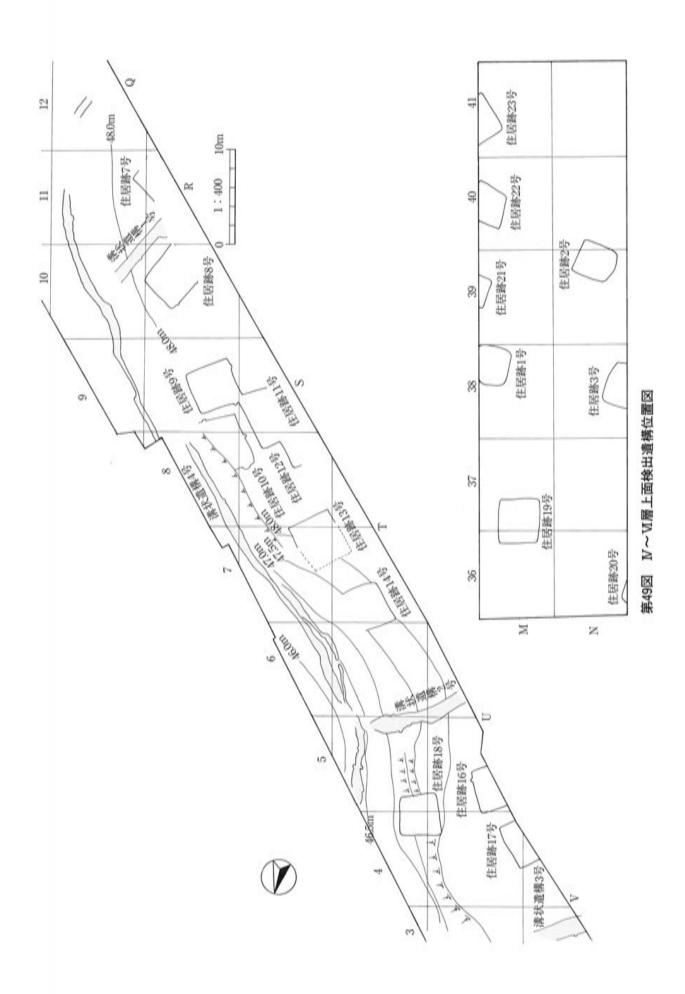
1号は、M-38区で検出したもので、平面形は $4 \text{ m} \times 3.6 \text{ m}$ の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは 25 c mを測る。竪穴の中央部には $52 \text{ cm} \times 42 \text{ cm}$ の楕円形の掘り込みと不整形な焼土域、南壁面に接して $60 \text{ cm} \times 44 \text{ cm}$ のごく浅い土坑を伴う。明確な柱穴は検出されていない。

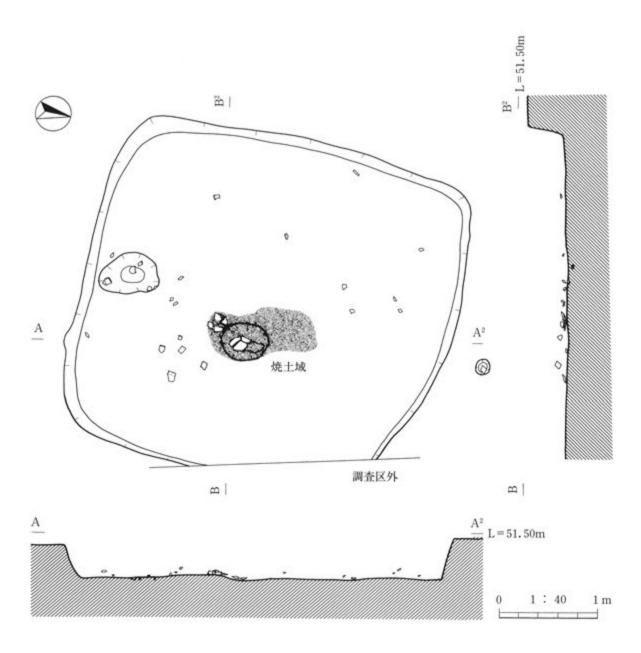
遺物は中央の焼土域と南側の土坑内にわずかに集中して出土している。床付近から出土したものを中心に6点を図化した。266はくの字状に外反する甕形土器の口縁部である。器面調整は外面がヘラケズリとナデ、内面はハケとナデである。267は内湾するタイプの甕形土器で棒状工具による刻み目のついた突帯をもつ。器面調整は外面がヘラケズリ後ナデ、口縁部内面はナデである。268は壺形土器である。頸部付近から口縁部までを欠き、底部は丸底となる。269は高坏形土器の脚部である。いわゆるエンタシス状で充実する。調整はヘラミガキである。271は手づくね土器である。

②竪穴住居跡 2 号 (第55~第58図)

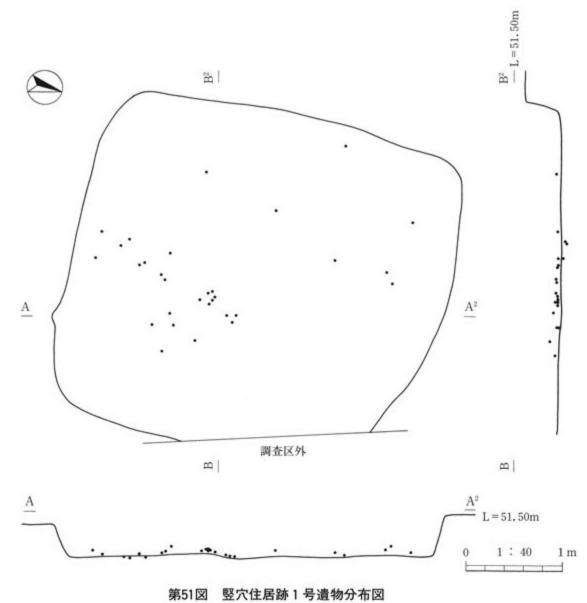
2号は、N-39~40区のIV層面で検出したもので、平面形は3.9m×3.8mの隅丸方形を呈し、西側がやや張り出す形状である。検出面からの深さは41cmを測る。竪穴内には中央に焼土域と主柱柱と思われる柱穴2基、南壁面に接して土坑1基を伴う。P1は径22cm、深さ24cm、P2が径32cm、深さ32cmである。土坑は80×64cmの楕円形で深さ18cmを測る。

272は甕形土器で口縁部が内湾するタイプである。胴部には断面が三角形で刻み目のある突帯が 1条めぐる。外面の突帯から下位にはススが付着する。273は甕形土器の脚部である。外反しなが らひらく器形で端部は平坦となる。内面天井部も平坦である。274は壺形土器の完形品である。口 径17.4cm,器高43.5cmを測る。口縁部は頸部から緩やかに外反し、屈曲して直立する形状でいわ ゆる二重口縁を呈する。頸部には斜位の刻み目のある突帯が一条めぐる。突帯は収束した部分で縦 に垂下し、刻み目の方向が逆方向へと変化している。底部は丸底となる。外面は平滑なナデ、内面

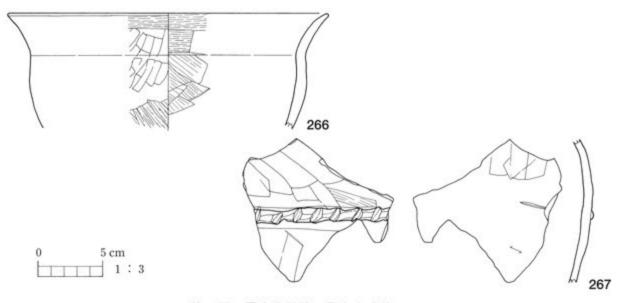




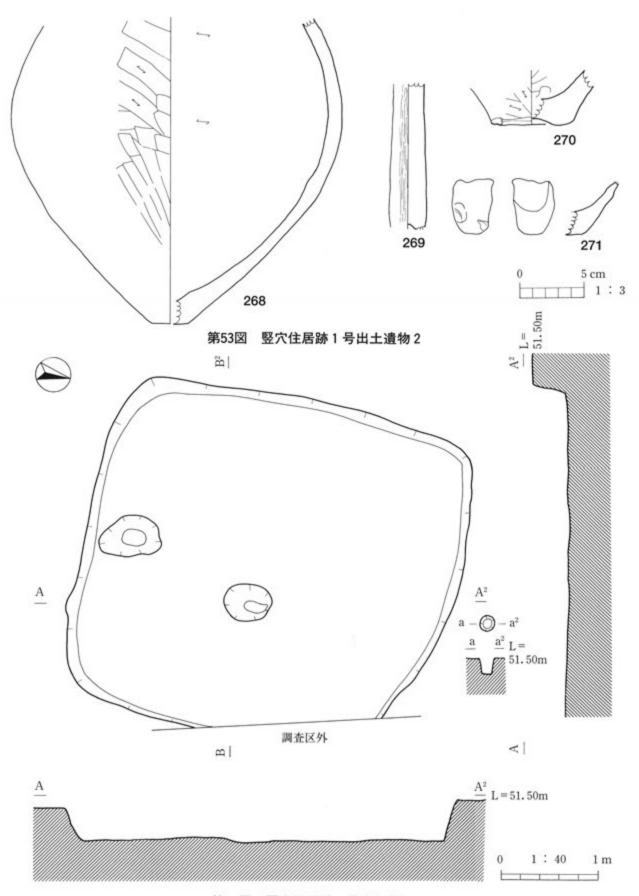
第50図 竪穴住居跡 1 号遺物出土状況



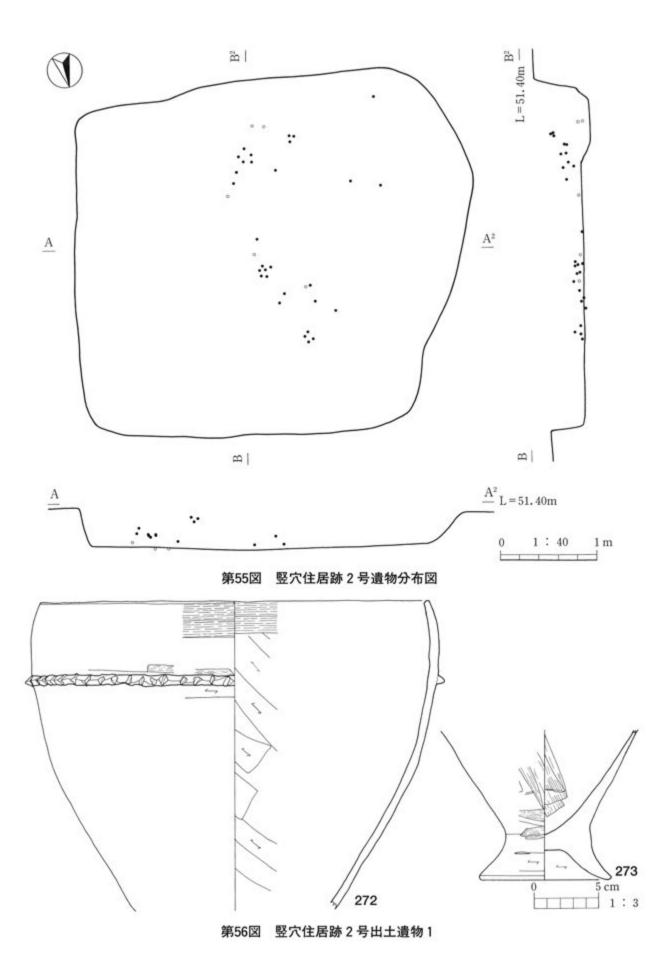
第57回 並八正冶助 1 5 度 初 7 7 1 回

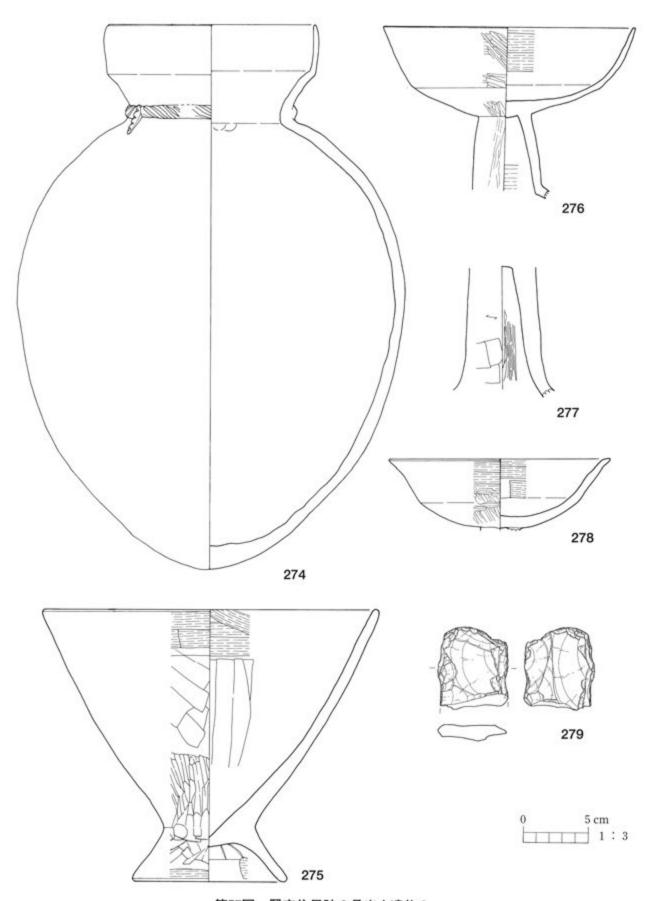


第52図 竪穴住居跡 1 号出土遺物 1

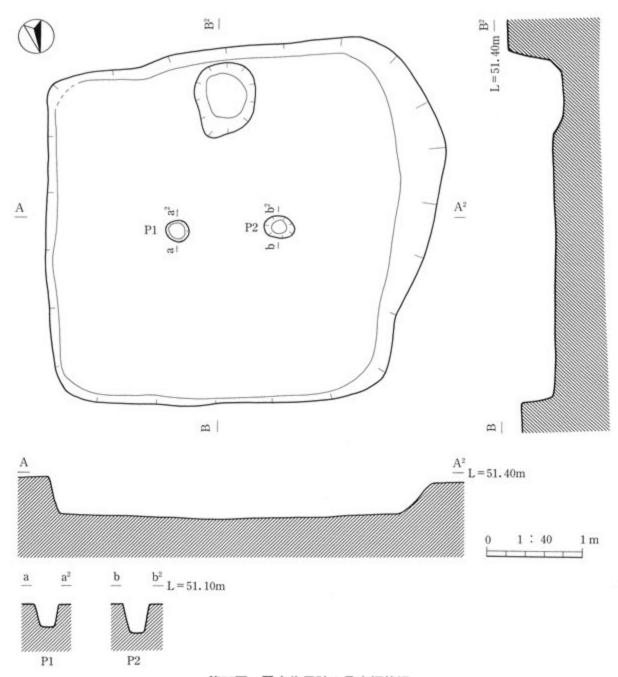


第54図 竪穴住居跡 1 号完掘状況

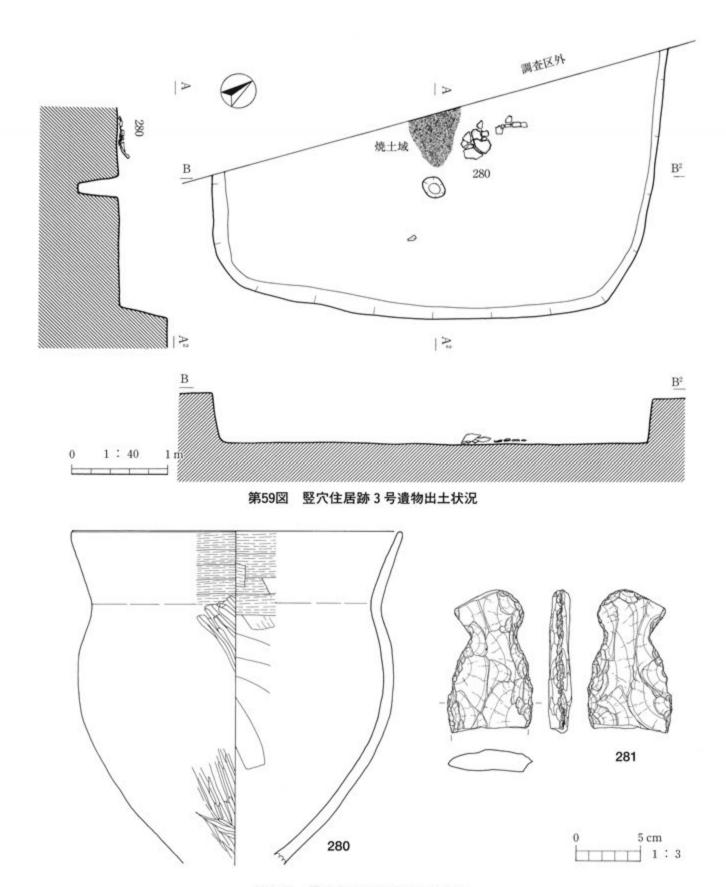




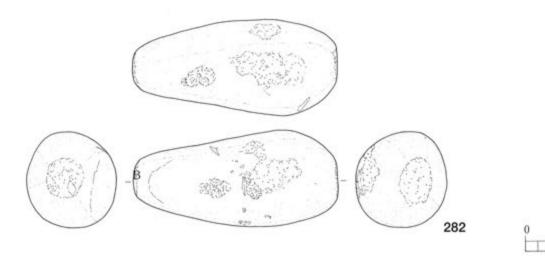
第57図 竪穴住居跡 2 号出土遺物 2



第58図 竪穴住居跡 2 号完掘状況

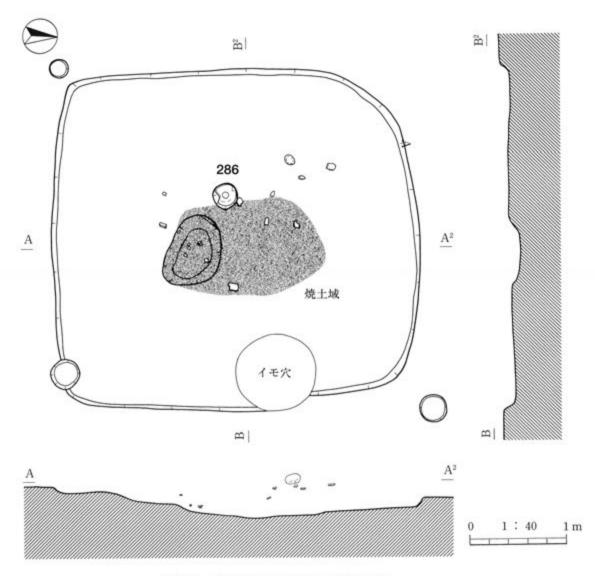


第60図 竪穴住居跡 3 号出土遺物 1



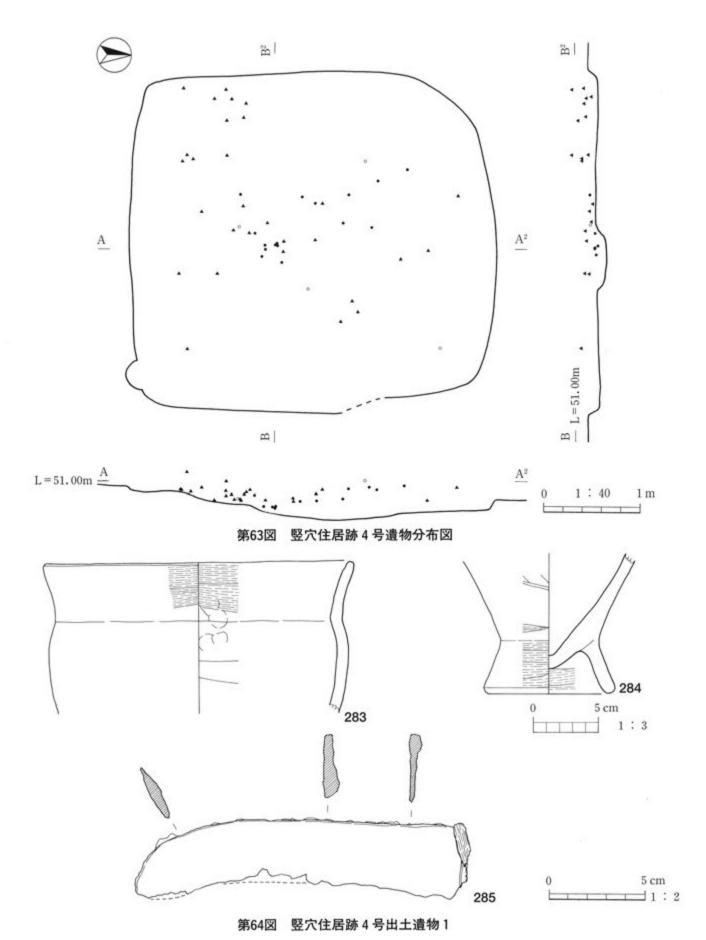
第61図 竪穴住居跡 3 号出土遺物 2

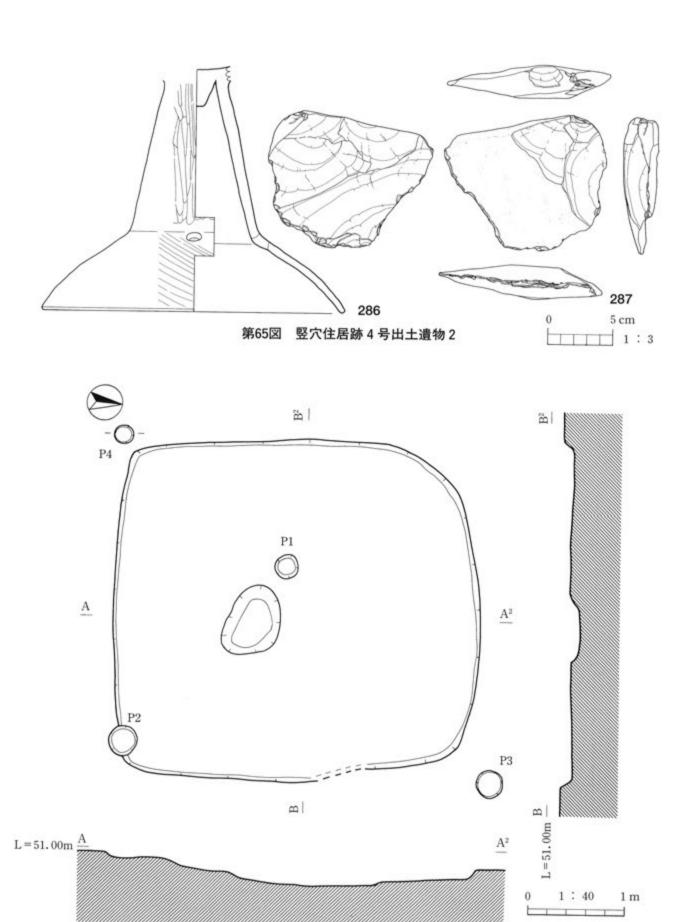
5 cm 1 : 3



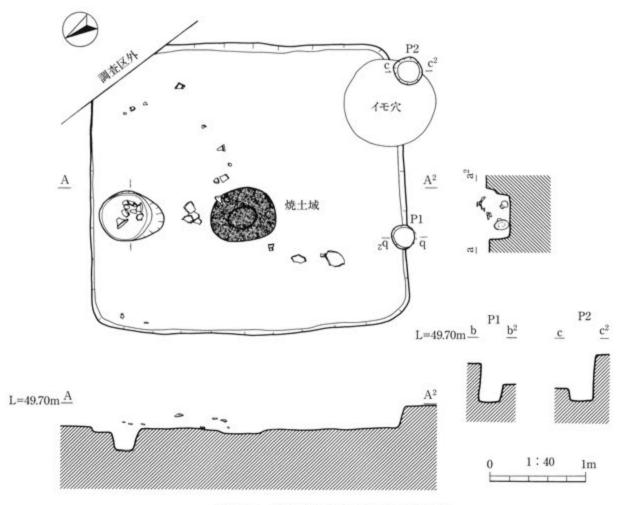
第62図 竪穴住居跡 4 号遺物出土状況

SD1





第66図 竪穴住居跡 4 号完掘状況



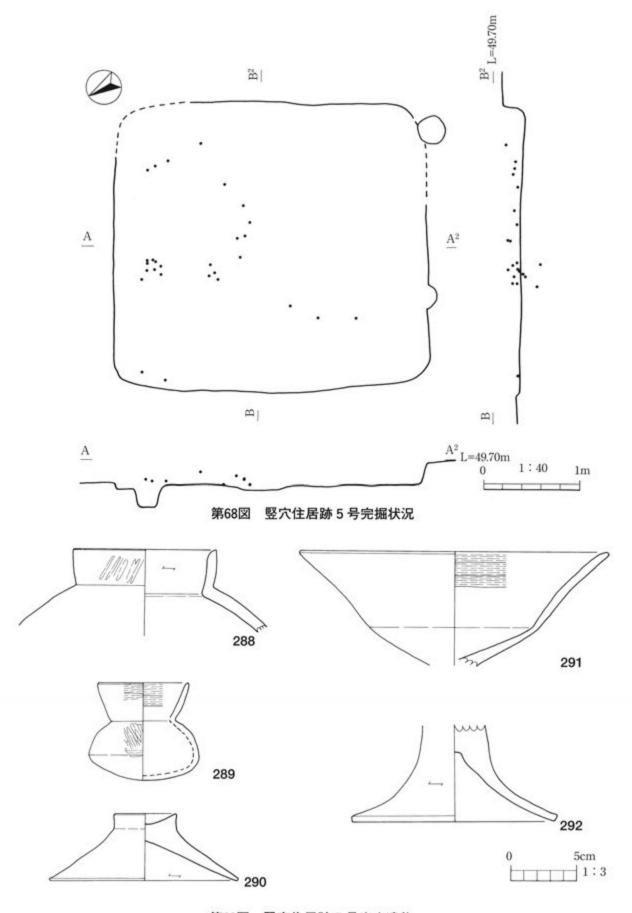
第67図 竪穴住居跡 5 号遺物出土状況

の頸部付近には指頭痕が残る。床着の状態でまとまって出土しているが、出土位置を明確にできなかった。275は甕形土器である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。外面にススが付着する。口径25.9cm、器高21.5cmである。胴部下半から底部途中までの外面にヘラナデ、口縁部内外面と底部内外面にナデがみられる。276~278は高坏形土器である。276は坏部が途中で緩やかに屈折したあと直線的に立ち上がるもので、脚部は中空となる。278は途中で緩やかに屈曲しやや外反して立ち上がる。279は打製石斧の基部である。刃部は欠損する。

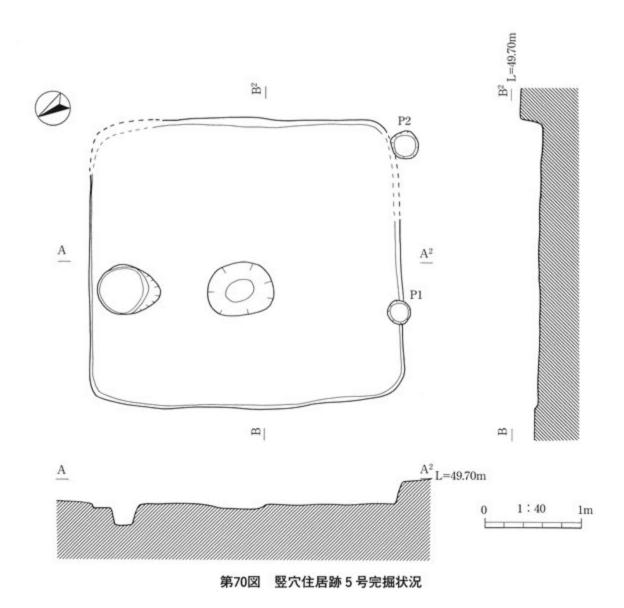
③竪穴住居跡 3 号 (第59図~第61図)

3号は、N-38区で検出したもので、推定で一辺が約4.6mの隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さは48cmを測る。竪穴は中央に焼土域、柱穴 1 基を伴う。 P 1 は径25cm、深さ44cmである。

遺構内遺物は3点を図化した。280は甕形土器で、焼土域の近くに床着の状態で出土したものである。口縁部は胴部から緩やかに外反して立ち上がり、口唇部端が丸くおさまる。胴部はやや丸み



第69図 竪穴住居跡 5 号出土遺物

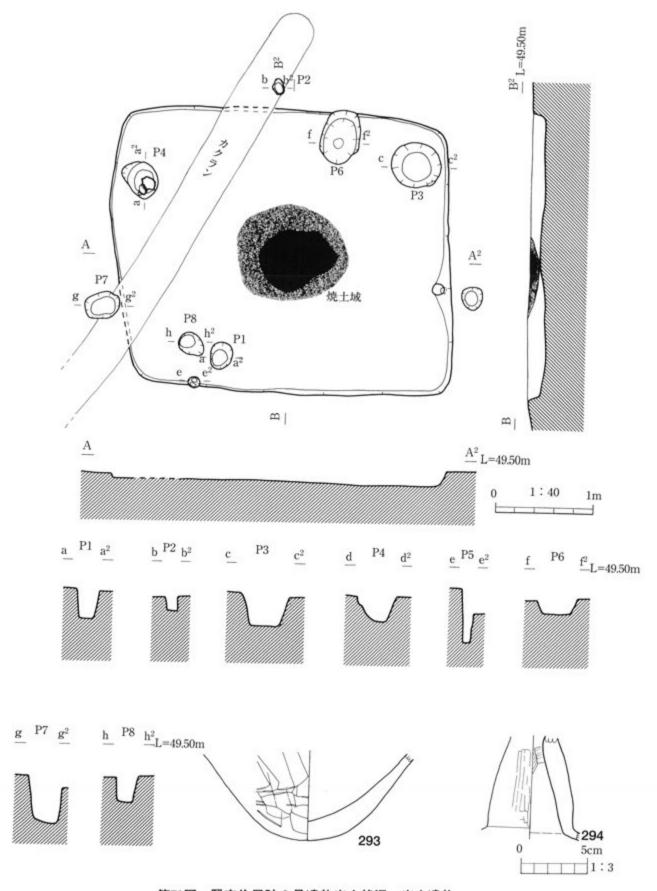


を帯びている。胴部から胴部にかけてヘラナデ、口縁部内外面にはナデがみられ、底部の内外面に ススが付着している。281は頁岩製の打製石斧で刃部を欠損する。282は砂岩製の敲石である。表裏 面と長軸の両端に敲打痕がみられる。

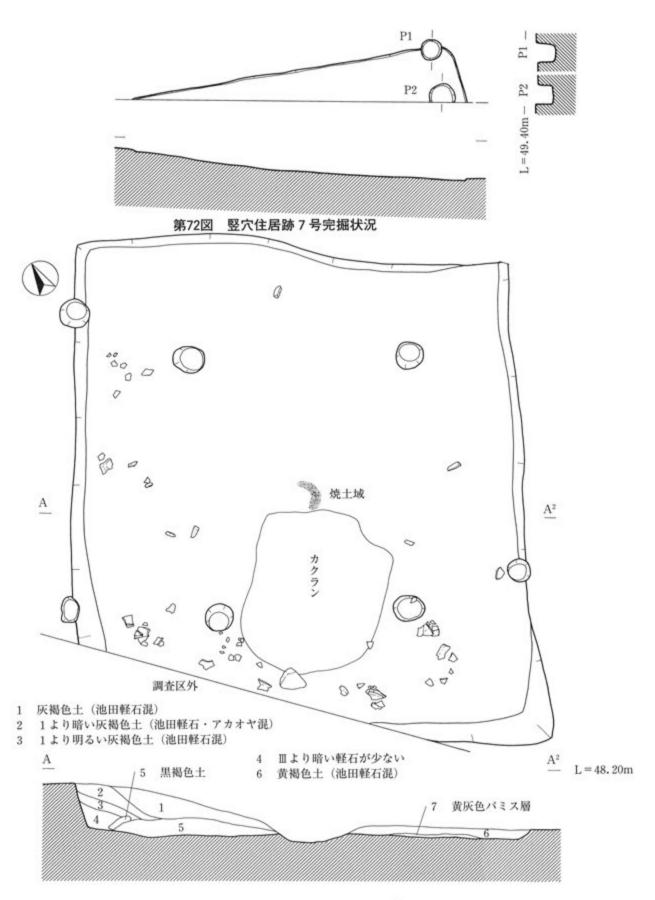
④竪穴住居跡 4 号 (第62図~第66図)

4号は、M-31区で検出したもので、平面形は $3.8m\times3.7m$ の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。竪穴からは中央に掘り込みを伴う楕円形の焼土域と柱穴 1 基を検出した。北西を除く竪穴の角部にもそれぞれ 1 基ずつ、計 3 基の柱穴を伴う。掘り込みは 76×56 cmで深さ 23cm、P 1 は径25cm・深さ52cm、P 2 は径30cm・深さ40cm、P 3 は径21cm・深さ15cmを測る。

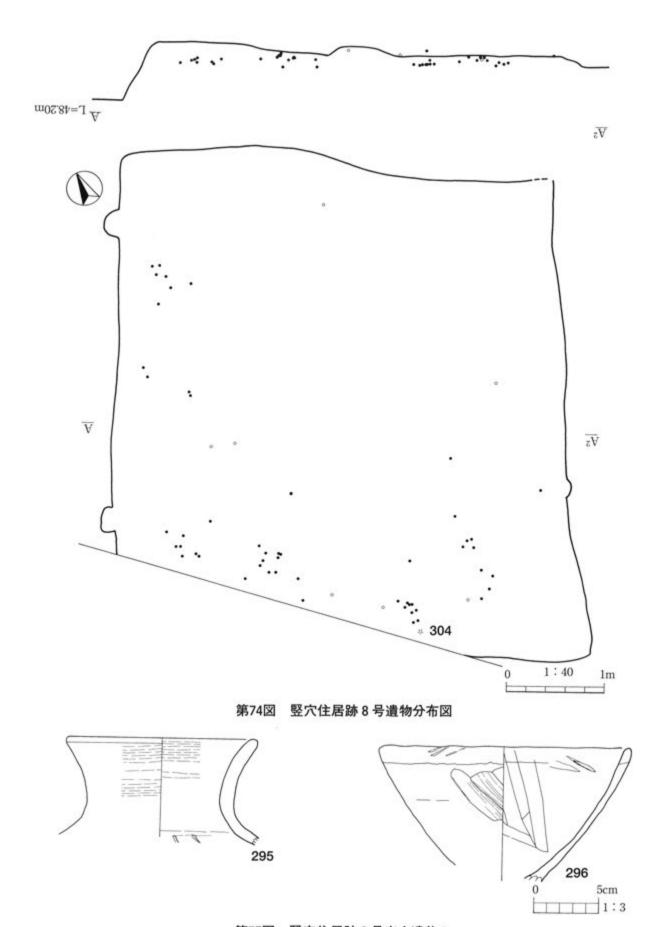
遺物は5点を図化した。283は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる甕形土器である。284は脚部で、内面天井部は下方に大きくふくらむ。286は高坏形土器で坏部を欠く。脚部に4か所に円孔がある。調整はヘラナデである。285は鉄製の鎌である。平面形は緩やかな弧を描き、先端部でやや湾曲する。刃部は一部欠損している。基部は柄を挟み込むために折り曲げられ、柄と思われる木



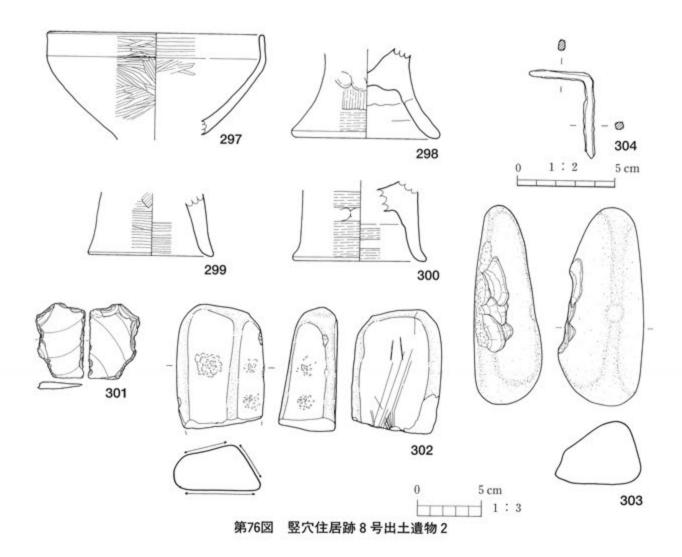
第71図 竪穴住居跡 6 号遺物出土状況・出土遺物



第73図 竪穴住居跡 8 号遺物出土状況



第75図 竪穴住居跡 8 号出土遺物 1



質が一部残存する。287は楔形石器と思われるものである。

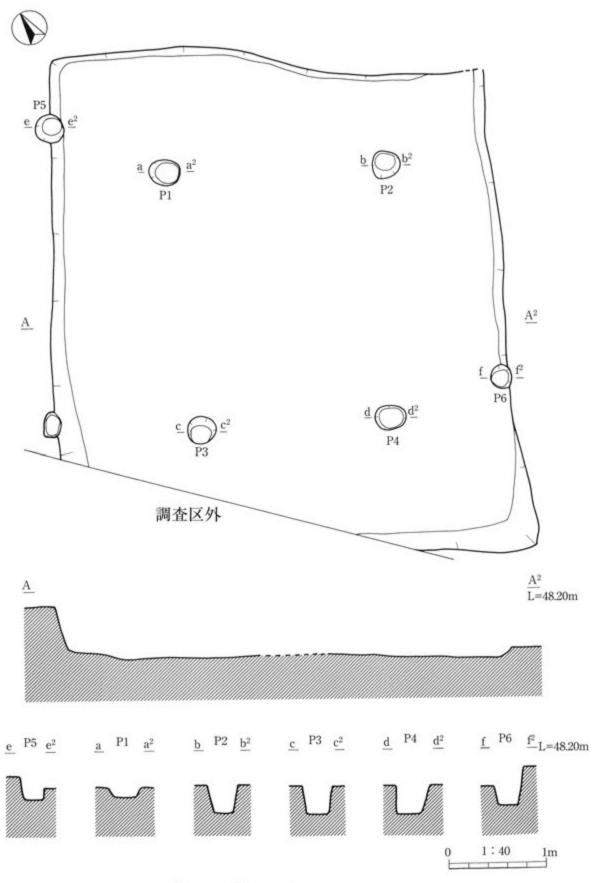
⑤竪穴住居跡 5 号 (第67図~第70図)

5号は $L\sim M-22\sim 23$ 区で検出したもので平面形は $3.3m\times 3.1m$ の隅丸方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは25cmを測る。竪穴の中央には $67\times 58cm$ の掘り込みのある焼土域、北側壁面中央には土坑 1 基を伴う。柱穴は南壁に接して 2 基検出された。

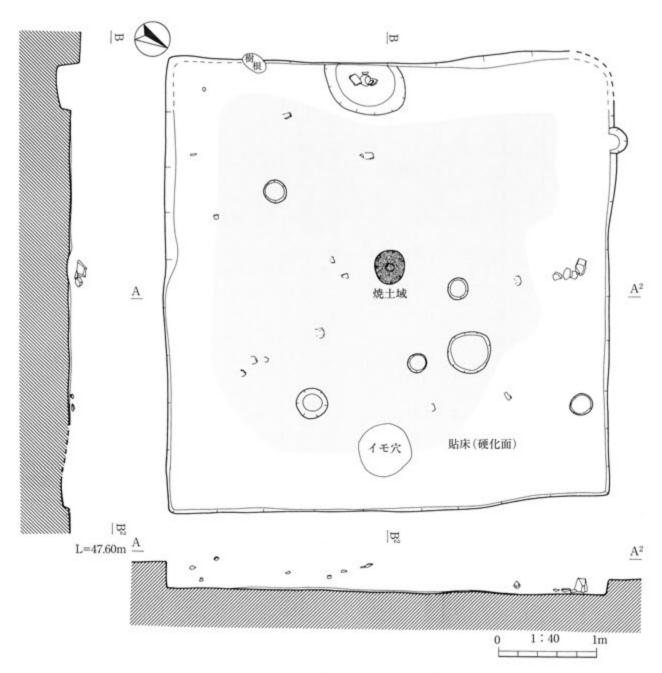
遺物は5点を図化した。288は壺形土器で内外面ともはナデである。口縁部の一部にヘラミガキがみられる。291は高坏形土器の坏部である。途中で屈折し外反して立ち上がる。289・292は住居の土坑内から出土したものである。289は坩形土器である。口縁部は外にひらき、底部は丸底となる。292は高坏形土器の脚部である。290は蓋形土器で、外面はハケ後ナデ、内面に丁寧なナデがみられる。復元径14.7cmである。

⑥竪穴住居跡 6号 (第71図)

6号は、M-21区で検出したもので平面形は3.0m×3.45mの隅丸方形を呈する。竪穴の検出面



第77図 竪穴住居跡 8 号完掘状況



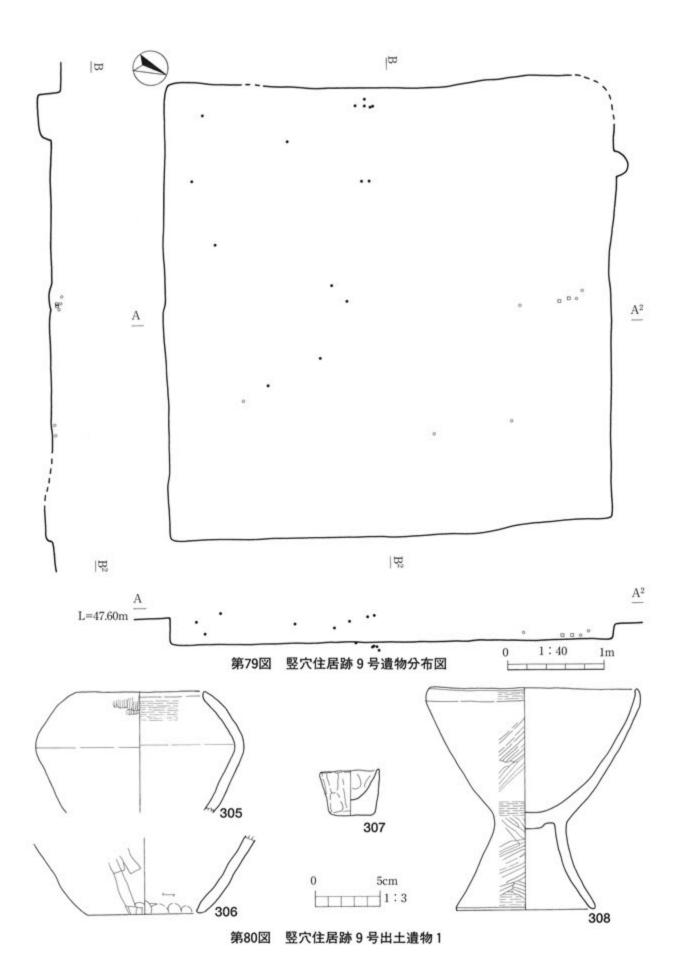
第78図 竪穴住居跡 9 号遺物出土状況

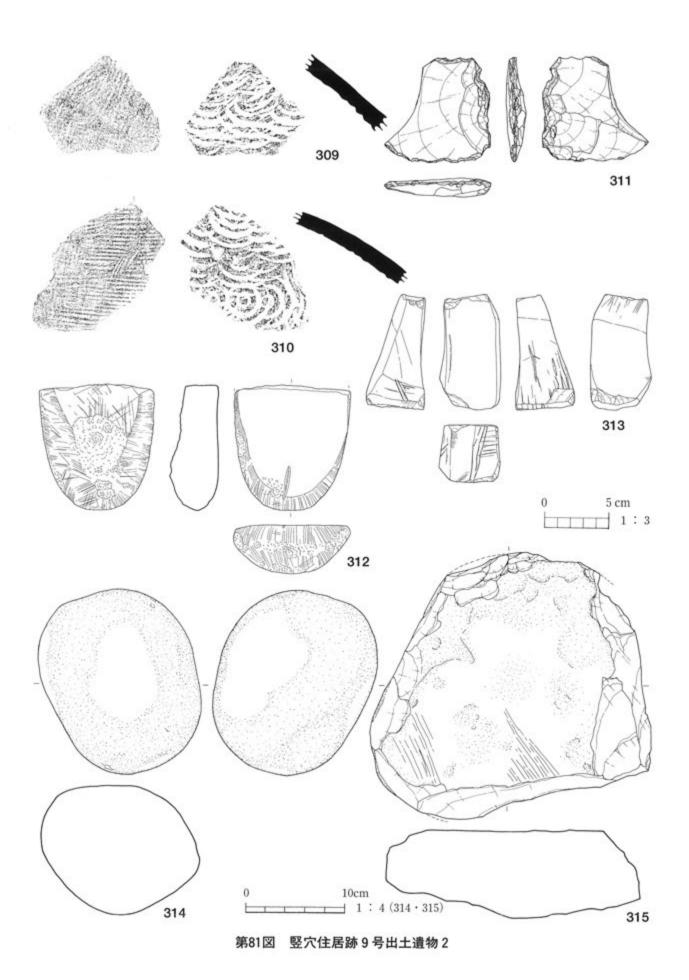
からの深さは25cmである。竪穴の中央には1.3m×1.0mの範囲に略円形を呈する明瞭な焼土域がある。柱穴は主として壁面に沿って5基検出され、竪穴の周囲にも5基が確認されている。

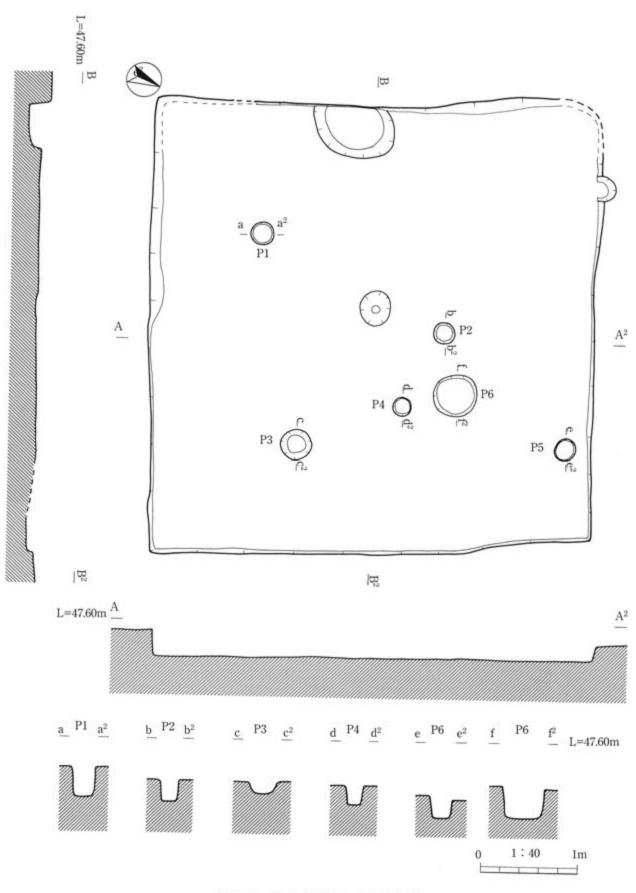
遺物は2点を図化した。293は壺形土器の底部で丸底を呈する。外面はヘラケズリがみられる。 294は高坏形土器の脚部で外面にヘラミガキ、内面はヘラの痕跡がある。

⑦竪穴住居跡 7号 (第72図)

7号は、R-11区のⅥ層面で検出したもので、平面形はおそらく隅丸方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは6cmと極めて浅い。竪穴の東隅に柱穴状のピットが2基検出された。







第82図 竪穴住居跡 9 号完掘状況

⑧竪穴住居跡 8 号 (第73図~第77図)

8号は、R-10区のVI層面で検出したもので、平面形は約 $4.7m \times 5.3m$ の方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは約62cmである。竪穴中央は桜の樹根によって攪乱されており、その北側に小さく弧状を呈する焼土域を検出した。竪穴内から主柱穴になると思われる柱穴が4基検出され、径はいずれも30cm前後である。竪穴の壁面に沿う柱穴も3基検出されている。

遺物は竪穴の東と南側から出土している。そのうち8点を図化した。295は壺形土器の口縁部である。くの字状に緩やかに外反する。内外面ともナデ調整と思われるがわずかに光沢がある。296は鉢形土器でやや粗い作りである。明瞭な接合痕を観察できる。297は黒色を呈する坏形土器で須恵器を模したものと思われる。口縁部はやや内湾する。内外面ともヘラミガキであるが、口縁部内面はナデ状となる。298~300は甕形土器の脚部で、298・300は外面に指頭痕がみられる。301は頁岩製でスクレイパー状の石器である。302は磨敲石、303は敲石でいずれも砂岩製である。304はL字状呈する鉄製品である。断面は略方形を呈する。

⑨竪穴住居跡 9号 (第78図~第82図)

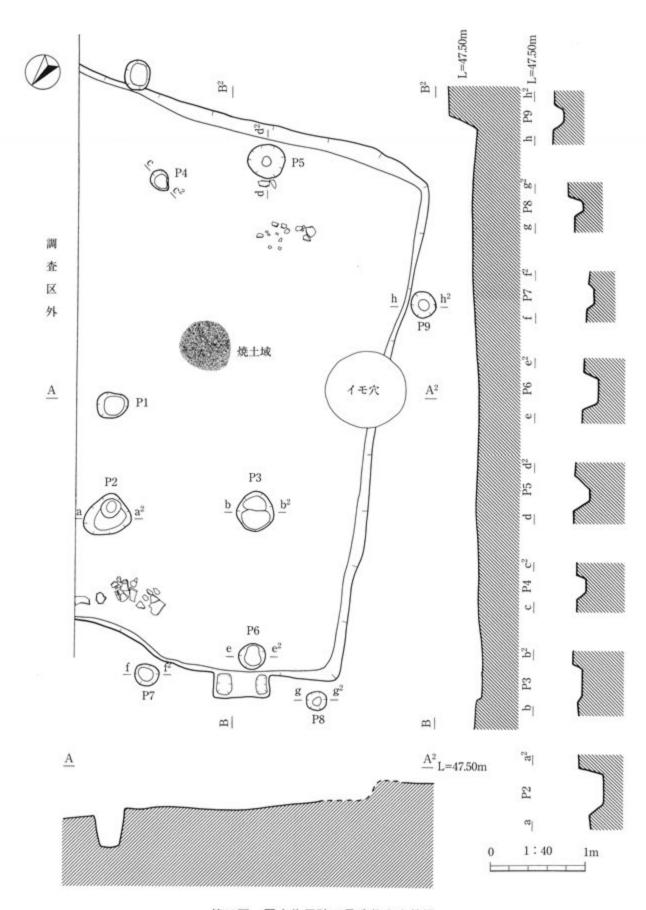
9号は、R-9区で検出したもので平面形は4.85m×4.7mの方形を呈する。竪穴部の検出面からの深さは30cmである。竪穴中央に36cm×32cmの掘り込みを伴う円形の小さい焼土域が形成されている。柱穴は竪穴内に6基、竪穴北壁に1基検出し、竪穴西壁には径82cmの楕円形の土坑を伴う。床面には貼床と思われる硬化面が形成されている。竪穴の西側の一部は11号住居と切り合っており、新旧関係では9号が古く、11号が新しい。

遺物は11点を図化した。305は無頸壷と思われる。竪穴の土坑内から出土したもので、外面にはヘラミガキが施され黒色を呈する。内面は口縁部にナデ状の痕跡が認められるが全体的に剥落が激しい。306は甑形土器の底部である。「つつぬけタイプ」で底部立ち上がり付近に指頭痕がみられる。307はコップ形の手づくね土器である。308は黒色を呈する鉢形土器の完形品である。口縁部は内湾し大きめの脚台がつく。脚台内面の天井部はやや下方へふくらむ形状である。口径16.5cm、器高17.6cmである。器面調整は口縁部付近と脚部との境、脚部立ち上がり付近がナデのほか、ヘラミガキである。309・310は須恵器甕の破片である。外面は平行のタタキ痕、内面は同心円状の当て具痕がみられる。312・313は砥石である。312は擦痕が側面にまで明瞭にみられ、平面部分には敲打による凹みがある。312は各面とも使用面となっており、溝状の擦痕も認められる。鋭利なものを研いだものと考えられる。314・315は台石とした。いずれも砂岩製である。

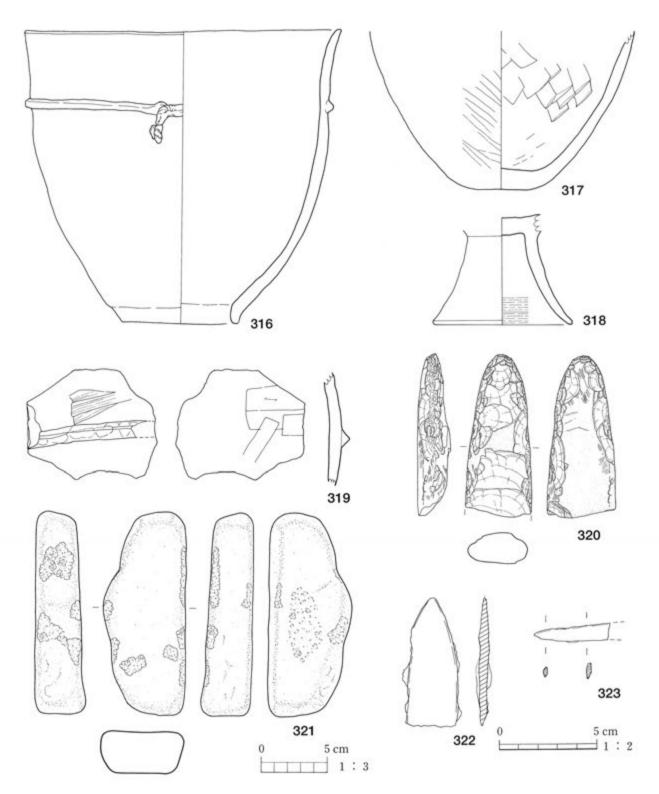
⑩竪穴住居跡10号(第83図・第84図)

10号は、 $R \sim S - 8 \sim 9$ 区にかけて検出したもので、平面形は 1 辺が約5.8mの方形を呈するものと思われる。竪穴部の検出面からの深さは31cmである。竪穴内の中央部に径54cmの略円形の焼土域、柱穴状のピットを 5 基検出した。ピットの径は大きいもので50cm、小さいもので25cmあり、深さは全体的に浅めである。また、竪穴北壁には長径60cm×短径20cmの小さい張り出しがある。この張り出しの東西に 1 基ずつピットが検出されており、出入口であった可能性が高い。

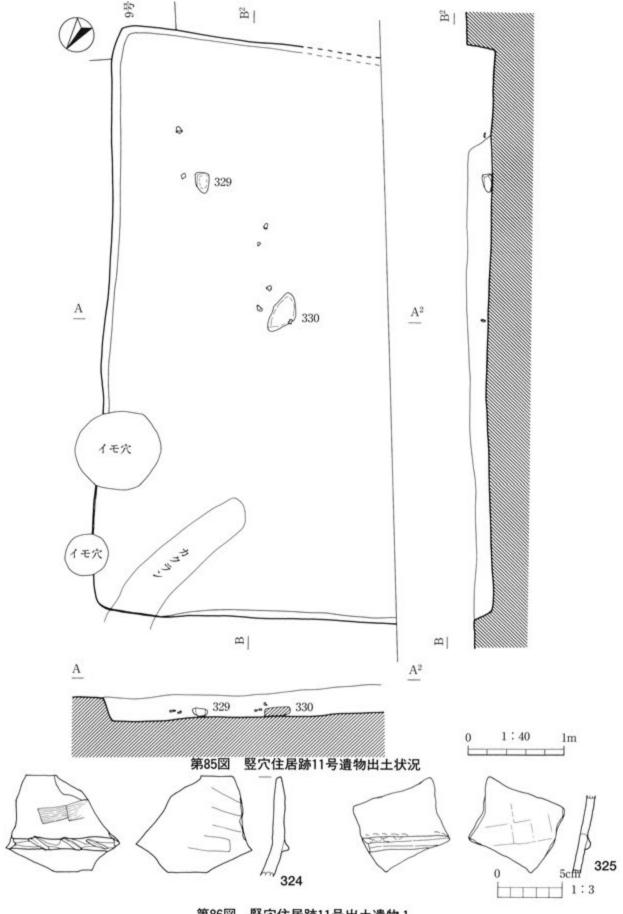
遺物は床付近から出土したもののうち、8点を図化した。316は甑形土器の完形品である。「つつ



第83図 竪穴住居跡10号遺物出土状況



第84図 竪穴住居跡10号出土遺物



第86図 竪穴住居跡11号出土遺物1

ぬけタイプ」である。口縁部はわずかに外反し、底部の立ち上がり付近がわずかにくびれている。 胴部には断面三角形で刻み目のない突帯が1条めぐる。口径24.9cm、器高23.5である。317は壺形 土器の底部である。外面にヘラケズリ、内面にはハケ目がみられる。318は鉢形土器の脚部と思わ れる。外面にはミガキ、内面にナデがみられる。脚部内面の天井部は平坦である。320は頁岩製の 打製石斧である。両側縁部方向からの整形剥離痕がみられ、一部に礫面を残す。基部は欠損してい る。321は砂岩を利用した凹石である。平面および側面の一部に敲打痕がみられる。322は鉄剣の先 端部である。残存長10.4cmを測る。323は鉄製刀子で、基部を欠損している。

①竪穴住居跡11号(第85図~第87図)

11号は、 $S-8\sim9$ 区で検出したもので、検出した部分から推定してと平面形は 1 辺が約 6 mの 方形を呈するものと思われる。今回検出した住居跡群の中では最も規模が大きい。竪穴の検出面からの深さは31cmである。竪穴の東端の一部は11号住居と切り合っており、住居の新旧関係としては 9号が古く、11号が新しい。竪穴内には柱穴は検出されていない。

遺物は床付近から出土したものから 7 点を図化した。324・325は甕形土器の口縁部である。324 は棒状工具によるキザミのある突帯,325は指頭によるつまみ痕のある突帯がめぐり,突帯の上位には爪痕が残る。326は須恵器の平瓶である。胴部の長径は15.4cmを測る。内面には口縁部と胴部の接合線が明瞭に観察できる。口縁部の先端は欠損している。327・328は坩形土器である。327は平底の底部で内外面ともにヘラミガキがみられる,328は外面がミガキ,内面はヘラナデで口縁部は内外面ともナデである。329は砂岩製の台石で使用面に擦痕や敲打痕による凹みがある。330は花崗岩製の石皿である。

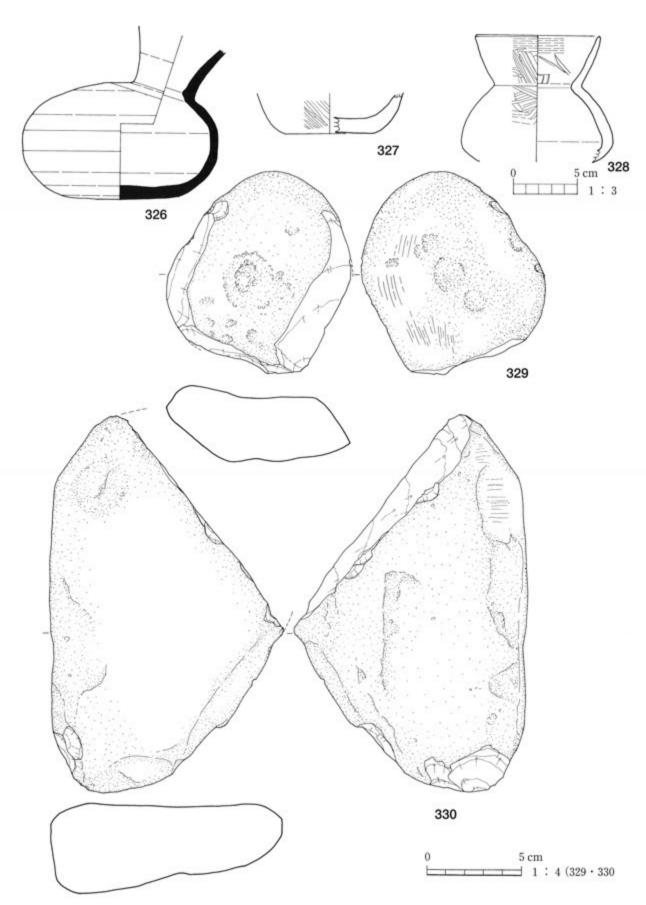
迎竪穴住居跡12号

12号は、S-8区で検出したものである。検出規模が小さく後世の攪乱によって削平が著しいために掲載していない。平面形はおそらく方形を呈するものと思われる。検出面からの竪穴の深さは約26cmある。竪穴の東側は11号と切り合っており、新旧関係では12号が古く、11号が新しい。

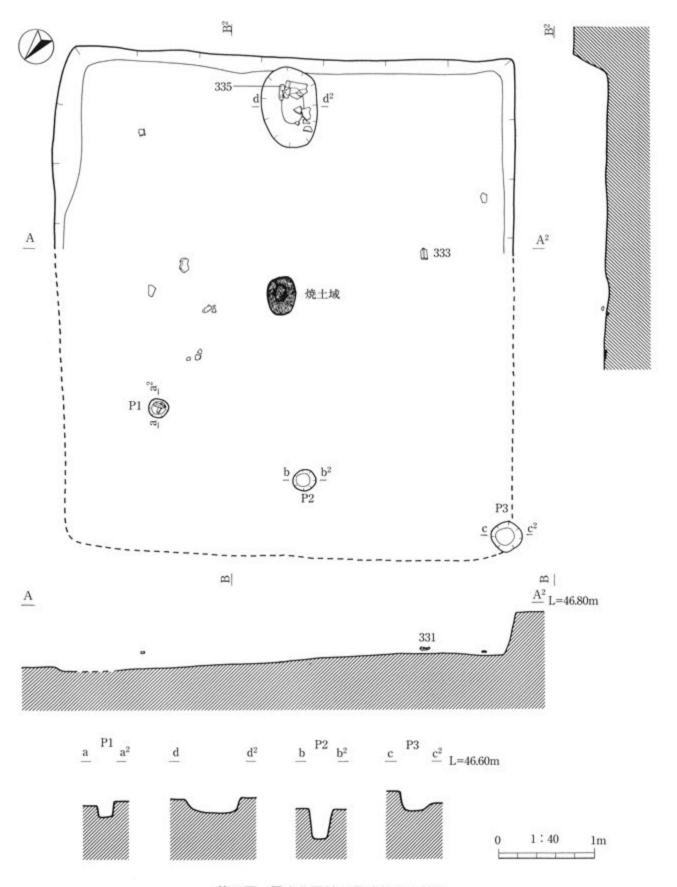
①竪穴住居跡13号(第88図・第89図)

13号は、 $S \sim T - 7 \sim 8$ 区のIV a 層面で検出したもので、平面形は方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは46 c mある。検出面のIV 層面での地形は北側に向かって傾斜しており、竪穴の左半分については明確なプランが検出されていない。第38図で示した竪穴平面の波線部分は、13号住居跡に伴うと思われる柱穴(P 3)から推定したラインである。竪穴内に径20cmのP 1,径24cmのP 2 が検出されたほか、中央には42cm×23cmの楕円形を呈し、掘り込みを伴う小さな焼土域が検出されている。竪穴の東壁には85cm×56cmの土坑を伴う。

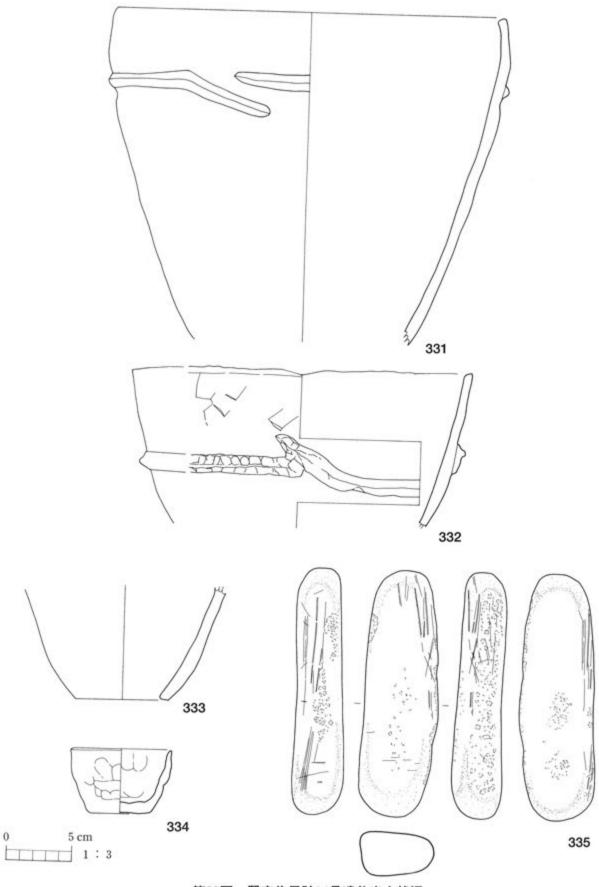
遺物は5点を図化した。331は甕形土器である。口縁部は内湾し、胴部は直線的な形状である。 突帯は収束せずに段違いとなる。333は甑形土器の底部である。332は口縁部から胴部にかけての破 片である。333と同様な器面調整、胎土・色調であり同一個体の可能性がある。334は手づくね土器 である。コップ形を呈し、内外面に明瞭な指頭痕が残る。復元口径7.8cm、器高4.9cmである。335



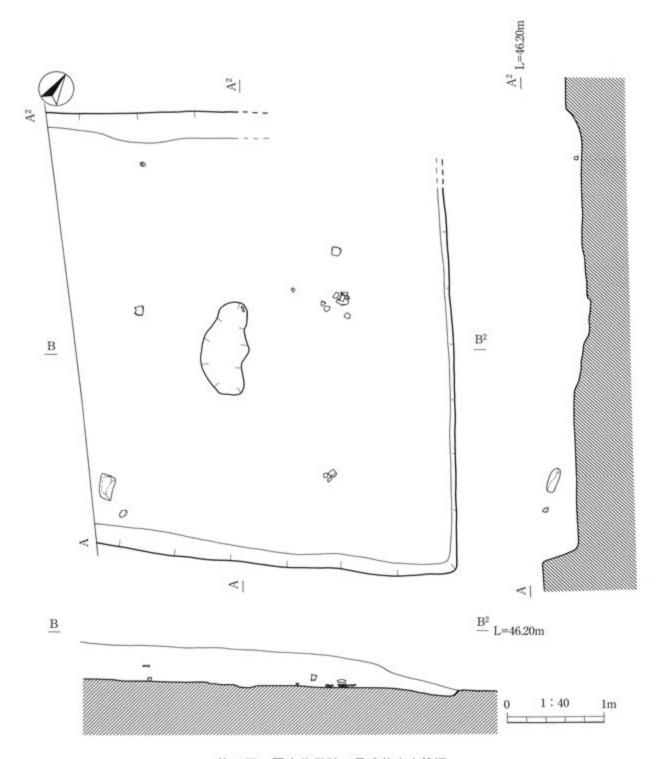
第87図 竪穴住居跡11号出土遺物 2



第88図 竪穴住居跡13号遺物出土状況



第89図 竪穴住居跡14号遺物出土状況

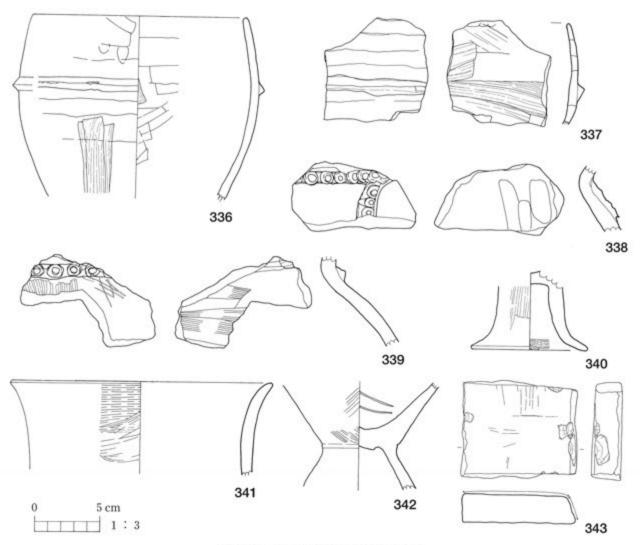


第90図 竪穴住居跡14号遺物出土状況

は磨敲石として分類したもので、礫面に擦痕や微細な敲打痕がみられる。

① S 文住居跡14号 (第90回·第91回)

14号は、 $T-6\sim7$ 区のIV a 層面で検出したもので、平面形は方形を呈する。検出した範囲から 1 辺が4.7m程度の規模と思われる。竪穴部の検出面からの深さは34cmである。竪穴部中央には炉跡と思われる不整形な凹みが検出され、埋土に炭化物を含む。竪穴から柱穴は確認されていない。

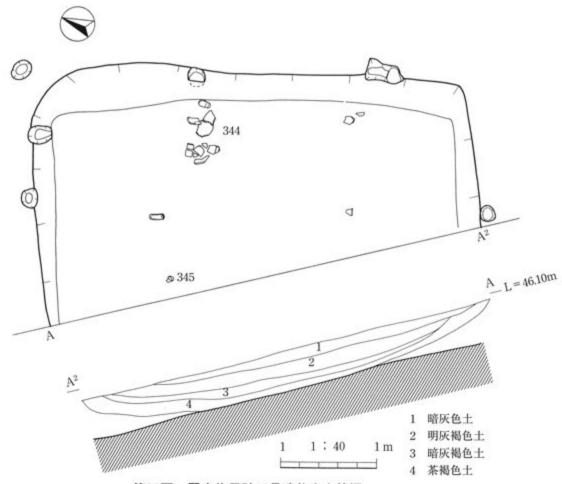


第91図 竪穴住居跡14号出土遺物

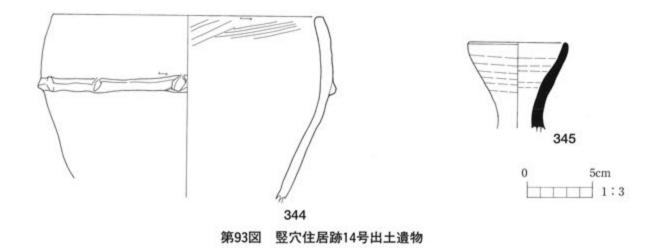
遺物は埋土から出土したものを 8 点を図化した。336・337は内湾する口縁部をもつ甕形土器である。336は内外面とも接合痕が顕著で胴部下半にススが付着する。338・339は壺形土器の頸部付近の破片である。竹管状の刺突が施された突帯がめぐるもので、338は突帯が胴部へ垂下している。器面調整は338の外面がナデ、内面には指頭によるナデである。339は外面がミガキ、内面はハケ状のナデである。341・342は鉢形土器と思われる。342は内外面ともケズリに近いヘラミガキである。外面に赤褐色の丹塗り、内面にはヘラ状工具による沈線がある。343は砂岩製の砥石である。表面と側面に使用面があり一部に擦痕が残る。

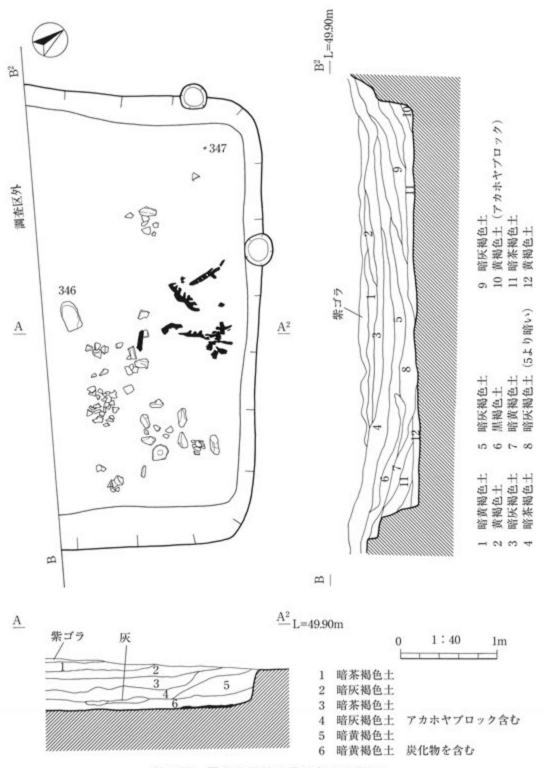
[5竪穴住居跡16号(第92図·第93図)

16号は、U-5区のIVa層上面で検出したもので、平面形は隅丸方形を呈し、竪穴の一辺は4.6mを測る。竪穴の検出面からの深さは42cmである。竪穴内から柱穴は検出されていないが、壁面に沿って楕円形、不整形を呈する柱穴を5基検出した。竪穴には灰褐色~茶褐色を基調とする埋土がレンズ状に堆積している。

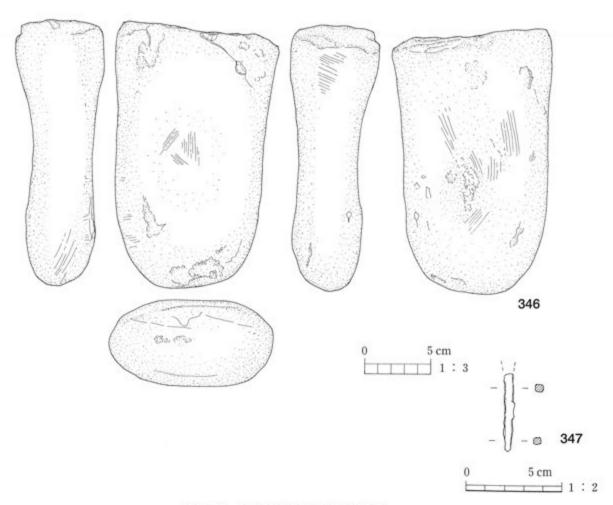


第92図 竪穴住居跡16号遺物出土状況





第94図 竪穴住居跡17号遺物出土状況



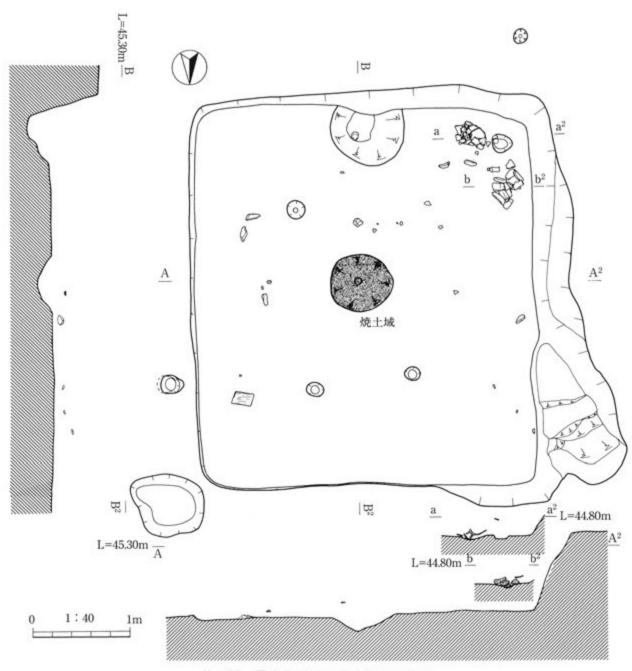
第95図 竪穴住居跡17号出土遺物

遺物は床付近から出土したものから2点を図化した。344は甕形土器である。口縁部は内湾し、 断面形がカマボコ状の突帯がめぐる。突帯上には間隔をおいて指頭状の刻み目が施される。345は 須恵器である。提瓶の口縁部分と思われる。内外面ともロクロによる整形痕が明瞭である。

16竪穴住居跡17号 (第94図·第95図)

17号は、 $U\sim V-4$ 区のV=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4区 V=4 V=4 V=4 V=4 V=4 V=4 V=4

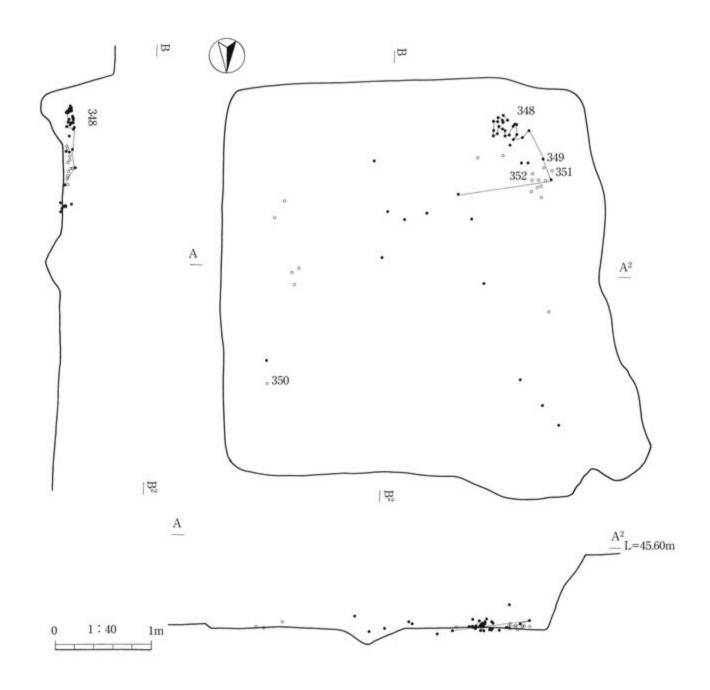
遺物は、竪穴の北側中央でエブリと思われる炭化材が出土している。古墳時代の生業を裏付ける ものとして貴重な発見である。ただし現場での取り上げ時から脆弱であったことに加え、報告書作 成まで時間が経過したため損傷が著しく、図化し掲載することができなかった。346は台石として 分類した。表裏面や側面の一部に擦痕や敲打痕がみられる。347は鉄鏃の茎部である。



第96図 竪穴住居跡18号遺物出土状況

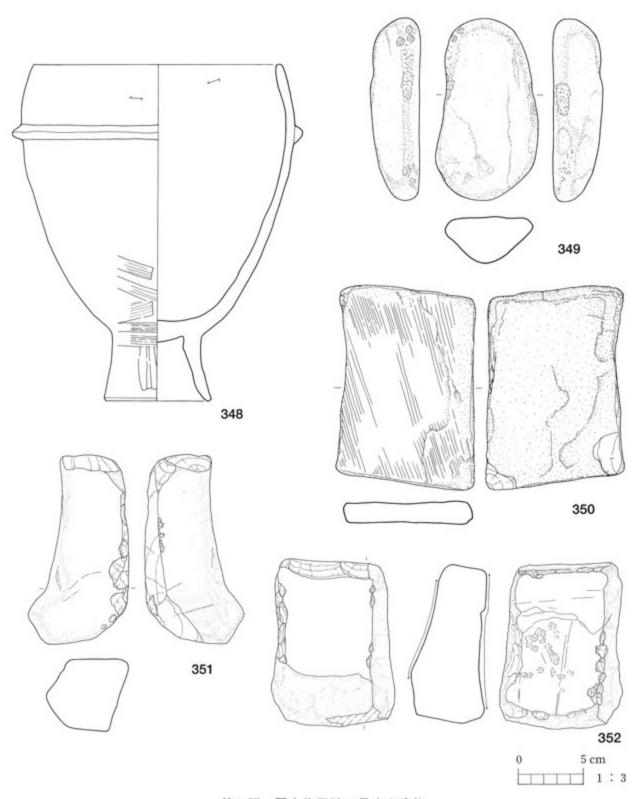
17竪穴住居跡18号 (第96図~第99図)

18号は、 $T \sim U - 4 \sim 5$ 区のW a 層上面で検出したもので、平面形が $3.95m \times 4.4m$ の方形を呈する。今回報告する住居群のなかでは最も残存状態が良好である。竪穴の検出面からの深さは最も深いところで84cm、浅い部分で約6 cmである。竪穴内には中央に $64cm \times 61cm$ の円形の掘り込みのある焼土域と柱穴 4 基、南壁に土坑 1 基を検出した。 $P1 \sim P3$ は径が $16cm \sim 20cm$ 前後で他の住居と比べると規模が小さい。竪穴内の土坑は半円形を呈し径77cmを測る。このほか竪穴の東と北に2 基のピットが確認されたほか、竪穴の北東端にやや不整形な土坑がある。また、竪穴の東壁には張り出しがあり、断面の形状が階段状の段差を形成することから出入口と考えられる。

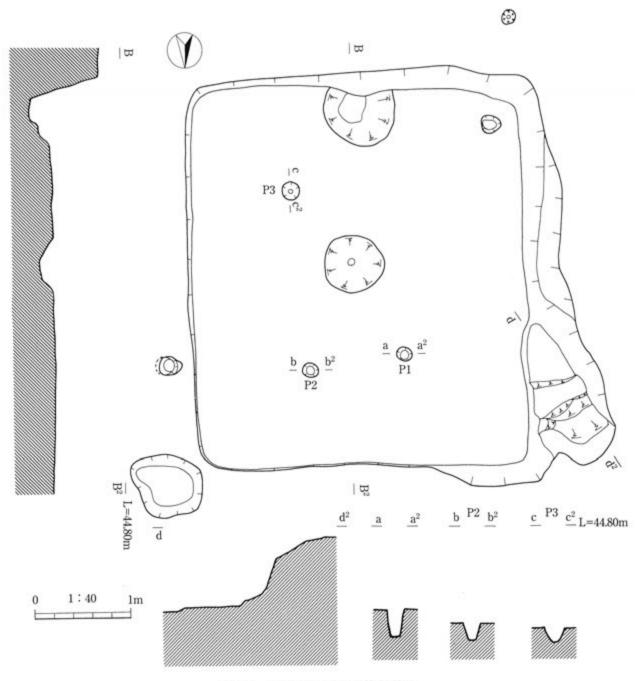


第97図 竪穴住居跡18号遺物分布図

遺物は、竪穴の南西端、P4周辺の床付近から甕形土器や石器が集中して出土している。そのうち5点を図化した。348は甕形土器の完形品である。口縁部は内湾し、胴部に断面がカマボコ状の突帯が1条めぐる。直線的な脚部がつき、脚部内面の天井部はやや下方へとふくらむタイプである。外面は脚部から突帯の上位にかけてススが付着している。口径19.0cm、器高24.7cmある。349は敲石である。両側面に敲打痕がみられる。350は石皿で明瞭な擦痕がみられる。351は長靴形を呈する砥石でわずかに磨面が観察できる。352は砥石である。両面に使用面があり一部に敲打痕も残る。



第98図 竪穴住居跡18号出土遺物

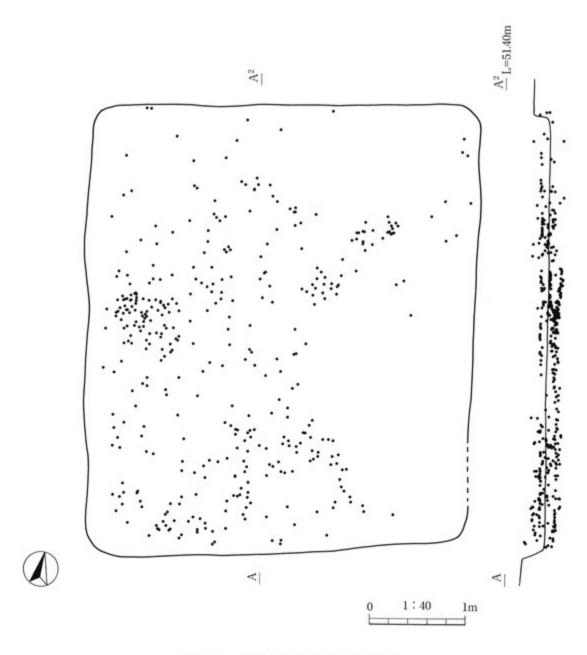


第99図 竪穴住居跡18号完掘状況

(18堅穴住居跡19号(第100図~第102図)

19号は、 $M\sim N-36$ 区で検出したもので、平面形は $4.8m\times 4.1m$ の隅丸方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは約24cmである。竪穴内は中央に焼土域を伴うが焼土域に伴う掘り込みや柱穴は検出されていない。竪穴の床面は西側に向かって傾斜している。

遺物は出土したものから8点を図化した。353は甕形土器である。口縁部はやや内湾し胴部に刻み目のある突帯がめぐる。調整はナデである。354は甕形土器の脚部で、内面の天井部に突起がある。355~358は高坏形土器である。355は坏部で直線的に外へひらくものである。356は途中で屈折

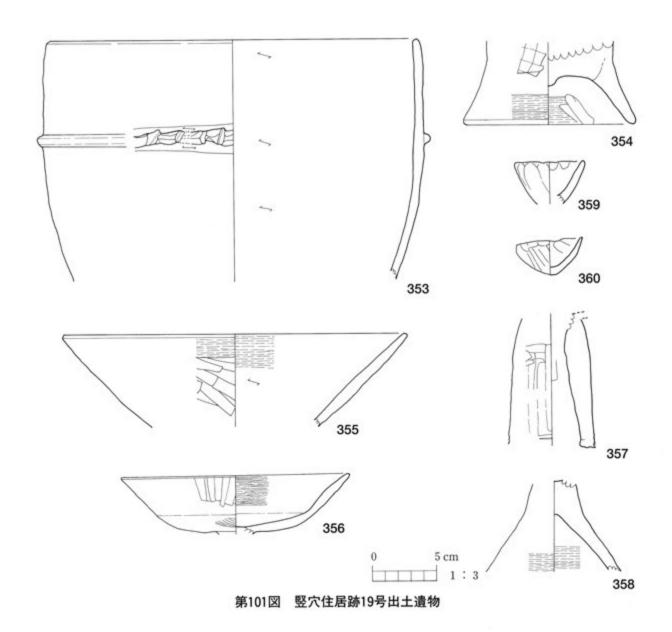


第100図 竪穴住居跡19号遺物分布図

し直線的に立ち上がる坏部である。外面ヘラナデ、内面ヘラミガキである。357はエンタシス状の 脚部でヘラナデ痕が顕著である。358は脚部が外へひろがるものでナデがみられる。359・360は手 づくね土器である。いずれも尖底のもので指頭による整形痕が明瞭である。

19竪穴住居跡20号

20号は、N-36区の西壁の土層断面で確認されたもので、掘り込み面はⅢb層上面である。竪穴の検出面からの深さは約32cmを測る。竪穴部のほとんどが西側の調査区外へのびるものと思われ、 検出規模が小さく平面プランも不明瞭なため図化しなかった。



20竪穴住居跡21号 (第103図·第104図)

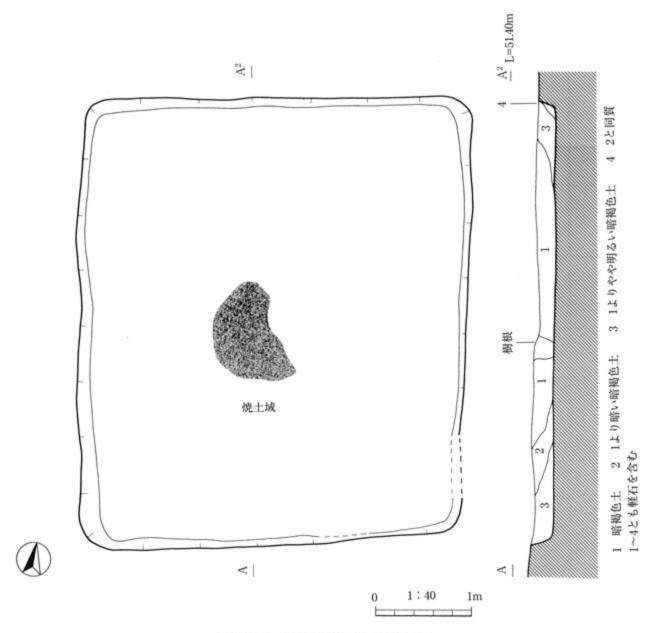
21号はM-39区で検出したものである。検出した部分から推定すると平面形は1辺が2.9m程度の方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは29cmである。検出規模も小さく、竪穴内からは焼土域や柱穴は検出されていない。

遺物は2点を図化した。361は高坏形土器である。坏部は脚部から直線的に立ち上がり、途中で 屈折し外反するものである。362は坏形土器である。内外面にヘラミガキが施され黒色を呈する。

② 竪穴住居跡22号 (第105図~第108図)

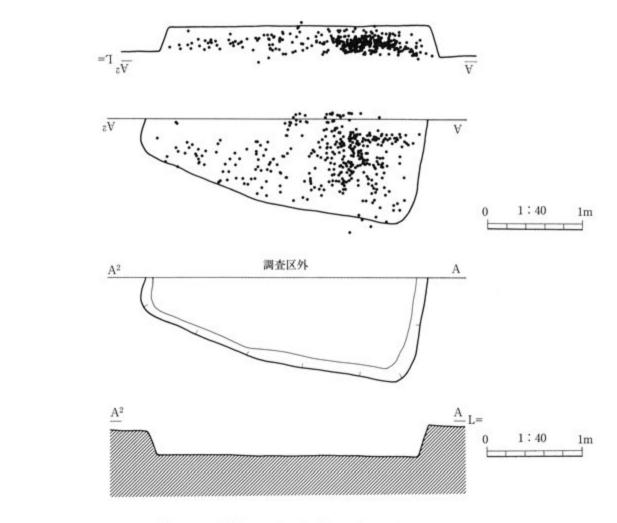
22号はM-40区検出したもので、検出した部分から推定すると、1辺が3.6mの方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは46cmである。竪穴内には中央部にハート形を呈する焼土域がある。竪穴内には掘り込みや焼土域、柱穴は確認されていない。

遺物は、13点を図化した。363は内湾する口縁部をもつ甕形土器である。胴部には菱形の刻み目

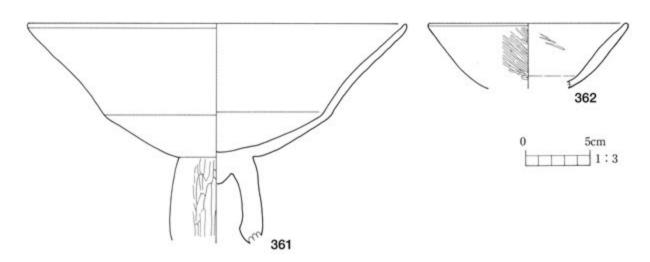


第102図 竪穴住居跡19号完掘状況

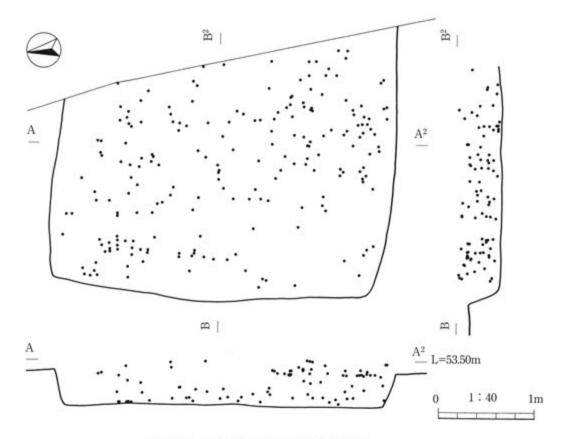
の施された突帯が1条めぐる。364~367も甕形土器の口縁部である。364は突帯上に棒状工具による斜位の刻み目が施される。365は突帯の上下に指頭圧痕が明瞭に残る。いずれも外面にススが付着している。374は甕形土器の底部である。外面にヘラおよび指頭痕、内面にヘラナデ痕が残る。368は壺形土器の頸部付近の破片である。刻み目のある断面三角形の突帯をもつ。369・372は壺形土器の口縁部として分類したものである。369・372は屈曲部にヘラ状工具による刻み面が施される。二重口縁を呈する可能性がある。370は甕形土器の脚部である。直線的な脚部で内面天井部はやや下方へふくらむ。371は壺形土器の口縁部である。内外面にヨコナデがみられる。373は直立する器形で鉢形土器と思われる。内外面ともナデがみられる。375は高坏形土器の脚部である。やや短く幅広のものである。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリがみられる。376は手つくね土器である。



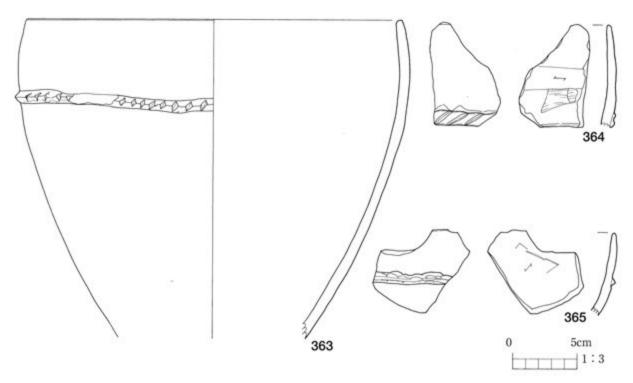
第103図 竪穴住居跡21号遺物分布図・完掘状況



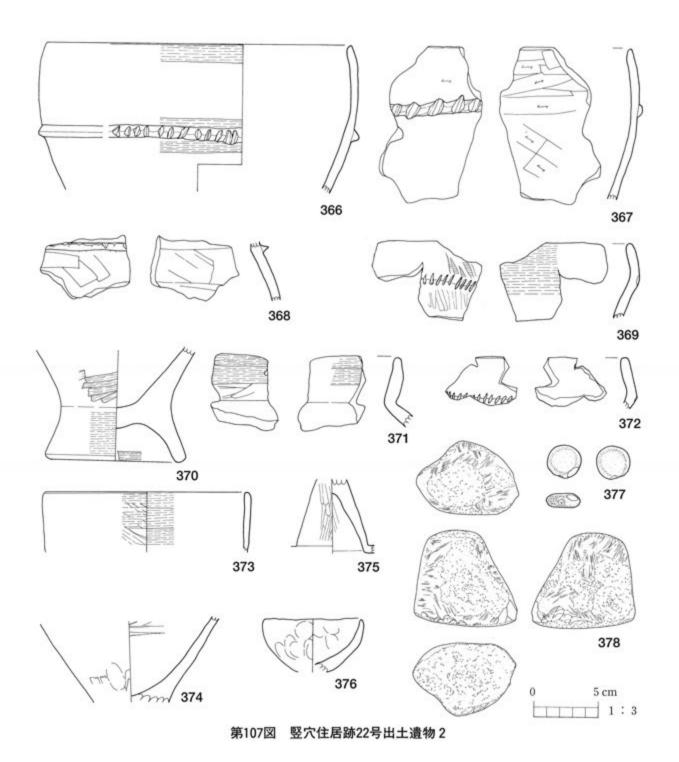
第104図 竪穴住居跡21号出土遺物



第105図 竪穴住居跡22号遺物分布図



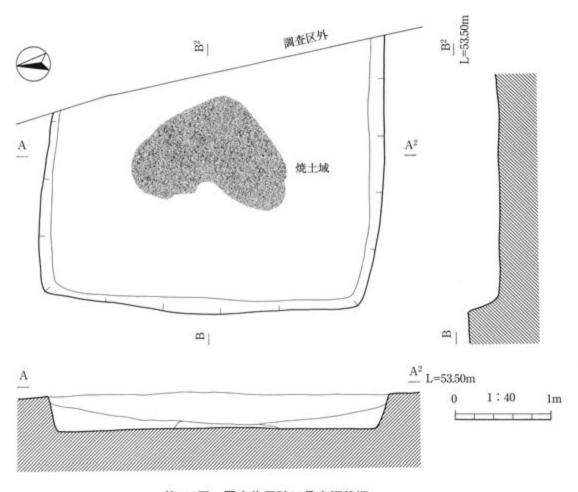
第106図 竪穴住居跡22号出土遺物1



内外とも指頭による整形痕が明瞭に残る。377・378は敲石とした。377は砂岩製で側面の一部に敲 打痕がみられる。378は磨敲石として分類したものでスタンプ状を呈する。器面全体に擦痕や敲打 痕が顕著である。

② 竪穴住居跡23号 (第109図·第110図)

23号はM-41区で確認したもので、検出規模が小さいが、平面形は方形で一辺が約4.8m前後になるものと思われる。竪穴部の検出面からの深さは54cmである。竪穴内から掘り込みや焼土域、



第108図 竪穴住居跡22号完掘状況

柱穴などは検出されていない。

遺物は13点を図化した。379~385・390は甕形土器である。379は口縁部が内湾し、胴部に布目のついた斜位の刻み目突帯が1条めぐる。胴部の形状は直線的である。口縁部内外面はヨコナデ、突帯より下位は丁寧なナデがみられる。380は突帯がやや下位に貼り付けられたものである。突帯の上下にススが付着する。382~384の脚部は内面天井部がやや丸みを帯び、390はやや下方へふくらむ形状である。382・384・385・390は器面の胴部と脚部境や底部立ち上がり付近に指頭痕が残る。全体として脚部高は低いものである。391は打製石斧である。幅広の素材を利用し側縁部方向から整形されている。刃部には使用痕がみられる。

調查区外 1:40 00 A^2 A Q $\frac{A^2}{L}$ = 51.80m Α 1

1 暗褐色土 2 1より明るい暗褐色土

4 1より暗い暗褐色土

第109図 竪穴住居跡23号遺物出土状況

3 2より明るい暗褐色土

(2) 溝状遺構

①溝状遺構 1 号 (第111図)

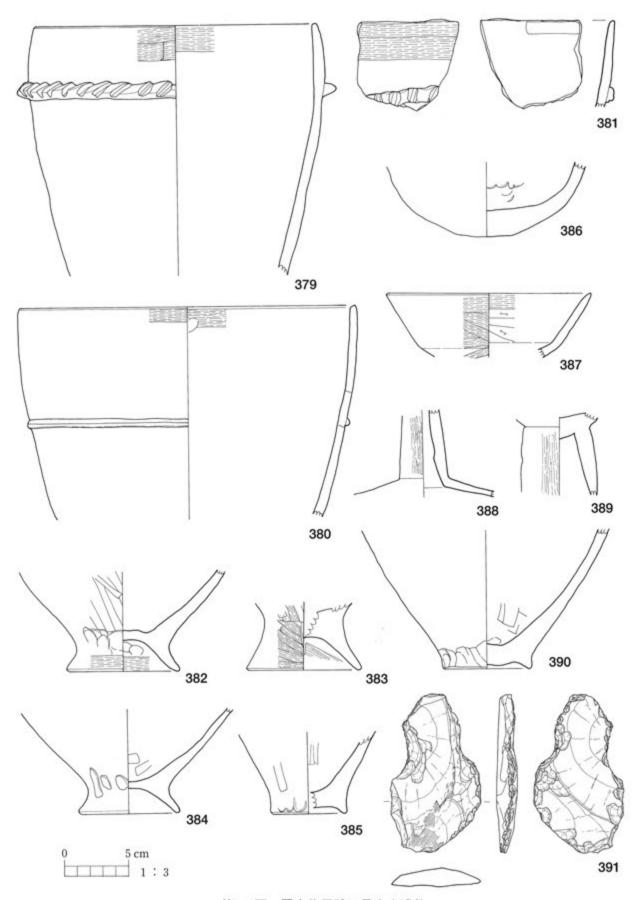
1号は、Q~R-10~11区のV層上面、住居跡7号、8号間で南北方向に検出されたもので、検出規模は長さ約15m、幅2.4~3.6m、深さは最深部で約2mを測る。断面形状はV字形を呈し、底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。溝に沿ってピット1基が検出されている。

出土遺物は5点を図化した。392は甕形土器である。口径16.9cm,器高20.5cmを測る。胴部に突帯がみられないものである。胴部中央にはヘラ痕,口縁部~胴部上半にナデ,脚部にナデがみられる。口縁部から胴部下半までと胴部内面にススが付着している。393は須恵器甕である。外面に平行のタタキ痕,内面に同心円状の当て具痕がある。394・395・397は鉄鏃である。394は圭頭鏃で先端と茎部を欠損している。395は矢柄部である。木質が残存している。397は茎部である。

②溝状遺構 2 号 (第112図)

2号は、T~U-5~6区のVI層上面、住居跡16・17・18号の南側で東西方向に検出したたもので、検出規模は長さ約16m、幅2.4~3.2m、深さは最深部で約80cmを測る。断面形状は浅いU字形を呈し、底面は北側に向かって傾斜している。溝に沿ってピットが4基確認されている。

遺物は3点を図化した。398は甕形土 器で胴部に断面三角形の突帯がめぐる。 399は椀型土器である。内外面とも入念 なヘラミガキがみられ、黒色を呈する。 396は鉄鏃の頸部~茎部である。



第110図 竪穴住居跡23号出土遺物

③溝状遺構 3 号 (第112図)

3号は、 $V-3\sim4$ 区のV層上面,調査区の北端において南北方向に検出したもので,検出規模は長さ約11.2m,幅約3.6m,深さは最深部で約2.9mを測る。茶褐色土を基調とする埋土がレンズ状に堆積し,上位には紫ゴラが認められた。断面形状はV字形を呈し,底面は東に向かって傾斜している。溝に沿ってピットが3基検出されている。

出土遺物は、6点を図化した。 401は甕形土器の内湾する口縁部、402も口縁部で突帯部は胴部方向へ垂れ下がっている。突帯下面に指頭痕、突帯の上位に爪痕がみられる。甑形土器の口縁部の可能性もある。403・404は椀形土器である。ヘラミガキが施され、黒色を呈する。405は坏形を呈し、外面には焼成後に橙(オレンジ)色の顔料が塗布されている。脚部がつく可能性もある。

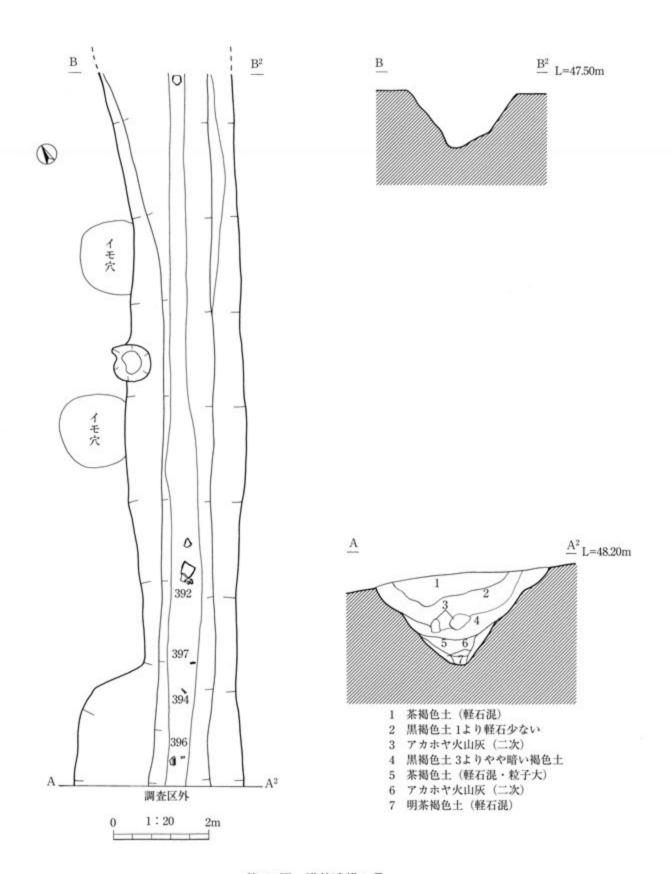
④溝状遺構 4 号 (第114図~第123図)

4号は、各年度の調査区において継続して調査したものが接続して1条となったため、溝状遺構4号としてまとめたものである。T-5区Q-12区にかけて南北方向に検出されている。検出規模は未検出部分($Q-11\sim12$ 区)を除き、長さ約75m、最大幅1.25m、深さは最深部で93cmを測る。断面形状は「V」字形を呈し、底面は平坦となる。埋土は黒褐色土や茶褐色土を基調とし池田火山灰のパミスを含む。

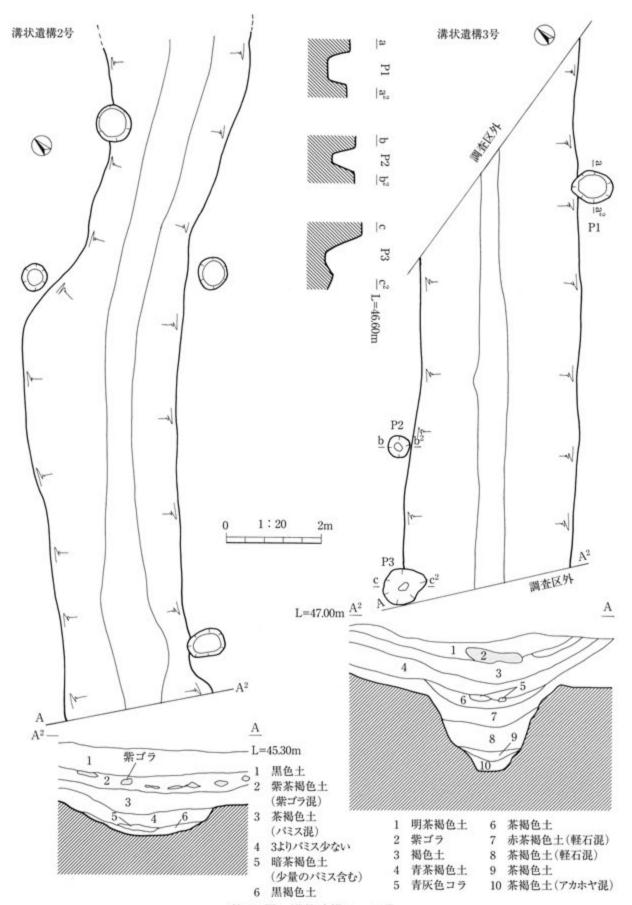
遺物は溝の全体から出土したが、なかでもQ-12区、Q-10区、S-6区、T-5区など数か所に遺物の集中が認められた。出土した遺物は甕形土器・甑形土器・壷形土器・高坏形土器・坏形土器・椀形土器・須恵器・鉄製品などで、うち58点を図化した。

406~427は甕形土器である。406~417は基本的に口縁部が内湾するタイプであるが、408は外反気味、406・409・410・417は口縁部端がやや直立する。いずれも胴部に断面三角形の突帯が1条めぐるものである。突帯上にみられる刻み目は、406~411が一定の間隔をおいて棒状工具で3か所ずつ連続して施すタイプである。411は刻み目が突帯から口縁部まで及んでいる。413は突帯上に連続した刻み目が施され、412は一定の間隔をおいて指頭状の刻み目がみられる。414・416・417は連続した刻み目はみられず、突帯の一部を指頭によって上方へとはね上げアクセントをつけている。406・407・414は完形品で、406は口径24・9cm、器高32・2cm、407は口径21・1cm、器高22・6cm、414は口径19・4cm、器高25・6cmを測る。406の胴部は直線的に長くのび、突帯下から胴部上半、底部内面にススが付着する。411・414・417は接合痕が明瞭に残る。414は口縁部の内湾がやや強く、直線的に立ち上がる脚部がつく。脚の端部は屈曲して外反する。器面調整は基本的にナデであるが口縁部内面に指頭痕がみられる。415は指頭状の刻み目のある突帯がめぐるもので胴部は長胴となる。418~427は甕形土器の脚部とした。418・423・424は外反しながらひらくタイプ、419~422は直線的に立ち上がるタイプである。脚部内面の天井部分は425が丸味、420・422が平坦、418・421・423・424が下方へふくらむタイプである。

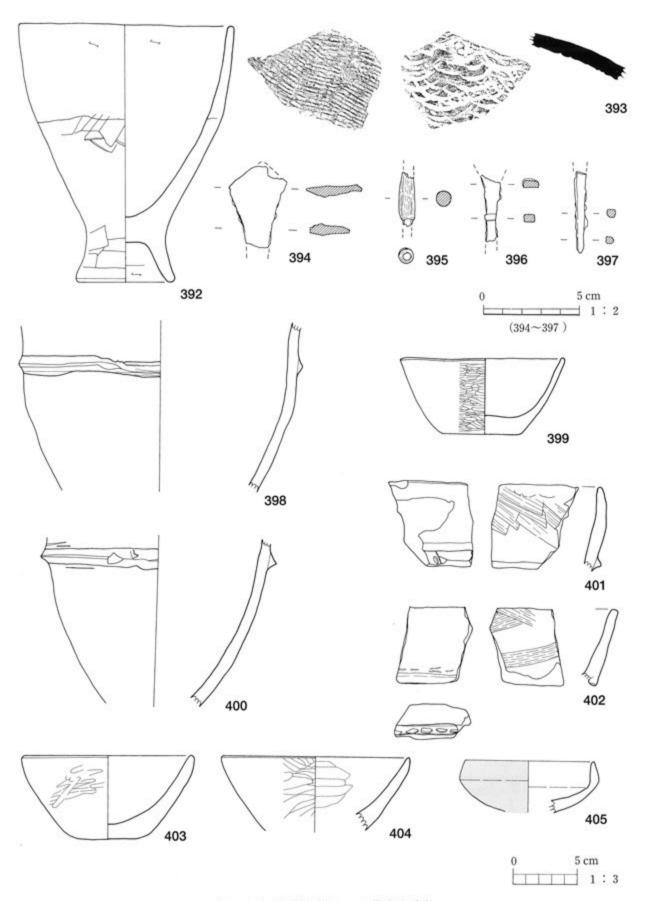
428~431は甑形土器である。428は完形品で、口径24.9cm、器高20.6cm、底径7.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、胴部には指頭による刻み目のついた突帯が1条めぐる。底部立ち上がり付近には棒状工具による刺突が少なくとも16か所あり、うち4つが貫通し小円孔となっている。焼成前に施されたものである。429は底部片である。多孔式で23か所の円孔を確認できる。器壁は



第111図 溝状遺構 1号



第112図 溝状遺構 2・3号



第113図 溝状遺構 1 ~ 3 号出土遺物

2.3cm程で厚手である。430は単孔式の底部片で復元径8.2cmを測る。立ち上がり付近の両面に指頭痕が観察できる。431は単孔式の胴部下半から底部にかけての破片で,復元径11.5cmである。431・432ともヘラ状のナデ痕とヨコナデがみられる。

432~437は壺形土器である。432は口縁端部を一部欠損するがほぼ完全品である。口径19.5cm,器高47.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり,頸部の屈曲も明瞭ではない。胴部は卵倒形を呈し底部は安定感があってやや丸みを帯びる。433は頸部付近の破片である。突帯上に竹管状の刺突文が施される。外面ヘラミガキ,内面ナデである。434は頸部から胴部片で接合痕が明瞭である。外面にはヘラミガキが施されるが剥落が激しい。内面はヘラ痕,ナデがみられる。435・436は底部片である。435は平丸底で内外面ともヘラナデである。436は丸底で外面はナデ,内面がヘラナデである。437は黒色を呈する壺形土器である。口径18.8cm,胴部径25.0cmを測る。口縁部は頸部から直線的に外へひらき,口唇端は丸くおさまる。頸部には一端面を形成し屈曲して胴部へ向かう。器面調整は外面全体にヘラミガキ,口縁部内面に入念なヘラミガキが施される。内面の頸部付近から胴部上半はヘラ痕が残る。接合痕が明瞭である。

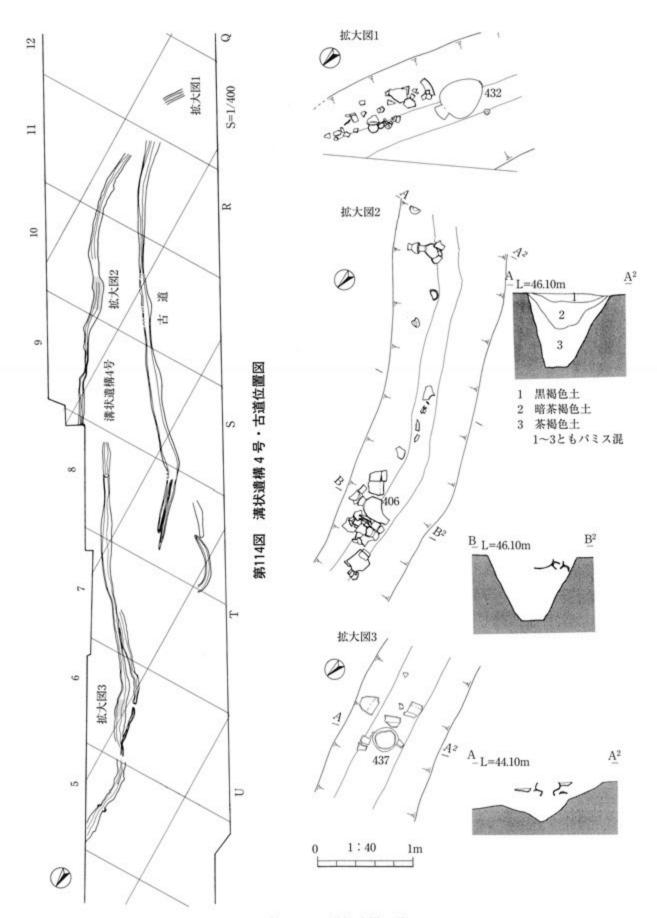
438は脚台が付く鉢形土器である。口径15.5cm,器高14.8cmである。直線的に立ち上がる脚部に 丸味のある胴部がつく。器面にヘラミガキが施されるが一部にヘラケズリ痕が残る。439は平底の 鉢形土器で、口径18.2cm,器高17cmを測る。底部立ち上がり付近でややくびれた後、緩やかに立ち 上がる器形で口縁端部はわずかに外傾する。口縁部内外面はヨコナデ、外面にはやや粗いヘラケズ リがみられる。

440~442は鉢形土器とした。440は頸部で屈曲する器形である。頸部から胴部の外面と口縁部内面にヘラミガキ,口縁部外面と頸部以下の内面にヨコナデがみられる。441は口径18.5cm,器高11.9cm,442は口径17.2,器高8.1cmを測る。調整は441が内外面ともヘラミガキ,442が外面ヘラケズリ後ナデ,内面ナデである。443~446は椀形土器とした。443は口径11.1cm,器高5.4cmでヘラケズリ後ミガキが施されていると思われるが不明瞭である。444は口径12.cm,器高6.4cmを測る。外面はヘラミガキが施されるが胴部下半は不明瞭である。内面はナデである。445は口縁部外面にナデ,胴部にヘラミガキ,内面はヨコナデがみられる。446は口径13.3cm,器高5.9cmを測る。外面にヘラミガキ,内面はナデである。448は須恵器で提瓶の可能性がある。

449は須恵器の坏蓋で、径11.6cm、器高3.6cmを測る。450は須恵器坏で立ち上がりは大きく内傾し端部は丸くおさまる。受け部も内傾する。径13.0cm、器高3.3cmを測る。451は須恵器坏で口縁部は途中で屈曲し内傾しながら立ち上がる。内面にヘラ状工具による「×」が刻まれている。口径14.6cm、器高5.9cmある。452は須恵器の平瓶で口径は11.8cmある。胴部には把手がつき、内外面ともロクロ痕が明瞭である。453~456は須恵器甕である。453は口縁部で、櫛描きの波状文がみられる。454・455は外面に平行のタタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が残る。456は外面にナデ調整が行われ、外面には同心円状の当て具痕がみられる。

457は敲石とした。長軸の一端と側縁部に剥離痕が認められる石器である。458は楔形石器とした もので両側縁部に剥離痕が残る。砂岩製である。

459~463は鉄製品である。459・460は鉄鏃である。459はいわゆる圭頭鏃である。460は頸部~茎 部である。461は刀子である。先端部と基部を欠損する。462は束である。463は鉄製鈴である。鈴



第115図 溝状遺構 4号

体は球形を呈し、腹部に鍔状の突帯がつく。頂部には方形の鈕がつき円形の鈕孔が穿たれている。 丸はチャート製の小礫が利用されているようである。正面幅4.3cm, 側面幅4.2cm, 高さ5.5cm, 鈴 体高4.0cmを測る。

2 出土遺物 (第124図~第130図)

464~484は甕形土器である。464は口縁部が外へひらき胴部から直線的に立ち上がる器形で、胴部には指頭痕が残る突帯がめぐる。突帯は収束せず段違いとなる。内面には接合痕が明瞭に残る。口縁部から胴部下半にかけてススが付着している。465は内湾する口縁部を有するもので胴部に連続した刻み目をもつ突帯がめぐる。脚台は小さめのものがつくものと思われる。466~467は外反する口縁部、468~469は直立する口縁部、470~472はやや内湾する口縁部片である。466・470・472は棒状工具による斜位の刻み目をもつ突帯がつき、467・469は菱形の刻み目、471には突帯の上下に指頭による整形痕がみられる。468も指頭痕がみられるが一部を口縁部方向にはね上げてアクセントをつけている。473~476は外反する口縁部である。473~475は口縁部と胴部の境に段を形成する。473は復元口径30.6mを測り、口縁部外面にナデ、内面にヘラ状のナデがみられる。器外面全体にススが付着している。474・475は口縁部外面にハケ状のかき上げがみられ、その後口縁部内外面にココナデが行われている。476は外面にヘラ状のナデ、内面にナデがみられる。477~483は甕形土器の脚部とした。484は胴部に突帯をもたない甕形土器で、内外面ともヘラ状のナデがみられる。

485は甑形土器の底部である。復元径7.4cmを測る。内外面とも指頭状のナデ痕がみられる。286は口縁部は内湾しながら立ち上がり端部がやや外反する。胴部外面はヘラナデ突帯の上下にヨコナデがみられ,甑形土器の可能性がある。487は内湾する口縁部で内外面ともヘラナデが施される。488・489は甑形土器ある。488は多孔式の底部片で少なくとも6か所の小円孔が確認できる。焼成前に棒状工具の刺突によって穿孔されている。489は単孔式のもので,接合痕やハケ状の調整痕が明瞭である。

490・491は蓋形土器である。490は径28.0cm,器高9.7cmを測る。胴部下端で屈曲し,外反して底面に至る。端部は平坦に仕上がる。外面はヘラナデとナデ,内面はハケとナデがみられる。491は小型の蓋形土器で,頂部に摘みがつくものと思われる。外面は指頭によるナデ,内面はナデである。492~517は壺形土器である。492~497は口縁部片である。492は外反しながら立ち上がるもので接合線が明瞭である。調整はヨコナデである。493はくの字状の口縁部で口唇端部は平坦となる。器面調整は外面がヘラナデ,内面がナデである。496・497は直線的に外反するもので,外面にハケ,内面にナデがみられる。495は小型丸底壺の口縁部,498は口縁部~胴部である。調整は内外面とも丁寧なナデが施されている。498は胴部下半にススが付着している。499・500は胴部の最大径付近に刻み目のある突帯がめぐるもので突帯の上下はナデがみられる。499は内外面にハケ,内面の一部に指頭痕がある。500は外面をナデ,内面にハケ痕が残る。501は頸部付近の破片で外面に波状の沈線が4条施されている。503~507は胴部に貼り付けられる突帯部分である。503は断面台形状の突帯に棒状工具による刻みが施される。器面調整は外面がハケ,内面がハケ後ナデである。504は断面三角形の突帯上に棒状の工具を縦位に押圧したもので,内外面ともナデ調整である。505~507はいわゆる幅広の突帯部分である。505・506はヘラ状工具によるハの字状の沈線文間に斜位の沈線

文と半裁竹管文が施されるものである。507は半裁竹管文のみである。508~517は壺形土器の底部 と思われる。形態は、508~513がほぼ平底、515~517が丸底、514は尖底である。509・511・512は 底部立ち上がり付近がわずかにくびれている。

518~524は鉢形土器として分類した。518~521は口縁部である。522~524は底部である。524は 平底となる。522・523は甕形土器の底部の可能性もある。

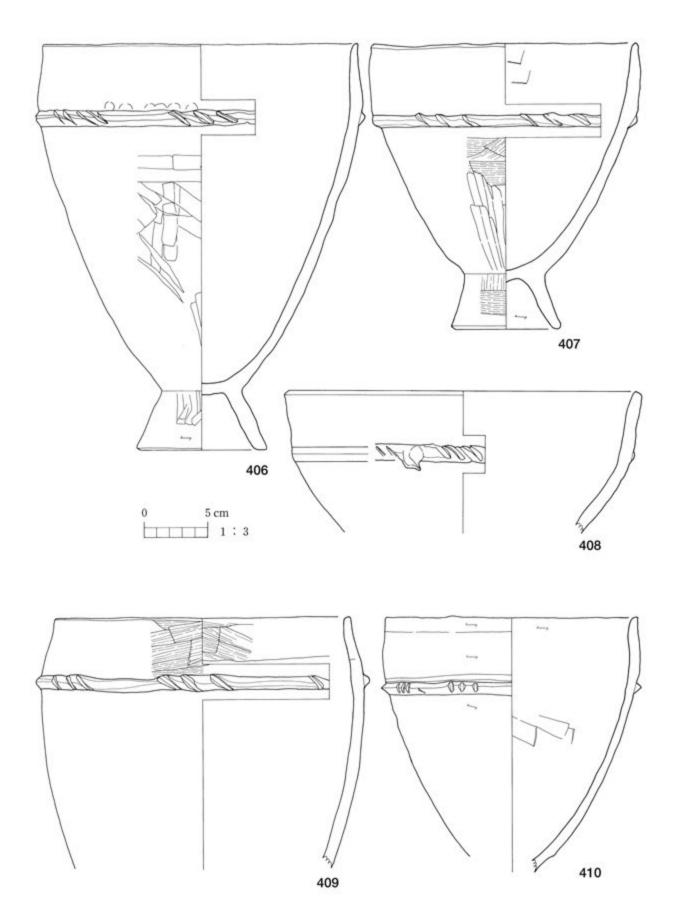
525~529は高坏形土器である。525は坏部を欠損する。にぶい黄褐色を呈し硬質である。本遺跡から出土した他の高坏形土器とは明らかに特徴が異なる。脚部は途中から緩やかに外反し端部は丸くおさまる。526は坏部で途中で屈折し外反するものである。527~529は脚部である。527は裾部が外へひろがるタイプで外面は丁寧なナデがみられる。528・529は円筒状の脚部で裾部が外へ折れ曲がるものと思われる。

530~535は坩形土器である。530・532・535が丸底,533は平底を呈する。530は胴部外面がヘラミガキ,口縁部と内面にナデがみられる。536は手つくね土器である。

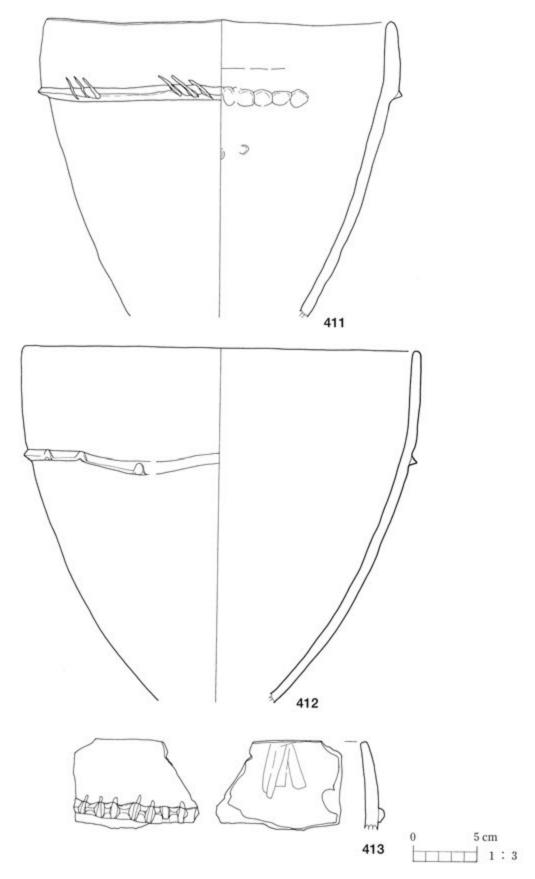
 $537 \sim 546$ は鉢形土器とした。 $537 \cdot 541 \cdot 542 \cdot 544 \sim 546$ の外面にはヘラミガキが施される。 $538 \cdot 539 \cdot 543$ の外面はヘラナデである。543の内面にはヘラ状工具によって「×」が刻まれる。

547は須恵器坏で内傾しながら立ち上がり端部も内傾する。受け部は平坦となる。548・549は提 瓶、550・551は須恵器甕の口縁部である。552は平瓶の口縁部である。

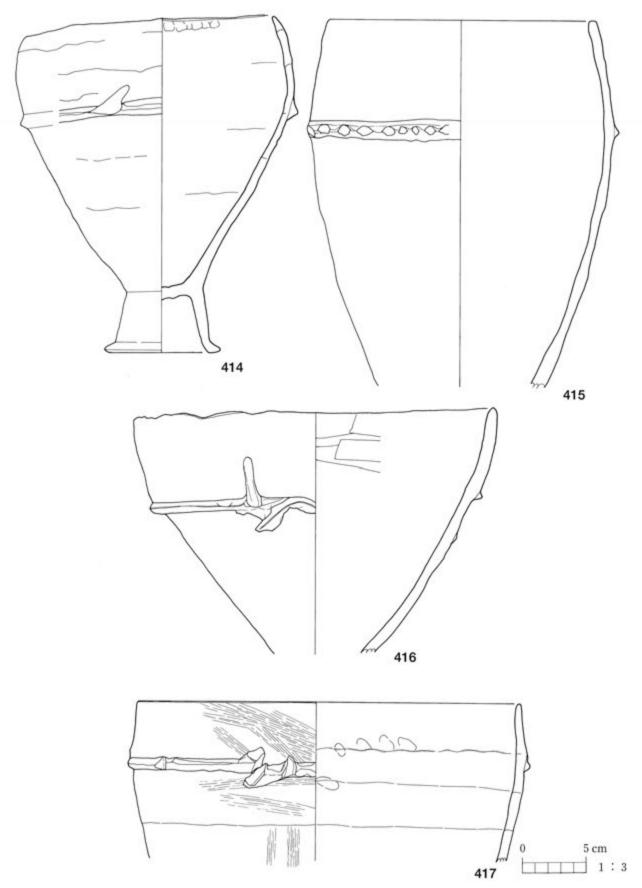
554~556は鉄鏃である。554は圭頭鏃である。555は刃部を,556は刃部と茎部を欠損している。 557は鉄製の束である,558は用途不明の土製品,559・560は弥生時代の土器である。断面三角形の 突帯が3条あり、突帯上にヘラ状工具による刻み目が施される。



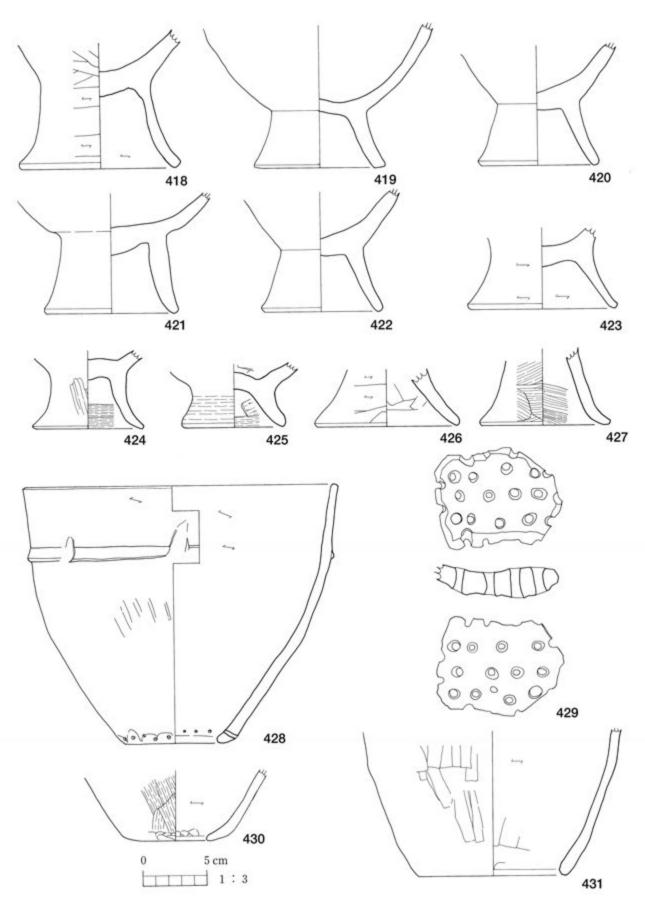
第116図 溝状遺構 4号出土遺物 1



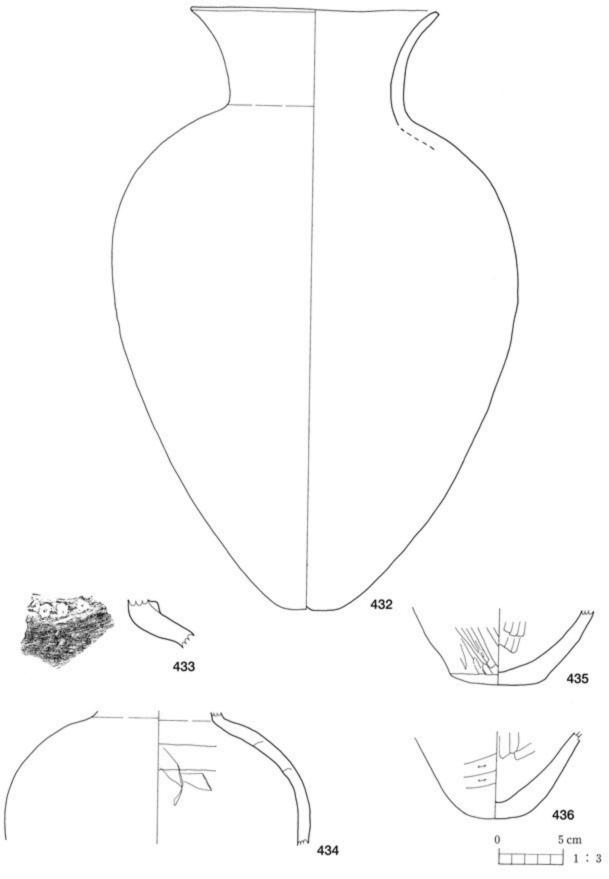
第117図 溝状遺構 4号出土遺物 2



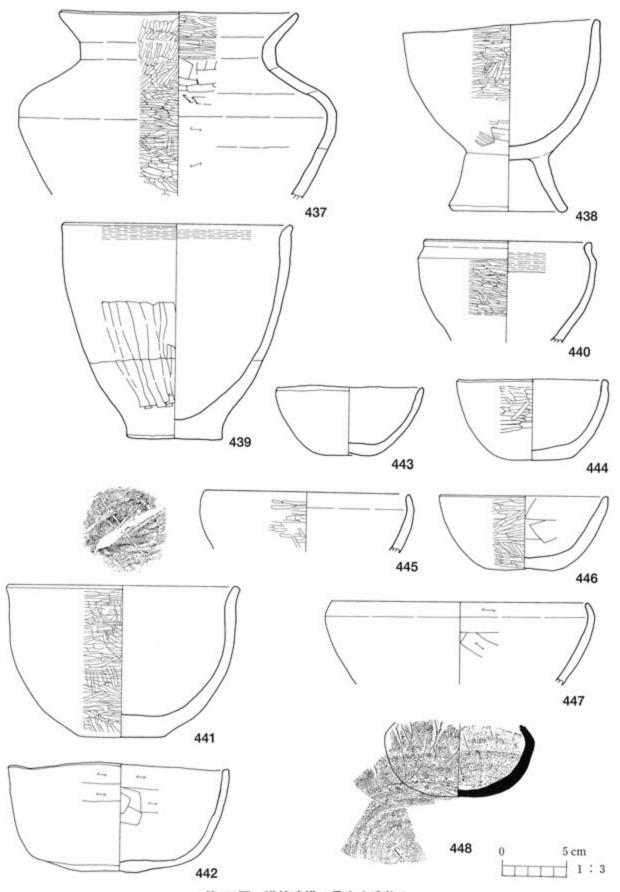
第118図 溝状遺構 4 号出土遺物 3



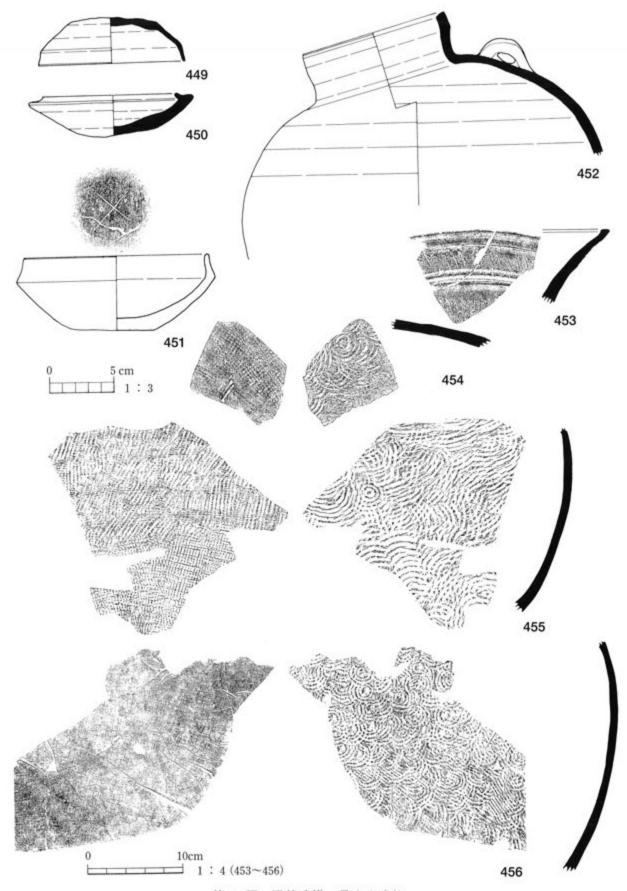
第119図 溝状遺構 4号出土遺物 4



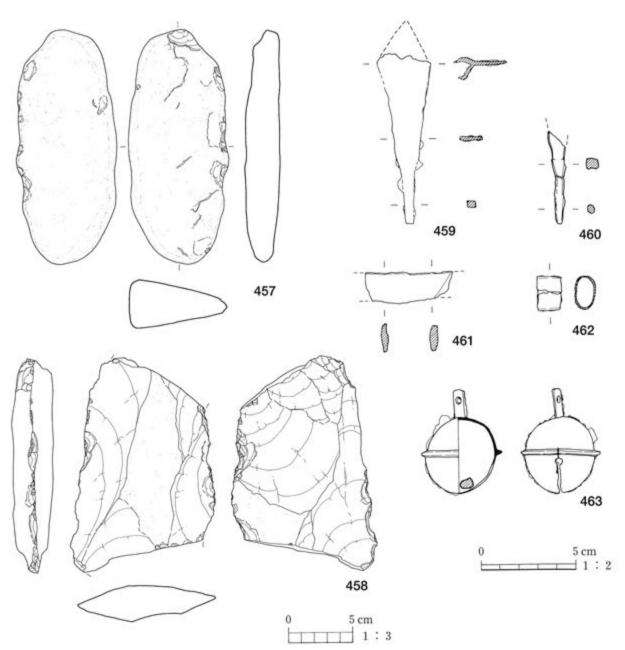
第120図 溝状遺構 4号出土遺物 5



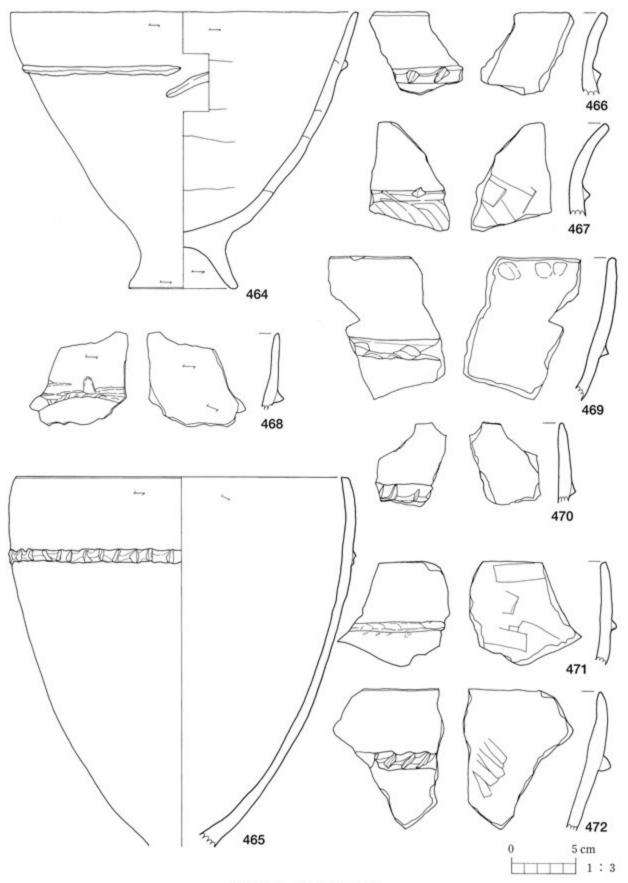
第121図 溝状遺構 4号出土遺物 6



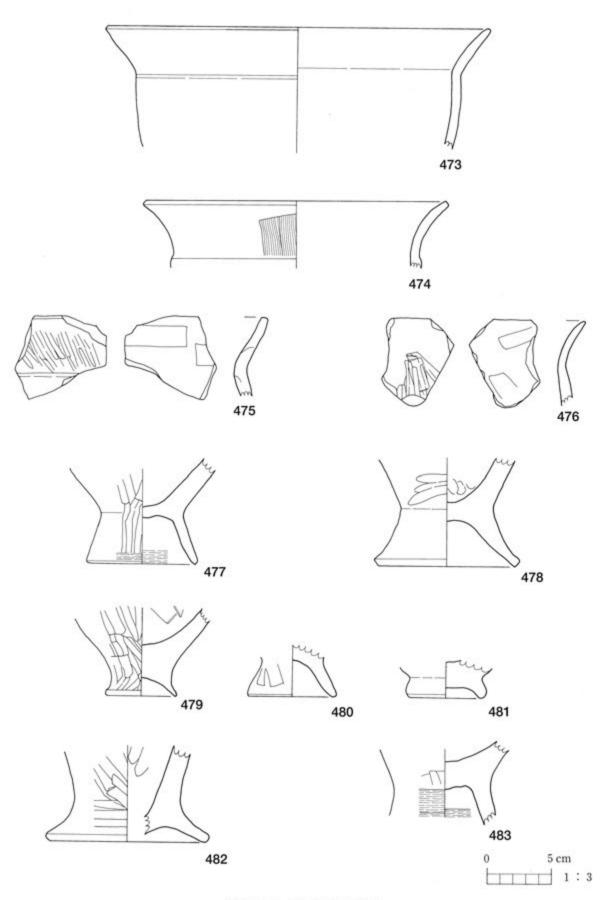
第122図 溝状遺構 4号出土遺物 7



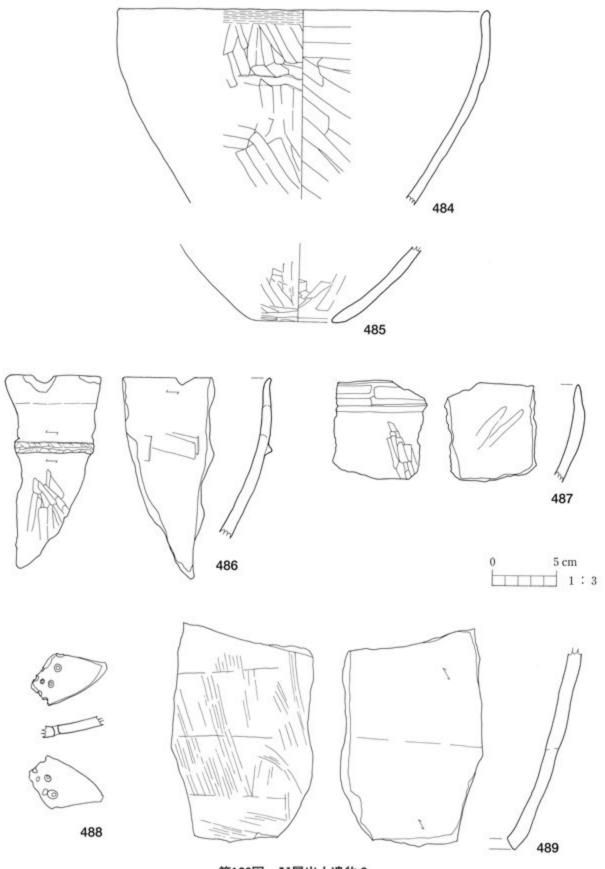
第123図 溝状遺構 4 号出土遺物 8



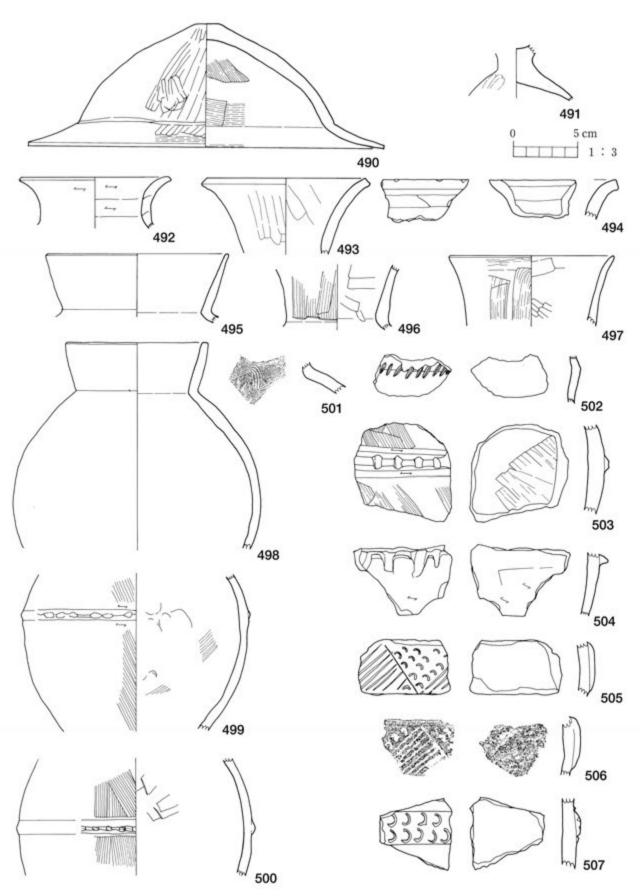
第124図 IV層出土遺物 1



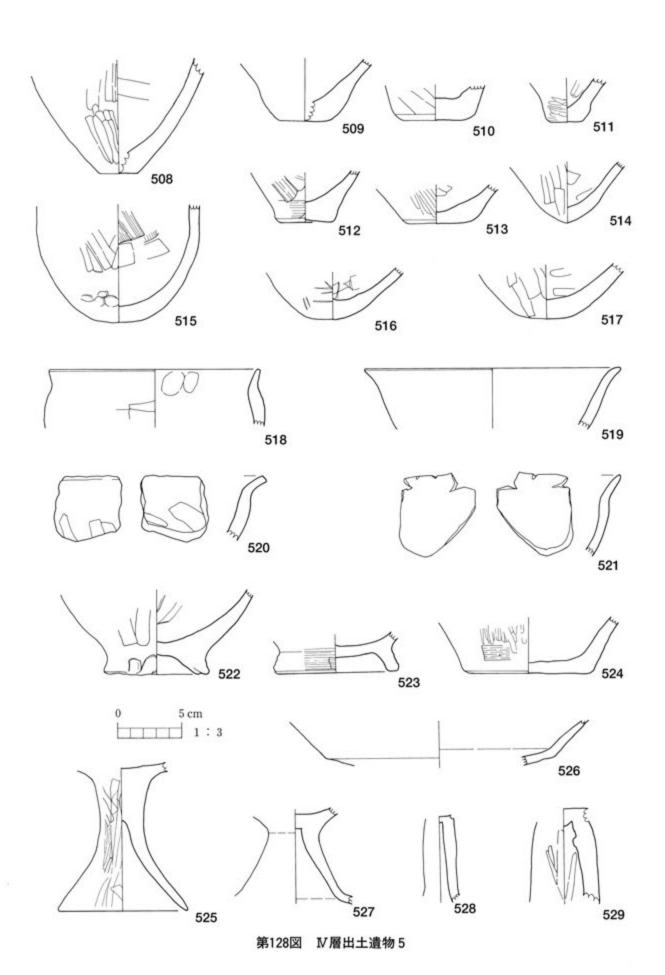
第125図 Ⅳ層出土遺物 2

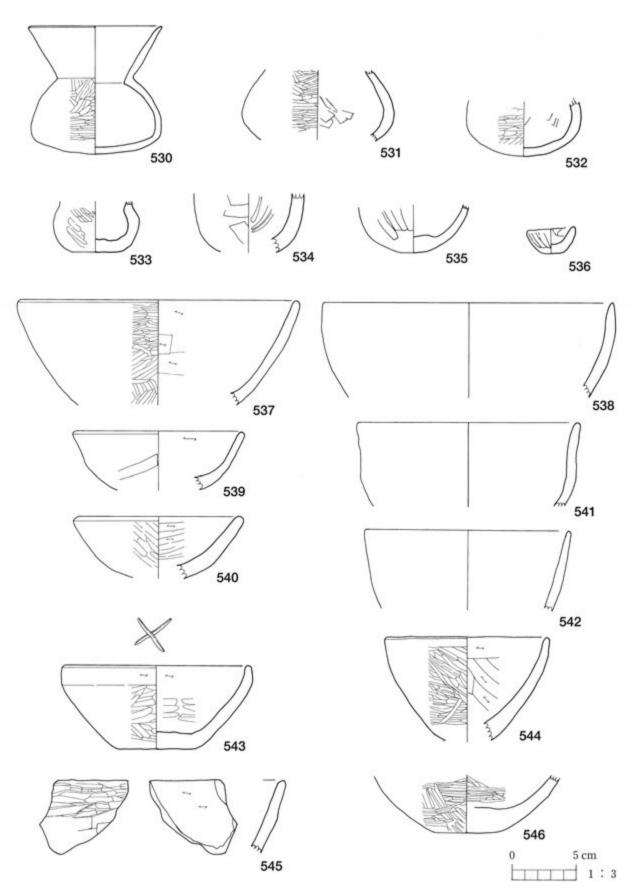


第126図 IV層出土遺物 3

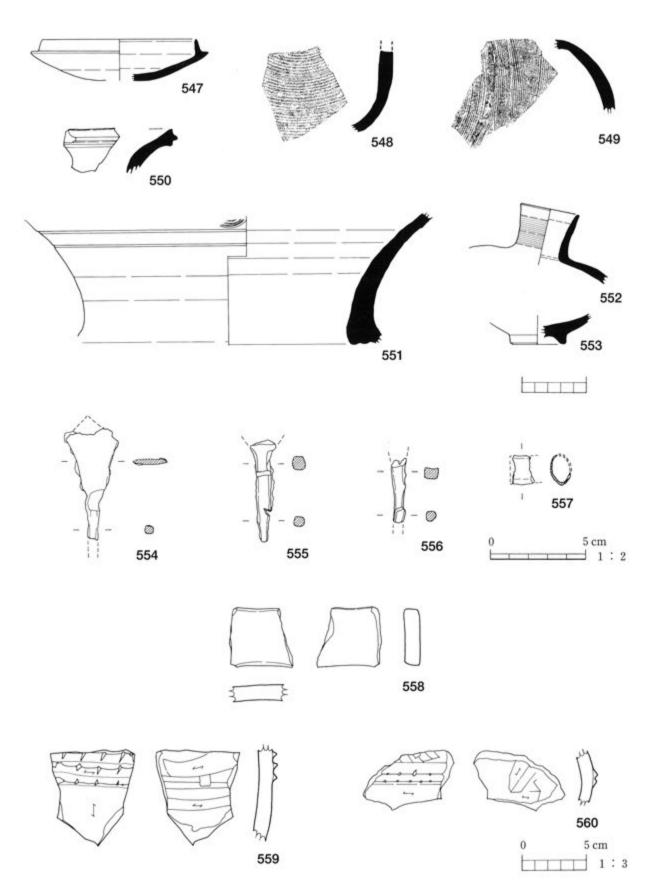


第127図 IV層出土遺物 4





第129図 Ⅳ層出土遺物 6



第130図 N層出土遺物 7 ほか

第16表 遺構内出土遺物観察表 1

図No.	図面	器種	部 位	遺構	色	調	胎土	焼朮	文様・器面調整等
-411C	番号		마	退 愽	外面	内面			
52	266	甕形土器	口縁~胴部	,	にぶい黄橙	明赤褐	長石・石英	良好	ヘラケズリ・ハケ・ナデ
	267	甕形土器	胴部		にぶい橙	にぶい褐	長石・金色雲母・砂粒	良好	突帯・ヘラケズリ・ナデ
	268	壺形土器	胴部~底部	1号住居	にぶい褐	にぶい橙	石英・黒粒多・白色粒	良好	ヘラナデ・ナデ
53	269	高坏形土器	脚部	1 7 11./1	にぶい黄橙	にぶい赤褐	長石・石英・黒粒	良好	ヘラミガキ
00	270	壺形土器?	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・茶粒	良好	ナデ
	271	手づくね土器	胴部~底部		灰黄褐	灰褐	石英・黄白砂・茶粒	普通	指頭痕
56	272	甕形土器	口縁~胴部		橙	にぶい黄橙	雲母・石英・黄白砂	普通	ナデ
<i>5</i> 0	273	甕形土器	胴部~脚部		橙	橙	長石・石英	良好	ハケ・ナデ
	274	壺形土器	完形		にぶい褐	明黄褐	長石・石英	良好	ナデ
	275	甕形土器	完形	2 号住居	にぶい赤褐	にぶい橙	長石・石英	良好	ヘラナデ・ナデ
57	276	高坏形土器	坏部~脚部		にぶい褐	にぶい橙	長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
	277	高坏形土器	脚部		にぶい橙	にぶい橙	長石・石英・茶粒	良良良良普普良良良良良良良良普良良普普良良良普良普普克良普普不良良普良良良良良良良良	ナデ・ヘラケズリ
	278	高坏形土器	坏部		明赤褐	橙	長石	良好	ヘラケズリ・ナデ
60	280	甕形土器	口縁~胴部	3 号住居	にぶい橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ヘラケズリ・ナデ
	283	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	普通	ナデ
64	284	甕形土器	胴部~脚部	4 号住居	にぶい黄橙	にぶい橙	長石・石英・茶粒	良好	ナデ
65	286	高坏形土器	脚部		浅黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂・黄橙砂	_	ヘラミガキ・ナデ
	288	壺形土器	口縁部~頸部		橙	にぶい黄橙		-	ナデ・ヘラミガキ
	289	坩形土器	完形	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙			ヘラミガキ・ナデ
69	290	蓋形土器	完形	5 号住居	にぶい橙	明赤褐	石英・白砂		
	291	高坏形土器	坏部		橙	にぶい橙	雲母・長石・石英・茶粒		
	292	高坏形土器	脚部			にぶい赤褐			ヘラミガキ
	293	壺形土器	底部		にぶい褐	暗灰	石英・白砂		ヘラケズリ・ナデ
71	294	高坏形土器	脚部	6 号住居			石英・白砂・黄橙砂		ヘラミガキ・ハケ
	295	壺形土器	口縁部~頸部		にぶい橙	にぶい橙	長石・石英		
75		<u> いいまた。</u>							
	296		口縁~胴部		にぶい黄橙		長石・石英・茶粒		ハケ・ヘラケズリ
	297	坏形土器	口縁~胴部	8 号住居		オリーブ黄	***************************************		ヘラミガキ・ナデ
76	298	甕形土器	脚部		にぶい黄橙		長石・石英・茶粒		ハケ・ナデ・指頭痕
	299	甕形土器	脚部		にぶい黄橙		雲母・長石		
	300	甕形土器	脚部			にぶい黄橙			
	305	壺形土器	口縁~胴部		黒褐	黒	白砂・黒粒		ヘラミガキ・ナデ
80	306	甑形土器	底部			にぶい黄橙			
	307	手づくね土器	完形	9 号住居	浅黄	浅黄	雲母・白砂	良好	指頭痕
	308	鉢形土器	完形		黒褐	オリーブ黒	白砂・黒粒	普通	ヘラミガキ・ナデ
81	309	須恵器甕	胴部		灰	灰	長石	良好	平行タタキ・同心円状当て具
	310	須恵器甕	胴部		灰	灰	長石	良好	平行タタキ・同心円状当て具
	316	甑形土器	完形		にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ
84	317	壺形土器	胴部~底部	10号住居	にぶい黄橙	にぶい黄	石英	普通	ヘラケズリ・ハケ
04	318	鉢形土器	脚部	10万压冶	にぶい赤褐	にぶい黄褐	雲母・長石	良好	ヘラミガキ・ナデ
	319	甕形土器	胴部		にぶい黄褐	にぶい橙	雲母・白砂・橙砂	良好	ハケ・ナデ
0.0	324	甕形土器	口縁部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・白砂	良好	ナデ
86	325	甕形土器	胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	326	須恵器平瓶	完形	11号住居	灰	灰	石英・長石・白砂	良好	ナデ
87	327	坩形土器	底部		暗灰	にぶい黄	石英・白砂	良好	ヘラミガキ
	328	坩形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙	にぶい橙	石英・白砂・黒粒		ヘラミガキ・ナデ
	331	甕形土器	口縁~胴部			にぶい黄橙	石英・長石		
	332	甑形土器?	口縁~胴部		にぶい褐	にぶい褐	長石・石英・黒粒		
39	333	甑形土器	胴部~底部	13号住居	にぶい褐	にぶい褐	石英・白砂		
	334	手づくね土器	完形		にぶい橙	にぶい褐	白砂		指頭痕
	336	蹇形土器	口縁~胴部		にぶい黄褐		雲母・白砂		
	337	甕形土器	口縁~胴部		黄褐	暗灰黄	雲母・長石		
0.1	338	壺形土器 	頸部	14年47日		にぶい黄橙	石英・白砂		
91	339	壺形土器	頸部	14号住居	黒	灰オリーブ	雲母・長石		ヘラミガキ・ハケ
	340	甕形土器	脚部		にぶい赤褐		石英・白砂		
	341	鉢形土器	口縁部				石英・長石・白砂		ハケ・ナデ・スス付着
	342	鉢形土器	胴部~脚部	1	暗赤褐	褐色	石英・カクセン石・白砂	良好	ヘラミガキ

第17表 遺構內出土遺物観察表 2

2017	_	ALL 1131 31-1-1	工 (25 17) E(17)						
図No.	図面 番号	器種	部 位	遺構	色 外面	調 内面	胎 土	焼成	文様・器面調整等
	344	甕形土器	口縁~胴部	10848	にぶい橙	橙	長石・石英・黄白砂	良好	ナデ
93	345	須恵器提瓶	口縁部	16号住居	灰黄	灰白	長石・石英	良好	ナデ
98	348	甕形土器	完形	18号住居	黄橙	にぶい黄褐	石英・白砂	普通	ハケ・ナデ・スス付着
	353	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・白砂		ナデ
	354	甕形土器	脚部		にぶい黄橙		長石・石英・白砂		ヘラケズリ・ナデ
	355	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐	浅黄	雲母・長石		ヘラナデ・ナデ
	356	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐		石英・黄白砂		ヘラミガキ・ヘラナデ
101	357	高坏形土器	脚部	19号住居	明赤褐	にぶい橙	石英・白砂		ヘラナデ・ナデ
	358	高坏形土器	脚部		明赤褐	にぶい橙	金色雲母・白砂		
		手づくね土器	口縁~胴部		灰白	灰白	白砂・石英		
	359	手づくね土器	完形		浅黄	浅黄	白砂		指頭痕
					にぶい赤褐				ヘラミガキ・ナデ
104	361	高坏形土器	坏部~脚部	21号住居			石英・白砂・黄橙砂		
	362	高坏形土器	坏部 四部			にぶい赤褐	長石	良良普良良良良良良良良良良良良良良良良良善良良普良良,普良良良,普良良良,普良	ヘラミガキ
	363	甕形土器	口縁~胴部		にぶい赤褐		長石・石英・白砂		
106	364	甕形土器	口縁部		にぶい赤褐				
	365	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙		雲母・長石・石英・白砂		
	366	甕形土器	口縁~胴部			にぶい黄橙	石英・白砂・橙砂		
	367	甕形土器	口縁~胴部		にぶい橙	にぶい褐	雲母・長石・茶粒		ナデ
	368	甕形土器	頸部		にぶい黄橙	にぶい橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	369	壺形土器	口縁部	22号住居	にぶい赤褐	にぶい橙	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ
	370	甕形土器	脚部	22.7 [17.1]	橙	橙	長石・石英・茶粒	良好	ハケ・ナデ
107	371	壺形土器	口縁~頸部		黒	にぶい黄橙	長石・白砂・橙砂	普通	ヘラナデ・ナデ
	372	壺形土器	口縁部		にぶい褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ナデ
	373	鉢形土器	口縁部		にぶい橙	黒褐	雲母・石英	良好	ナデ
	374	鉢形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ・指頭痕
	375	高坏形土器	脚部		明赤褐	にぶい赤褐	石英・白砂	普通	ヘラミガキ
	376	手づくね土器	口縁~底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	良好	指頭痕
	379	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	普通	ナデ
	380	甕形土器	口縁~胴部		灰黄褐	にぶい黄橙	長石・石英・黄橙砂	普通	ナデ
	381	甕形土器	口縁部		にぶい橙	にぶい橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	382	甕形土器	脚部	-	にぶい褐	にぶい赤褐	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラナデ・ナデ・指頭痕
	383	甕形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラナデ
	384	甕形土器	脚部		にぶい褐	にぶい黄橙		良好	ナデ・ヘラナデ・指頭痕
110	385	甕形土器	底部	23号住居	にぶい赤褐		石英・茶粒		ヘラナデ・指頭痕
	386	壺形土器	底部				長石·金雲·黄白砂·黒粒		ナデ・指頭痕
	387	高坏形土器	坏部	1	にぶい赤褐		長石・石英・白砂		
	388	高坏形土器	脚部		にぶい褐		長石・石英・白砂		ヘラミガキ・ナデ
		高坏形土器	脚部	_	にぶい赤褐		金色雲母・長石・黒粒		ヘラミガキ・ヘラケズリ
	389		胴部~底部				雲母・長石・石英		ナデ・指頭痕
	390	甕形土器甕形土器	完形	-	明黄褐		雲母・長石・石英		ナデ・スス付着
	392			1号溝	灰	灰	長石		平行タタキ・同心円状当て具痕
	393	須恵器甕	胴部						
	398	甕形土器	胴部	2 号溝	にぶい橙	にぶい赤褐 にぶい褐			
	399	椀形土器	完形		にぶい赤褐	-	雲母・長石・石英	-	ヘラミガキ
113	400	甕形土器	口縁部	-	褐	にぶい赤褐			ヘラミガキ・ナデ
	401	甕形土器	口縁部	-	橙 200 #1249	黄灰	長石		ナデ・ハケ
	402	甕形土器	口縁部	3 号溝	にぶい黄橙				ナデ・爪痕・突帯状指頭痕
	403	椀形土器	完形				長石・石英・白砂	普通	
	404	椀形土器	口縁~胴部	4	灰褐		長石・カクセン石・白砂		ヘラケズリ
	405	坏形土器	口縁~胴部		橙		長石・石英・黄白砂		外面橙色顏料塗布
	406	甕形土器	完形	1	にぶい橙	橙	金色雲母・長石・石英	良好	ヘラナデ・指頭痕・ナデ
	407	甕形土器	完形]	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ハケ・ナデ
116	408	甕形土器	口縁~胴部	4号溝	灰白	灰白	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	409	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ハケ・ナデ
	$\overline{}$	甕形土器	口縁~胴部	1	灰黄褐	にぶい黄褐	長石・石英・白砂	普诵	ナデ

第18表 遺構内出土遺物観察表 3

M 10		AZ 1171 JF4-	工员彻氏示	300					
図No.	図面 番号	器 種	部 位	遺構	色 外面	調 内面	胎土	焼成	文様・器面調整等
	411	甕形土器	口縁~胴部	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ・指頭痕
117	412	甕形土器	口縁~胴部		にぶい黄橙		金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	413	甕形土器	口縁部		にぶい橙	にぶい橙	石英・黄橙砂・茶粒		ナデ・ヘラナデ
	414	甕形土器	完形		にぶい橙	にぶい黄褐		良好	ナデ・指頭痕
	415	蹇形土器	口縁~胴部		にぶい赤褐				ナデ
118	416	甕形土器	口縁~胴部		にぶい橙	にぶい褐	金色雲母・長石・石英		ナデ・スス付着
	417	蹇形土器	口縁~胴部		浅黄橙	にぶい黄橙			ナデ
	418	甕形土器	脚部		にぶい橙	にぶい黄橙			ナデ
	419	蹇形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英		ナデ
	420	甕形土器	脚部		にぶい黄橙		金色雲母・長石・石英		ナデ
	421	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	422	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	423	甕形土器	脚部		にぶい黄褐	にぶい褐	金色雲母・長石・石英		ナデ
	424	甕形土器	脚部		浅黄	黒	長石・石英・雲母		ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ
119	425	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・石英・茶粒	普通	ナデ・ヘラケズリ
	426	甕形土器	脚部		にぶい黄	にぶい黄橙	長石・石英	普通	ナデ
	427	甕形土器	脚部		にぶい黄	にぶい黄橙	金色雲母・白砂・茶粒	良好	ナデ
	428	甑形土器	完形	- 4 号溝	橙	明赤褐	長石・石英・カクセン石・黒砂		ナデ
	429	甑形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・白砂		ナデ
	430	甑形土器	底部		にぶい黄橙	浅黄	雲母・白砂・黒砂	良好	ナデ・指頭痕
	431	甑形土器	胴部~底部		橙	橙	雲母・黄白砂・黒砂	普通	ヘラナデ・指頭痕・ナデ
	432	壺形土器	完形		橙	にぶい橙	石英・白砂	良好	ナデ
	433	壺形土器	頸部		にぶい黄褐	にぶい黄橙	石英・白砂・黒曜石?	良好	ヘラミガキ・ナデ
120	434	壺形土器	頸部~胴部		黄褐	にぶい黄	石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ヘラナデ
	435	壺形土器	底部		橙	にぶい橙	長石・石英・黄橙砂	良好	ヘラケズリ・ナデ
	436	壺形土器	底部		にぶい黄	橙	雲母・長石・茶粒	良好	ナデ・ヘラケズリ
	437	壺形土器	口縁~胴部		黒褐	灰オリーブ	雲母・白砂・黒粒	良好	ハケ・ヘラミガキ
	438	鉢形土器	完形		橙	明褐	長石・石英・茶粒	普通	ヘラミガキ・ナデ
	439	鉢形土器	完形		浅黄橙	浅黄橙	長石・石英・白砂	普通	ヘラケズリ・ナデ
	440	鉢形土器	口縁~胴部		明赤褐	にぶい赤褐	長石・石英・黒粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	441	鉢形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ
191	442	鉢形土器	完形		にぶい褐	黒	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラケズリ・ナデ
121	443	椀形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・黄白砂	良好	ヘラケズリ・ヘラミガキ
	444	椀形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	445	椀形土器	口縁~胴部		にぶい橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ・ヘラミガキ
	446	椀形土器	完形		黒褐	灰オリーブ	雲母・長石・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	447	椀形土器	口縁~胴部		暗灰黄	黄灰	長石・石英・白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	448	須恵器提瓶?	胴部~底部		灰褐	褐灰	白砂	普通	
	449	須恵器坏蓋	完形		灰	灰	白砂	良好	
	450	須恵器坏	完形		灰	灰	白砂	良好	
	451	須恵器坏	完形		暗灰	暗灰黄	白砂	良好	ヘラミガキ
122	452	須恵器平瓶	口縁~胴部		灰	灰	白砂	良好	
100	453	須恵器甕	口縁部		オリーブ灰	オリーブ灰	長石・白砂・茶粒	良好	
	454	須恵器甕	胴部]	灰	灰	白砂	良好	平行タタキ痕・同心円状当て具痕
	455	須恵器甕	胴部		オリーブ灰	オリーブ灰	白砂		平行タタキ痕・同心円状当て具痕
	456	須恵器甕	胴部		灰黄	灰オリーブ	白砂	普通	ナデ・同心円状当て具痕

第19表 Ⅳ層出土遺物観察表 1

					-	abor .			
図No.	図面	器種	部 位	出土区	り り り り り り り り り り り り り り り り り り り	調 内面	胎 土	焼成	文様・器面調整等
	464	甕形土器	完形		にぶい橙	にぶい橙	金色雲母・長石・石英	華通	ナデ・スス付着
	465	変形土器	口縁~胴部	1 T			金色雲母・長石・石英		ナデ・ヘラナデ
	466	変形土器	口縁部	N - 39	にぶい黄褐		金色雲母・長石・茶粒		ハケ・ナデ
	467	変形土器	口縁部	M - 30	福黄灰	灰黄褐	石英・黄橙砂・茶粒		
124	468	変形土器	口縁部	- WI 30	にぶい黄橙		長石・石英		
124		売ル上品 甕形土器	口縁部	Q - 8	灰褐	にぶい褐	長石・石英		ナデ・指頭痕
	469				にぶい黄褐		長石・石英		
	470	甕形土器	口縁部	6 T			雲母・長石・石英		
	471	甕形土器	口縁部	M - 41	にぶい褐	褐			ハケ・ナデ
	472	甕形土器	口縁部	N - 23	にぶい黄橙		長石・石英		ナデ・ヘラナデ
	473	甕形土器	口縁~胴部	M - 41	暗灰黄		金色雲母・長石		ナデ・ヘラナデ
	474	甕形土器	口縁部	M – 28	灰黄褐		金色雲母・長石		ハケ・ナデ
	475	甕形土器	口縁部	6 T		にぶい赤褐		普良良良普良普良普普的良产普普良产良普良良良良良良良良良良良良良良的食品的。	ハケ・ナデ
	476	甕形土器	口縁部	M - 40	にぶい褐	にぶい赤褐	雲母・茶粒		ヘラナデ・ナデ
	477	甕形土器	脚部	M – 31	にぶい褐	黄灰	金色雲母・長石		ハケ・ナデ
125	478	甕形土器	脚部		にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・白砂	普通	ヘラナデ・ナデ
	479	甕形土器	脚部	6 T	にぶい黄橙	にぶい褐	金色雲母・長石・茶粒	普通	ヘラケズリ・ナデ
	480	甕形土器	脚部	M - 39	橙	橙	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	481	甕形土器	脚部	M - 39	にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石・石英	普通	ナデ
	482	甕形土器	脚部	N - 35	にぶい橙	にぶい赤褐	長石・石英・茶粒・黄橙砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	483	甕形土器	脚部	_	にぶい赤褐	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	普通	ナデ
	484	甕形土器	口縁~胴部	_	暗褐	にぶい褐	雲母・長石・石英・黄橙砂	普通	ヘラナデ
	485	甑形土器	底部	_	黒褐	にぶい褐	雲母・黄白砂・黒砂	良好	ナデ
100	486	甑形土器	口縁~胴部	_	黒褐	にぶい褐	金色雲母・長石・黄橙砂	良好	ナデ・ヘラナデ
126	487	甑形土器	口縁部	N - 39	にぶい褐	にぶい赤褐	長石・石英・白砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	488	甑形土器	底部	=	にぶい黄橙		長石・石英・黒砂		
	489	甑形土器	胴部~底部		にぶい黄橙		長石・石英・白砂		
	490	蓋形土器	完形	M - 39	にぶい褐		長石・石英・黄橙砂		ハケ・ヘラナデ・ナデ
	491	蓋形土器	摘み部~胴部	-		にぶい黄橙			指ナデ・ナデ
	492	壺形土器	口縁部	M - 27	明黄褐		雲母・長石・石英		
	493	壺形土器	口縁部	N - 38		-	雲母・長石・茶粒		ヘラナデ・ナデ
	494	壺形土器	口縁部	M - 39	灰褐	にぶい橙	金色雲母・長石・黄橙砂		
	495	壺形土器	口縁部	G - 9	黒褐	にぶい褐	金色雲母・長石		
	496	壺形土器	口縁部	M - 39			金色雲母・長石・茶粒		ハケ・ナデ
	497	壺形土器	口縁部	M - 39	にぶい褐	褐	金色雲母多・長石		ハケ・ナデ
	498	壺形土器	口縁~胴部	1 T	にぶい褐		石英・白砂		
127	499	壺形土器	胴部	M - 39	灰褐	にぶい赤褐	長石・石英・白砂		
	500	壺形土器	胴部	1 T	にぶい褐		金色雲母・長石・黄白砂	**************	
	501	壺形土器	頸部	0 - 14 · 15	黄灰	にぶい褐	雲母・長石・石英・黄橙砂		横描き波状文・ナデ
	502	壺形土器	頸部	M - 31	にぶい橙		雲母・長石・石英		ヘラミガキ・ナデ
		壺形土器	胴部		にぶい黄橙		雲母・長石・石英・黄白砂		
	504		胴部	T - 7 0 - 14 · 15	にぶい黄褐 にぶい黄橙		長石・石英 雲母・石英		
	505		胴部	V - 3	にぶい黄	にあい. 灰黄			
	506		胴部 胴部			灰貝 にぶい橙	長石・石英・茶粒	_	
	507	壺形土器		T - 7	褐灰		金色雲母・長石・石英		
	508	壺形土器 	底部	M - 39	にぶい黄褐		金色雲母・長石・石英		ヘラナデ・ナデ
	509	壺形土器	底部		にぶい赤褐		金色雲母・長石・石英		
	510	壺形土器	底部		にぶい赤褐		雲母・長石・茶粒		ヘラナデ
	511	壺形上器	底部	- M or or	にぶい褐	にぶい黄橙	金色雲母・長石		ヘラ状押圧?・ヘラナデ
	512	壺形土器	底部	M-25~26	にぶい橙	灰黄	長石・茶粒・黄橙砂		ハケ・ナデ
	513	壺形土器	底部	N - 38	にぶい褐	黒褐	長石・石英		ヘラミガキ・ナデ
	514	壺形土器	底部	M - 39	にぶい黄橙		金色雲母・長石・茶粒		ヘラナデ
128	515	壺形土器	底部			にぶい赤褐			ヘラナデ・指頭痕・ハケ・ナデ
-	516	壺形土器	底部	N - 38	にぶい黄橙		長石・茶粒・黄橙砂		ヘラケズリ・ナデ
	517	壺形土器	底部	_	明赤褐	にぶい橙	長石・石英・黄橙砂・茶粒	-	ヘラナデ・ナデ
	518	鉢形土器	口縁部	M - 38	灰褐	にぶい褐	雲母・長石・黄橙砂		ヘラケズリ・ナデ・指頭痕
	519	鉢形土器	口縁部	M - 41	褐	褐	雲母・長石	-	ナデ
	520	鉢形土器	口縁部	_	にぶい黄褐		雲母・黄白砂・茶粒		ハケ
	521	鉢形土器	口縁部	N - 41	にぶい橙	橙	雲母・長石	普通	ヘラナデ
	522	鉢形土器	脚部	N - 14	暗灰黄	灰黄	雲母・長石	普通	ヘラケズリ・ナデ・指頭痕
	523	鉢形土器	脚部	N-34~35	にぶい黄	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	普通	ハケ・ヘラミガキ

第20表 Ⅳ層出土遺物観察表 2

図画	-,,		/	CT 142 MONTO 21	•					
524 林形上器 底部 0-14-15 橙 にぶい黄橙 長石・石英・茶粒 良好 ヘラナデ 525 高环形上器 坪部 M - 88 にぶい黄橙 長石・本粒 音通 ナデ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	図No.		器 種	部 位	出土区			胎土	焼成	文様・器面調整等
128 526 高环形土器 环部 M - 38 にぶい黄橙 明黄褐 長石・素粒 普通 ナデ・ヘラケズリ 527 高环形土器 脚部 M - 38 にぶい黄橙 にぶい黄橙 長石・素粒 普通 ナデ・ヘラケズリ 528 高环形土器 脚部 M - 34 - 35 灰褐 にぶい橙 長石・石英・白砂 良好 ナデ・ヘラケズリ 530 坩形土器 脚部 N - 41 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・白砂 良好 ハラ・ガキ・ナデ 531 坩形土器 脚部 N - 41 にぶい橙 にぶい樹 長石・石英・黄白砂 良好 ハラ・ガキ・・カラナデ 532 坩形土器 脚部 M - 32 - 24 にぶい褐 長石・石英・黄色砂 良好 ハラ・ガキ・・カラナデ 533 坩形土器 脚部 M - 40 にぶい褐 長石・石英・黄色砂 本種 ハラ・ガキ・・ハラナデ 536 井が土器 底部 O - 14 · 15 位 にぶい褐 長石・石英 普通 ハラ・ガキ・・ハラナデ 536 井が土器 丘部 一脚部 一 下変褐 にぶい褐 長石・石英 普通 ハラ・ガキ・・カラナデ 537 鉢形土器 口縁~脚部 一 下変褐 にぶい褐 長石・石英 自好 カラ・ブ・・フ・ナデ 539 鉢形土器 口縁~脚部 一 下変褐 にぶい褐 金色雲母・長石 良好 ナデ・・ラナデー 540 鉢形土器 口縁~脚部 一 「ぶい・毒褐 雲母・長石・石英 良好 ナデ・・ラナデ・ 541 鉢形土器 口縁~胴部 一 黄褐 一 二 二 長婦 日縁・長石・石英 長好 ハラミガキ・ナデ 1 日縁・肥土器 口縁~胴部 一 黒褐 二 二 二 二 二 二 二 二 二		524	鉢形土器	底部	O - 14 · 15	橙	にぶい黄橙	長石・石英・茶粒	良好	ヘラナデ
128 527 高环形土器 胸部 M - 38 にぶい黄檀 にぶい黄檀 医母・長石・茶粒 普通 ナデ・ヘラケズリ 528 高环形土器 胸部 M - 34 - 35 灰橋 にぶい橙 長石・石英・白砂 良好 ナデ - ヘラナブ・ヘラケズリ 529 高环形土器 胸部 N - 41 にぶい褐 英福 雲母・長石・茶粒 良好 ヘラナデ・ヘラケズリ 531 坩形土器 胴部 S - 5 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 にぶい黄檀 長石・石英・黄白砂 良好 ヘラミガキ・ナデ 532 坩形土器 胴部 M - 40 にぶい褐 長石・石英 貴母 日砂 人分・フ・ブリー 536 手形土器 脈部 の - 14 - 15 橙 にぶい樹 長石・石英 貴母 日砂 人分・フ・ブリー 537 鉢形土器 丘参・胴部 ー にぶい褐 にぶい赤褐 金色雲母・長石 貴母 ハラ・ガキ・ナデ 129 538 鉢形土器 口縁・胴部 ー 下、大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田		525	高坏形土器	坏部~脚部	_	にぶい黄褐	灰褐	長石・黒粒	良好	ヘラナデ
527 高环形土器 胸部 M - 38 にぶい機 にぶい機 長石・石英・白砂 良好 ケデ - ヘラケズリ 528 高环形土器 胸部 M - 34 にぶい機 にぶい機 長石・石英・白砂 良好 ケデ ハーカイ・スポース 大学 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・ステーズ 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 日本 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 日本 日本 ハーカイ・スポース 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	400	526	高坏形土器	坏部	M - 38	にぶい黄橙	明黄褐	長石・茶粒	普通	ナデ
529 高坏形土器	128	527	高坏形土器	脚部	M - 38	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	普通	ナデ・ヘラケズリ
11 15 15 15 15 16 16 16		528	高坏形土器	脚部	M − 34~35	灰褐	にぶい橙	長石・石英・白砂	良好	ナデ
531		529	高坏形土器	脚部	N -41	にぶい褐	黄褐	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ・ヘラケズリ
132 均形土器 胴部〜底部 S - 5 にぶい黄橙 浅黄橙 長石・石英・黄橙砂 良好 へラミガキ・ヘラナデ 133 均形土器 胴部〜底部 M - 40 にぶい褐 長石・石英・白砂 普通 ヘラミガキ・ヘラナデ 135 均形土器 原部 M - 40 にぶい褐 長石・石英・白砂 普通 ヘラ・ガキ・ヘラナデ 135 均形土器 底部 0 - 14・15 橙 にぶい橙 長石・石英 貴好 ヘラナデ 137		530	坩形土器	完形	1 T	にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
533 坩形土器 胴部 (大き) M-23-24 にぶい褐 (たぶい褐 (大き) 音通 (大き) へラミガキ・ヘラナデ 534 坩形土器 順部 M-40 にぶい褐 (たぶい褐 (大き) 石英、黄白砂・茶粒 (良好 (ハラケズリ) カラケズリ 535 坩形土器 底部 (ハラ・1/5) 橙 (にぶい褐 (たぶい褐)) 長石・石英 (良好) 普通 (ハラナデ) ハラナデ (ステンガー) カラナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・ナデ (ステンガー) カラミガキ・カラケズリ カラミガキ・カラテズカー カラミガキ・カラケズリ カラミガキ・カラテズカー カラミガキ カラミガキ・カラケズリ カラミガキ・カラテズカー カラミガキ・カラミガキ・カラテズカー カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カラミガキ・カーラミガキ・カー カラミガキ・カースティガー カースティガー カースティガー カースティガー カースティガー		531	坩形土器	胴部	S - 5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
130 日形土器 胴部 M - 40 にぶい黄杷 にぶい機 石英・黄白砂・茶粒 良好 ヘラケズリ 535 日形土器 底部 〇 - 14 · 15 橙 にぶい橙 長石・石英 普通 ヘラナデ 536 手づくね土器 完形 一 にぶい褐 にぶい褐 黒粒 良好 指ナデ 537 鉢形土器 口縁~胴部 一 灰黄褐 にぶい赤褐 雲母・長石 百英 ナデ・ヘラナデ 538 鉢形土器 口縁~胴部 一 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 良好 ナデ・ヘラナデ 539 鉢形土器 口縁~胴部 一 直褐 黄灰 金色雲母・長石 百英 ナデ・ヘラナデ 540 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 褐 金色雲母・長石 普通 ヘラミガキ・ナデ 541 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 褐 金色雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 542 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 褐 金色雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ 大子 543 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 二 二 二 三 三 三 三 三 三 三		532	坩形土器	胴部~底部	S - 5	にぶい黄橙	浅黄橙	長石・石英・黄橙砂	良好	ヘラミガキ・ヘラナデ
535 坩形土器 底部		533	坩形土器	胴部~底部	M-23~24	にぶい褐	にぶい褐	長石・石英・白砂	普通	ヘラミガキ・ヘラナデ
536 手づくね土器 完形		534	坩形土器	胴部	M - 40	にぶい黄橙	にぶい褐	石英・黄白砂・茶粒	良好	ヘラケズリ
537 鉢形土器 口縁~胴部 一 灰黄褐 にぶい黄褐 金色雲母・長石 良好 小ラミガキ・ナデ 538 鉢形土器 口縁~胴部 N - 39 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 良好 ナデ・ヘラナデ 540 鉢形土器 口縁~胴部 一 黄褐 黄灰 金色雲母・長石・石英 良好 ナデ・カラミガキ・ナデ 541 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 黒 雲母・長石・石英 良好 小ラミガキ・ナデ 542 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 黒 雲母・長石・石英 良好 小ラミガキ カラミガキ 543 鉢形土器 口縁~胴部 一 黒褐 黒褐 雲母・長石・石英 良好 小ラミガキ 大子 543 鉢形土器 口縁~底部 一 黒褐 黒褐 雲母・長石・石英 良好 小ラミガキ・ナデ 大海・野土器 口縁を底部 一 黒褐 黒褐 雲母・長石・石英 良好 ハラミガキ・ナデ 大海・野土器 口縁部 N - 40 褐 にぶい褐 雲母・長石・石英 良好 ハラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 一 灰 下 上級 上級 上級 下 上級 上級 下 上級 上級		535	坩形土器	底部	O - 14 · 15	橙	にぶい橙	長石・石英	普通	ヘラナデ
129 538 休形土器 口縁~胴部 N - 39 にぶい褐 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 良好 ナデ・ヘラナデ 539 休形土器 口縁~胴部 -	5	536	手づくね土器	完形	_	にぶい褐	にぶい褐	黒粒	良好	指ナデ
539 鉢形土器 口縁~胴部		537	鉢形土器	口縁~胴部	-	灰黄褐	にぶい黄褐	金色雲母・長石	良好	ヘラミガキ・ナデ
540 鉢形土器	129	538	鉢形土器	口縁~胴部	N - 39	にぶい褐	にぶい赤褐	雲母・長石・石英	良好	ナデ・ヘラナデ
541 鉢形土器 口縁~胴部 - 黒褐 黒 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ 542 鉢形土器 口縁~胴部 - 黒褐 盛色雲母・長石・茶粒 良好 ヘラミガキ 543 鉢形土器 完形 - にぶい黄褐 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 普通 ヘラミガキ・ナデ 544 鉢形土器 口縁~底部 - 黒褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 546 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 灰 金色雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 546 鉢形土器 底部 - 灰 灰 白砂 良好 ヘラミガキ・ナデ 547 須恵器坏 口縁~底部 - 灰 灰 白砂 良好 548 須恵器提瓶 胴部 2 T 灰 灰 白砂 良好 549 須恵器蹇 口縁部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器蹇 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 貴好 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 カリーブ黒 カリーブ黒 カリーブ黒 カリーブ黒 カリーブ黒 カリー		539	鉢形土器	口縁~胴部	-	にぶい赤褐	橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ
542 鉢形土器 口縁~胴部 - 黒褐 名 金色雲母・長石・茶粒 良好 ヘラミガキ 543 鉢形土器 完形 - にぶい黄褐 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 544 鉢形土器 口縁~底部 - 黒褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 545 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 灰 金色雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 反 金色雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 - 灰 灰 白砂 良好 548 須恵器採瓶 胴部 2 T 灰 灰 白砂 良好 549 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器		540	鉢形土器	口縁~胴部	-	黄褐	黄灰	金色雲母・長石	普通	ヘラミガキ・ナデ
543 鉢形土器 完形 - にぶい黄褐 にぶい赤褐 雲母・長石・石英 普通 ヘラナデ・「×」沈線 544 鉢形土器 口縁~底部 - 黒褐 黒褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 545 鉢形土器 口縁部 N - 40 褐 にぶい褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 - 灰 灰 白砂 良好 548 須恵器採瓶 胴部 2 T 灰 灰 白砂 良好 549 須恵器提瓶 胴部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 炭灰 灰木リーブ 白砂 良好 551 須恵器栗瓶 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 一 552 須恵器平瓶 口縁一胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 サデ 558 土製品 ? M - 40 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N - 40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・大粒 良好 ナデ		541	鉢形土器	口縁~胴部	_	黒褐	黒	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ
544 鉢形土器 口縁~底部 - 黒褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ナデ 545 鉢形土器 口縁部 N - 40 褐 にぶい褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 灰 金色雲母・長石・茶粒 普通 ヘラミガキ 547 須恵器坏 口縁~底部 - 灰 灰 白砂 良好 548 須恵器提瓶 胴部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器養 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器養 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N -40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		542	鉢形土器	口縁~胴部	_	黒褐	褐	金色雲母・長石・茶粒	良好	ヘラミガキ
545 鉢形土器 口縁部 N - 40 褐 にぶい褐 雲母・長石・石英 良好 ヘラミガキ・ヘラケズリ 546 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 灰 金色雲母・長石・茶粒 普通 ヘラミガキ 547 須恵器坏 口縁~底部 - 灰 反 白砂 良好 548 須恵器提瓶 胴部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M - 40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N - 40 にぶい橙 にぶい橙 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		543	鉢形土器	完形	_	にぶい黄褐	にぶい赤褐	雲母・長石・石英	普通	ヘラナデ・「×」沈線
546 鉢形土器 底部 - 灰オリーブ 灰 金色雲母・長石・茶粒 普通 ヘラミガキ 547 須恵器坏 口縁~底部 - 灰 戶 白砂 良好 548 須恵器提瓶 胴部 2 T 灰 戶 白砂 良好 549 須恵器提瓶 胴部 - 灰 灰 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 丁 丁 丁 長石・茶粒 普通 551 須恵器甕 口縁部 - 丁 丁 丁 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M - 40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N - 40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		544	鉢形土器	口縁~底部	_	黒褐	黒褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
130 547 須恵器坏 口縁~底部 - 灰 灰 白砂 良好 548 須恵器提瓶 胴部 2 T 灰 戶 白砂 良好 549 須恵器提瓶 胴部 - 灰 戶 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M - 40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N - 40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		545	鉢形土器	口縁部	N - 40	褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ・ヘラケズリ
130 548 須恵器提瓶 胴部 2 T 灰 戶 白砂 良好 549 須恵器提瓶 胴部 - 灰 戶 戶 戶 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O - 13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい掲 黒粒 良好 558 土製品 ? M - 40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N - 40 にぶい橙 にぶい掲 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		546	鉢形土器	底部	_	灰オリーブ	灰	金色雲母・長石・茶粒	普通	ヘラミガキ
549 須恵器提瓶 胴部 - 灰 反 白砂 良好 550 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		547	須恵器坏	口縁~底部	_	灰	灰	白砂	良好	
130 550 須恵器甕 口縁部 - 灰 灰オリーブ 白砂 良好 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		548	須恵器提瓶	胴部	2 T	灰	灰	白砂	良好	
130 551 須恵器甕 口縁部 - 黄灰 長石・茶粒 普通 552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		549	須恵器提瓶	胴部	_	灰	灰	白砂	良好	
552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		550	須恵器甕	口縁部	_	灰	灰オリーブ	白砂	良好	
552 須恵器平瓶 口縁~胴部 O-13 オリーブ黒 オリーブ黒 白砂 良好 553 須恵器 底部 - 暗灰黄 にぶい褐 黒粒 良好 558 土製品 ? M-40 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ	120	551	須恵器甕	口縁部	-	黄灰	黄灰	長石・茶粒	普通	
558 土製品 ? M-40 赤褐 赤褐 金色雲母・白砂 良好 ナデ 559 甕形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ	130	552	須恵器平瓶	口縁~胴部	O - 13	オリーブ黒	オリーブ黒	白砂	良好	
559 菱形土器 胴部 N-40 にぶい橙 にぶい褐 長石・石英・茶粒 良好 ナデ		553	須恵器	底部	_	暗灰黄	にぶい褐	黒粒	良好	
		558	土製品	?	M - 40	赤褐	赤褐	金色雲母・白砂	良好	ナデ
		559	甕形土器	胴部	N - 40	にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・茶粒	良好	ナデ
		560	壺形土器	胴部	_	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長石・石英・白砂	良好	ナデ

第Ⅳ章 発掘調査のまとめ

第1節 縄文時代

1 縄文時代早期

ここでは、土器を中心にふれる。 II 類から II 類として分類した土器群は、従来の土器型式でいう吉田式土器の範疇に含まれるものと思われる。 II 類とした一群は、これまで小牧遺跡 II 類もしくは椿ノ原 6 類とされているものに類似する。 II 類から II 類については、根占町大中原遺跡から良好な資料が出土しており、器形. 施文方法ともに共通点が認められる。 IX 類は下剥峯式土器に該当すると思われるが、口縁部には桑ノ丸式に類似した文様、胴部には下剥峯式にみられる貝殻刺突文が施されているのが特徴である。本遺跡から出土した土器群は大隅半島における早期土器の研究に貴重な資料を追加したものと考えられる。

2 縄文時代晚期

小片が多く、全形を知りうる資料が少ないが、形状及び施文法において滋賀里式系土器など他地域との関連を窺わせる資料が出土している。

組織痕土器は全国的には出土例が少なく,鹿児島県や宮崎県など南九州地域で出土する遺跡数が多いことは全国の研究者の知るところである。これまで組織痕土器の器形を把握しうる良好な資料が出土した遺跡として鹿屋市榎木原遺跡,国分市上野原遺跡,末吉町桐木遺跡などがある。本遺跡では小片も含めて100点以上を確認したが,出土量としては県内でも有数のものなっている。胴部下半から底部にかけてみられるいわゆる組織痕には,編目痕・蓆目痕・編布痕などのバリエーションがあり,なかでも土坑1号の周辺から出土した143は,胴部下半から底部にかけて蓆目痕が施された完形品である。器面にススや炭化物の付着がみられない点が特徴である。

第2節 古墳時代

1 検出遺構

平成3年度から7年度の調査で計22軒の竪穴住居跡と溝状遺構4条などを確認した。本遺跡で検出した竪穴住居跡群は、出土遺物から判断すると古墳時代後期、成川式土器の笹貫期のものと考えられる。成川式土器とよばれ南九州において極めて在地性の強い一連の土器群のなかで、笹貫式期の住居の検出例は、これまで川内市成岡遺跡、同麦之浦遺跡、吹上町辻堂原遺跡、国分市城山山頂遺跡、同妻山元遺跡、高山町花牟礼遺跡、同永野原遺跡、同東田遺跡などに例がある。

本遺跡で検出した住居跡群は、住居の切り合いなどが認められることから若干の時間差が考えられるものの、主軸方向や出土した土器から判断するとほぼ同時期の住居跡群である可能性が高い。

竪穴住居跡の形状は基本的に方形で、これまで知られている遺跡と比較すると相対的に規模が大きい。全体的な規模が把握できる住居跡のうち、最も大きいものでは竪穴の一辺が約6m(竪穴住居跡11号)、小さいものは3.0mある(竪穴住居跡6号)。なお、特徴として方形の竪穴の中央部に焼土域を伴い、円形の掘り込みをもつ住居跡があることや竪穴の壁面に沿って周辺に柱穴が検出される点が挙げられる。

また、住居跡や溝状遺構から県内では数例しか出土が知られていない甑形土器(竪穴住居跡10

号・溝状遺構 4 号)や、器面にヘラミガキが施され、入念に研磨された黒色土器が出土している(竪穴住居跡 8 ・ 9 号・溝状遺構 2 ・ 3 ・ 4 号)。また、成川式土器と須恵器の共伴が認められる住居跡がある(竪穴住居跡 9・16号・溝状遺構 4 号)。南九州の古墳時代の土器編年を考える上で貴重な資料を得ることができたものと考えられる。

溝状遺構は、断面形状がV字(1・3・4号)とU字(2号)を呈するがあり、一部のみの検出にとどまっているものもあるが、調査区外にもひろがる集落を取り巻いているものと予想される。 溝状遺構1号からは鉄鏃が出土していることなどから溝状遺構のもつ機能が注目されるところである。

2 出土遺物

遺物については、遺構群の中でも溝状遺構 4 号から甕形土器、壺形土器、甑形土器、鉢形土器、 平瓶、須恵器模倣坏、鉄製品など良好な一括資料が出土した。以下、各器種ごとの特徴についてふ れることとする。

甕形土器は、口縁部が内湾し、脚台をもつタイプが主体である。従来から成川式土器の笹貫タイプとよばれているものである。甕形土器の胴部に施される突帯上の施文には、棒状工具や指頭によって突帯上に連続して刻みを施すもの、一定の間隔をおいて棒状工具で4~6か所に刻みを施すもの、突帯の上下から指頭で連続してつまむもの、一定の間隔をおき指頭によって突帯の数か所を口縁部方向にはね上げてアクセントをつけるものなどのバリエーションがある。このほか、甕形土器に口縁部が外反するものがある。全形を把握できる資料を提示できていないが、底部が丸底を呈するものが含まれている可能性も残る。

壺形土器については、竪穴住居跡 2 号から出土した二重口縁を呈する274や溝状遺構 4 号から出土した472のほか、同 4 号から出土した437は、内外面にミガキが施され黒色を呈するものであり希少な発見となった。

古墳時代の甑形土器については、これまで南九州地域の宮崎県域に集中して出土することが指摘されており、県内においてはほとんど出土が認められていなかったが、近年の発掘調査によって徐々に類例が増加しつつある。以下、類例を列挙する。なお、ここで用いる甑形土器の呼称については、杉井健氏の蒸気孔による形態分類に準ずることとする。

薩摩半島では、日置郡金峰町入来遺跡の6号竪穴住居跡から「つつぬけタイプ把手無大型甑」が出土しているほか、鹿児島市鹿児島大学構内遺跡からの出土例がある。また、薩摩川内市井上遺跡の竪穴住居跡から「つつぬけタイプ把手無大型甑」の完形品が出土している。胴部に刻み目のある突帯が1条めぐるタイプである。同大島遺跡では、古墳時代から古代にかけての甑形土器の良好は資料が出土しており、形態的には、「つつぬけタイプ」、「多孔式」の両タイプが認められる。このほか、指宿市橋牟礼川遺跡では、甑形土器の把手部分と思われる資料が出土し、薩摩郡宮之城町では、鉢形を呈する「円形多孔式タイプ」の甑形土器が採集されている。

本遺跡では、破片を含め甑形土器を12点確認し、うち10点を図化している。なお、このほか第89図の332、第126図の486なども甑形土器の一部としての可能性が残る。

蒸気孔の形態には単孔式と多孔式の両タイプが認められる。単孔式は、いわゆる「つつぬけタイプ把手無大型甑」(以下、つつぬけタイプ)、多孔式は、「桟渡し用小円孔タイプ把手無甑」(以下、

桟後付けタイプ)、底部に刺突によって蜂の巣状に穿孔する「多孔タイプ把手付甑」(以下,多孔タイプ)にあたる。428は「桟後付タイプ」と考えられるものである。底部立ち上がり付近に少なくとも16か所の円形の刺突痕があり,うち4か所が貫通している。従来の「桟後付けタイプ」のように小円孔が一対あるいは二対で対角をなさない点が特異である。使用方法の検討,復元が必要となるが小円孔が使用のために施されたものでない場合は,「つつぬけタイプ」の範疇に含まれる可能性がある。「多孔タイプ」の429・488は全体の器形が不明であるが把手付きではないことも考えられる。「多孔タイプ」の底部や「桟後付タイプ」の底部立ち上がり付近にみられる小円孔は,どちらも焼成前に何らかの工具による刺突によって穿孔されている。

甑形土器のうち器形が把握できる資料についてはいずれのタイプも大型で、口縁部端がわずかに 外反する共通点がある。加えて胴部に粘土積み上げ時の接合痕、底部(蒸気孔)端には指頭痕が観察されるものが多いことも特徴である。

316・428のように胴部に1条の突帯がめぐる資料は、県内でも初見の可能性がある。前述した井上遺跡出土の甑形土器もこのタイプである。在地色が強いといわれる成川式土器の特徴が反映されたものと思われる。県内においては、これまで古墳時代の住居跡が基本的に竈を伴わないと捉えられていることから、住居跡中央部の地床炉(焼土域あるいは掘り込みをもつ焼土域)で使用された可能性がある。今後、住居の内部構造や甑形土器の使用法についての検討が課題となるであろう。

須恵器は県内では出土例の少ない平瓶や提瓶の出土が注目される。平瓶は11号住居跡出土の326, 溝状遺構 4 号の452, 一括遺物の552の 3 点を確認した。溝状遺構 4 号出土の452は比較的大型のも ので把手のつくタイプである。

黒色土器の存在も本遺跡の特徴のひとつである。器面がヘラミガキによって研磨され、黒色を呈する一群である。器種としては、壺形土器・鉢形土器・脚台のある鉢形土器・椀形土器がある。

543は須恵器模倣坏と思われる。模倣坏の分布の南限は6C代までにおいて鹿児島県志布志湾沿地域岸から熊本県球磨地域あたりと考えられ、前方後円墳の南限と一致することが指摘されている。

463の鉄製鈴は、溝状遺構 4 号から出土したもので鍛造技術によって製作されたと思われる。形状は球形で腹部に鍔状突帯がつくタイプである。頂部には方形の鈕がつく。丸はチャートの小礫が利用されているようである。鍛造技術によって小型の製品を製作していることから高度な技術が存在したことを示すものと考えられる。同様の形態で鍛造によって製作された鉄製鈴は、滋賀県大津市の横尾山古墳 7 号墳に出土例がある。 2 点が出土しており、古墳の築造年代は 7 C代中葉と報告されている。中尾遺跡では、463のほか、4号地下式横穴墓から銅製の鈴が副葬品として出土している。 このような鍔状突帯をもつ鈴が鍛造によって多く作られるようになるのは 6 C後半以降と考えられており、遺跡の年代を考える上での一つの傍証となろう。

本遺跡は、甑形土器・須恵器模倣坏・黒色土器などがまとまって出土しており、古墳時代中期から後期に新しく出現するものとして指摘されている要素ををほぼ満たしているものと思われる。

報告するにあたって遺跡、遺構、遺物について全くといっていいほど咀嚼しきれていない状況であることをお詫びして結びとしたい。今後の南九州における古墳時代の研究に少しでも役立つことができれば幸いである。

〈参考・引用文献〉

河口貞徳 「入来遺跡発掘調査概報」『鹿児島考古』第11号 1976 鹿児島県考古学会

杉井 健 「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 1999 大阪大学考古学研究室

杉井 健 「国家形成期の考古学」大阪大学考古学研究室10周年記念論集 1999 大阪大学考古学研究室

杉井 健 『朝鮮半島渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究』 2003 熊本大学文学部

中村直子 「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい可能性を求めて「コミュニケーションのかたち - ことば・もの・メディア - | | 鹿児島大学全学プロジェクト報告書 2004 鹿児島大学

『古墳時代中・後期の土師器 - その編年と地域性 - 』 第 5 回九州前方後円墳研究会発表要旨資料2002 九州前方後円墳研究会 『二見谷古墳群』 1975 兵庫県城崎郡城崎町教育委員会

『横尾山古墳発掘調香報告書』1988 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

『内宮田遺跡・柳迫遺跡・中別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第30集 2001 宮崎県埋蔵文化財センター 『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集 2003 宮崎県埋蔵文化財センター

『水の谷遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1986 鹿屋市教育委員会

『妻山元遺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1978 国分市教育委員会

『城山山頂遺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1985 国分市教育委員会

『赤木・下剥峯・大四郎・内和遺跡』 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 1978 西之表市教育委員会

『後ヶ追A遺跡』 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1999 垂水市教育委員会

『大中原遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 2000 根占町教育委員会

『上中段遺跡 (第4地点)』 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4) 1986 末吉町教育委員会

『長田遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 2003 有明町教育委員会

『西免遺跡・枦場遺跡・山神遺跡・曲迫遺跡・桑ノ丸遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財報告書(7) 1977 鹿児島県教育委員会

『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (28) 1983 鹿児島県教育委員会

『榎木原遺跡Ⅲ』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(53) 1990 鹿児島県教育委員会

『保養院遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(11) 1994 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『東田遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(16) 1996 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『上野原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(52) 2003 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『桐木遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71) 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要第2号 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター

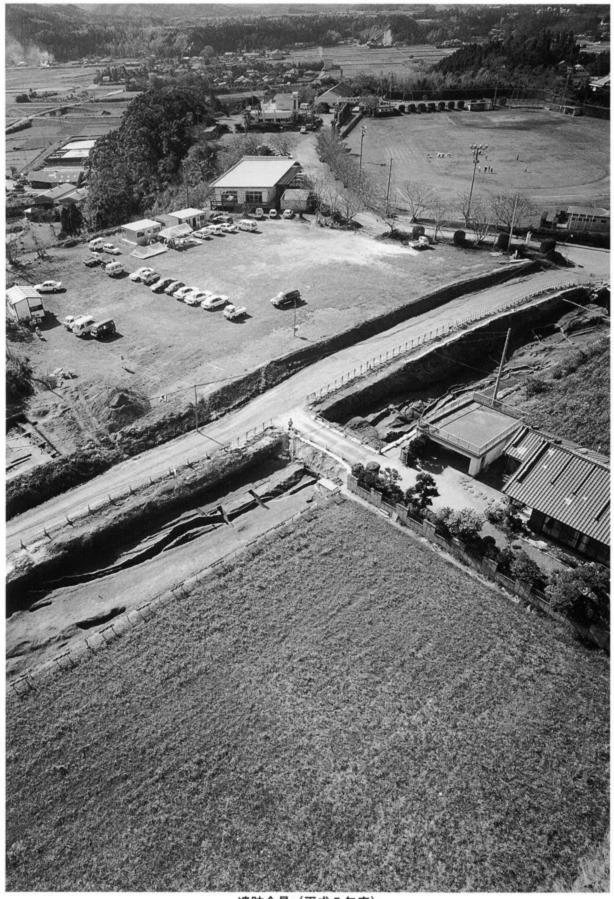
『宮之城町史』 2000 宮之城町

『吾平町誌』 上巻 1991 吾平町

写 真 図 版



遺跡全景 (平成3年度)



遺跡全景 (平成5年度)





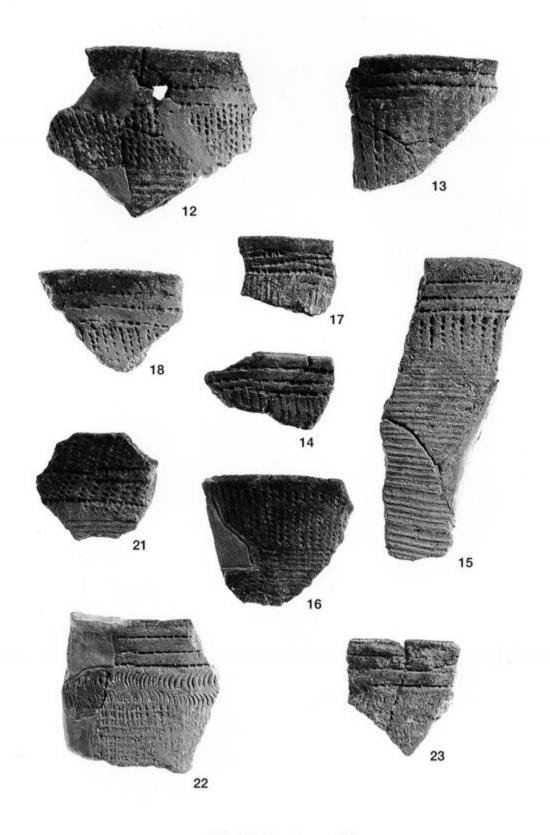




- ①集石7号
- ②集石3号断面
- ③集石2号

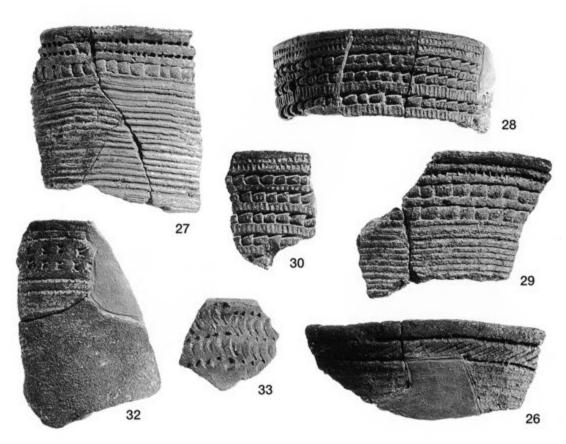


Ⅷ層出土土器1 (Ⅰ・Ⅱ類)

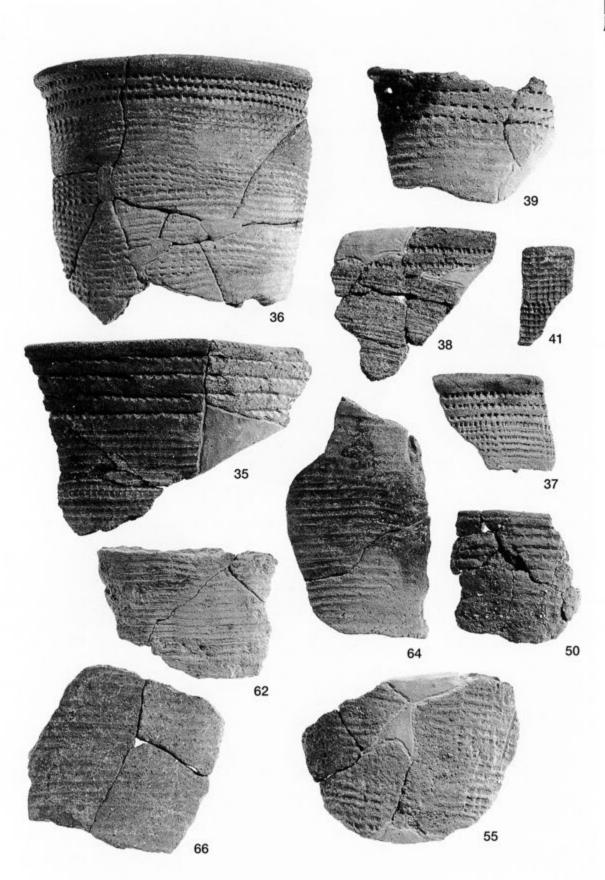


Ⅷ層出土土器 2 (Ⅲ・Ⅳ類)

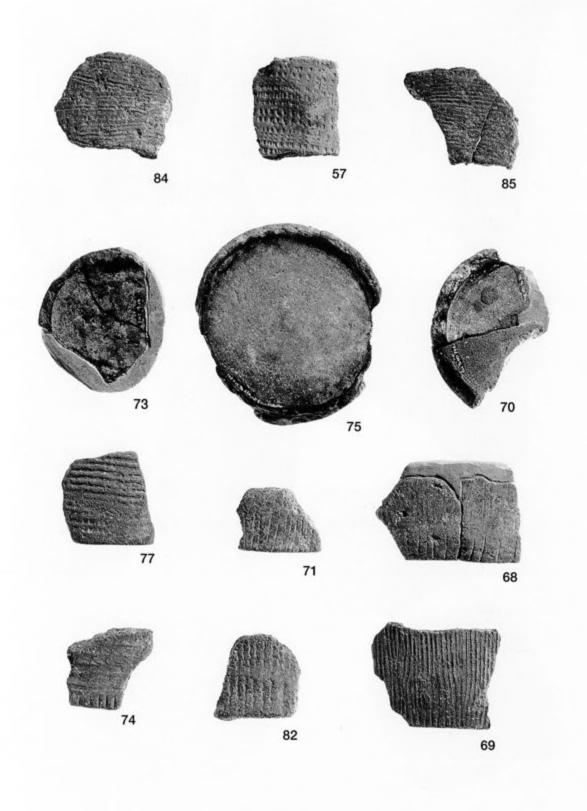




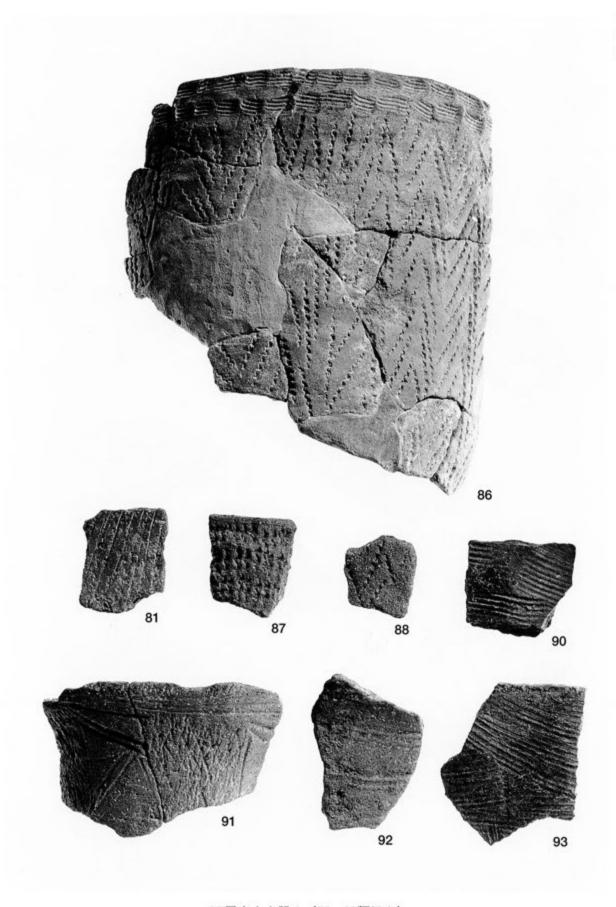
VII層出土土器3 (V・VI・VII類)



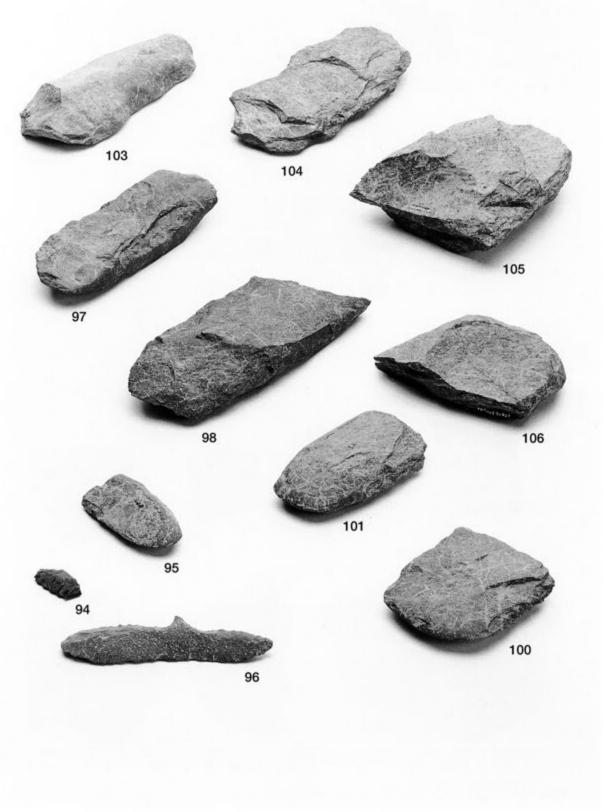
W層出土土器 4 (W類)



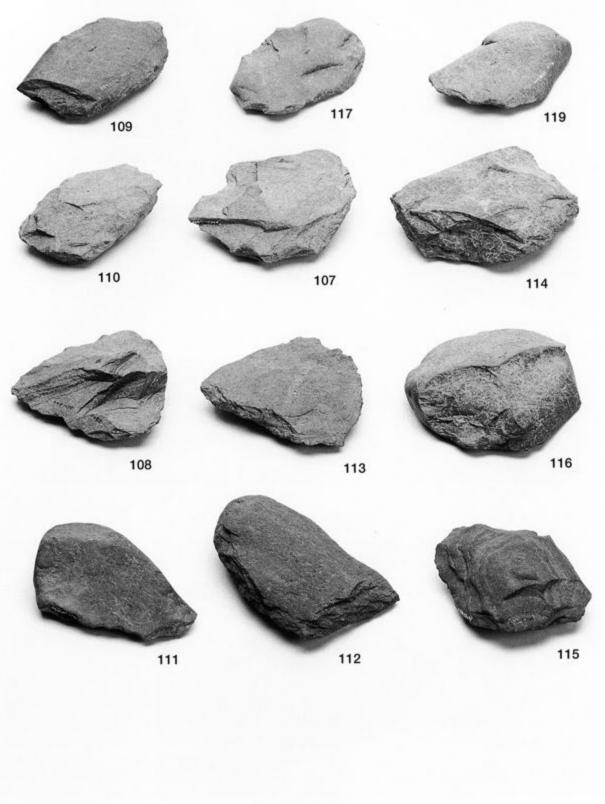
Ⅷ層出土土器5 (底部)



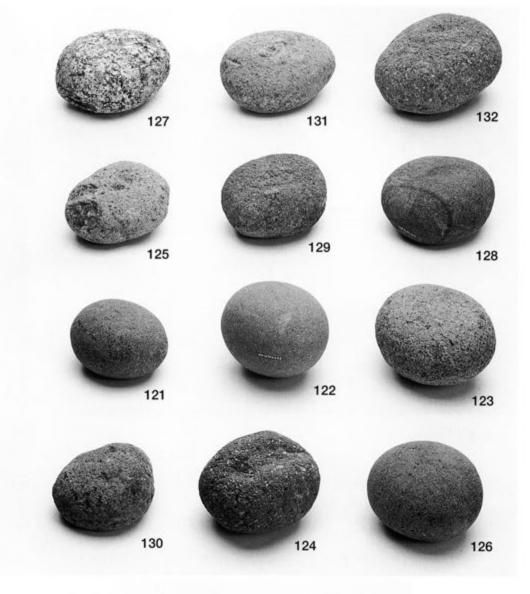
Ⅷ層出土土器 6 (区・X類ほか)



Ⅷ層出土石器 1

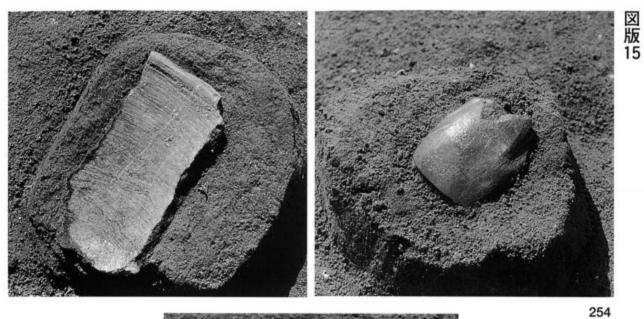


Ⅷ層出土石器 2



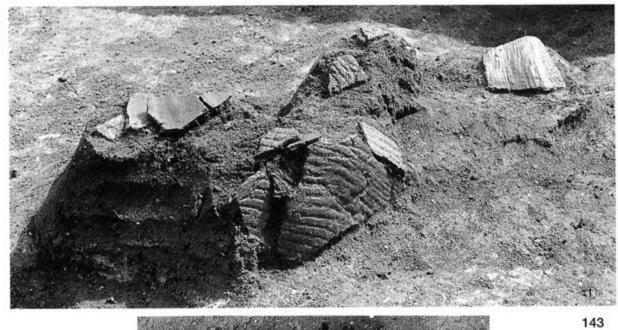


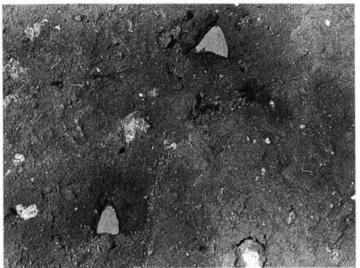
VII層出土土石器 3

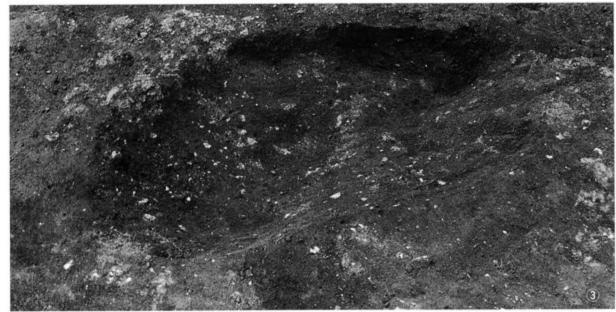










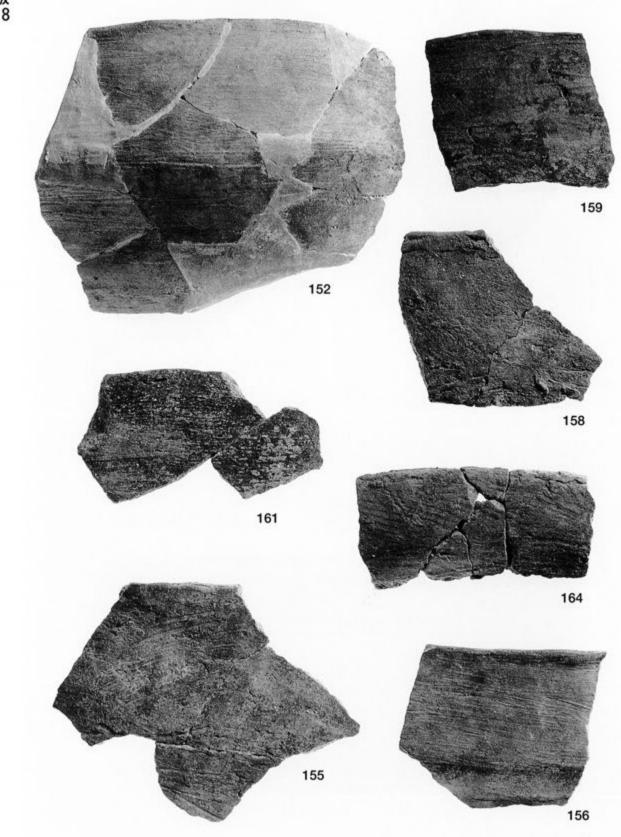


①土坑 1 号上面遺物出土状況 ②土坑 1 号石鏃出土状況 ③土坑 1 号完掘状況

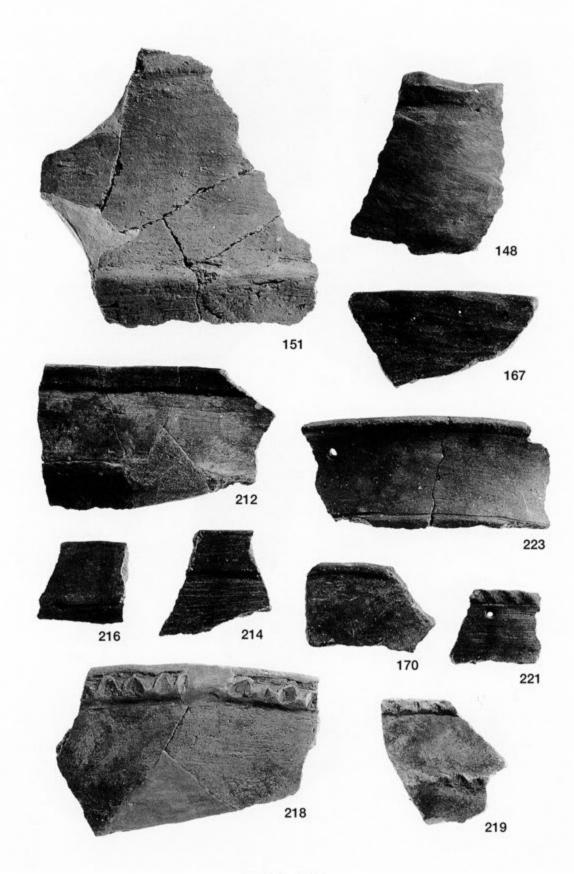




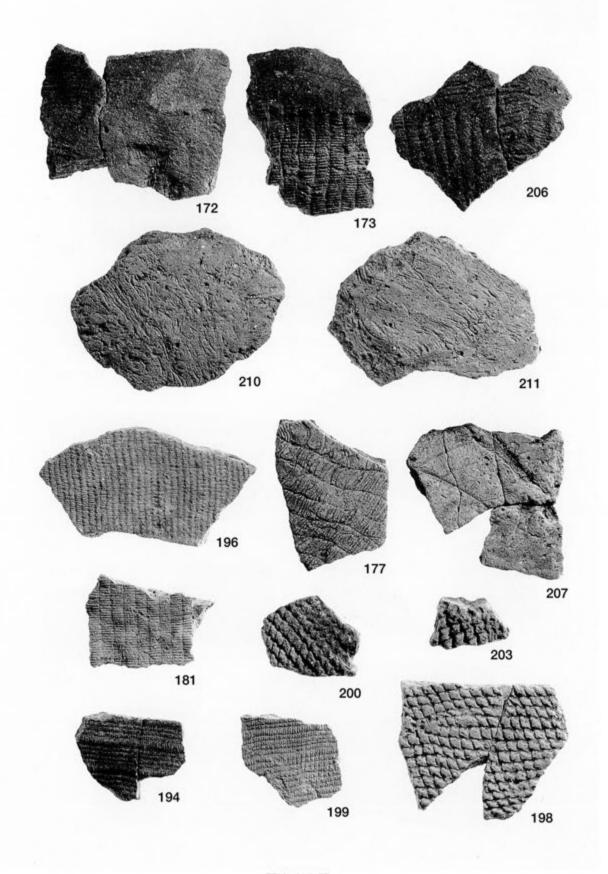
Ⅳ層出土土器 1



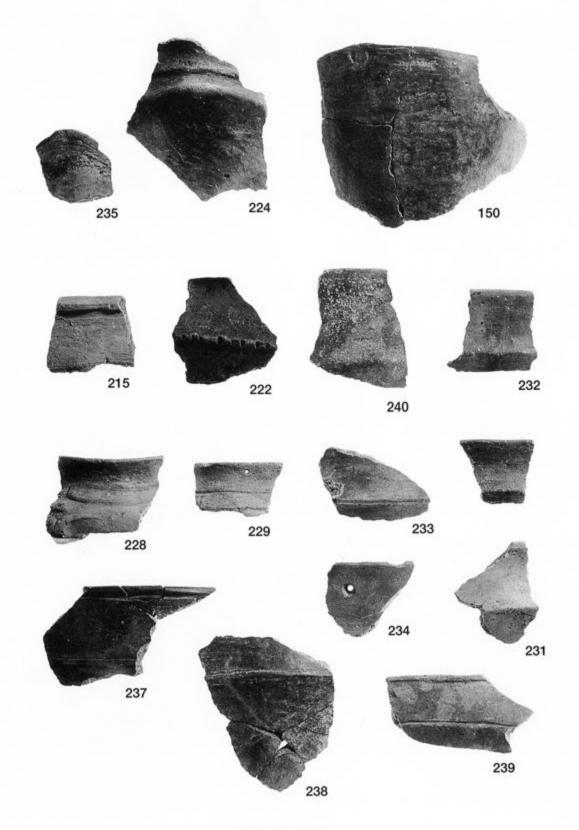
Ⅳ層出土土器 2



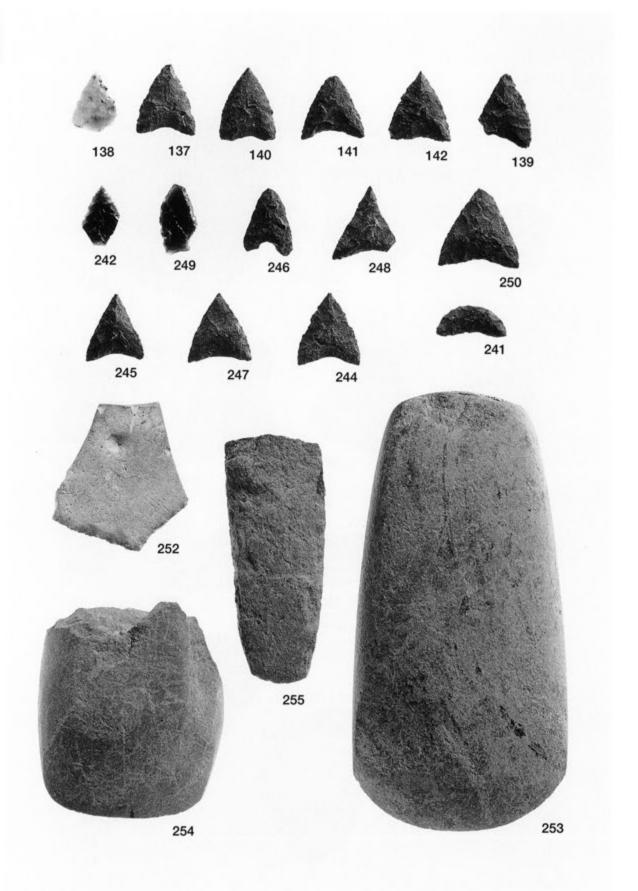
Ⅳ層出土土器 3



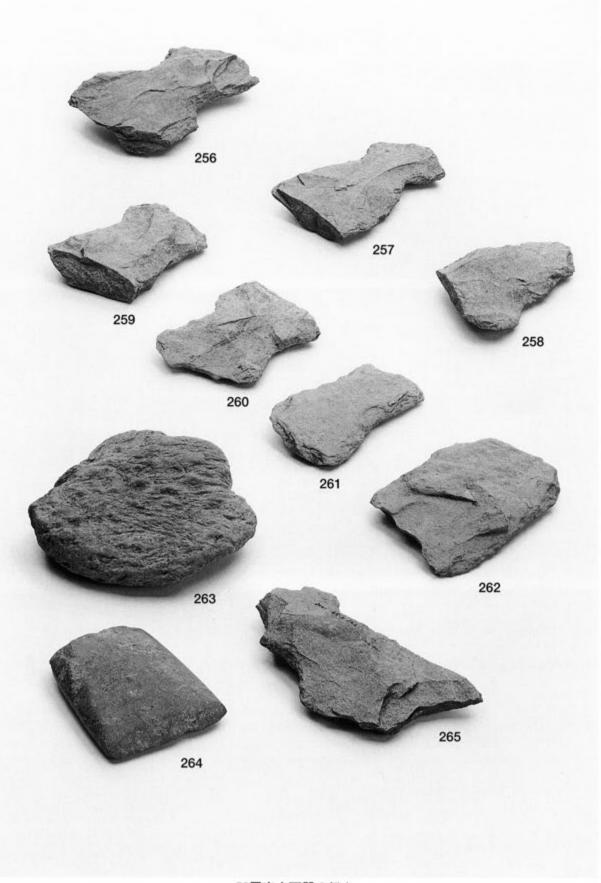
Ⅳ層出土土器 4



Ⅳ層出土土器 5



IV層出土石器 1



№層出土石器 2 ほか





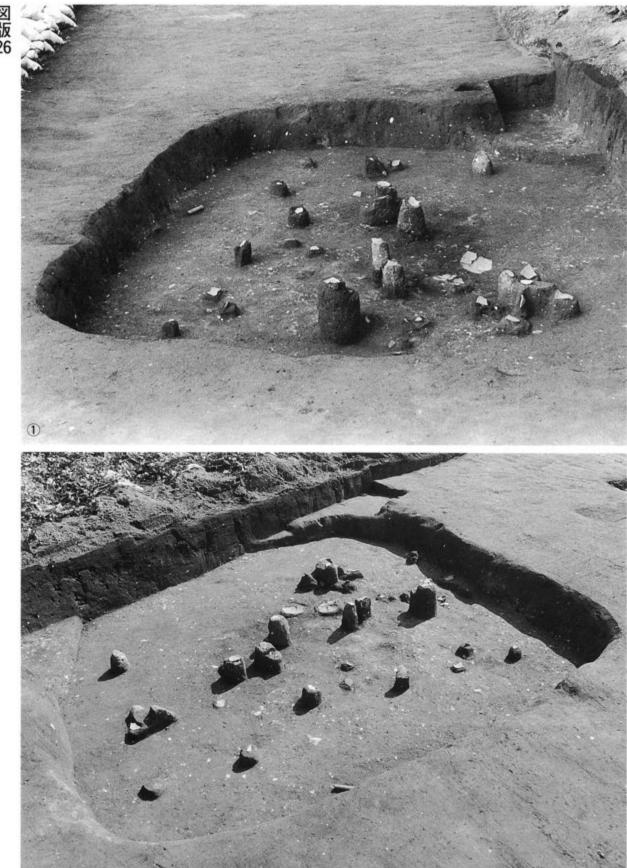


竪穴住居跡群 ①平成3年度 ②平成5年度 ③平成7年度





①遺跡近景(北から) ②遺跡近景(南から)

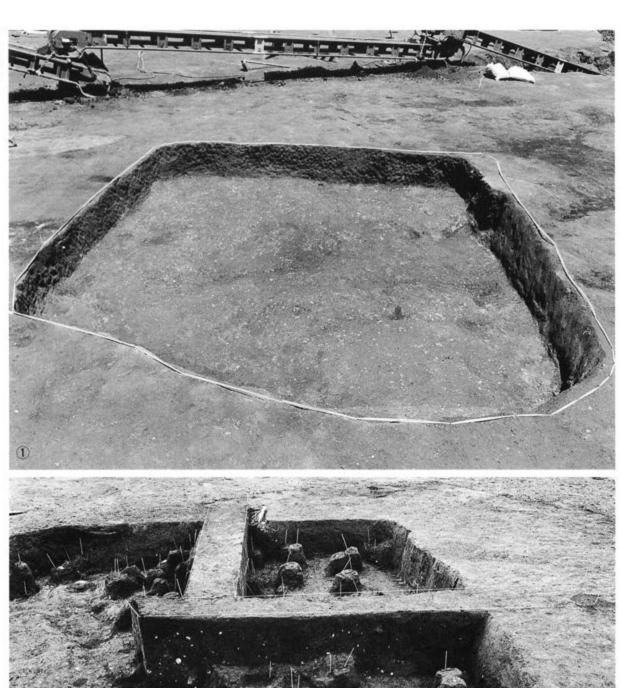


①竪穴住居跡1号(南から) ②同1号(北から)



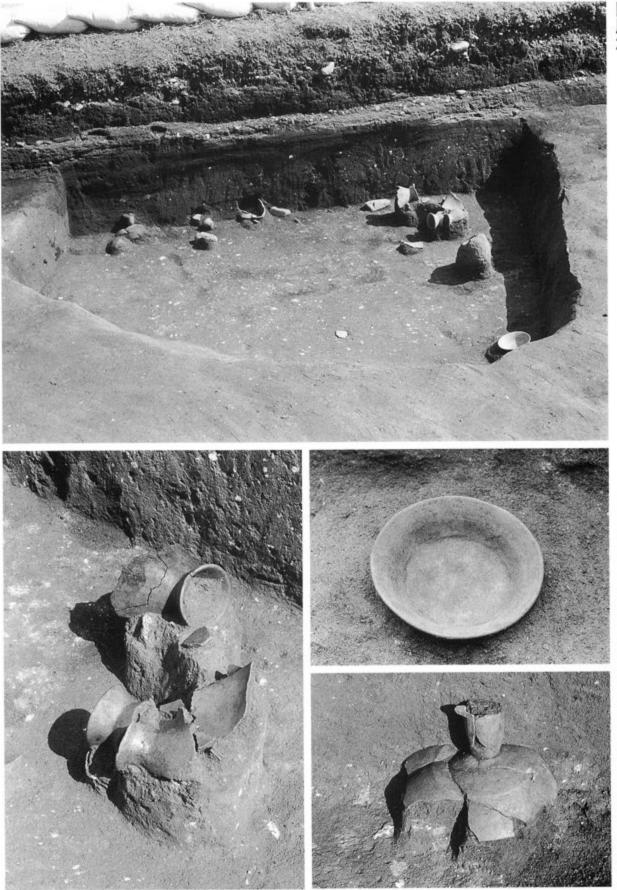


①竪穴住居跡 1 号遺物出土状況 ②同 1 号遺物出土状況





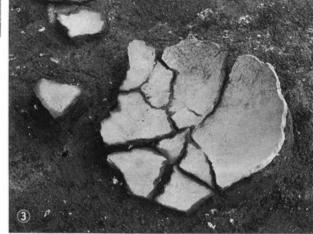
①竪穴住居跡 2号 ②同 2 号遺物出土状況



竪穴住居跡 2 号遺物出土状況



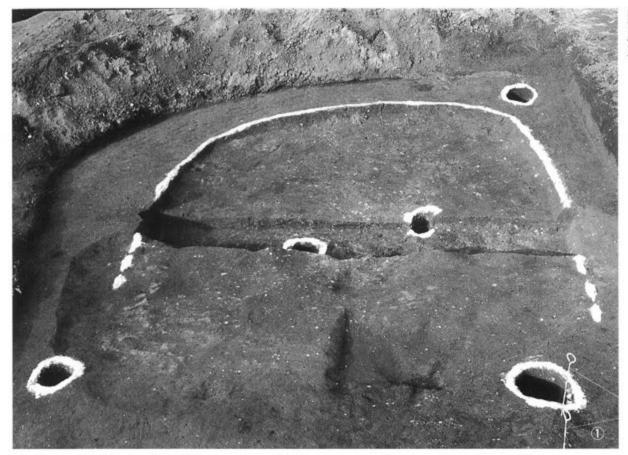




①竪穴住居跡 3号

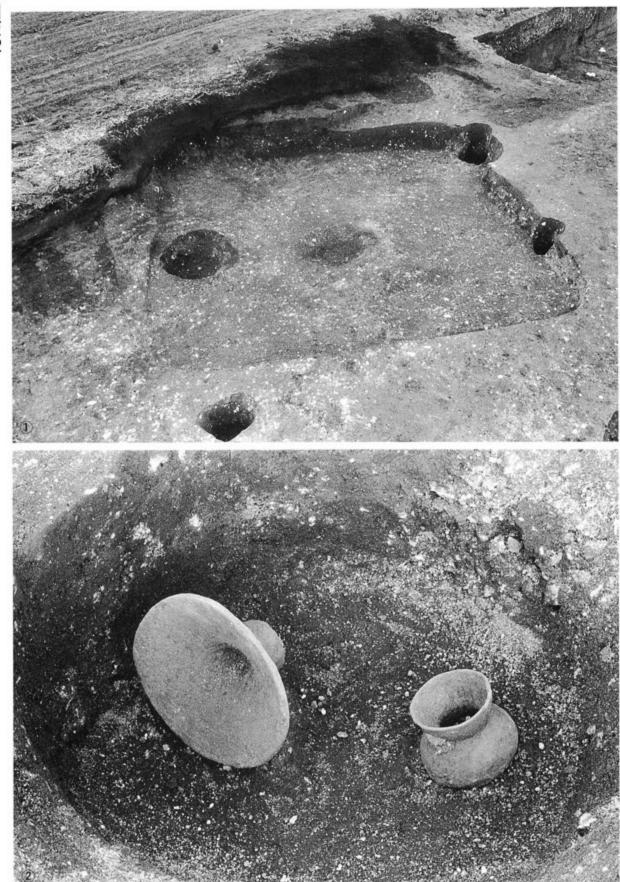
②同 4 号鉄器出土状況

③同3号遺物出土状況



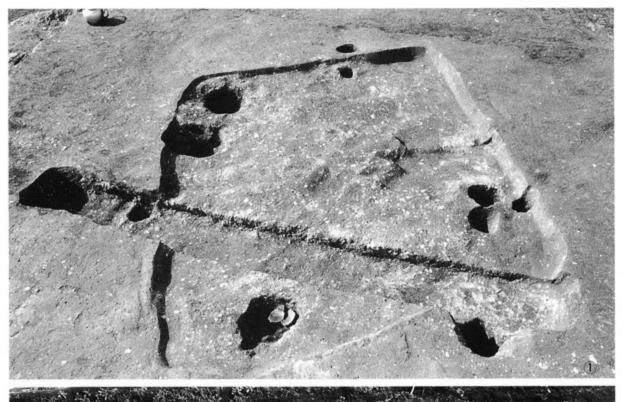


①竪穴住居跡 4号 ②同 4号断面

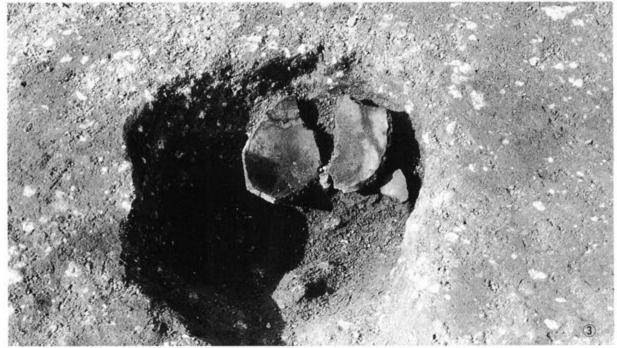


①竪穴住居跡 5号 ②同 5号遺物出土状況(土坑内)





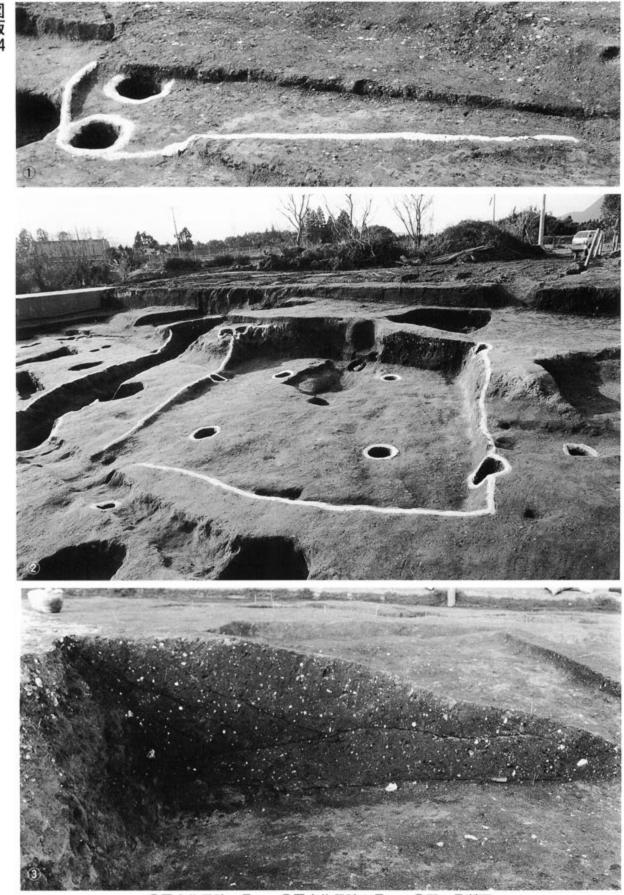




①竪穴住居跡 6号

②同6号断面

③同6号遺物出土状況(土坑内)

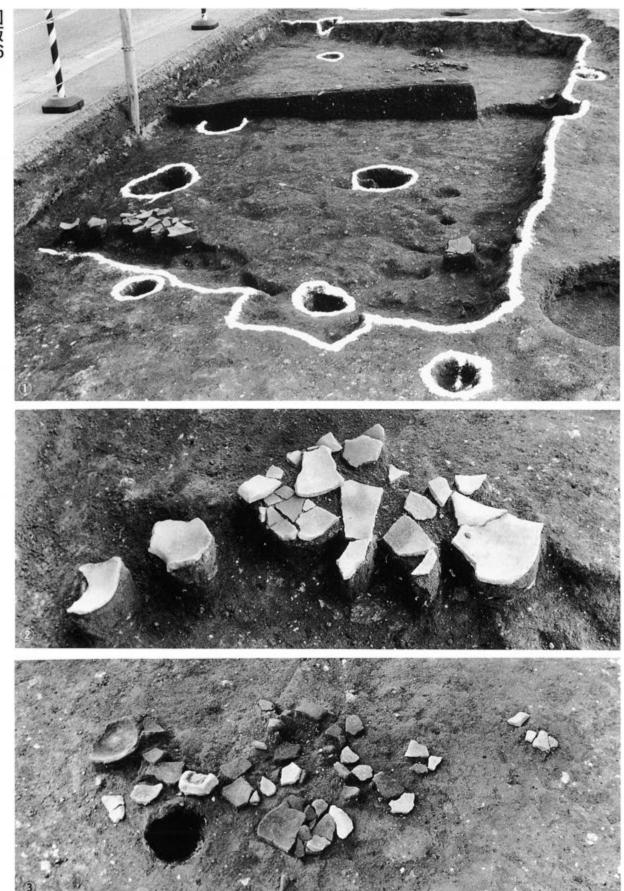


①竪穴住居跡 7号 ②竪穴住居跡 8号 ③同 8号断面





①竪穴住居跡 9号 ②同 9号(奥)と10号(手前)



184

②同10号遺物出土状況(甑)

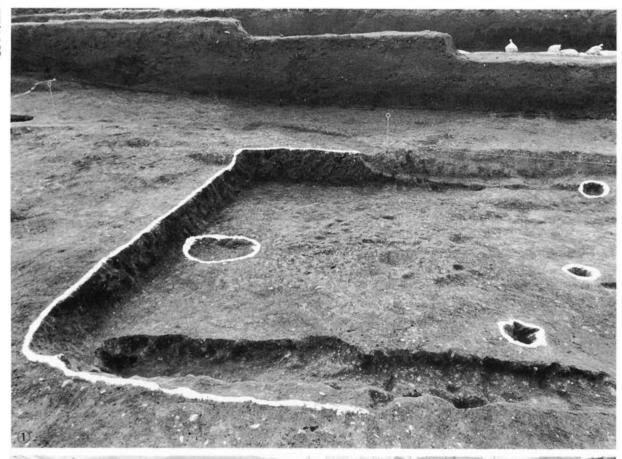
③同10号遺物出土状況

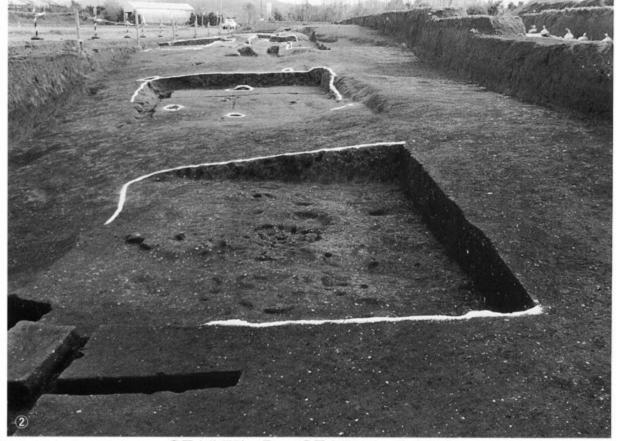
①竪穴住居跡10号



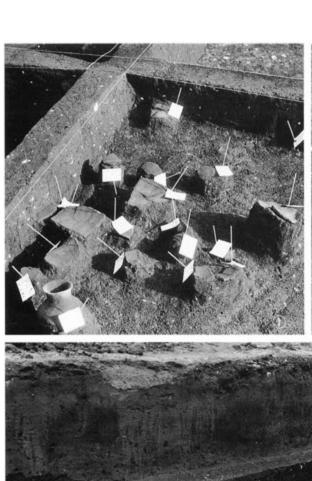


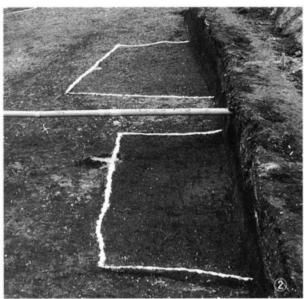
①竪穴住居跡13号 ②竪穴住居跡9号(左奥)・11号(右)・10号(左前)





①竪穴住居跡13号 ②竪穴住居跡14号 (手前)









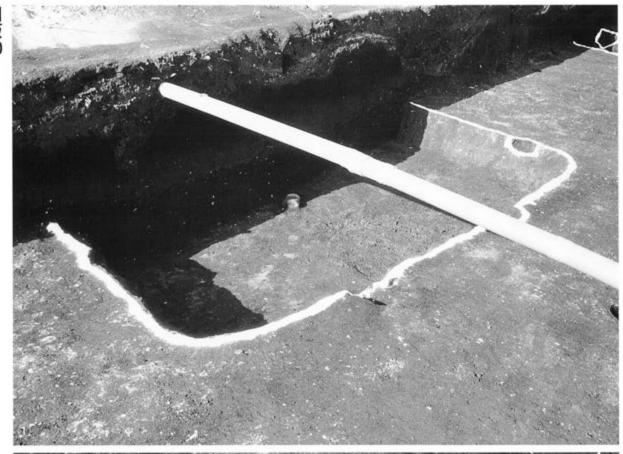


①幻の15号遺物出土状況 ④同16号須恵器出土状況

②竪穴住居跡16号(奥)・17号(手前)

⑤同16号遺物出土状況

③同16号

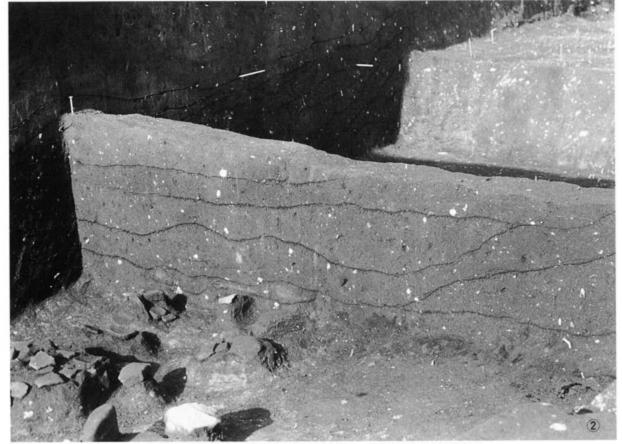




①竪穴住居跡17号 ②同17号遺物出土状況







①竪穴住居跡17号炭化物出土状況

②同17号土層断面



竪穴住居跡18号と溝状遺構 4号







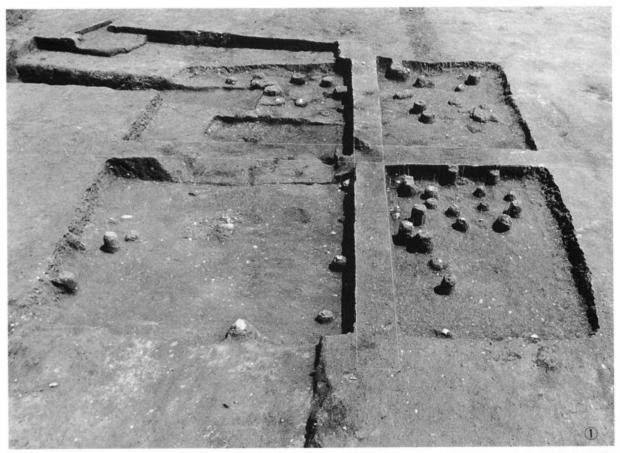
①竪穴住居跡18号(南から) ②同18号(北から)

192

①・②竪穴住居跡18号遺物出土状況

③・④竪穴住居跡18号中央土坑

⑤竪穴住居跡18号完掘状況





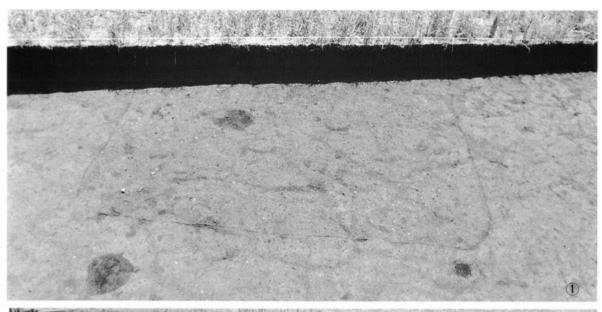
①竪穴住居跡19号

②同19号完掘状况

①竪穴住居跡21号

②同21号遺物出土状況

③同21号完掘状況







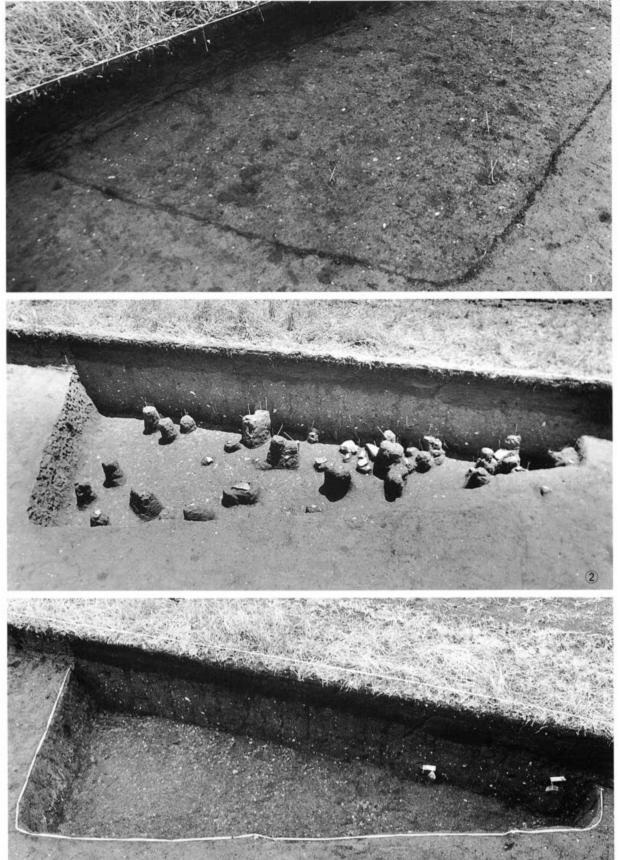
①竪穴住居跡22号検出状況

②・③同22号遺物出土状況

①竪穴住居跡22号遺物出土状況

②同22号遺物出土状況(土坑内) ③同22号完掘状況

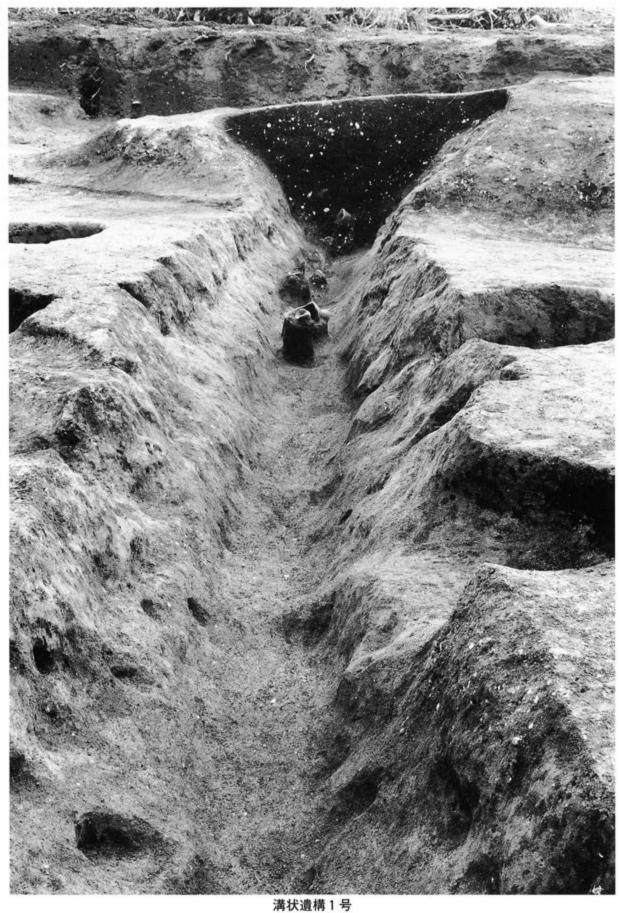




①竪穴住居跡23号検出状況

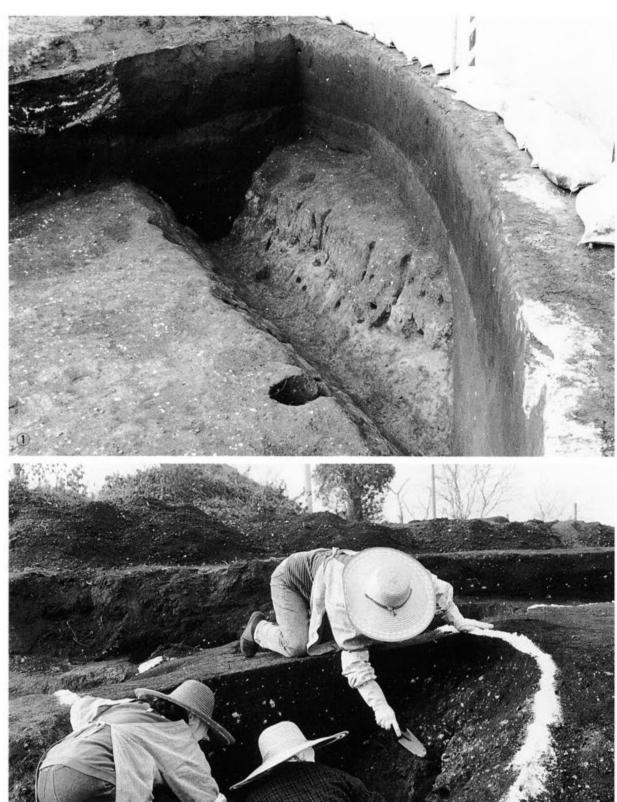
②同23号遺物出土状況

③同23号完掘状況





①溝状遺構2号 ②同2号断面



①溝状遺構 3 号 ②溝状遺構検出風景

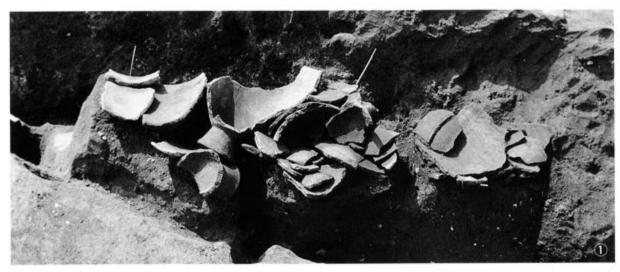


溝状遺構 4号



①・②溝状遺構 4 号遺物出土状況

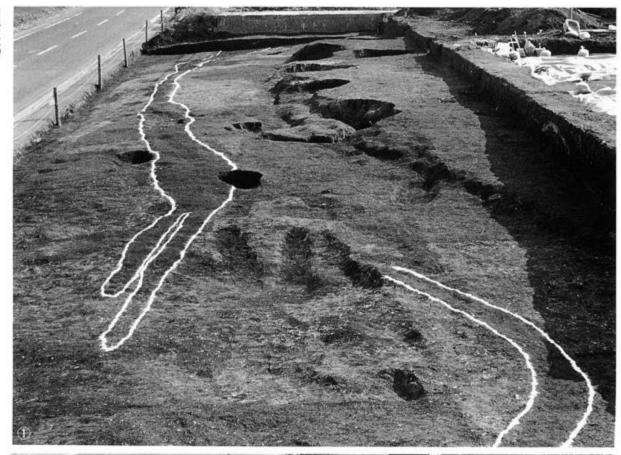
③同 4 号鉄製鈴出土状況







①・②・③溝状遺構 4 号遺物出土状況





①・②古道検出状況



竪穴住居跡1・2号出土土器

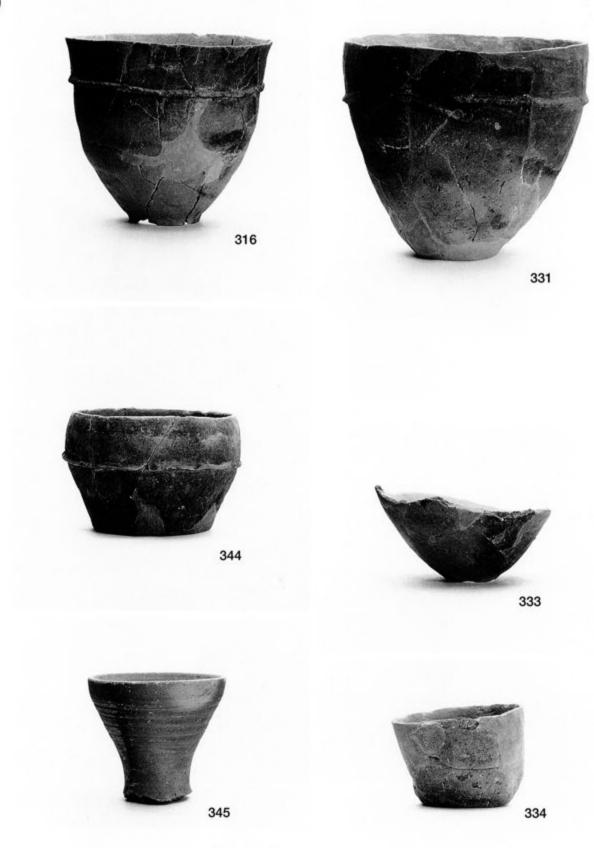


竪穴住居跡2・4・5・8号出土土器





竪穴住居跡8・9・11号出土土器



竪穴住居跡10・13・16号出土土器

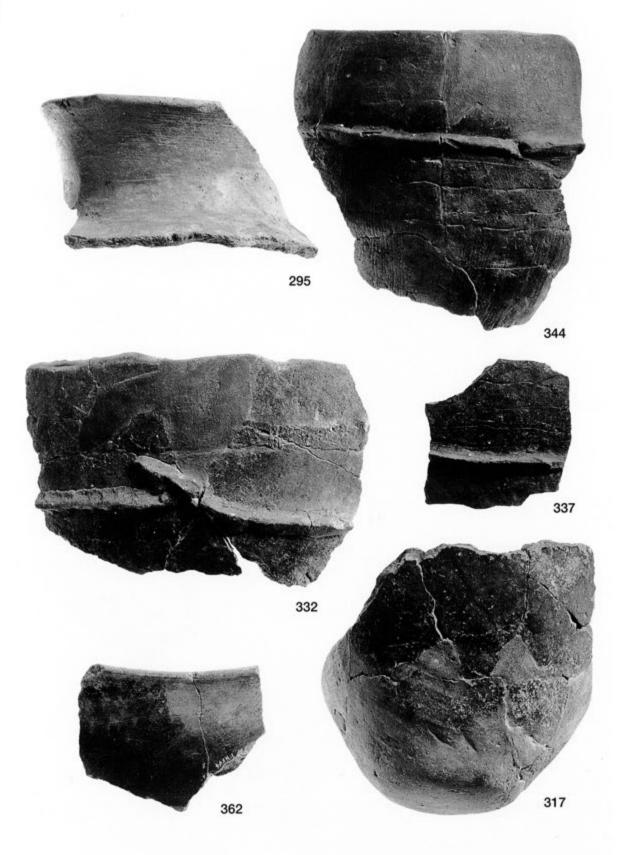




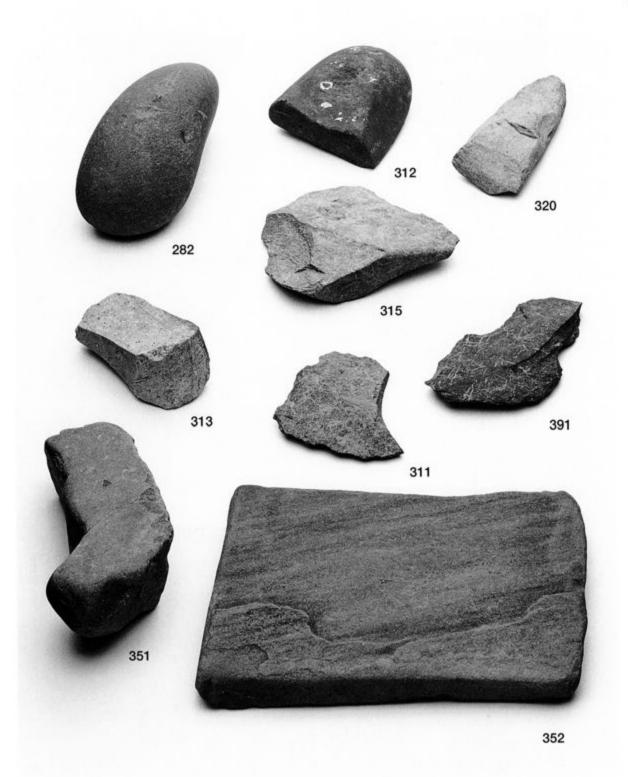




竪穴住居跡18・19・21号出土土器



竪穴住居跡 出土遺物



竪穴住居跡 出土石器



溝状遺構1・2・3・4号出土土器

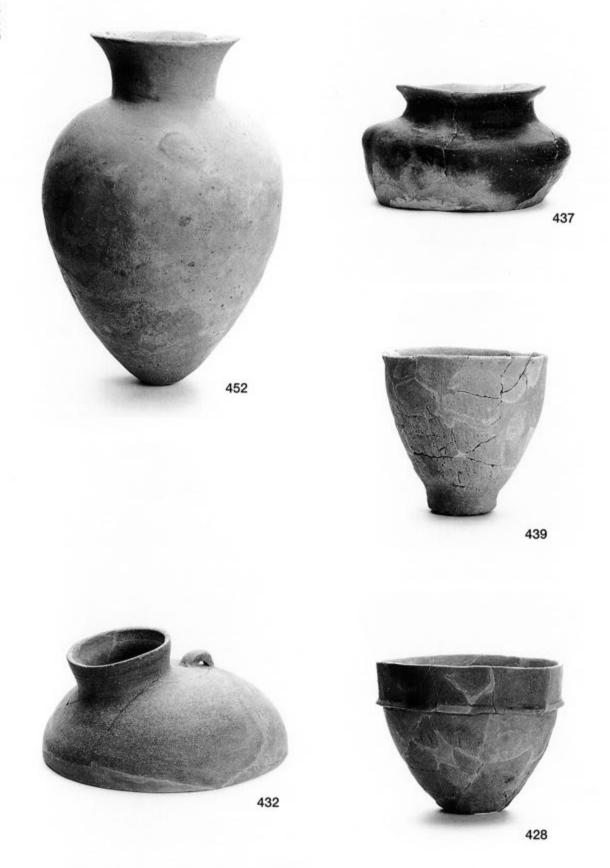




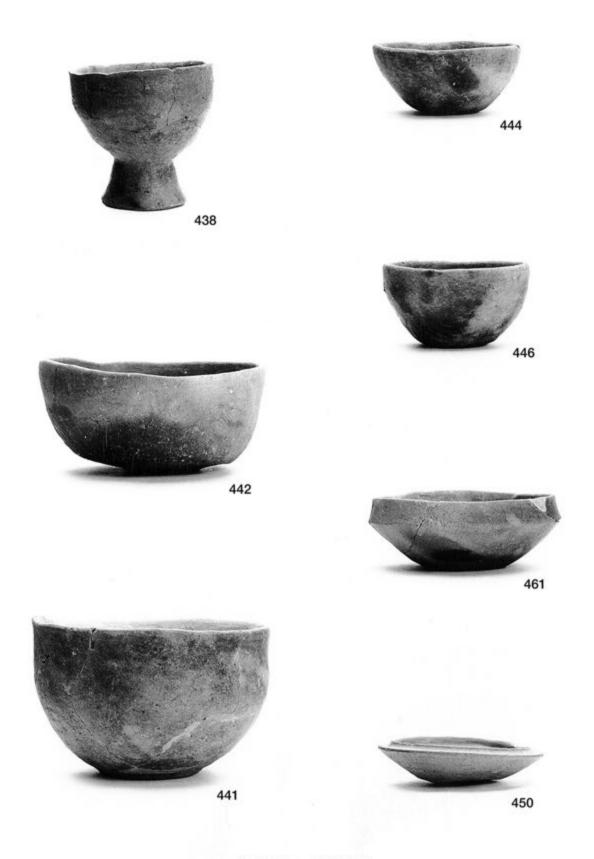




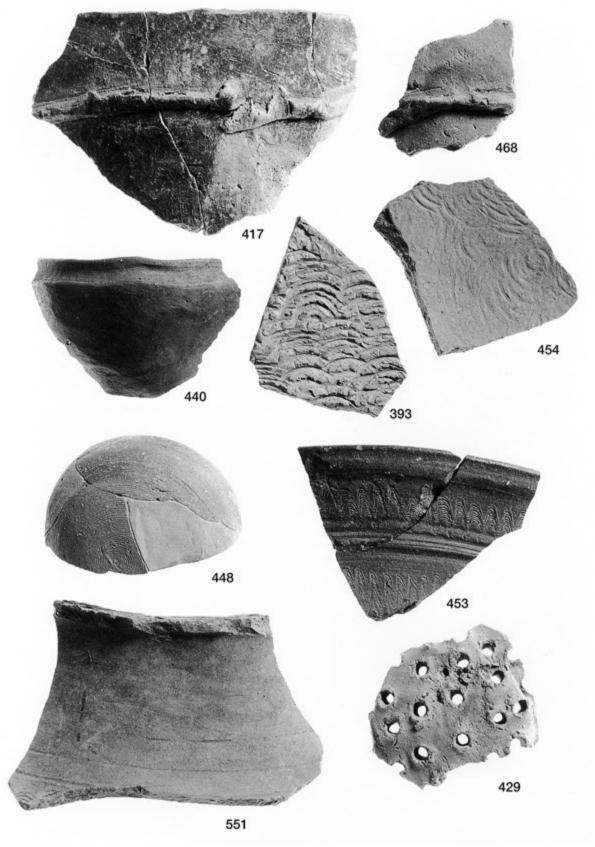
溝状遺構 4 号出土土器



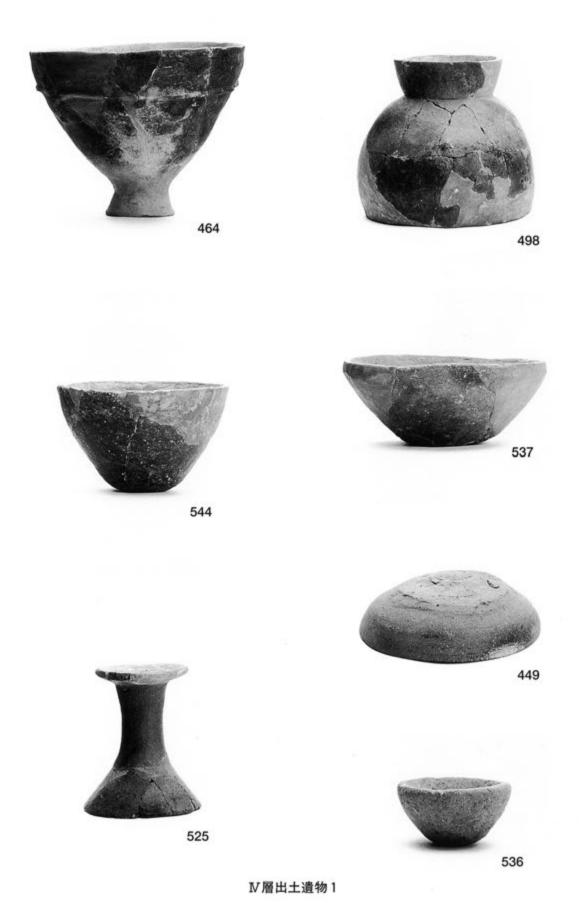
溝状遺構 4号出土土器



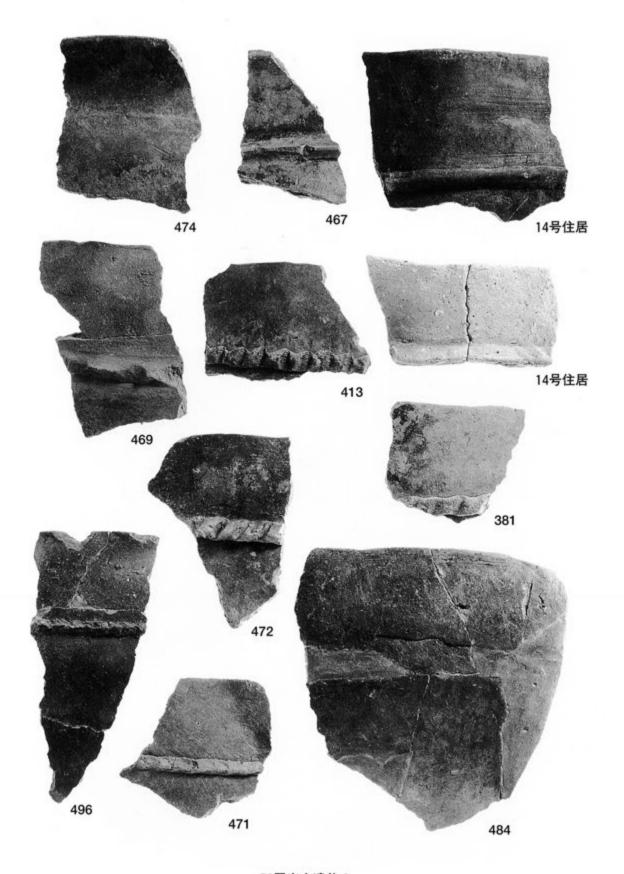
溝状遺構 4号出土土器



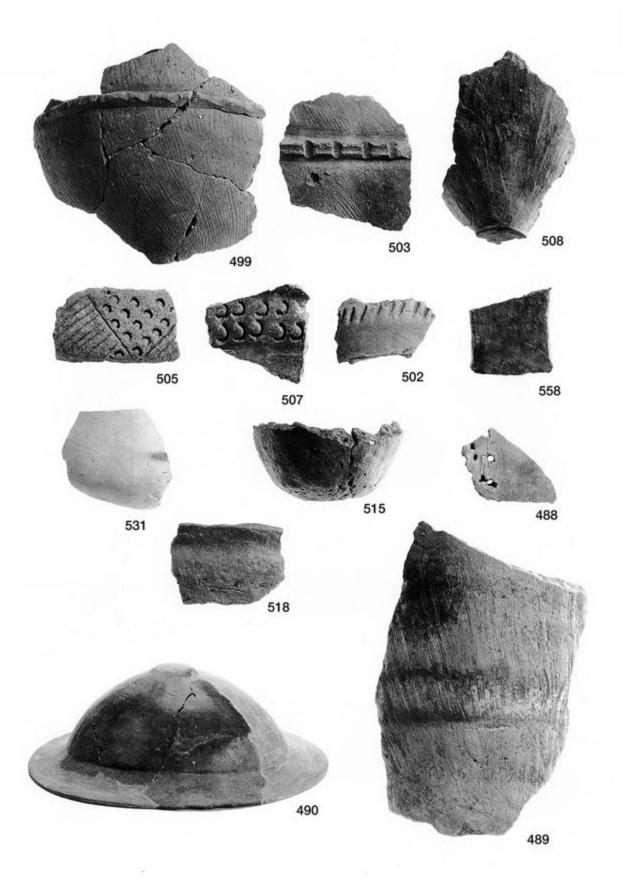
溝状遺構 出土遺物ほか



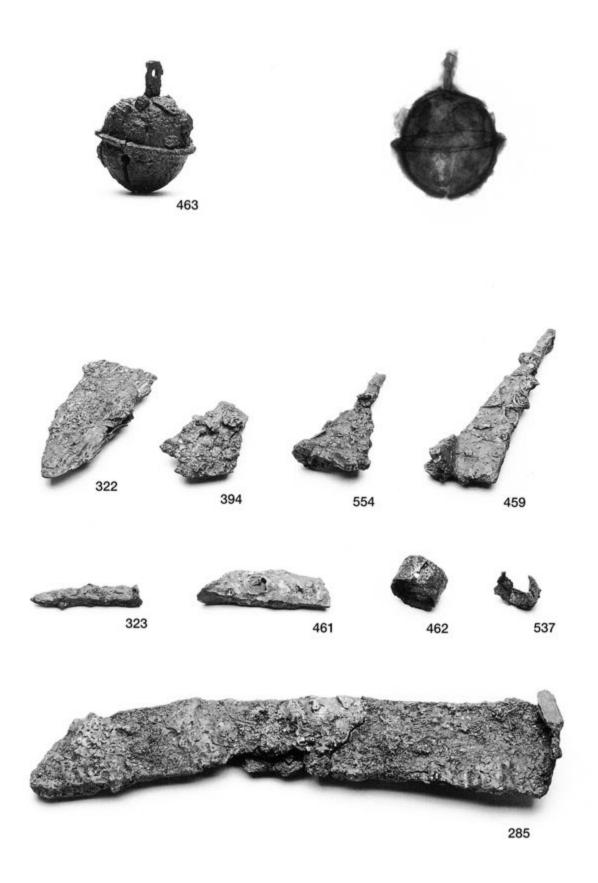
217



Ⅳ層出土遺物 2



Ⅳ層出土遺物 3 ほか



鉄製品 ①鉄製鈴・②同X線写真 ③鉄鏃・刀子鉄鎌ほか

あとがき

2004年は、度重なる台風上陸や新潟中越地震など、近年例をみないほど自然災害に見舞われた年であった。言い尽くされた表現だが、「台風銀座」とよばれる南九州のみならず、全国各地で人的・物的に多大な被害がもたらされた。

中尾遺跡の発掘調査時にも数回にわたって台風の襲来があり、台風対策や復旧作業におわれたことが当時の日誌に記されている。遺構や機材、図面などの維持管理に苦労されたことと想像される。今回、発掘現場に赴いたことのない者が報告書の刊行にたどり着くことができたのも、当時の発掘担当者の方々のお蔭である。鉄製の鈴が数百年の時を経てもなお、その音色を失わずにいることが何よりの証ではないだろうか。

中尾遺跡は、古墳時代の集落跡であり、竪穴住居跡が22軒発見された。この時代に生きた人々は、自然災害に対してどのような想いを抱き、イエを守るために何らかの工夫を凝らしたのだろうか。

なお,本報告書作成にあたって,以下の方々からご指導・ご助言いただいた。記して感謝いたします。

池畑耕一・甲斐康大・川崎重治・川崎俊行・鶴田静彦・寺原徹・長野眞一・中村和美・中村耕治・中磨浩太郎・東 和幸・前追亮一・宮田栄二・元田順子・山下博文 湯之前尚

整理作業員(平成15・16年度)

石原啓子・木村仁美・迫田かおり・末廣みゆき・古川陽子(五十音順・敬称略)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (87) -一般県道折生野・神野・吾平線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I -

中尾遗跡

2005年3月31日

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1

印刷所《料》朝日印刷

〒890-0055 鹿児島市上荒田町854-1

